発行元：(株)ダブルクロス 〒171 東京都豊島区南池袋2-33-6 大同ビル3F 電話/03-5992-3240

とんねるず こんと いん なえば Vol.7



1997年3月7日(金)8日(土)9日(日)
8:30PM開場/9:30PM開演
¥5,150(税込み・整理番号順入場制)

苗場プリンスホテル
BLIZZARDIUM

〈苗場プリンスホテル宿泊 バス・JRツアー〉
●公演日程に合わせて出発します。料金は全てチケット料金が入っております。

★バスツアー	(東京発)	¥34,000〜¥52,000
	(名古屋・大阪発)	¥39,000〜¥57,000
	オリジナル限定記念品付	
★JRツアー	(東京・上野駅発)	¥34,000〜¥50,000
★日帰りツアー		¥19,500〜¥21,000

旅行主催/西武トラベル(運輸大臣登録旅行業第139号)

専用申込書にて先行予約を行ないます。詳しい資料及び申込書をお送りしますので下記あてご請求下さい。

●お問い合わせ
03-3404-7500 キャピタルヴィレッジ

ラジオはダイヤル1242 ニッポン放送

紙のプロレス RADICAL

1997 NO.2

無菌・無臭の時代に
「バイ菌」を撒き散らせ!
心にドスを持った奴だけが
オンモシレェことができるんです!

紙のプロレス・ラディカル

CONTENTS

Art Director
出田さん •San Ideta

Design / two-three
ヒサくん •Kun Hisa
村松さん •San Muramatsu
マツ •Ma-tsu

表紙モデル/高田延彦
撮影/斉藤ユーリ
スタイリング/中村カタブツ君
ヘア&メイク/高田延彦

※えー、「RADICAL」は「根源的」「根本的」という意味でとらえてくれると非常に嬉しいといいますか。


高田延彦
6月、ヒクソン狩りへ
高田、動く!

Pride Renaissance '97

再生
ルネッサンス

Nobuhiko
Special Shoot
Takada



撮影／斉藤ユーリ
photographs by Yuri Saitou


対立概念？
ありますよ、
当然！

高田延彦よ、今こそ鋭利な『ドス』を抜け！

いつも心に「旨口（ドス）」――。

すべてのプロレスラーに望まれることといえば、これしかない。

高田延彦というプロレスラーに期待するもの、それは、あまたのレスラーよりも鋭利で太いドスを、いつ懐の中から出してくるのかということに尽きる。

藤原喜明がいった「いざとなったら一番怖いのは高田」発言を記憶から引っ張り出すまでもなく、ボクシングのT・バービック戦や北尾戦での、鋭角で重い闘いぶりから、高田の持っているドスに対する幻想は膨れあがるだけ膨れあがっていった。

かつてアントニオ猪木はジャイアント馬場を執拗に追い回した。

前田日明は「アントニオ猪木なら何をやっても許されるのか！」と憤慨し、アントニオ猪木を仮想敵とした。

船木誠勝は、さらにその前田日明を否定し、「UWFでやってたことは、すべて前田さんへのメッセージ」と言い切った。

Pride Renaissance '97

高田延彦は、そういった怨念や情念を明確に打ち出すことによって、自分の心の中にあるドスに磨きをかけるという逆説的な方法を取らなかった。


いつも自分の世界の中で、静かにニュートラルにバランス良くドスを仕舞いこんでいった。

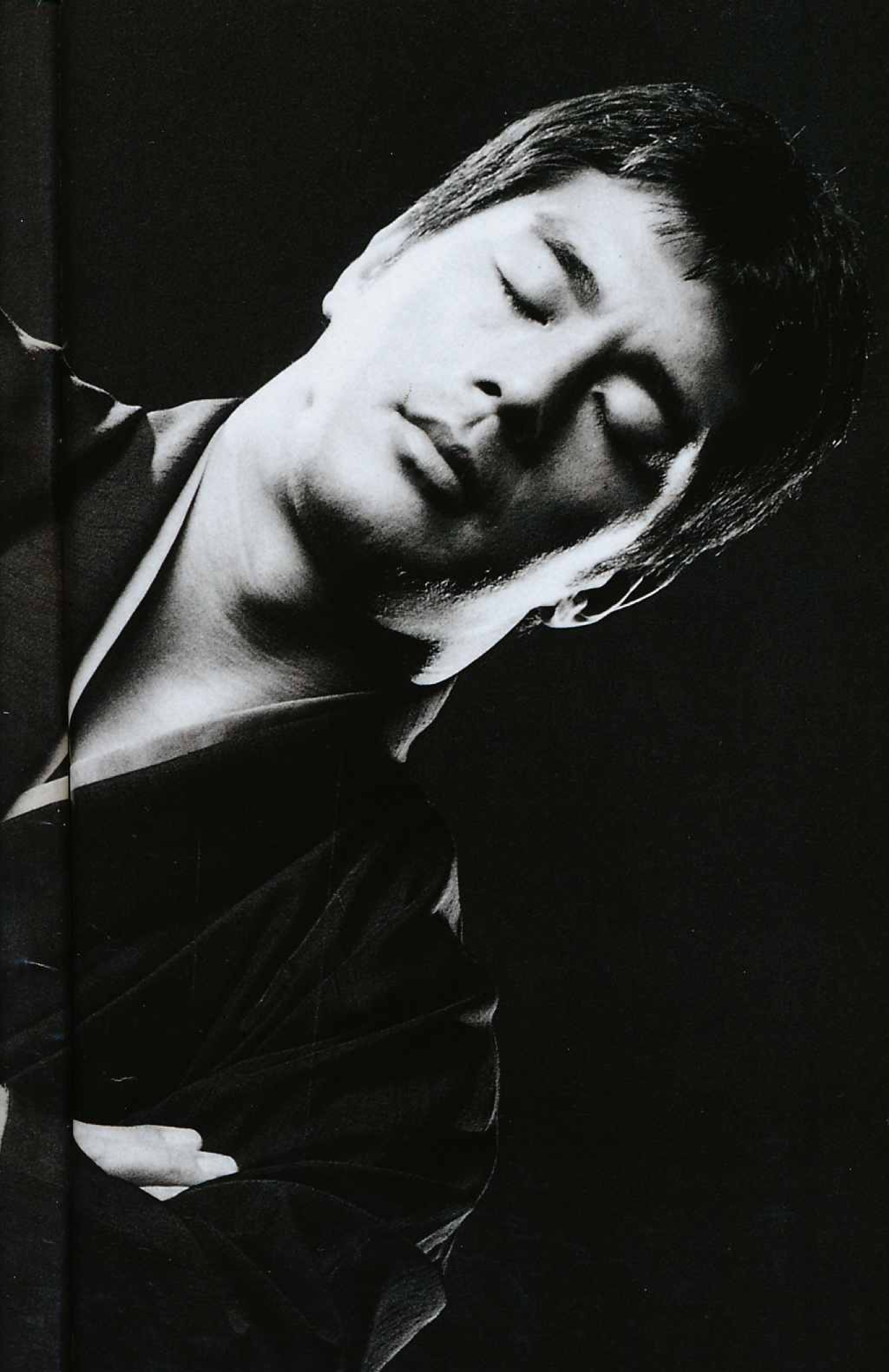
そうこうしているうちに、『高田延彦という名の最強』は、新日本プロレスのリングで、武藤敬司、橋本真也の前に屈してしまった。

当然の如く、新日本のリングで苦杯をなめたとき以来、高田の「外」と「内」を取り巻く状況は、なにかが変わった。いや、なにもかもが変わってしまったといってもいい。

昨年8月の安生戦は、閑散とした神宮球場で行われ、10月には化石ともいえるブッチャーとも相まみえた。そして12月にUWFインターナショナルは解散！　となった。

そういえば、前号での高田のインタビューで気になる発言があった。





「プロレスにプライドを持ってもしゃーないなと。俺のやってることにプライドを持って、高田延彦のために生きていこうと」。

　ある専門誌のインタビューでは「UWF魂なんていわれると、背筋がかゆくなってくる」とまで言っている。

　こういった発言に高田延彦のジレンマが隠れていることは明白である。

　かつて高田はプロレスに対してのプライドからUWFに参加し、異種格闘技戦に挑んでいった。

　はじめにプロレスありき――。

　それがファンの信頼を勝ち取っていくと同時に、自分のプライドの「芯」となっていったはずである。

　そんな高田が「プロレスにプライドを持てない」と言ってしまうのは、実は大変な問題である。

　新日本プロレスのリング上での負けだけではなく、高田延彦自身が辿ってきた人生そのものにも負けはじめているのではないかという懸念が生じてくるからだ。

　しかし、たった今（本当にたった今だ）、ヒクソン・グレイシーと高田の一騎打ちが、6月中にドームで決定というスクープ情報が本誌の独自のルートから飛び込んできた！

Pride Renaissance '97

　しかし、今注目しなければならないのは、その勝敗ではなく、高田が再び懐のドスを磨き始めた摩擦音である。

　『最強』という世界は誰が何と言おうと、一切の負けが許されない世界であるはずだ。

　先述したように、高田は『最強』の座から滑り落ちた。となると、その高田にとってヒクソン戦の勝敗は、重要ではあるが最大のテーマではないはずだ。

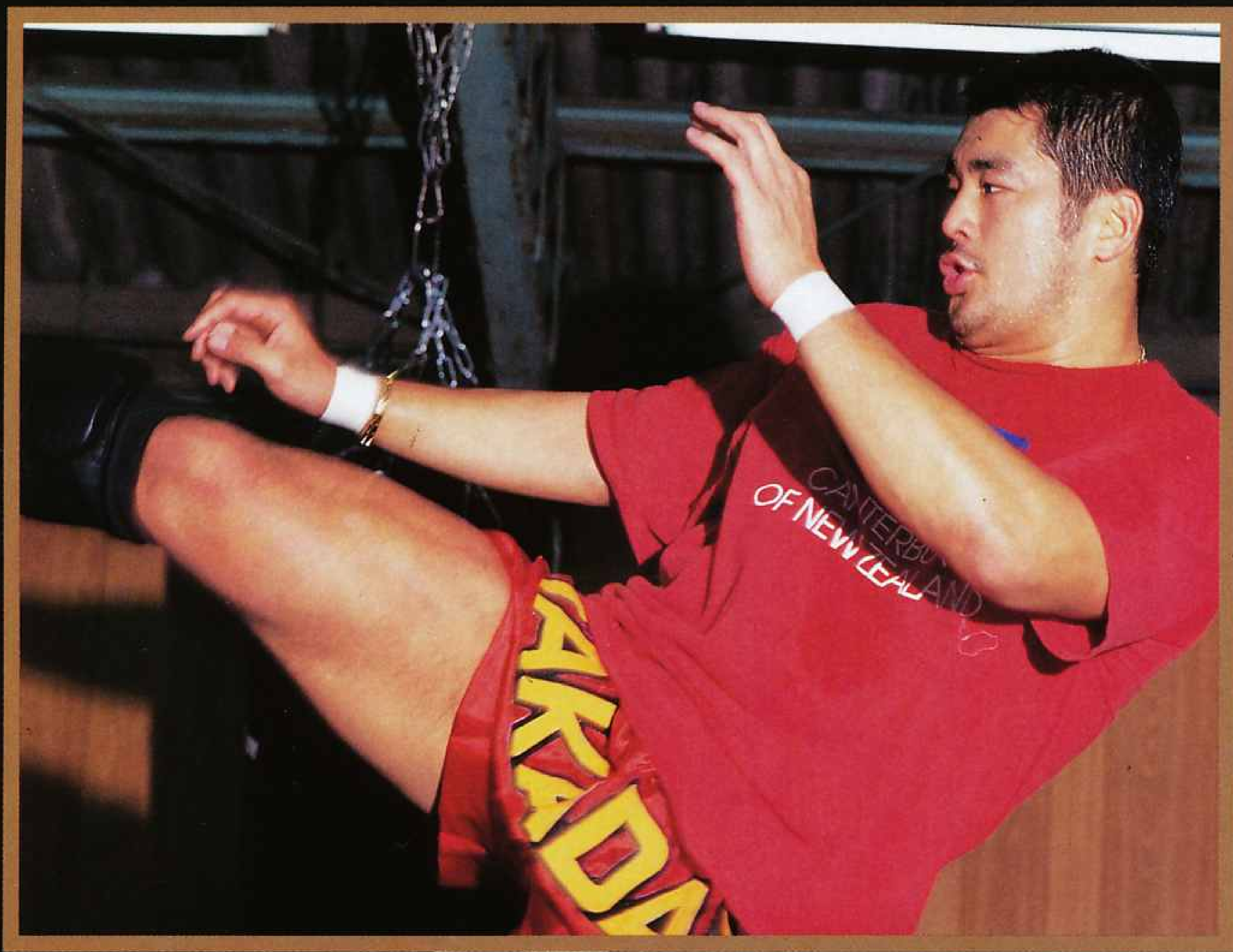
　ズバリ言ってヒクソン戦における高田のテーマは「ルネッサンス」である。ルネッサンスとは、再生、復興、復活を指す。

　隠し持ったドスをルネッサンスすること！　そしてそのドスを抜くことを決心すること！　それが、ひいてはプロレス界がプライドを持てる世界に再生していくことになる――。

　されど、心にドス！

　きっと、高田が今一番言いたい言葉はこれに違いない。






面白い高田延彦は
絶対見れます！
保証します！

田村潔司

確信犯・田村潔司のリングスでの存在価値



聞き手／羽賀玄太
interview by Genta Haga
撮影／斉藤ユーリ
photographs by Yuri Saitou


KIYOSHI TAMURA
Pride
Renaissance '97

僕は自分が一番正しいと思ってますよ

KIYOSHI TAMURA

―お帰りなさい。オランダから帰ってきたばかりなんですよね。

田村　たった今、空港から。

―それはそれはお疲れさまです（笑）。時差ボケはないですか？

田村　ないですね。もともとボケてますから（笑）。

―またまたぁ（笑）。試合（対マナート戦）の方はどうでした？

田村　やる前は会場の雰囲気が殺伐としてて、重い感じだったんですよ。

―まさに敵地って感じですか？

田村　うーん、敵地って感じはしないんですけど、なんだろう。日本のような感覚ではないですから。海外だなっていう感じで。

―そういうのはやりにくいもんですか？

田村　やりにくいような、やりにくくないような。海外だと、リングに上がる前につまずいてコケたりしても笑われないでしょ？　日本だと、「あ、田村がコケた！」って言われちゃうんで。

―また、深読みされたりしてね。「やはり田村は悩んでいる」なんて（笑）。

田村　ハハハハハ。

―いや、田村さんってね、マスコミでの扱われ方がいつも孤独で悩める若者的な感じなんですよ。でもボクはそうではないだろうと思うんですよね。そのへんをですね、田村さんのリングス移籍前から現在までをお聞きしながら解明しようと思うんですが。

田村　お願いします。

―まず、移籍前にもの凄く印象に残ってることとして、高田選手に向かって言った「真剣勝負で闘ってください」発言なんですけど。あのセリフはあの時、最初から今日は言ってやろうと思ったんですか？

田村　まあ、素直にボクとやってくださいっていう気持ちですかね。

―でも、「真剣勝負で闘ってください」なんて言ったら、大変なことになるんじゃないかと思ったでしょ？

田村　いや、そうでもないですけどね。大変なことになってました？

―なりましたよ（笑）。

田村　ボクはなってないと思いますね。

―それは、思ったよりも大変なことになってないなっていうことですか？

田村　いや、それは周りが決めることで、ボクが決めることではないですから。

―あれは計画的犯行でしょう？（笑）。

田村　犯行って言われたら犯罪者みたいじゃないですか（笑）。

―でも、あれはマット界では犯罪に近いんじゃないですか？（笑）。

田村　そうですか？　そんなことないでしょう（笑）。

―でも、ああやって真剣勝負なんていう刺激の強い言葉を使って、みんなが驚くだろうって考えての発言だったわけじゃないですか。

田村　いや、ボクは頭悪いんで。ただ、先のことを読む頭はあるんですよ。

―そうでしょ？　実は先々までシミュレーションしてるじゃないですか？　ああいう発言をするとみんなが驚くだろうと。もっと言えば専門誌の表紙になってる自分が頭に浮かんでるんじゃないかと思うんですよ。

田村　ハハハハ。そういういやらしさはないですよ、はい。いたって真面目ですから。

―ヌハハハハハ。

田村　ボクは、自分はまともだと思ってるんで。自分が一番正しいと思ってますから。リングスの中でも、選手それぞれ、そう思ってると思うんですよ。で、その正しさはリング上でしか表現できないんですよ。生き残った者しか認められないわけですから。

―まあ、そうですよね。でも、まともかまともじゃないかっていうことになれば、リングスの親分はかなりまともじゃないような……（笑）。

田村　でも、前田さんは前田さんで自分でまともだと思ってますよ（笑）。だから、それはやっぱり捉え方だと思いますよ。前田さんをまともだと思ってる人もいるでしょうし、羽賀さんみたいに反対のこと思う人もいるでしょうし。カマキリっているでしょ？

―へ？（笑）。

田村　虫のカマキリですよ。

―もちろん、知ってますよ（笑）。

田村　カマキリって、子どもを作るか産むかすれば、メスがオスを食べるじゃないですか。それはボクらからしてみれば、おかしなことするもんだと思うじゃないですか。喰われちゃうんですよ、カミさんに。

―ヌハハハハハ。それは確かにおかしいですね（笑）。

田村　でも、カマキリの世界からすればそれが正しいんですよね。カマキリが人間社会を見たらおかしいと思いますよ。「なんで子供産んだのに旦那を喰わねえんだ」って。やっぱり、それぞれだと思いますよ。

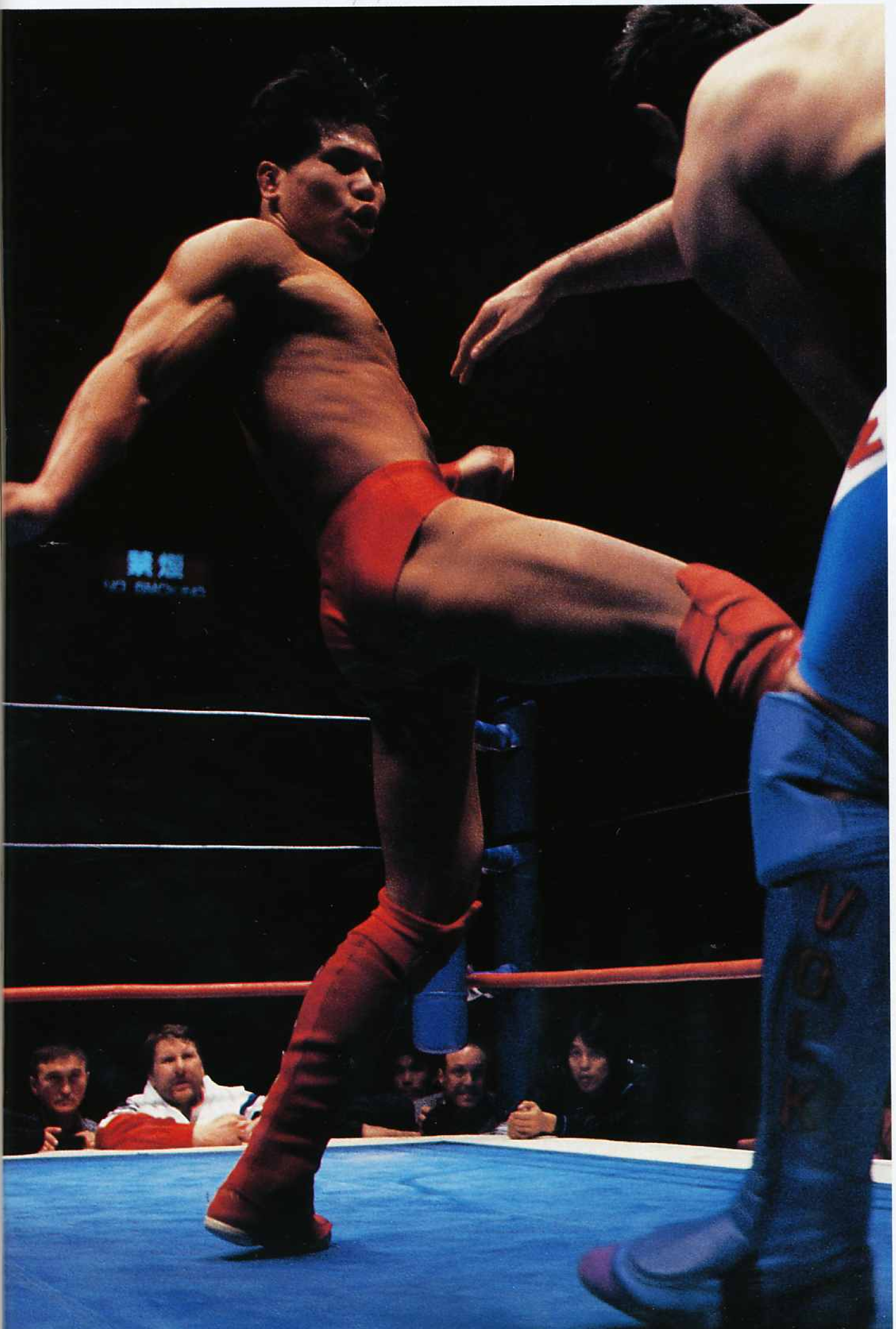
―なにがなんだか（笑）。でも、自然の摂理や法則の中だと、それは当然だと思うんですけど。「それはそれで正しいかもしれない。でも、俺は許せない」って思うこと、田村さんだって




Pride
Renaissance '97


FILA

あるでしょう。
田村　以前はありましたね。色々矛盾が多いですから、この世界は。
――ありますよねえ。プロレスって一言で言っても色々あるわけですし。
田村　ボクも人に紹介される時、プロレスラーと紹介されるんですけど、プロレスラーっていうと、飛んだり跳ねたりして、血が流れたりする人って思われるんですよね。ボクはそれがイヤなんですよ。プロレスっていうイメージがそうなんで、そのイメージと同化されるのがイヤなんですよ。
――一緒にされたくないと？
田村　いや、そうじゃないです。それはイメージの話で、そうじゃないです。いろんなスタイルがあって、それぞれお客さんが入ってるんで、それはボクには否定できないですよ。
――なるほど。ところで、田村さんは桜庭（和志）戦を自分のベストバウトとしてよく挙げてますけど、あの試合をベストとするということは、技術の競り合いを一番に見せていきたいということですよね。
田村　はい、その通りです。
――ボクも、あの試合は凄く完成度の高いきれいな試合だとは思うんですけど、ただ、ああいうお互いにわかる者同士が闘うことによって、試合から殺気が削げてしまうような気がするんですけど。
田村　殺気ですか。それはファンの人が決めることですからね。5年10年後に結果が出ることだと思いますよ。
――例えば桜庭戦の時はどうでした？「お客さんはわかってくれてるな」と思ったか「全然わかってないな」と思ったか、どちらでしたか？
田村　どっちとも言えますね、あの時（96年3月1日・日本武道館）の会場の雰囲気は、メインが高田延彦対越中詩郎だったんで、新日のファンの人もたくさん来てたと思うんですよ。でも、ボクは拳を突き上げたり、ワーッとかキャーッとかいう声援は好きじゃないんですよね。
――はぁ、はあ。
田村　試合を見て、選手の動きを見て、その上で凄いなっていう歓声が好きなんですよ。あの日のボクと桜庭の試合は、そういう歓声が一番多かったと思うんで、そういう意味では納得してますね。新日本のファンの人が、技術的に高度なことをやってるなと思ってくれないのは凄く悔しいですけど。ボクはね、ファンが団体を選ぶようにボクもファンを選びたいし、選べる権利はあると思うんですよ。
――おお！　凄い発言ですね。
田村　なるべくなら、あの中に新日本のファンの人たちはいてほしくなかったんですけど……。しょうがないですよね。



KIYOSHI TAMURA

僕の発想はスタイルが違うだけでパンクラスと同じなんですよ

Pride Renaissance '97

──でも、客を選ぶといっても、わからない客にもわからせようとは思ってるんでしょ？　田村さんのグラウンドって、膠着状態がなくて華やかじゃないですか。やっぱりグラウンドでもお客さんに面白く見せたいっていう意識があるからですよね。

田村　ただ関節の取り合いを見せて終わりっていうのは、もう時代遅れになっちゃってますからね。ただ、「こうやったらお客さんにウケるだろう」と思って練習してるわけじゃないですから。例えば60分練習してて、いい動きが3分間あったとしますよね。その3分間を試合で見せたいんですよ。それは見せようと思って見せられるわけじゃなくて、うまく試合が流れた時に出せる表現なんで。そういうのを見せながらお客さんについてきてほしいんですよ。お客さんがついてこなかったらダメですから。

──でもね、パンクラスの船木さんなんか「自分のやりたいことをして、それでお客さんがついてこないなら故郷の青森に帰ります」というようなことを言ってるんですけど、田村さんはどうですか？

田村　いやあ、お客さんがついてこなかったら仕方ないですよね。

──そうですか、なんか意外ですねぇ。

田村　寿司屋の職人と同じですよ。

──はあ？（笑）。ご実家がそうですよね（笑）。

田村　はい（笑）。寿司屋で10年修行して、それでもお客さんが来なかったら、また新しいことをやんなきゃいけないから。寿司屋でやった10年間は全く無駄になるわけですから。

──でもね、そこで回転寿司にするっていう発想もあるわけですよね（笑）。

田村　ハハハハハ。回転寿司ですか？　そうかあ、寿司は寿司ですよね。でも、ボクのやってることはプロレスと言えばプロレスだけど、その範囲を超えるようなことはやりたくないんですよ。ボクのやってる最大限の中で、土俵ギリギリまでは残るけど、そこから落ちちゃったらもうできないですからね。

──でも、お寿司屋さんとして自分の寿司は客にウケると思ってますよね。

田村　それを持ってないとやってられないですからね。

──でも、自分は旨い寿司を握っているんだから、客が来ようが来まいが関係ないという人もいますし、客足が鈍ければ、ちょっと味を変えるのもありだと言う人もいますよね。そう考えると、田村さんは後者だと思うんですよ。

田村　ああ、そうかあ。

──乱暴に言えばパンクラスは前者ですよね。船木さんがそう言ってるんですからね。

田村　いや、ボクの発想はパンクラスと同じなんですよ。ただスタイルが違うだけで。

──田村さんからすれば、リングスもパンクラスも、自分のやりたいスタイルとは全く違いますよね、ある意味。

田村　違いますね。ボクの試合は胡散臭さ全くなしにして、ホントのホントの技術の攻防なんですよ。で、パンクラスとボクの違いは、あんまり言いたくないんですけど、ガード・ポジションがパンクラスではあるじゃないですか。あれをボクはやらないんですよ。

──それはなぜですか？

田村　負けたくないと思ってやってると、ガード・ポジションって出ちゃいますよね。でも、負けてもいいんですよ。お互いやってることやってるわけですから。それは相撲で言うと、引いたまま勝つのと、前に出て負けるのとの違いで、前に出て負けた方が先につながるじゃないですか。お客さんも喜ぶし。

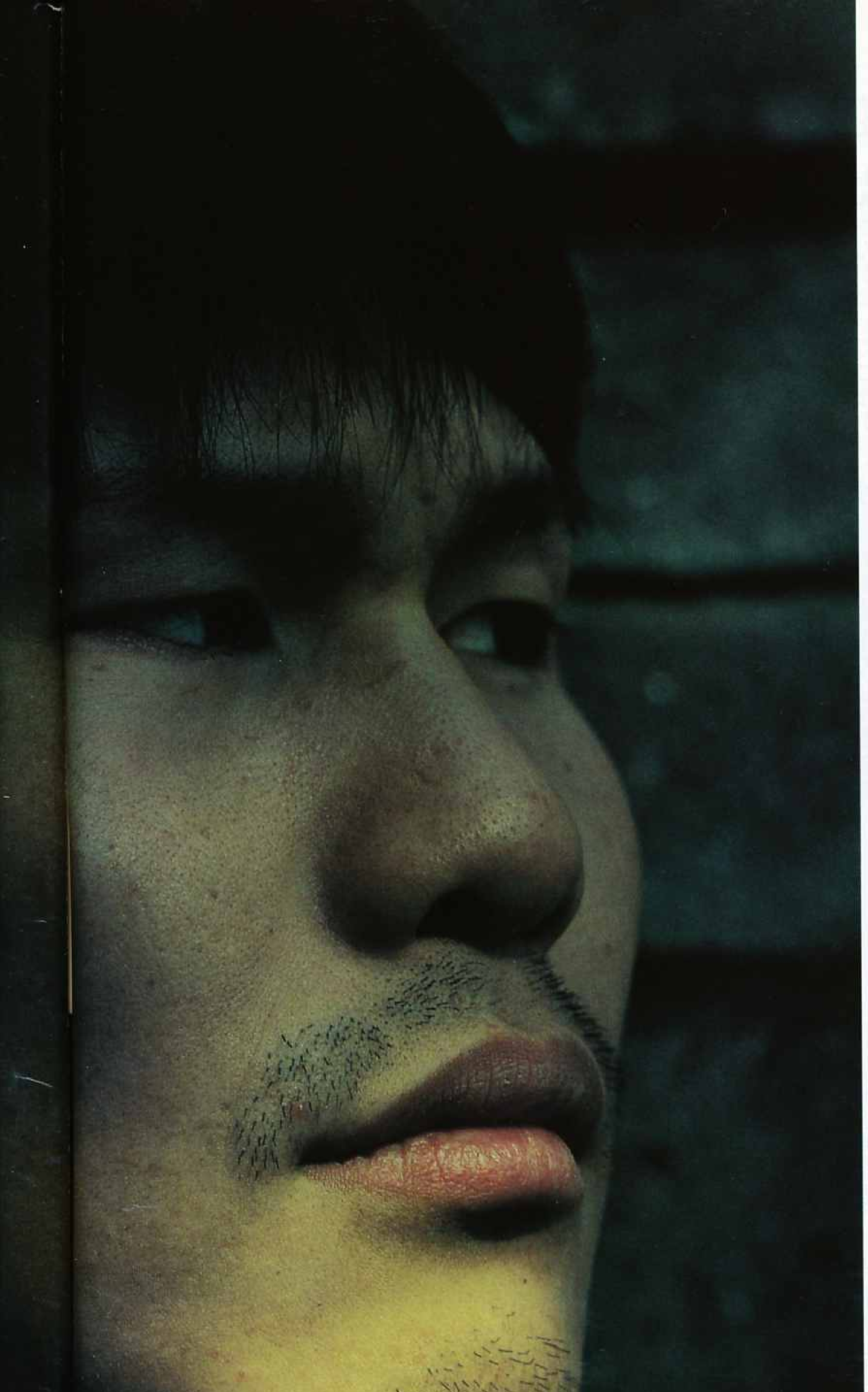
──つまり、そのガード・ポジションをやらないことによって負けてしまってもかまわないと。

田村　それは、その競技の中でということですよ。例えばよその団体と対抗戦をやるとしますよね。仮に船木さんとやるとなったら、ボクはガード・ポジションやりますよ。ただ、ボクのやりたいスタイルっていうのは、それをやらないスタイルですから。

──田村さんのやりたいスタイルができる相手というのは、今のリングスの中にいますか？

田村　名前は言えないんですけど、似たような匂いがする人はいますね。路線図に例えると、リングスの中にも、小田急線とか山手線とかいろんな線がありますよね。他の人は生き残れなければ別の線に乗り換えるかもしれないけど、ボクは小田急線なら小田急線をを長く続く線にしたいんですよ。

──田村さんの線には、これからたくさんの若い選手にレールの上を走ってもらわないといけないし、お客さんにもたくさん利用してもらわないといけないわけですよね。



向こうは僕が来たこと嫌がってるんじゃないですか。全部おいしいとこ持って行かれたわけですから

田村　そうなんですよ。だから、今はリングスの田村潔司ですけど、リングスという団体を田村潔司の線に乗せたいんですよ。

――なるほど。しかし、まさしく話が脱線してしまいました（笑）。で、インターを離脱してリングスに移籍するわけですけど、前田さんが「今まで見てきた選手の中で、素質では田村が一番」と発言しましたよね。それを聞いた時、どう思いました。

田村　（小声で）いやあ、そうかなあと。

――ヌハハハハ。急に何言い出すんだとか思いませんでした？

田村　（やっぱり小声で）いや、でもね、そういうこと言われたことあるんですよ。新弟子の頃、前田さんにキックミット持ってもらってキックの練習してた時も、なんかそういうふうなこと言ってもらいましたし、グラウンドの練習でも言われたと思います。

――そう聞いて「前田さん、やっぱりわかってるなあ」みたいな感じですか？（笑）。

田村　いやいや、今でもそうなんですけど、前田さんが言ってくれることより、自分で思ってることは全然下なんですよ。むしろそのイメージに追いつくために一生懸命練習してるんですよ。

――田村さんから見た前田さんってどんな人ですか？

田村　前田さんですか……。

――よく二人で話したりします？

田村　いや、話せないです、全く。ほとんど「はい」と「いいえ」しか言えません。やっぱ、新弟子の頃のイメージがありますからね。昔は前田さんも厳しかったから、白いものでも前田さんが黒と言ったら黒でしたから。前田さんと話すときは今でも緊張するんですよ。

――久々に前田さんと同じ団体になったわけですけど、前田さんは変わってましたか？

田村　いや、変わってませんよね。
—丸くなったとか？
田村　それはないと思います（笑）。
—ヌハハハハ。
田村　丸くなったのは体型くらいですかね（笑）。
—ドーッ（重低音ストンピング攻撃）。
田村　あの、前田さんって弱い人間には弱いんですよ。逆に強い人間には強いんで。ボクが弱い人間の時に弱い前田さんで接してくれたんで、凄いありがたかったです。
—ほお！。
田村　インターでボクが色々困っていた時に、前田さんも困った目線で話を聞いてくれたんですよ。そういう点は凄い尊敬できますね。あとも、まあ、他もいろいろ尊敬できますけど（笑）。
—ヌハハハハ。
田村　色々人によって長所、短所がありますよね。前田さん、高田さん、山崎さん、藤原さんにしても。前田さんのいいところはそういうところです。悪いところは……、ボクの口からは言えません（笑）。でも、上の人っていうのは大変ですよ。羽賀さんは上の方に文句言いますか？
—え、ボクですか？　ああ、言いますねえ。一人、上司でボクにムチャ言う人がいるんですよ。また、凄いデブなんですけどね。その人がいないところでは悪口を言ってます。
田村　へえ（笑）。
—でも、なぜか本人の耳に入るので、いつも仕返しされます。まあ、ボクの話はいいんですけど（笑）。で、リングスに入った時に話を聞きたいんですけど、道場に入った時はどんな感じでしたか？
田村　ちょっと雰囲気が暗いですね。
—気分は転校生って感じですか？
田村　そうですね。別にボクだけではなくて、誰が入ってもそういう雰囲気になるんでしょうけどね。
—逆の立場だったら田村さんも面白くないと思いますよね？
田村　面白くないですね。ムカつきます。だから、彼らが思ってることは、手に取るようにわかりますね。
—ヌハハハハ。
田村　向こうはボクがこっちに来たことを嫌がってるんじゃないですか？　全部おいしいとこ持って行かれたわけですから。



—これからはね、向こうとなじむ方向も、あえて今のような立場を貫くという方向もあると思うんですけど。
田村　向こうの出方次第っていう部分もありますよね。ボクはマイペースですから。でも、この世界は弱肉強食ですから。最終的にはどっちかがどっちかに頭を下げなきゃならないんで。
—今、スパーリングをする相手はいるんですか？

Pride Renaissance '97

田村　新弟子くらいですかねえ。向こうが言ってくれたらやりますけど。一人いますよ。「お願いします」って頭下げて来たのは。
—それは誰なんですか？　と尋ねても教えてくれないんでしょうねえ。
田村　言わない方がいいんじゃないですかね。ボクが弱ければ強い人に頭下げますし、逆にボクより弱ければ、ボクに頭下げなきゃいけないんですよ。
—今のリングスの選手の中で、田村さんが頭を下げるべき人はいますか？
田村　強さでは……。技術的な面でお互い尊重しあっていける選手は一人、二人はいますけど。
—その人とさっき言ってた田村さん

と同じスタイルができそうな選手っていうのは同一人物ですか?
田村　はい、同一人物です。
——なんか、秘密主義ですねぇ。で、いよいよトーナメントのことについてお聞きしたいんですけど、ボクが印象に残る試合として対山本戦と決勝のハン戦があるんですけど。まあ、どっちもいい試合ですけど、好対照ですよね。
田村　ボクは、いい試合はハン戦だと思いますね。
——でも山本戦が終わった後は、「俺のベストバウトだ」って言ってたじゃないですか。
田村　あれは興奮してたんですよ、頭を打たれてたんで（笑）。
——ヌハハハハ。
田村　最後、きれいに極まったから、それで興奮してたんですよ。ああいう試合展開の中で、ああいう技の極まり方ってなかなかないでしょ？　そういう意味でのベストバウトです。
——終わりよければ全てよしの世界ですね。ああいう試合になるであろうという予感はありました？
田村　ないですないです、全然。やってたねえ、頭に（ダメージが）来てるんですよ。「なんでこんなに来てるのかな」と思って、あとで（ビデオで）見たら、（アゴを）かするパンチを喰らってるんですよ。あれは効くんですよ。それをグーでやられてたから。
——でも山本戦よりハン戦がいいって田村さん本人が言ってても、実際、トーナメントのベストバウトには山本戦が選ばれてるんですよ。
田村　トーナメントのベストバウトは

山本戦は技術がなくてもできる試合



田村対ハン戦です。山本との試合は凄い汚い試合ですから。審査委員の意図がわからないですね。

――ボクが思うに、プロレスって、いつ試合が壊れてもおかしくない危険性をはらんでいるべきだと思うんですよ。それが1年に1回、10年に1回でも、なんでもいいんですよ。

田村　う～ん……、でも、山本戦なんか誰でもできるでしょう。誰でもできる試合はイヤなんです。逆に言うと、山本戦は技術がなくてもできる試合。アルティメットもそうですよ。あれは誰でも、羽賀さんでもできるんですよ。でも、羽賀さんがボクと試合できるかといったらできないですよね。

――当たり前です！　なるほど、ボクがボコボコに殴られれば、それはそれで殺伐とした雰囲気は出せると。

田村　そういう面白味はね。

――田村さんがファン時代に好きだった試合は何ですか？

田村　羽賀さんが言うような試合では、前田さん関係の試合が印象に残ってますね。

――印象に残ってるということは、田村さんの胸に何かしら残したっていうことですよね。

田村　ああ、そうですね。

――それこそ記憶に残る試合ですよね。もう、前田さんの試合は残ってしょうがないですよ（笑）。

田村　なるほど。それはわかりますね。

――それに、対山本戦のような試合をしてしまった以上、ファンはああいう試合を見たがりますよ。

田村　ああ、そうかあ。

――興奮してわけのわからん人を相手に、高い技術で仕留めると。そういう試合を見たがりますよ。

田村　わけのわからん人（笑）。そういうふうに書いといてくださいね。わけのわからん人（山本）って（笑）。ボクが言ったことにしないでくださいね。羽賀さんが言ったんですからね。

KIYOSHI TAMURA

――わかりました（笑）。今後、他の日本人や前田さんとの闘いもあると思いますけど。

田村　うーん、ちょっとつらい言い方すれば、選手としては、前田さんは早く辞めてくれっていう感じですね。でも、色々状況がありますから。だから、選手としては辞めてくれっていう感じなんですけど、会社全体のことを考えると一番上で苦労されてると思うんですよ。また、その苦労をボクらに言わないですからね。

――「決勝でハンに勝っても負けても田村とはやる」って前田さんは言ってましたけど。

田村　早いうちにはあるでしょうね。優勝していたら色々言えたんですけど。

――トーナメントに優勝したら何か言いたいことがあったんですよね？



田村　会社をよくしていくために、ボクが生き残るために言いたいことです。

――いつ明らかになるんですか？

田村　トーナメントで優勝できなかった時点で、全てリセットなんですよ。今は0点です。最高得点に達すれば言います。やっぱり言えないでしょ、結果を残してない人が。

――なかなか肝心のことを言ってくれませんね（笑）。そういう思わせぶりなことを田村さんはしょっちゅう言ってますけど、それは全部計算ですか？

田村　ワハハハハ。計算じゃないですよ。ただ、それがうまい具合にいってるだけじゃないですか。実際、インターと新日本が絡んだ時に、こうなる（インターが崩壊する）ことは見えてましたから。ボクは5年後10年後のシミュレーションまではできてますから。ただ、体が持つかどうか。今でももう、ボクなりにはきつい練習したり、節制してるんですよ。でも正直言うと、もう辞めたいんで。普通の生活に戻りたいんですよ。今は試合のために頑張るじゃないですか。試合が終わったらアイスとか食べますけど。

――アイス（笑）。

田村　アイスを食べることが普通の生活なんですよ。あとお菓子バカバカ食べたりね。そういう生活に早く戻りたいんですよ。ボク、練習嫌いですし。

――あらっ。それは意外ですね。

田村　練習好きって言ってるヤツは、それだけの練習しかしてないんですよ。自己満足の練習しかしていない。

――なるほど。田村さんは、この世界に入って9年目ですよね。9年前の新弟子時代の田村潔司は、今の田村潔司を見て何て言いますかね。

田村　新弟子の頃？　いやあ、将来のことなんか考えたこともなかったですね。その頃ってホント余裕なかったです。オナニーもしてなかったですもん。

――ヌハハハハ！

田村　ホントに。そういう息抜くヒマなかったですから。

――息抜くヒマも一発抜くヒマもなかったんですね（笑）。

田村　だからもう、夢精ばっかしてましたねえ。

――ヌハハハハ！

田村　よくしたなあ……。

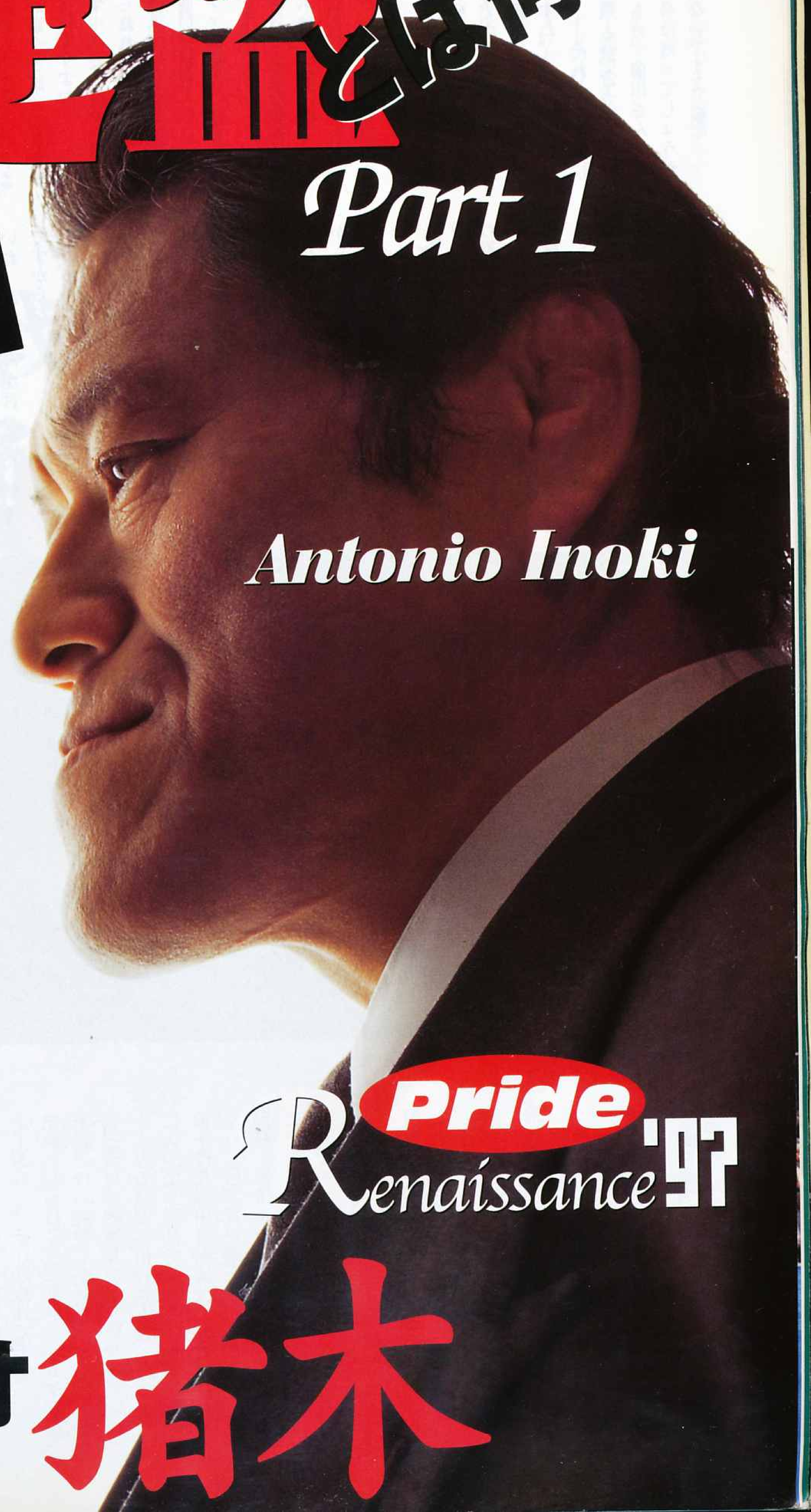
――んもう、なにがなんだか（笑）。

〈97年2月6日、RINGS事務所にて収録〉

技連盟とは何か?

Part 1

りの師弟対決



Antonio Inoki

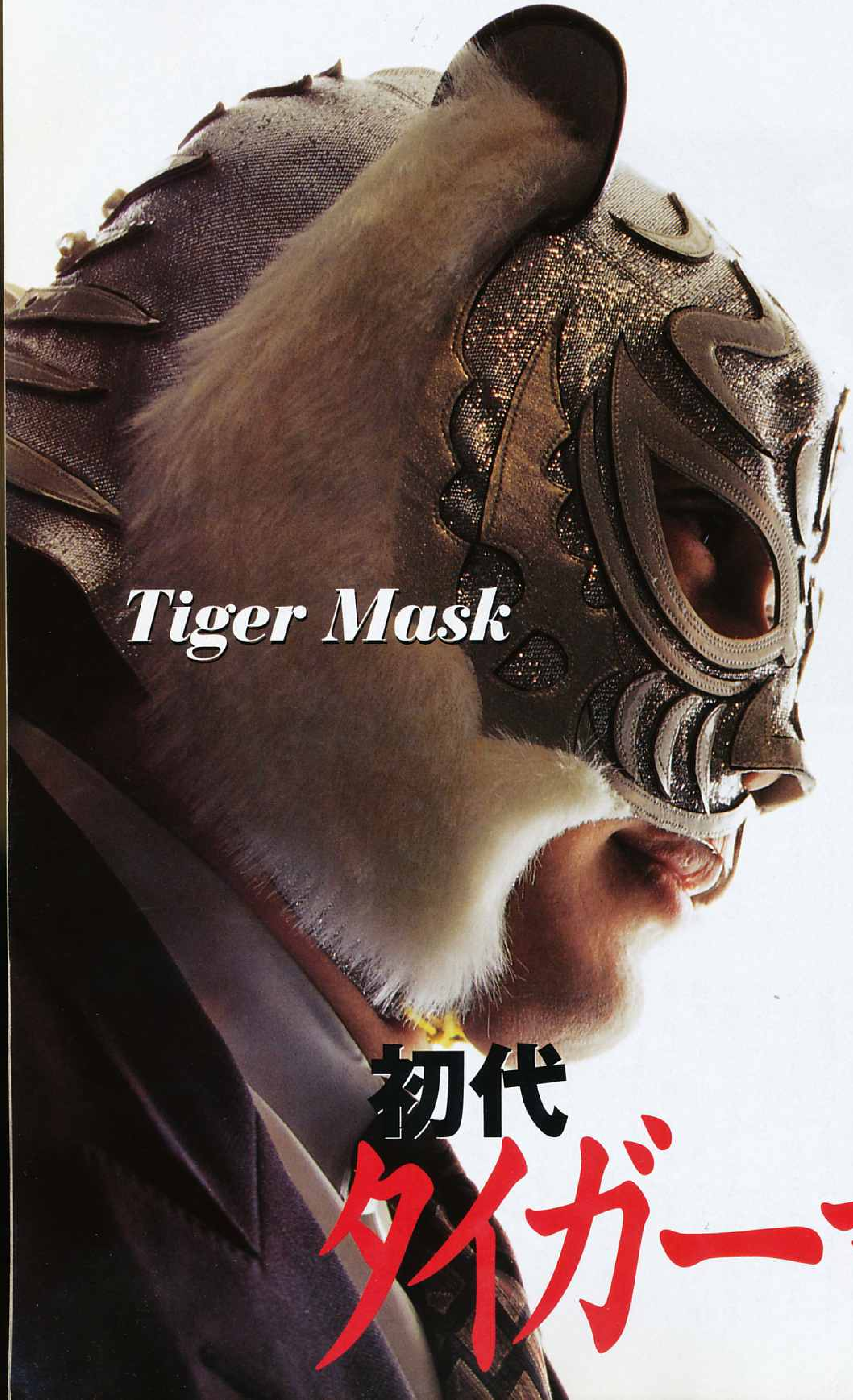
過激で
素敵で

Pride Renaissance '97

VS アントニオ猪木

世界格闘

愛と裏切り



好奇心溢れる
大河ロマン！

初代
タイガーマスクv

――ところで猪木さんと佐山さんは、佐山さんがプロレスから離れている間には接触はなかったんですか?

ティグレ　ほとんどなかったですねぇ、ええ。だけど、僕がちょっと接待して食事に来てもらったりとか。ブラジルのホテル頼む際とか。辞めた時点、辞める時になんか誤解されてるみたいなんで、誤解を解くために……。

――誤解を解く！（笑）。

ティグレ　だって俺が言ったことじゃないよっていうのをね、俺だってそんなこと雑誌で言ってないよとか、俺がやったんじゃないよとかありますからぁ、そういう説明しに行かないとぉ（笑）。ね？

――そう見つめられても（笑）。

猪木　いや、俺は知らないんだよね。そういうのもめんどくせェから。誰がどう言ったとか、どう思ったとか聞いても、どれもこれも知らないというか。でもね、あとで聞いたらスゲェこと言ってたっていうなぁ。それを聞いたときはブッ殺してやろうか！　と思ったけどね。

ティグレ　いやいやいやいや、僕じゃないで～す。ほぉんとに。ぶぁ～。

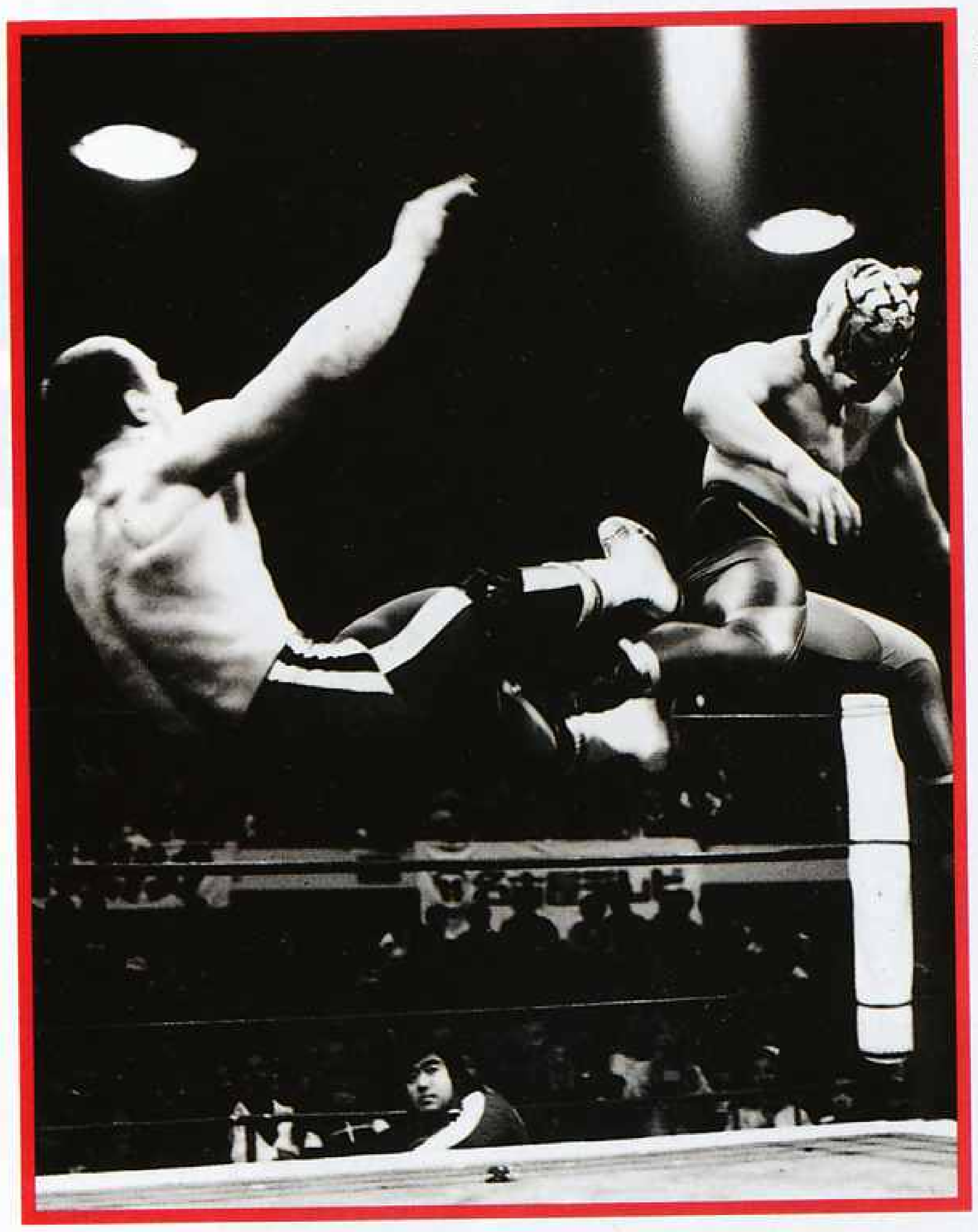
――『ケーフェイ』のことですか?

ティグレ　あのね、あのね、書いたの俺じゃないんだよね、アレねェ。どっかの本にも山本小鉄さんのことを「小鉄の野郎、バカ野郎」って俺が言ってるとか書いてあるんですよォ（笑）。俺、そんなこと言わないよォ。

――どっかの本に（笑）。

ティグレ　どっかの本に。アハハハァ。だけど、その人は全日本プロレスに僕を売ろうとしてたんですよ。けっこう僕もやられてるなあ（笑）。ウフフフ。

Antonio Inoki vs Tiger Mask



――いや、なんか、今の会話だけでも、もの凄い師弟タッグですね。で、今日はですね、「世界格闘技連盟とは何か？」ということで話を進めたいんですが。猪木さんは最近、ブラジル、キューバ、メキシコ、ロスと回ってきたそうですが、これがなかなかプロレスマスコミの方にも詳しく書かれてないんで……。

猪木　まあ、一つは詳しくしゃべってないからね。ンムフフフ。

――ぜひ、ここで聞かせてください。ちょっとの間、佐山さん、お休みいただいて（笑）。

ティグレ　あ、は～い。

猪木　まあ、基本的には今のプロレス界が世界的によくなってもらわないと困るんだけどね。にわかにここに来てブラジルブームというか、バーリ・トゥードあるいはグレイシー関係とかが日本という市場にね、ドォーッと流れ込んできてる。そんなことの状況を見るというか、それがメインじゃなかったんだけど、まあ行って。メキシコのプロレスもちょうど今、この時期は冬なんでね。客の入りはそんなによくないんですけど、それにしても一時の勢いがちょっとメキシコのプロレスにも非常にないというか。

ティグレ（コクコクとうなずく）

猪木　そんなんで、ちょうど変化を起こさなきゃいけない時期にきてるというか。アメリカのプロレスについては、去年ロスの平和のイベントに出て、いろいろその中で教訓というか、得るものがたくさんあって、このままアメリカの団体を変な意味で刺激することなくね、何かやりたいなというのが一つの目的。それと同時にアジアに向けての戦略というのが当然出てくるし。そういう中で対立してる限りはいろいろ大義名分をつけても、一方が参加すりゃ、一方が参加しないとかなってしまうから。

ティグレ（コックリとうなずく）

猪木　そういう意味での誰もが参加できるような環境作りというか、そういう意味での格闘団体というか。もともとプロレスはボーダレスですから、なんとなくまたそういう流れがここへきて出てきたというか。また、ズバリ言ってプロレスの定義が非常に見えなくなってきてる！

ティグレ（素早くうなずく）


猪木　まぁ、プロレスはプロレスでなくならないと思うんですね、いままでの歴史があるから。でもかつてあのマーシャルアーツがあったり、いろんなモノがたくさんあったんだけど、消えてなくなったものもありますね。そんなことで今、これからアジア戦略ということになると、地域のスターを育てていかなきゃいけない。

ティグレ（ゆっくりうなずく）

猪木　インド系であったり、あるいは中国系であったり、そういうものを養成していく道場というかジムを最初にスタートさせて。そこでみんなこれから格闘技とはこうあるべきと、あんまり「べき論」は嫌いだけど、一つのルールを確立することによっていままで交じわり合わなかったものが交りあえるというね、そういう布石かな。そう言ってしまうと、すぐまたみんながブァーッと広めてしまうから。言うのは簡単ですけど、現実に実現していくってことはこれから大変な作業がいるんですね。

――その大変な作業の中で、やはり、佐山タイガーマスクというのが重要なポジションを占めてるわけですよね。

猪木　まあ、そうですね。一つは彼が



Pride Renaissance '97

ズバリ言ってプロレスの定義が見えにくい

日本人だけが後継者って いう意識はねえんです

Pride Renaissance '97



今までやってきたこと、それから彼が持ってる理想というかね。俺なんかはどちらかと言えばそういうみんなが持ってる理想を一つの方向に向けることができればね、素晴らしいものがこれから生まれてくるんじゃねえかと。個々にみんながやってるんだろうけど、それはそれで素晴らしい。でももう一つ、何かが加わればもっと素晴らしくなるっていうね。いよいよそういうものを集約させた時に、なんか新しいものが生まれるというか。そういう意味では佐山の、タイガーマスクというか、その存在は大変大きいですね。

ティグレ　いや、もう自分はただついてくだけですからぁ、……自分の目標っていうんですか？　まあ、ええ、それは全部任せてあるんで。自分は練習して、それから基本作りに、とにかく土台作りが自分の仕事だと思ってますからぁ、あの……。

——どうやら、佐山さんは猪木さんの前だとあまりしゃべらない感じがするんですが（笑）。

ティグレ　アハハハァ、いやいやいや。

——いつもはもう少ししゃべっていただけるんですが（笑）。

猪木　しばらく俺、向こうに行ってようか？（笑）。

ティグレ　いやいやいや、いてくださ〜い（笑）、お願いしま〜す。あの、戻ってきたプロレス界っていうのは、率直な感想として、試合が全部変わってしまったなぁと思うんですよ。

——それは例えば？

ティグレ　シューティングもそうなんですけど、そのスタートはやっぱり猪木イズムがあってですね。で、僕らが若い時代にズーッと教えられてきて、やってて。で、今こういう風にポッとプロレスに入ってみて、「あれ？　随分変わってるな」というのがホントに素直な……アハッ。そんな感じですね。

——今のプロレス界というのは、気がついたら「馬場プロレス」全盛の時代じゃないかと思うんですね。馬場さんはよく「プロレスにはセオリーがある」という言い方をしますけど、セオリー内のプロレスという意味での「馬場プロレス」の完成形がプロレス界を支配してるというか。で、猪木遺伝子というか「猪木プロレス」の遺伝子というものが、あまりにもリング上に少ないんじゃないかという気もするんですよ。なぜだ！　と思っちゃうんですよね。

猪木　まあ、それも一理あると思いま

すね。でも、いつもやっぱり変革を見極めていくっていうか、善し悪しはさておいて、それが俺の宿命なんで。猪木がそれによって素晴らしいとか、あるいはダメだというとかいうよりも、それを自分がやることに喜びを感じるわけだから。やっぱり、格闘技ってのはなくならない。でも絶対の努力をしなければ、まあ、メジャーになる必要はないけれど、やはり大衆へアピールし続けることは大変難しいと思うね。そのためにこれから闘っていかなきゃいけないのかなというね。

ティグレ （コクコクとうなずく）

猪木　一時は俺もプロレスを一回離れたというか、半分引退という意識を自分の頭の中に持っていながら、やっぱりそこへグッと入って帰ってきた時に非常に「これでいいのかな？」っていうね。やっぱり「これでいいのかな？」っていうのは、どの業界であろうと持ち続けないといけない。それがあるから発展していくわけで、これでいいんだと思えばもう、俺たちはやる必要は何もないわけだから。遺伝子というか、ある意味での精神的なものっていうのは残っていくし、それがなくなった時には多分プロレスっていうのが全然違った形のものになっていくだろうとは思いますけどね。

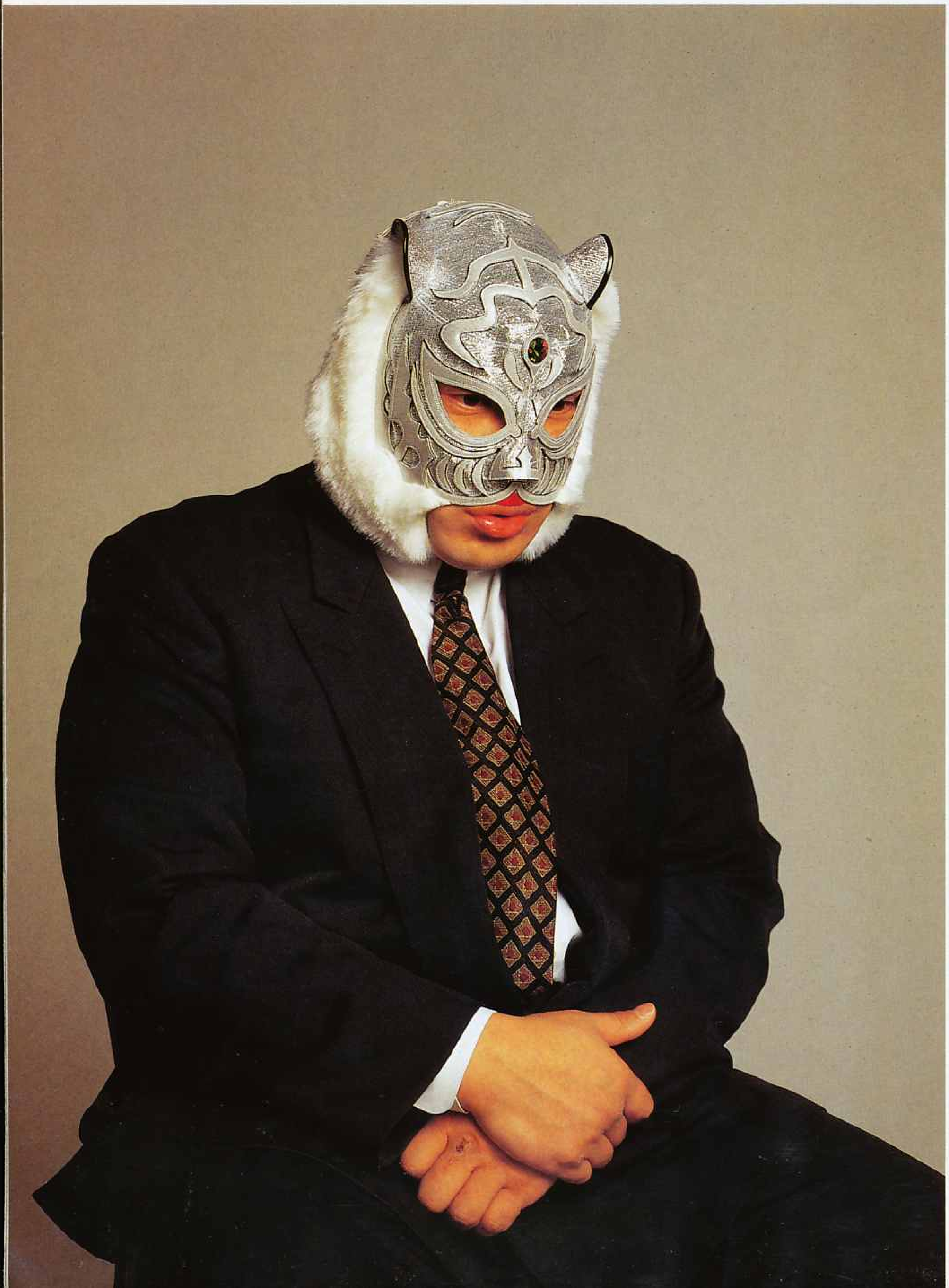
――ズバリ言って「猪木プロレス」の遺伝子がなくなったら、もうプロレスは終わりですよね！


猪木　まあ名前を挙げていうわけにはいかないけど、大体日本のいまの選手も含めてね、例えば後継者っていうと日本人っていう風にすぐになるわけだけど。俺なんかね、そういう意識ってのはあんまりねぇんですね。それよりも世界に通用するキャラクターというか、選手ってものをこれから育成していかないといけない。例えばハルク・ホーガンであるとか、テレビを通じて一つのイメージができてる場合と、まったくそうでない、そういう肩入れをしなくて、面白いかどうかで見る地域ってのがあると思うんですね。そういう意味では新日本プロレスっていうのは大変評価が高いから。まあ、高いっていうだけでアグラをかくわけにはいかない。だから、そこでそういう人たちをも、もっと巻き込んだ形の選手が生まれてくれればね、いいと。

ティグレ （深くうなずく）

猪木　だから、俺がこういうような立場でこういった話をしてると、新日本に対しての批判を言うような形になってしまうけどね。ンムフフフ。でも、そうじゃなくて、新日本はいいじゃないかと！　それを変えようがないんだから、もう。要するに猪木というズーッとやってきたものから、変化が起きて当然だし、その変化がいい方向にいけばいいし、それと同時にある、猪木という一つの自分自身の、なんていうか趣味と言っていいのかな。そういう意味での、「こうあるべき」「こういう絵を描きたい」ということは常にズー

Antonio Inoki vs Tiger Mask





シューティングも所詮は猪木イズムですから

ッと持ち続けてるわけでしょ。で、ある程度描けたからって満足できないだろうしね。そこんとこで、言葉で今日は初めて言いますけども、佐山自身が持ってた内在する意識というか、そういうものが多分一致するものだと。

ティグレ（もの凄い早さでうなずく）

猪木　だから俺自身もそうだし、佐山自身も世界へ飛び出していかなきゃいけない！　例えば新日本のこの間の東京ドームを見た時ね、確かにこれは日本のファン6万人というお客が熱狂してくれて、それでいい。しかし、世界にそれを流していく時にやはり国際色っていうことには非常に欠けますよね。

――例えば佐山さんと、具体的にこうしよう、ああしよう、というのは今まで出てないんですけど、今ここで言えることというのはありますか？

猪木　今うちの新人の中にはけっこう凄いのが、優秀なのがいるんですね。

――藤田選手とか。

猪木　うん。だからまあ放っとくと非常にいい素材が100％力を出し切れない違った方向へ行く可能性があるんですね。やはり誰しもが壁にブチ当たるというか、その壁にブチ当たった時に、いい方向性を示してあげれば、その人間が気付けばだけど、その「気づき」さえ与えてあげることができればね。もっともまあ俺なんかは、何人かの選手が俺のパートナーを務めるとか、ジョギング一緒にやるとかで、ほとんどの選手は接することがないんですね。

ティグレ（きょとんと宙を見上げる）

猪木　だから俺が何を考えてるのかっていうことも彼らにはわかってないし、彼らも迷ったり、あるいはどういう風に考えているかということもなかなか話し合う機会もないと。だから、なにかね、要するに今までは「やるならやる！」「勝手にしろ！」じゃないけど、それでグングン引っ張ってやっていけた。今はそうじゃない。なんか世の中もそうなんだけど、逆に言えば、それが迷いが起きる原因かな、と。自由になればなるほど選択肢ってのは非常に広がるじゃない。広がることによって迷うわけだよね。この道しかないということであれば、逆に言えば不満もあるかもしれないけど、そこへ必死になって力を投入できるというか。そこんとこがね。ま、なんかあまり後継者の話ばっかするとインタビューの主旨と違ってくるのかもわかんないけど（笑）。



――いえいえ（笑）。

猪木　将来像というものを見た時に、日本のプロレスは違うんだと、アメリカともあるいはメキシコともまったく違うんだっていうことの主張から、ある程度世界に向けて評価受けてきてね。その主張をなくしちゃったらば、もうアメリカの方がパフォーマンスはいいし、体もいいし。ね。あるいはアメリカ人ということで国際的な受けもいいし、そういうことからしたら俺たちは勝てないわけだからね。

――つまりは、やっぱり新日本プロレスの黄金期にあった道場論というか道場の概念に行き着くと思うんですよ。例えば「佐山さんが新日本の道場でも練習している」なんていう話を聞くと、やっぱりもうワクワクソワソワしちゃうんですが、佐山さん、何かしゃべってください（笑）。

ティグレ　あ、はい。ウフフ。だから、先ほど言われたように社長（猪木）と共鳴してるんじゃないかと。これはまったくその通り。共鳴してるというか。

猪木　別に共鳴しなくてもいいよ！

ティグレ　いやいやいや。共鳴というかね、社長に乗せられたことですから最初から（笑）。シューティングも所詮はそうですよ。共鳴とかそういうんじゃなくて、そうやって教えらたことをやっただけなんですよ。俺が今パッと入ってきて、「アレ？　昔はこうだったんだけど今は全然違うな」と。で、僕もスタイルとか全然忘れてて（笑）。試合とかやってみて。でも社長はもの凄い厳しいこと言ってくれるわけですよ。「あ、これだった！」っていうのをホントもう、今年に入って思い出してきて。それで僕のファイティングスタイルも変わったと思うんですよ、今年に入ってから。

猪木（椅子を使って体をほぐし始める）

ティグレ　こういうこと言うとキザに聞こえるかもしれませんけど、僕は教えるってことにある程度、そういうものに関しては絶対的に自信を持ってるんですね。で、新日本の中でも凄いのいますよね。彼らのあの素質は凄いですね。道場で練習してると。想像できる人はできると思うんですけど、自分がそういう技術をもっと教えていって彼たちはどういうレスラーになっていくかね。ジャブから入ってるわけですよね。ジャブから入ってタックルから入って、もちろんマウントもやってるし、関節もやってますし。彼たちの目、輝いてますからぁ。「このやる気とい



うのは、ダイヤモンドハウスっていうか、金の卵どころじゃないね、あそこはダイヤモンドハウスみたいな道場なんだ」って昨日も話してたんですけど。すごい速いんですよ。石沢かな。パ～ンと行くとト～ンと来るんですね。なんかいままでにないような充実感っていうんですかね、そういうのはありますねぇ。

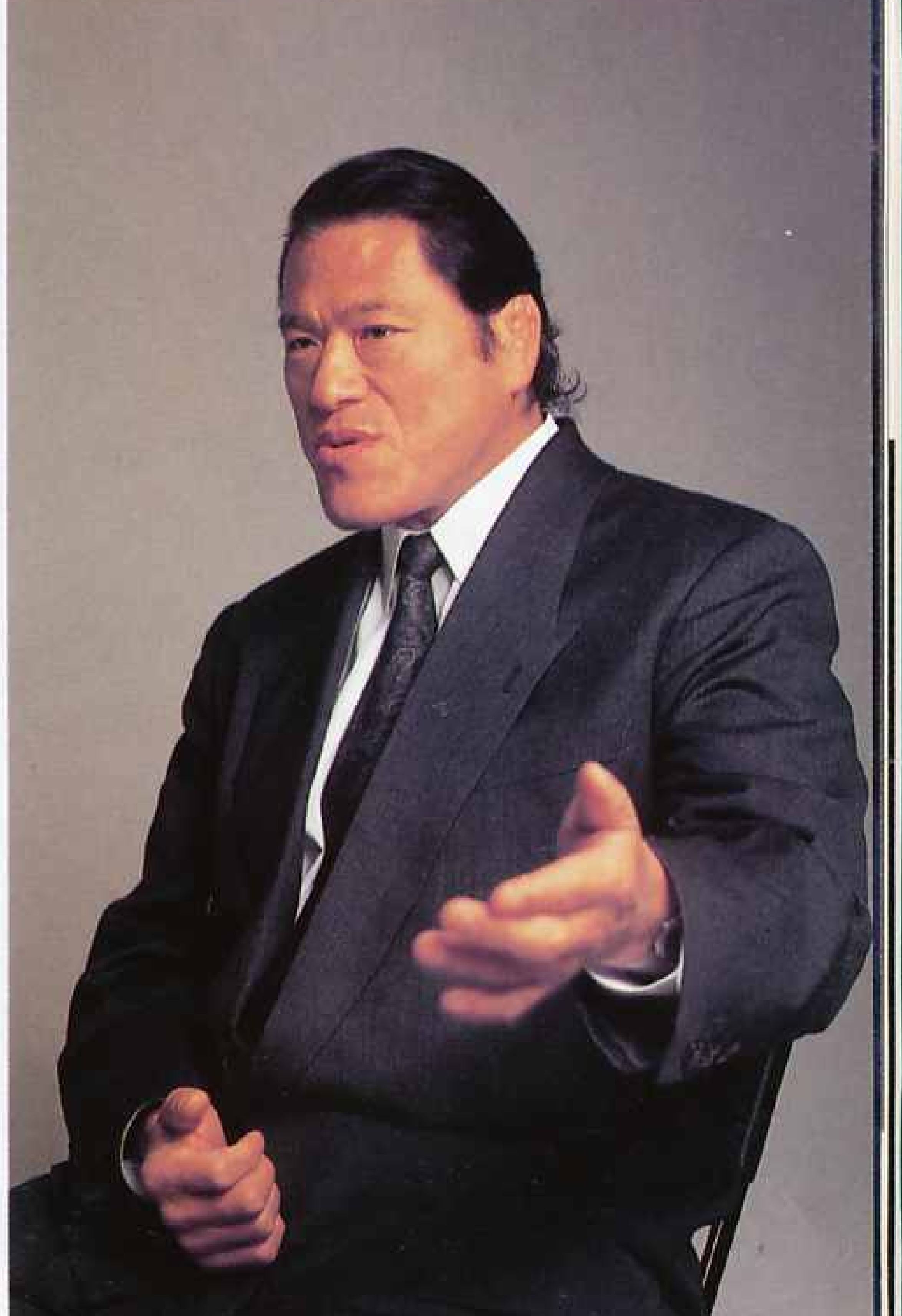
――ははぁ。で、プロレスというのは、猪木さんが常に言ってるように、人を感動させることができるジャンルであると。最終的にはそこに行き着くと思うんですけども、人を感動させるという尻馬に乗っかってと言いますか、乗っかりすぎて闘いの原点が見えにくくなってますよね。

猪木　うん、でも正直なことをいやあね、もう役割を早く終わらせてしまいたいというか。俺も自由な旅に旅立ちたいというかね。人間っていうのは思惑通りにいかないみたいで、逆の方向にどんどんどん進んでしまうからさ（笑）。結局、だから、その表向きの部分しか見えない感性ともう一つ、今度はその側面を見る感性というね。

Antonio Inoki vs Tiger Mask

要するにプロレスというのはスポーツのジャンルを超えた格闘技である。そうすると今言った感動であるとか、非常に幅広い強さ、イコールそういうものを身につけた者がメインイベンターとして登場できる。強いだけであれば他にいるかもしれない。そうすっと客を呼ぶこともできないしね。

そういうことが非常に伝えにくいというより、教えにくいというか。これはだから、ある意味では俺一人では出来なかったり、ティグレに加わってもらって。彼の場合は非常に理論づけがうまいというかね。俺なんかの場合はどちらかと言えば自分の感性でやってきたから。「わかるだろ！」っていうね。ところがそれは俺がわかってる話で、彼らの感性とは違うから首傾げてる。スリーパー一つとっても俺が極めると極まって、彼らが同じにやっても極まらない。こういう部分で理論づけっていうのが必要だしね。



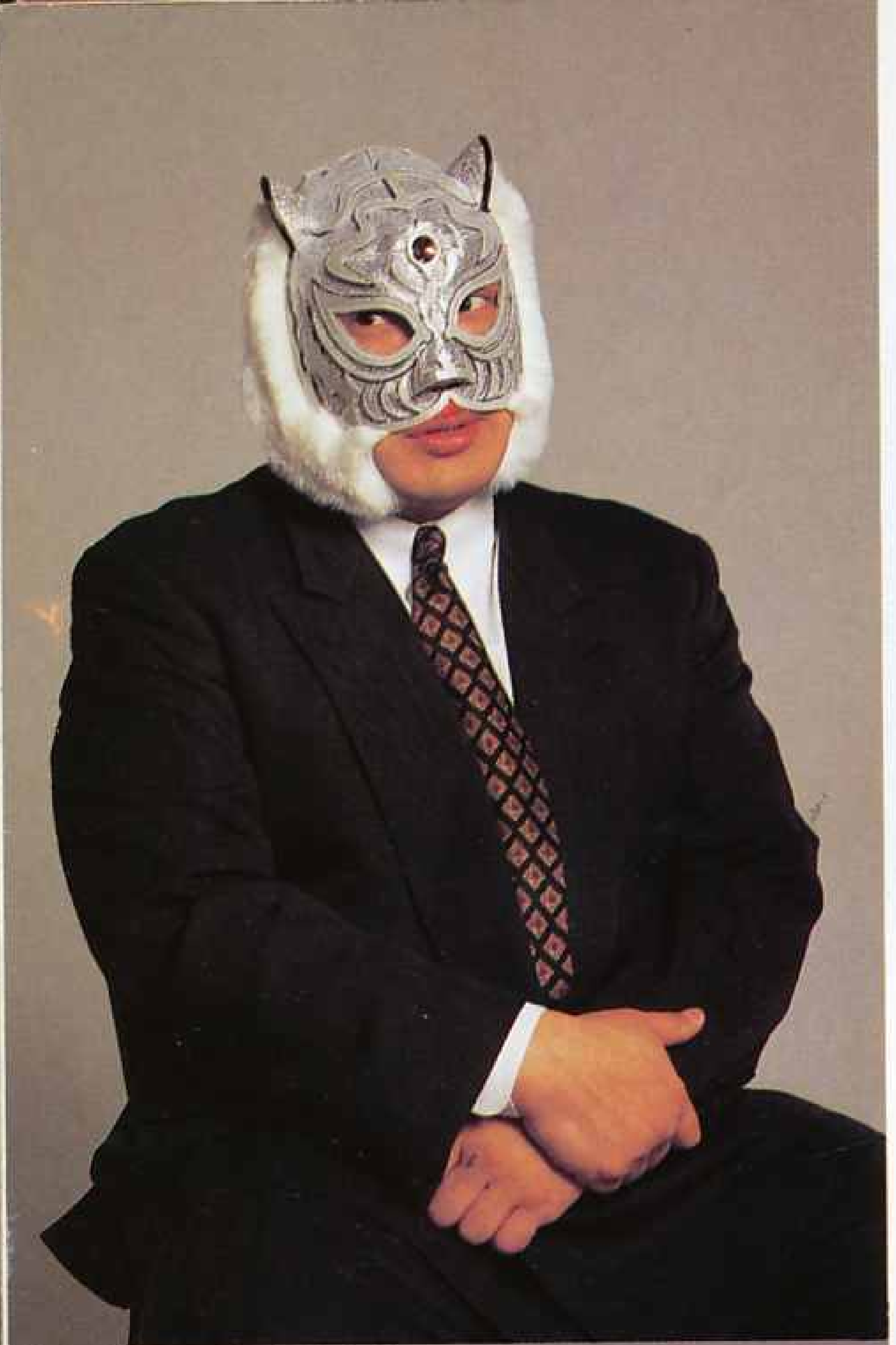
ティグレ　（コクコクとうなずく）

猪木　日本のプロレスにそれがなかったんですよ、今までね。力道山っていう人も自分の感性で、ただガムシャラに鍛えてね、若い人を。そこで脱落するのはしょうがないと。で、根性論でズッと来てた。で、カール・ゴッチが登場することによって、ある意味それを理論づけるというかね、テクニックとして。もっと言えば、あの時代でも今のアルティメットみたいなものが出てきた時に、間違いなくグラウンドでバッと組んだら絶対負けない。それは一つのルールの中で殴ったりなんかしないという部分でね。極め技の応酬っていう。ところが今度は殴りっこがあるということになると、そういう絶対的だったものが崩れてきちゃうわけでしょ。周りの環境が変わってきたから。

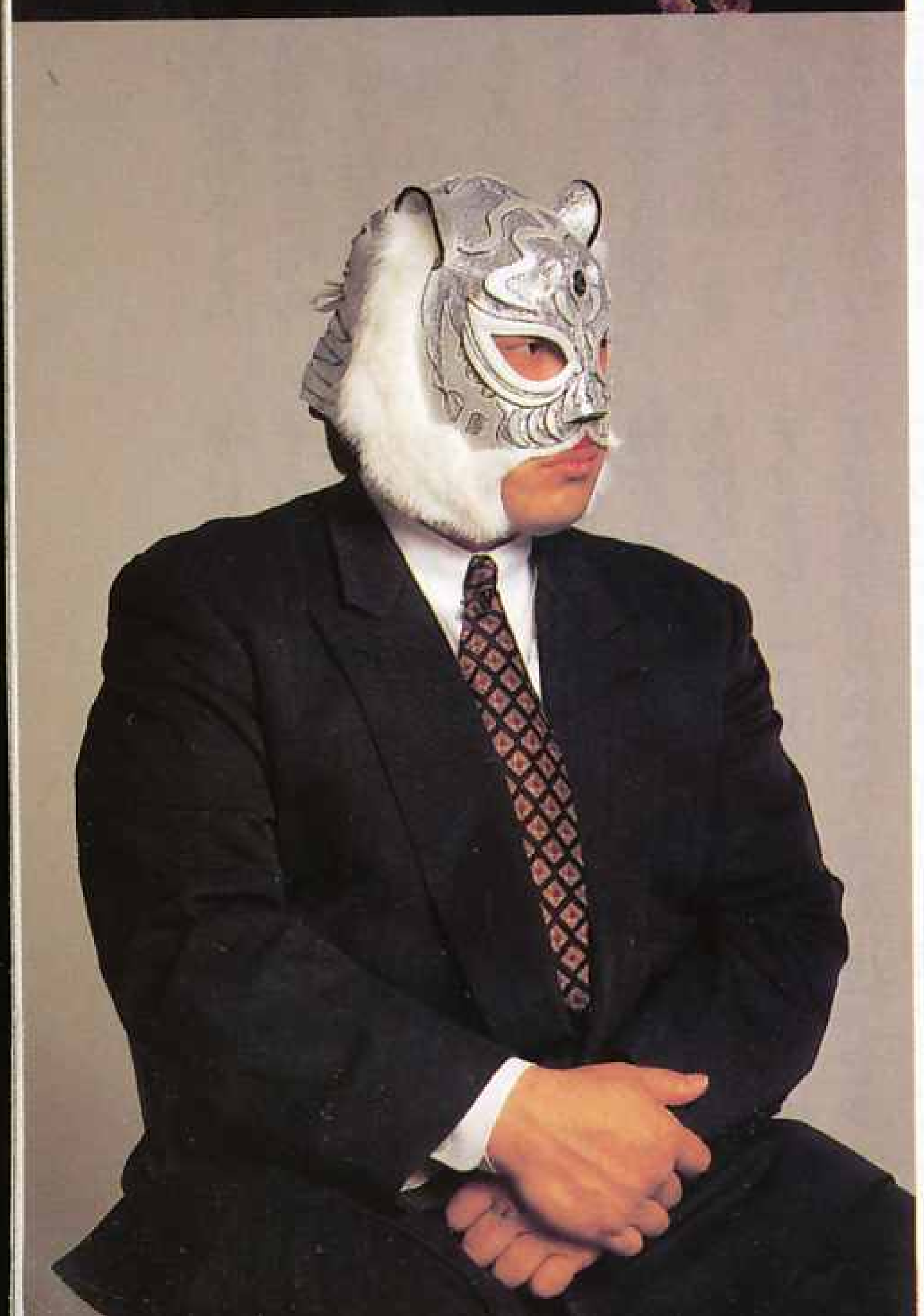
ティグレ　はいはいはい。

猪木　レスラーは絶対強いと思うんですね！　俺も自信持ってるし。ただルールが違ったからといって、俺たちはやらないということは、いままで主張してきたことと相反するというか。どっかで格闘家っていうのはイキがってる部分とか、「プロ」というジャンルから入ればそういうイキガリがビシッと見えてくる。それがやっぱり見る方から見ると楽しい。逆に言えば、日本の武道の精神から言えばすべて悟ったように闘わずして勝つ方法だけれど。相手にしなくてもいい。そこがね、要するに非日常的なことが現実にリングで実現するっていうことにね、ファンの夢を掻き立てる、そこんとこの難しさをね、どこまで俺がそういうとこまで深く入っていくか。どんどんどんどん入っていくと非常に難しい話になってしまう。もっと単純に言えば、だから強いか弱いかっていう。強いか弱いかの一つのポイントとして、これとこれとこれがあればどうだと。その素材が今、新日本にはいっぱいあるんですよ。そこに気付かせる。ま、新日本ってのは凄いんですよ。それから今、いろんなジャンルにいろんなのがいます。その彼らに「気づき」をさせたら、興味さえ持ってくれれば、新しいさっき言った格闘技連盟ってのがあったけど、多分そういう方向にね、走っていくんだろうと。それはまだ、絵が描けてる









俺は、レスラーというのは絶対に強いと思うんです

わけじゃないから。あくまでも絵を描きながら、点を打ちながら、今こう進めてるという状況ですけどね。

——世界格闘技連盟ということに関してもそうだし、やっぱり猪木さんのやることが5年も10年も早いことだと思うんですよ。ホントはもっと早く誰かがやってなきゃいけないのかもしれないんですけど、結局最終的に猪木さんしかやらないということになってしまいますね、いつも（笑）。

猪木　2、3日前にゲームの取材があったんですね。例の今出てるやつ。

——は？　プレイステーションですか。

猪木　あれは要するに、もうレスラーのなんていうかな、現実のリングに近づいているんだよね。もしかしたらゲームが先に行っちゃうかもしれない。感情移入ができるというか、そこまで来てる。実際うちの会社で「お前ゲームやったことあるか？」って聞くとほとんどないんだよね。そうすると結局やってないわけだから、「いや売れてるんですね」とか、そのレベルなんだね。そういったものがなぜ受けてるのかっていうことに、みんなが触わろうとしないんだね、不思議なことに。だからもう一つは、若い選手に言えるのは例えば俺なんかがインタビューしてる記事がいっぱいあるわけでしょ。それすら読んでないんだよね。で、わかんないわけでもないけど、自分の記事だけは読む。でも、少なからずその道の先輩というかな、それが何を考えて今日あるのかなっていう、成功哲学みたいなものがあるんだから。そういう興味があるのか、ないのか。まったく無関心でね。俺は日頃インタビューでしゃべってるわけでしょ。プロレスラーとはこうあるべきだとか。ところが選手はそういうことを見てないの、ほとんど。これはね、俺も不思議だなあと思うんだよね。

——それはズバリ言って好奇心の欠如というやつですか。

猪木　俺自身ホント正直言って苦手なんですよ、こんなこと言うのはね。でも、大事な部分っていうか、要するに船が出航してどこの港に行き着くんだという目的意識がね、薄いと。これから海外出ていく選手が何人かいるんで、そういう目的意識をハッキリ持たして。俺たちは修行に出た時にはそういうことは言われて出ていかないけど、自分なりのポリシーがあったからその目的意識がハッキリしてたんだよね。

ティグレ　（思い出すように宙を見上げる）

猪木　それはね、みんなそれぞれの素質、資質ってのがあって、俺がこうだからって押しつけるわけにいかないけども、少なからずその道のプロってのがみんないるでしょ。この道で言えば俺がプロなんだろうけど、興行をも含めてね。究極は、だからお客の心を掴まなきゃいかんわけでしょ！　お客の心を掴むのか、お客に踊らされるのかっていう。これはもう非常に微妙なとこなんですけど



究極は、だから、お客の「心を掴む」というか

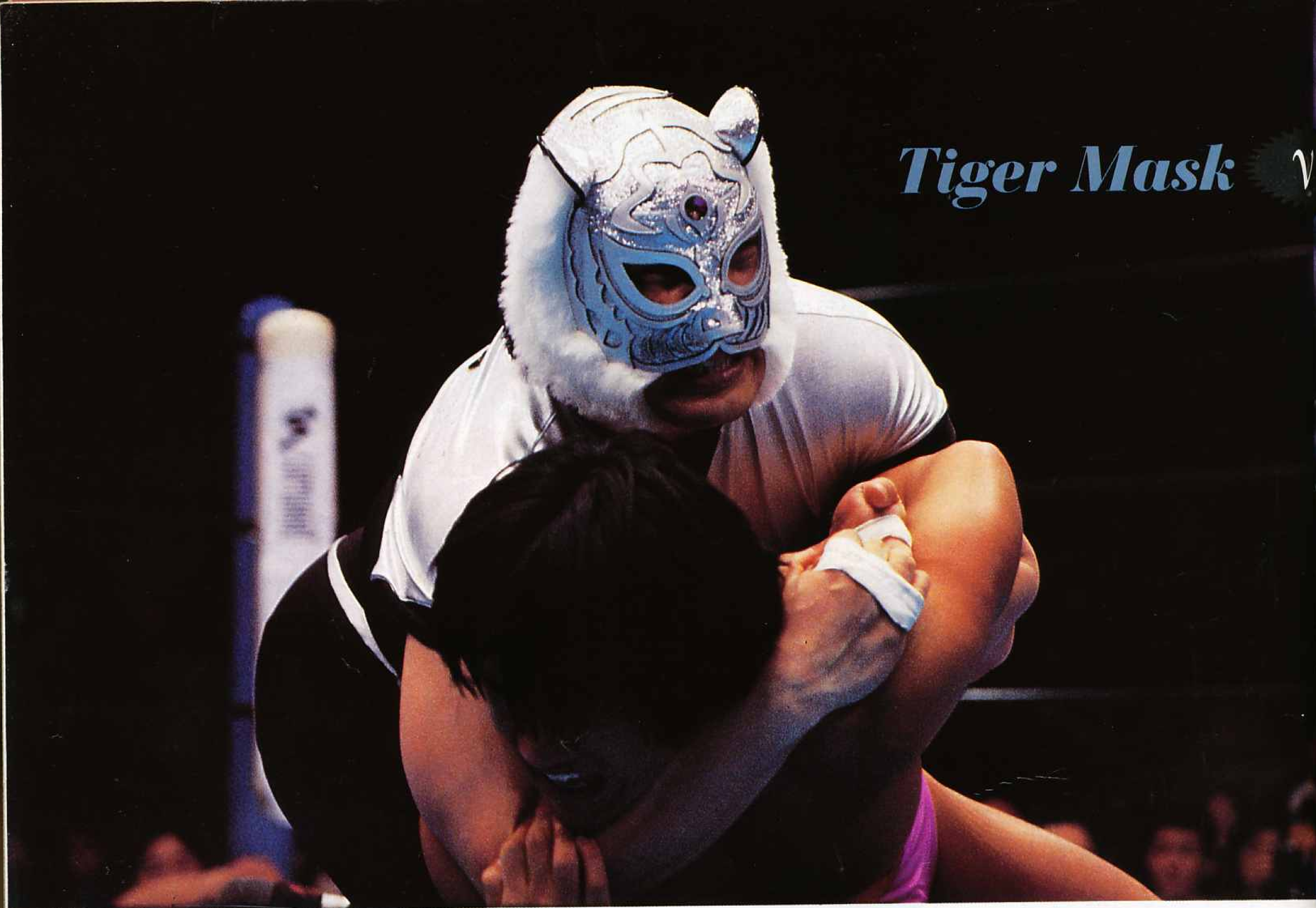
ね。お客に媚びを売って、拍手をもらうのか。そうじゃなくてお客にこちらに注目させておいて、それで無意識のうちにお客が拍手を送ってくるのか。こういう考え方が、いまこのプロレス界では特異的な意見かもしれない。でも、他のプロレスとの違いをどう訴えていくかっていうと、多分それが一番。逆に言えば日本人のプロレスラーとして世界を相手にしたときに、それがなかったら、これはもうちょっとアメリカのプロレス界、世界のプロレス界で通用しないだろう。だから、いろんな選手がアメリカに出てって、ムタも含めてね、テレビに出ればとりあえず知名度は高められますよ。しかし、こいつのために入場料を払います、というのがメインイベンターですからね。

――猪木さんの考えっていうのは、僕は個人的にすんなりスーッと入ってきますけど。

ティグレ　あ、あ、僕から見ても当たり前なんですよ。それで育ってきたわけですからぁ。それをわかってないなって人もすごく多くて面白いんですけどぉ。最近よく道場でディスカッションするんですよね、練習終わってね。汗が引いてるとこでバーッとやるんですけど、これが一番大事だと思うんですね。そういうことを何のためにやってんのか、やんなくちゃいけないかって。そういうディスカッションの場をもっともっと増やしていかないとね。やらないと変わってかないかなと。

猪木（椅子を使って軽いトレーニングを始める）

ティグレ　でも今やってる人たちは例えば直接言われたりとか、活字で書いてあってもわかんないと思いますよ。何ていうんでしょうかね、誤解の方に行っちゃうと思いますよ。だから、道場のリングの上でディスカッションをして素質を伸ばしてやりたいなあ、みたいな思いがあるんですけど。僕は新日に入る時に、そういうことをガンガン言われ続けて何年も若手時代を過ごして、それでわかってるわけでしょ。だからそういう意識があるか、ないかですね。僕もさっき言ったように、去年バッバッて試合やってた時と、あとからそういうのを思い出して「ああ、やんなくちゃいけない」と思った時とはまるっきり違いますからね。僕の場合は根底にあったからできるんですけれど。若い人たちはそのホントの意味を掴んでいかないとね。



Pride Renaissance '97

——直接言われてもわかんないということは、例えば猪木さんがしゃべってても「うるせえな、このジジイ」と思ってる不届き者がいるんですかね。

ティグレ アハッアハッアハッ。ヒドイ、この人ぉ、ヒドイ！（笑）。

——いやいや、そういう意味じゃなくて（笑）。そういう感覚というか。

猪木 ま、もしそれだったとしたら、それはないと思いますけどね。ただ習慣っていうことで、自分がある意味での一つの基礎が出来ちゃうとそっから違ったことをやるっていうのは至難の技なんですよね。人生何十年。もうサラリーマン社会でそこへ入っちゃったら、そっから抜け出せない。不満はいっぱいある。辞めたい。夢もいっぱいあるけど、そっから抜け出せないっていうのが現実の世の中にはあるじゃないですか。そっから出た人は異端であったりね。おそらくプロレスの練習法一つとっても、従来あった屈伸運動から始まって腕立て伏せをやって基礎体力をつけて。そしてこうこうこうと。で、俺なんかはどちらかというと毎日続けていくことと同時に、ある瞬間は違った状態を作っていうかね。例えば野外に出るとか。ところが見てるとなんか教えたことがズーッと十年一日変わってない。例えば俺らが創造した背中を柔らかくするためにタイヤを使ってブリッヂをさせるとか、それからいろんなこう器具を改良したり、自分でね。そっから何にも発想しない。いつ行っても、「面白えことやってるな」っていう興味を湧かせてくれるものが何もない。いまだにそれをみんなが後生大事にやってる。同じようにね。確かに俺たちも自分でよかったからそれを作ったんだけど。なんかそういうような発展性っていうものが感じられないというのはありますね。

——今の棒のトレーニングも猪木さんがやったことですからね。

猪木 いや、まあ。藤原曰く「次から次へと面白いもの持ってきますね」ってな（笑）。ンムフフフフ。

ティグレ 棒はね、ホントにいいよ。前から自分たちがやってる理論、筋肉の理論、レスリングはこうでなくちゃいけない理論。全部一致してますから。だけど社長がやってると思わずさあ、見る人が見るとさあ、バカみたいに思われるかもしれないけどォ（笑）。

——ガハハハハハ。ヒドイ。

ティグレ 海外行ってる時さ、棒貫ってさ、「やっておけ」って言われて。「これやるから」って「ありがとうございます」ってやろうと思ったんだけど。でも今最新式の作ってますから。

——折りたためる棒（笑）。怖いですねえ。

ティグレ あれただ回してるわけじゃないんですよ。俺も最初、猿がやるんだと思ったんだけど（笑）。

——また、ヒドイことを（笑）。

ティグレ やってみるとね、伸ばすところがね、全然違うんですよ。

猪木 結局いままではね、筋肉信仰というかな、大きいものに対する信仰であって、とにかく大きくなることが絶対的であってね。そして大きくなるためにボデービルというかね。まあ、俺たちが練習した頃っていうのはまだ、ボデービルが一般化されてなかったしね。そういうものから、カール・ゴッチという人が出てきて、あんまりバーベルはほとんど使わなくて。まあ、ああいう練習法で、まあ俺も割合ボデービルも強かったけど、あんまりそれで筋肉を固くしないですんだというか。ところが、その後ステロイドが始まってハルク・ホーガンが人気になって筋肉マンみたいのが主流になって。そうするとみんなそこへ目が向いてしまったわけでしょ。結果的にはその人の体質によるから一概にはいえないけども、ほとんどの場合はボデービルは筋肉がガチガチになっちゃって躍動さっていうのかな、そういう筋肉のしなやかな動きってのができないわけですよね。だから、プロレスラーの本来の動きっていうのはしなやかさにあるわけでね。スピードに力強さが加わる、そういう筋肉じゃなくちゃいけないんだけど。いつのまにかそういう流れが変わっちゃったわけですね。

ティグレ (きょろきょろと周りを見渡す)

猪木 だから、プロレスラーも相変わらずボデービル信仰というか、それが自然になっちゃったのね。それがいけないというと可哀想だから、それはいいじゃないかと。それだけの筋肉を作れるんだから。俺にそんだけ作れって言ってても興味もないし、それはそれで見せる部分で筋肉が大きくていいじゃないかと。それで強ければいいわけだから。しかし、俺の考え、自分の体に合ったことにすれば、しなやかにどんな技を掛けられても極まらないという。そういう自分の経験から言ってね、練習法も変化を起こさなきゃいけない。いままでは屈伸運動だけとか。それはそれでたまにあってもいいけど、まったく違った形のトレーニング方法。これもね、見てると若い選手がそこに入ってくる選手と入ってこない選手がいて、これはもうね、その人の興味。「あっ、俺もそういう風になりたいな」っていったら入ってくるし、「ああ、俺はとてもそういう風なのは、俺はもう」ということであれば入ってこないしね。だから、「お前やれ、コレをやれ」っていうわけにいかないから。そういう意味ではジッと見てると面白い。



Antonio Inoki VS Tiger Mask

ティグレ あの、ある種の僕らの考えっていうのは前から一致してることがあるんですよ。筋肉に頼らないとかね、柔らかい筋肉作らなきゃいけないとかね、躍動感がなくちゃいけないとか。他の運動の世界で世界記録出した人たちとかね、全然違う練習法なんですよ。それがね、僕たちと一致するの、考え方が。ベンチプレスに至っては社長がやってるベンチプレスがあるんですが、あれがその人たちの主流になっちゃってるのね。そんなことまで一致してるのかってビックリしちゃったんですけど。たぶんこれからスポーツ界で、いろんな記録を出してきたりとか、そういう風になっていくはずですよ。

——猪木遺伝子は「外」にしか広がらないんですかね(笑)。

猪木 近くにいすぎてわからないということをね、よく言われるんですね(笑)。で、まあ、多分ある時代からはアントニオ猪木が好きだからって入ってきた選手と、アントニオ猪木じゃなくて例えば長州に憧れて入ってきた選手ってのもいるわけですね。そういうことからすると、好き嫌いとかそういうんじゃなくてね、そういう選手に遺伝子を刷り込むということはちょっと難しいかなって。だって興味がないんだから。ある人間に興味を持ったり、あるいは好きであるというのは絶対的なものですよね。昨日も『好き』っていうテーマで朝まで議論したんですけどね。

——『好き』っていうテーマ！(笑)。

ティグレ ……『好き』……?

猪木 あの、『LOVE』とかってあるでしょ！

(つづく)

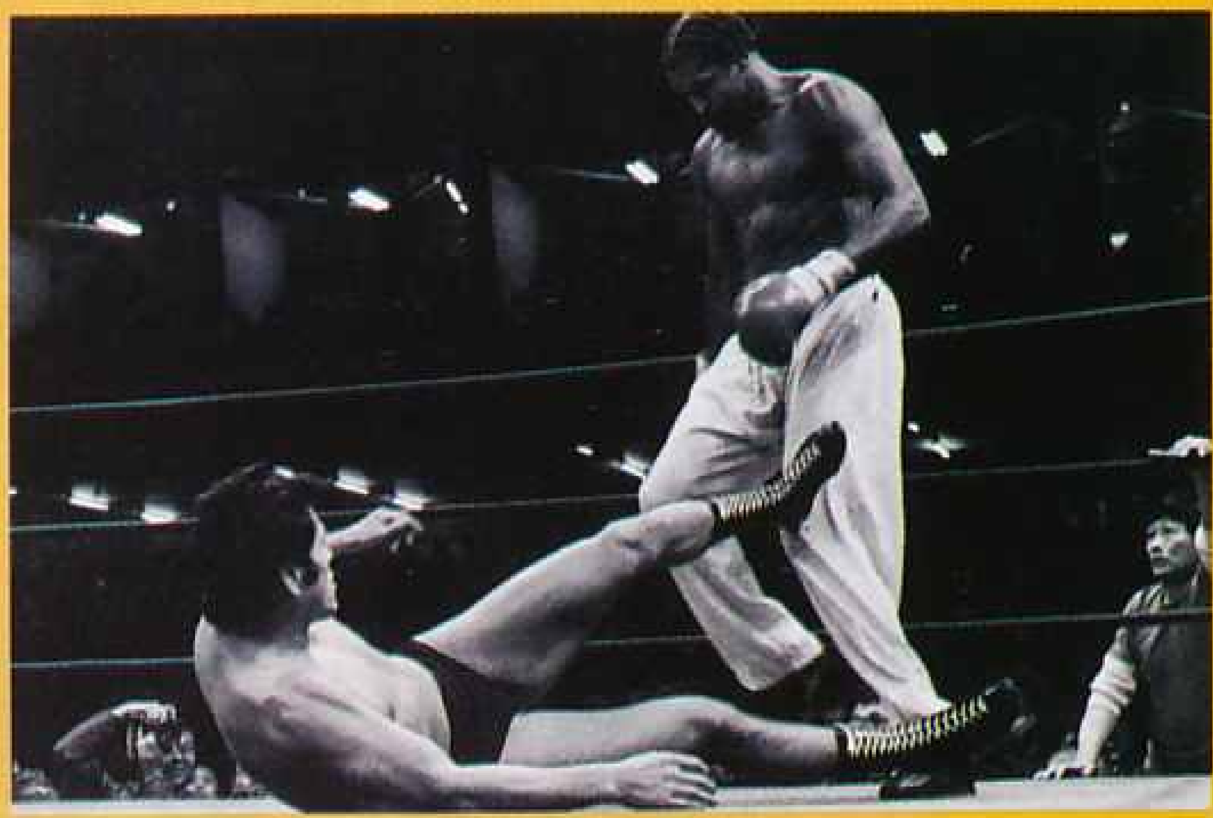
※『LOVE』とかってあるでしょ！という謎の言葉を残して終わった過激で素敵で好奇心溢れる大河師弟対談第1回！あまりにも面白すぎて今回だけでは収録しきれないのである。

次回、船木、前田、長州、馬場などの名前が出てくる続編はどんな闘魂と不条理と情念を見せてくれるのか?

乞うご期待!!

特別寄稿

前『週刊ファイト』I編集長
井上 義啓



熊殺しの墓標に降り注ぐ17年という名の歳月



「ミスター・イノキ。私が今日あるのは、あなたのおかげだ。だから私はいつも、あなたに感謝している」

「イノキは格闘技界新世代の父なんだ。彼は偉大な男だった。そして今でも偉大だ」

ウイリー・ウイリアムスの猪木に対する言葉。活字は掃いて捨てるほどあるが、その中からハッと胸を衝かれたものを拾い上げてみると、こうなる。この言葉を口にした大男が〝平成9年1月4日〟どんよりした空気が淀んでいたビッグエッグで、上半身には肉がついていたが、太ももはやつれて寂↘

↘し気に映ったアントニオ猪木と闘った。勝った側にもパワーは感じられなかった。負けた側に、冒頭で記した畏敬の念が強かったのだから、これはもう死闘にはならない。17年という長い歳月。東京ドームに両雄の闘いを見た高校生は、まだ生まれていないか。生まれていたとしても一つかそこらの赤ちゃんである。そういったヤングたちに対して、あの闘いをどう納得させようというのだ。「猪木とウイリーとの間には17年という長い時間が存在していた。それが1・4ドームのすべてである」——。

●

あの闘いについて、私はいろいろな人からさまざまな質問を受けた。東京ドーム、そして大阪で……。その『喫茶店トーク』のいくつかを列記するとこうなる。

「なぜ、試合直前になって、猪木はコブラツイスト、ウイリーは正拳突きのみによって決着をつけるという決め技限定マッチになってしまったのか。私はうかつにも、このルールをマスコミ控室に入ってから知った。呆然とした。あの技は使ってはいけない。この技も禁止する。あの忌まわしい猪木×アリ戦の教訓は一体どこへ行ってしまったのかとね。あのルールで闘ったのなら、あのようなそっけない猪木になって当然だ。伸ばそうと思えば時間は伸ばせただろうが、しょせん、同じシーンの繰り返ししかやれないのだから、初めから山あり谷あり、〝名勝負〟は考えてもいなかったと思う」

「ウイリーの自分に対する気持ちは知っていたから、情け容赦なく叩き潰すことはしないだろうとの安堵感は持っていたと思う。しかし、去年の1・4(対ベイダー戦)がそうであったように、どんなアク↘

↘シデントが生まれるかわからない。大した突きではないのにガクッと崩れ落ちてしまって、それっきり立ち上がれないといったね。猪木が一番恐れていたものはこれだ。だから、受けてから勝つという、猪木のこれまでのパターンにこだわってはおれなかった。とにかく、チャンスがあればなりふり構わず勝つという……。それが、あの短い(4分13秒)寸劇を呼び込んでしまったんだ」

「猪木は秒殺が嫌いだ。だから短い勝負は数えるほどしかない。その中で、すぐ思い出されるのがグレート・アントニオとの昭和52年(12月8日・蔵前国技館)の流血戦だ。あの試合はそれより長いんだな。それなのにあまりにもあっけなさすぎたのは、そこにケンカがなかったからなんだ。あの4分13秒の中に猪木に血ヘドを吐かせ、ウイリーの顔面を血で真っ赤にさせるという壮絶死闘を織り込んでいたとすれば、逆に名勝負として讃えられただろう。それができなかったのが17年という時間の間に強固になってしまって、もうどうしようもなくなった猪木に対するウイリーの感謝と畏敬の思いだった。藤波と藤原が猪木の足をへし折ることができなかったように、ウイリーもまた猪木を痛めつけることはできなかった。ウイリーの、あまりにもだらしのなさすぎるもろさ——、それが1・4の罪状のすべてだけど、それをとがめても仕方がない。17年もの歳月の間にふくらんでいって大木と化した猪木の思いを、さァ、闘うことになったんだから、みんな憎悪に変えてしまえ、と言われてもできる相談じゃない。それを押しつけるには、ウイリーはあまりにも人がよすぎたからね」

●

あの試合は迫力も技の凄さもなにもない試合だった。だから17年前の二人の死闘も、殺気も恐怖もほとんどなかったのではないか。当時の記者が、針小棒大に「体が震えるほどの殺気と恐怖だった」と書き飛ばしただけの話なんだろう。

私はそう言われるに違いない、と恐れた。そして、それが現実のものとなった。今さら何を言っても始まらないが、「あの試合を事実として踏まえて、17年前の凄絶死闘に弱々しい負け犬のイメージを反映させてはならない」とだけ言わせてくれ。「あの勝負は本物だったんだよ」と……。

(了)

Pride Renaissance '97

風景とプライドを復興せよ！



ヤキイモとはなにか？ プロレスとはなにか？

元気ですかーッ！

俺は、元気だゾーッ!!

さて、つい先日のことだ。

スポーツ新聞を何気なくめくっていたところ、「ヤキイモ」が一部のコンビニで大ヒットしているという記事を目にした。

実にこれは興味深い記事である。

そこには、近所のコンビニに行けば、ヤキイモがいつでも手軽に手に入るようになるまでの、技術的な試行錯誤に関する記述があった後に、味の方もとても美味！　というようなことが書いてあった。

ところで広辞苑によると、ヤキイモは「焼芋」と書き、「焼いた薩摩芋」のことをいうらしい。

非常に簡潔で、よくできた説明だが、当然のことながら、これではヤキイモの本質を捉えたことにはならない。

ヤキイモとはなにか。

――トラック屋台のヤキイモ屋が、人が早足で追いつけるほどのスピードで町内を回ってくる。

――そのトラックのスピーカーから流れる「いーしや〜きいも〜」という皺がれた声に、ハッとしてしまう自分がいる。

――たまにはヤキイモもいいなぁと思ってからの奇妙なドキドキ感。

――外へ出たときの身を切るような冷たい空気に触れた際の触感。

――目印の赤い提灯をキョロキョロと探し当てたときのソワソワ感。

――石が焼ける独特の匂いと、近くに寄ったときの顔に受ける熱っぽさ。

――「500円分ください」といった後に、芋を量りにかけてもらうときのワクワク感。

――年季の入った軍手で芋を選り分ける、年季の入った親父さんとの会話。

――その親父さんの人生の年輪を、芋をくるむ新聞紙の断片にフと感じてしまうこと。

――などなど。

「ヤキイモ」とは、これらの『風景』をすべてひっくるめてこそ「ヤキイモ」なのである。

決して「焼いた薩摩芋」が「ヤキイモ」ではないのだ。

当然のように、コンビニで買えるヤキイモには、こういったゼイ沢な風景は生じてこない。

そこにあるのは「ウマイ」か「マズイ」かの単純明解な消費者の論理だけである。

もちろん、屋台の時代のものよりも味が数百倍落ちているということはありえるはずもないし、コンビニ・ヤキイモだって決してバカにはできないはずだ。

しかし、問題なのは単なる味のことではなく『風景』がそこに絡みついているかどうかである。

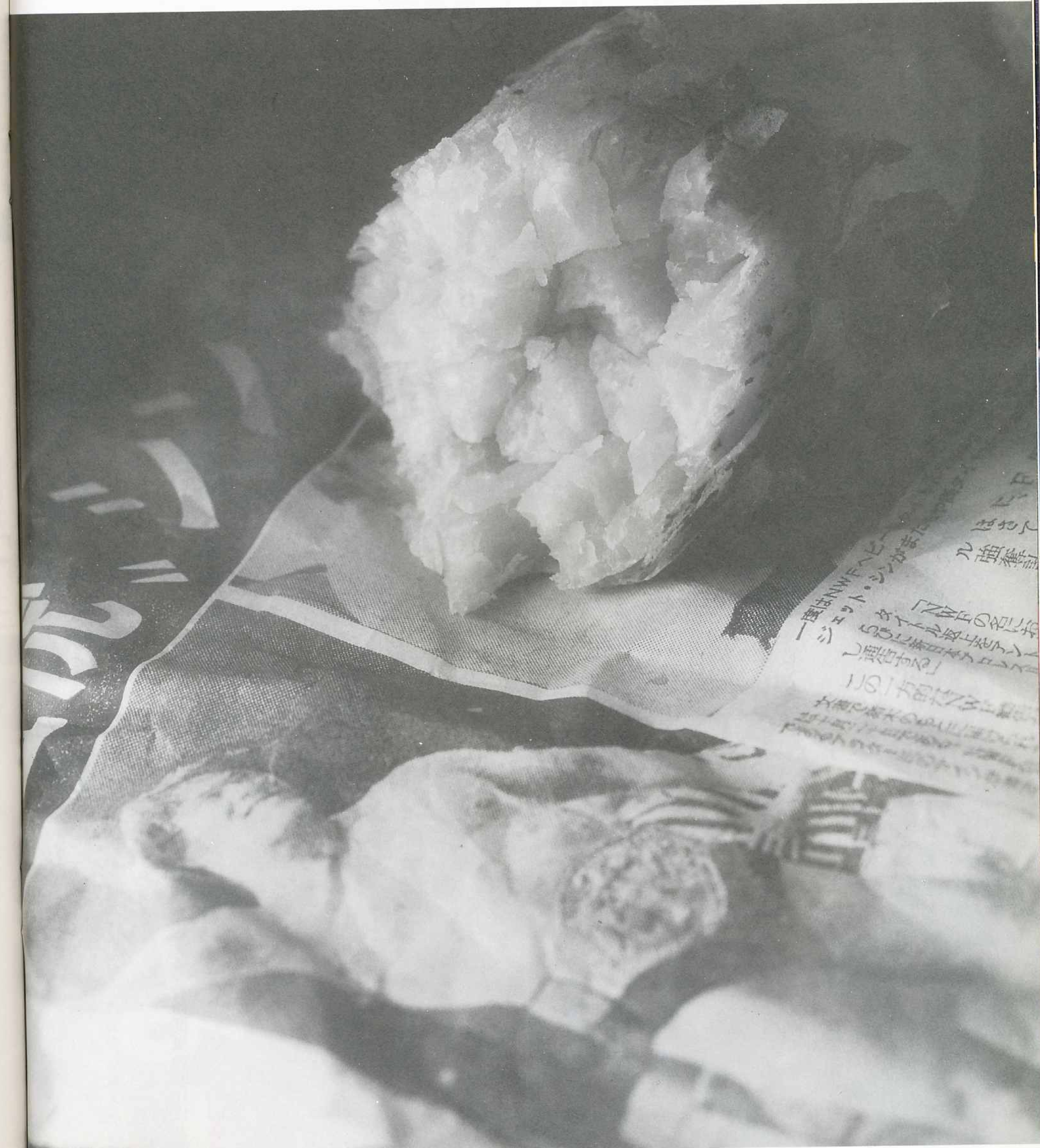
風景とは「景色」「風光」「風姿」「風采」そして「人の様子」のことをさす。

「人の様子」とは「人が織りなすドラマ」といいかえてもいい。

プロレスから、その『風景』が消えて久しい。

6万人が埋め尽くしたドームに、あるいはそこに映し出されるオーロラビジョンに『風景』は存在しない。

ひっくるめて、はじめてヤキイモである!



ヤキイモは『風景』すべてを

レスラーが織りなすドラマ。観客が織りなすドラマ。それらを伝える側、見る側がどう構築して自分なりのドラマに仕立て上げていくか。そこにプロレスの本質が隠されている。

ところで、プロレス界の亡霊と化した、ターザン山本氏の話によると、奥さんである仁香さんが面白いことをいっていたらしい。

いま人気のバトラーツを見て、この人気の根底には「たまごっちの論理」が横たわっているというのだ。

つまり、たまごっちの謎の小動物を育てるように、ファンが団体やレスラーを育てる感覚になっているというのである。

確かにこれは、ちょっと前のみちのくプロレスにも当てはまる。しかし、ここで気がつくことは、ファン主権という概念が異様に肥大化し、いまやファンが団体やレスラーの面倒を見るという感覚になってしまっているということだ。

まったくプロレスもプロレスラーもナメられたものである。

ある意味で、いまはプロレスマスコミも、「面倒を見る」という感覚でしか団体やプロレスと付き合っていないから始末が悪い。

「面倒を見る」という感覚で接している限り、そこには絶対に『風景』などは生じてこない。

「面倒を見る」から「面倒」を抜かして、ただただ見る。これが一番大事なことなのだ。ジーッと見続ける「力」がなければ真の愛情など芽生えないし、物事の中心など見えてくるわけがないからである。

いまは、レスラーもマスコミもファンも、ジーッと見ることをせずに、ただやみくもにヤキイモを食べて、「ウマイ」か「マズイ」かの感想をいいあっているだけの状況なのだ。

もっといえば、「ウマイ」か「マズイ」かの感想さえいえずに、誰かが「ウマイ」といえばそれに追従するという、まさに世紀末的状況になっている。

そこには屋台も軍手も新聞紙も、もちろん石が焼ける匂いなどあるわけがない。

「ヤキイモ」が、先述した風景をひっくるめて、はじめて「ヤキイモ」といえるように、プロレスも大会場で騒いで終わり、試合経過や試合結果を見てチョン、という世界ではない。

プロレスとは考えることである。

もし哲学のいらないプロレスならば、それはもうプロレスではなくなっているのだ。

プロレスにとって必要な『風景』とは何か？　いま一度レスラーも関係者もファンも深く考える時期にきているはずである。

ところが、プロレス界が無味乾燥な空気に支配されているこんな時期に、パンクラスの高橋義生がアルティメット大会で日本人初の勝利をもたらし、いよいよ6月には高田延彦がヒクソン・グレイシー狩りへ出陣するというビッグ・ニュースも飛び込んできた。

アントニオ猪木と佐山タイガーマスクの世界格闘技連盟も大きなうねりを起こそうとしている。

こういった一連の動きは、プロレスに「プライド」を取り戻すルネッサンス運動の火の手が、やる側から上がったと取ってもいいのではないだろうか。

あとは、伝える側と見る側が、いかにこの「プライド復興運動」の芯を掴み取るかである。

プロレスに風景とプライドを！

本誌も微力ながら屋台を引いて、「か〜みぷろ〜、か〜みぷろ〜」と叫んで、風景とプライドが根底にある「プロレス」を売り歩く決心をしようと思う。

コンビニ・ヤキイモを食べながら「けっこうイケるな」と思いながらも、なぜかそう感じた次第である。

それではみなさん、いきますかーッ！

解散だとぉ？……なんでやねん!!

14



▲売れ筋商品、200%メッシュキャップやねん！

15



▲200%キャップ、こっちはノーマルタイプやねん！

16



▲大人気、Gカップスキャップやねん！

1



非売品のレアTシャツ。参考商品なので欲しい人だけに売ってあげるねん！

2



▲昨年の静岡&盛岡大会用に作ったTシャツやねん！

Tシャツは￥2000のところ
一気に半額!!
最強プライス ALL￥1000やねん！

3



▲新日本プロレスとの全面戦争時のTシャツやねん！

4



▲ハイテンションTシャツやねん！

5



▲'94年、ワールドトーナメントのTシャツやねん！

ンターナショナル
記念
t☆U
ウォンチュー

9



▲200%モデル、ベイビー用水着やねん！

ベイビーにも着せてあげたいねん！

10



▲200%モデル、ベイビー用ラグトップやねん！キュートやねん！

※値段はお問い合わせ下さい。

7



▲イギリステイストなトレーナーやねん！

6



8

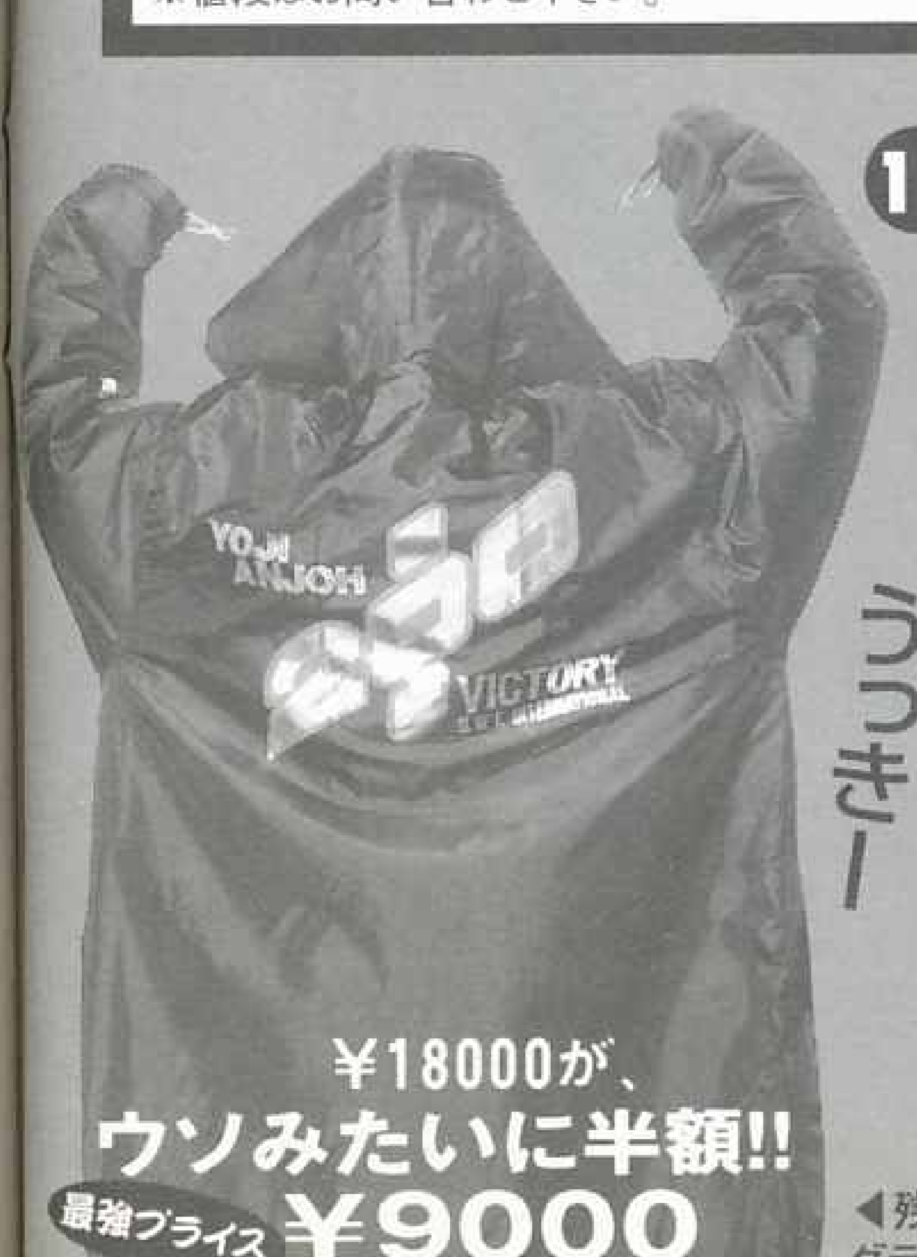


◀シマウマテイストなトレーナーやねん！

▲センスグーなパーカーやねん！

トレーナーは￥4000のところ、
これまた半額!!
最強プライス ALL￥2000やねん！

11



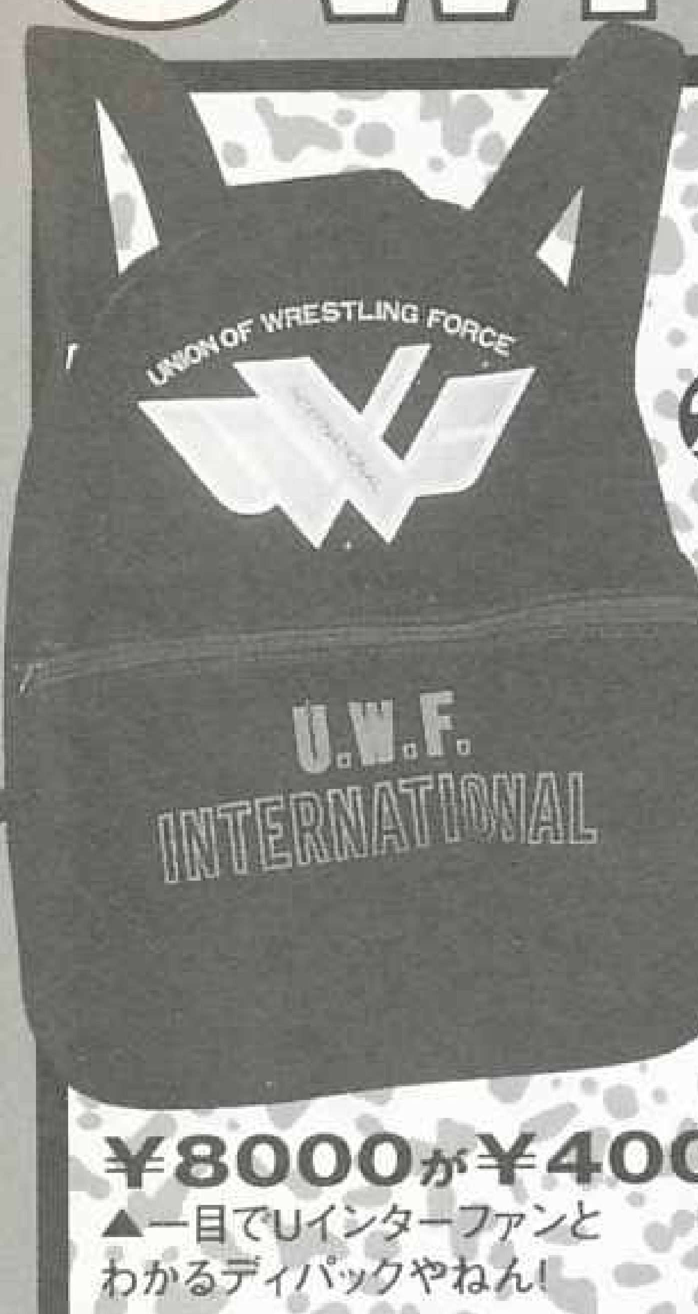
うつき～

￥18000が、
ウソみたいに半額!!
最強プライス ￥9000

◀残りわずかの200%グランドコートやねん！腕部分に安生洋二のイラストが入ってるねん！

UWFインターナショナルが解

究極のVIVA価格!!



⑳
¥8000が¥4000
▲一目でUインターファンとわかるディパックやねん！



⑲
¥5000が¥2500
▲伸縮性よさそうなスパッツやねん！



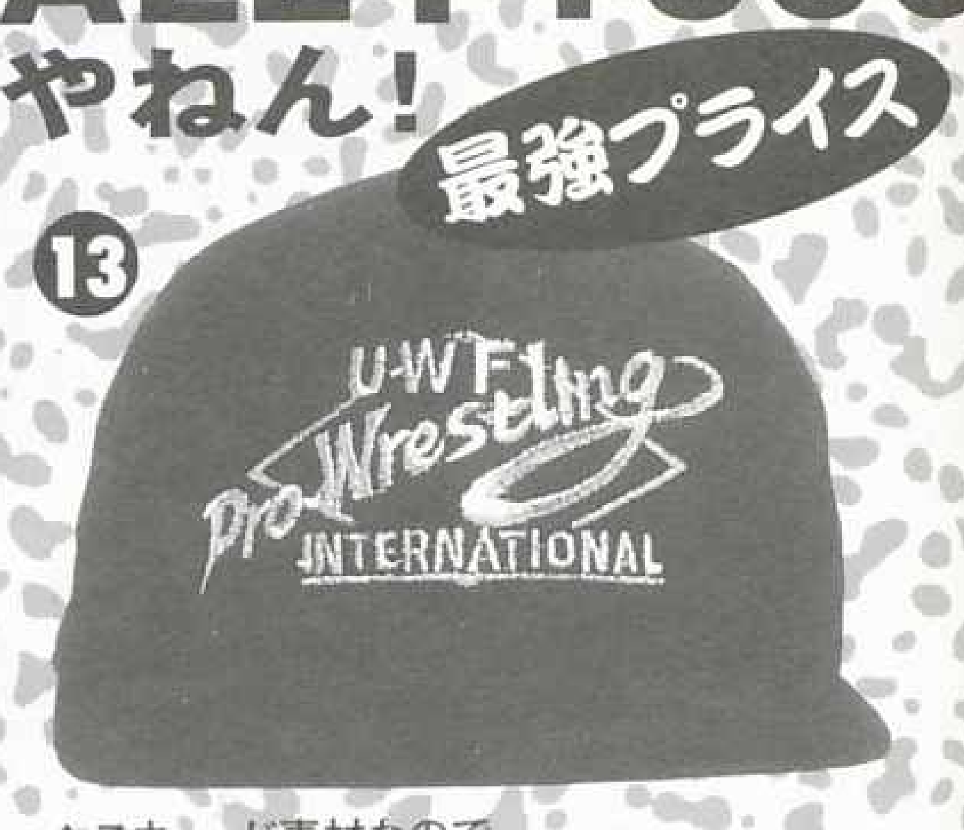
⑱
¥4000が¥1000
▲こちらはランドリーバック。使いやすそうやねん！



⑰
¥1500が¥1000
かっちょいい～い靴下やねん！
オシャレのポイントは足元からやね～ん！

キャップは（⑬以外）ALL¥1000やねん！

最強プライス

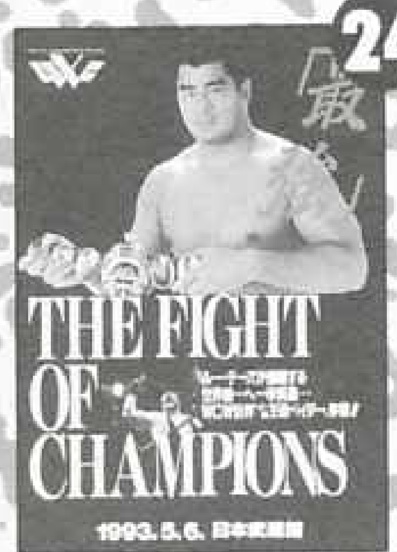


⑬
▲スウェード素材なので、¥4000だけどY2000でどうやねん！

でたっ!! これぞ"なんでやねん価格"



㉕
▲'95年4・20
名古屋レインボーホール
高田VSベイダー戦
記念パンフ



㉔
▲'93年5・6
日本武道館・高田VS
ダン・スバーン戦
記念パンフ



㉓
▲'92年10・23
日本武道館・高田VS
北尾光司戦記念パンフ



㉒
▲'92年6・28
博多スターレーン
旗揚げ1周年
記念パンフ



㉑
▲'91年12・22
両国国技館・
高田VSバービック戦
記念パンフ

パンフレット¥1000が なんと！¥200!!
ポスター¥500が ホゲ～！¥100!!



㉖
▲'95年11・25
両国国技館
新日本対抗戦記念パンフ



㉗
▲'96年8・17
神宮球場・高田VS安生戦記念パンフ



㉝
▲'91年に作成されたポスター。
こいつはレアやねん！



㉜ ㉛ ㉚ ㉙ ㉘
▲'91年に出た
団体イメージパンフ。
現在リングスの
長井の姿も！

さらばUWFイン夕

なんでやねん 誌

Wan t

Uインター・グッズ
誌上在庫セール

うきうきうっきー
グランドコート
やねん！



⑫
うききー
▶グリーンとオレンジ、2種類あるねん！
白黒でわかりにくいが、めっちゃ派手やねん！

¥12000が、
ギャフンと半額!!
最強プライス ¥6000

グッズはここで買えるねん！

ん～、すべてがほしいちゅー買い物上手なアンタさんに、これらのグッズの購入方法を教えてあげるねん！　とりあえずここに載っている商品全て通信販売にて受け付けるねん！
宛先はコチラ・〒154世田谷区弦巻2-21-1UWFインターナショナル「Uグッズ誌上在庫セール～紙プロRADICAL係」まで！　すべて現金書留にて！　送料は500円、グランドコートのみ1000円なので、そこんとこお間違いなくやねん！
解散だからお金送るの不安～って人や、在庫があるかどうか不安という人は、こちらまで問い合わせるねん！☎03・3439・1121

※文中随所に出てくる「～やねん」の使い方が適切ではないことは理解のうえですので、そこのところご了承のうえ、お読みくださるようお願い申し上げます。

ノンスポンサー、ノンテレビでよくやってる

けっして
どこかのように
解散では
ありません。

ダブルクロス事務所移転決定無限大記念

在庫一掃SALE

紙のプロレス本誌バックナンバー一挙放出

読むと人生が狂うスキャンダル充満

RADICALのコアな部分がたっぷり詰まった本誌

＊創刊号～第4号、6号～7号は完売しました。

第12号 特集**色気とは何か?**
◇豪華絢爛9大王インタビュー



◎語り部王・前田日明を語る
村松友視
◎はずかしいから燃えるAV女王
河合メリージェーン
◎戦慄の色気王
アントニオ猪木
◎**蝶野正洋／ザ・グレート・サスケ／市川さん**他
◇**前田日明『女子便所』緊急座談会**

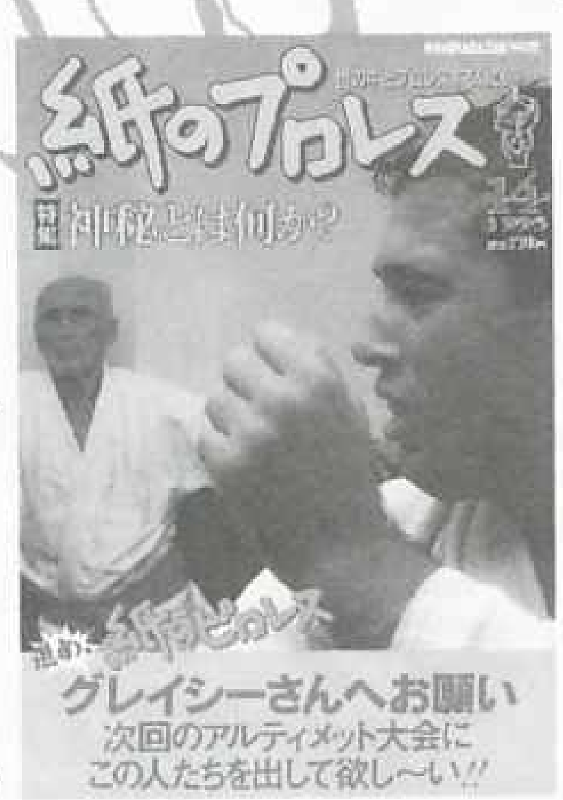
第8号 特集**「さらば新日本プロレス!」**
本誌初登場、泥んこプロレス王インタビュー
ザ・グレート・サスケ

第9号 特集**「週刊プロレスとは何か」**
うそつきと関わったドッカンビリビリインタビュー
大仁田厚

第10号 特集**「週刊プロレスとは何か」第2弾**
力道山に向かって「○○野郎!」と言ったのは俺だけだ!
ガチンコインタビュー **ユセフ・トルコ**

第11号 特集**「狂気とは何か?」**
驚愕6人インタビュー
T・J・シン／西村知美／佐野量子／ガッツ石松／堀辺正史／糸井重里

第14号 特集**神秘とは何か?**
次回のアルティメットに出てほしい方々



◎元プロボディーガード・元欽ちゃんの弟子 **清水伯鳳**
◎大東流合気柔術六方会・宗師
岡本正剛
◎**佐山サトル、鈴木みのる、大槻ケンヂ**
●ガチンコインタビュー
遠藤幸吉
●セメントインタビュー
高田文夫

緊急2大インタビュー
第13号 **『道場破りとは何か?』**



◎「俺なら腹を切る」 **山本小鉄**
◎「長生きしたヤツが一番強い」
上田馬之助
特集ファミコンプロレスの逆襲
◎パワーマックユーザー**前田日明**
◎『ファイプロ』制作者 **須田剛一**
スペル・デルフィン／馳浩／斎藤文彦
◇セメントインタビュー
●**養老孟司** ●**糸井重里**

ニュージャパンバラエティー'95
第16号 特集**新日本凸凹大学校**



◎超豪華講師陣
後藤達俊／マサ斎藤／田中秀和／橋本真也／キラー・カーン
◎紙プロ版夢の懸け橋対談
糸井重里vsサダハルンバ谷川
◎戦後50年特別公演
カックン超特急対談
ユセフ・トルコvs由利徹

第15号 特集**インディペンデントの逆襲**



◎第1部 ガチンコインタビュー
高野拳磁、ポイズン澤田、中牧昭二
◎第2部 山口昇試練の十人組手
小野浩志、松崎駿馬、茂木正淑、神風、覆面太郎他
◇**巻末緊急特集K―1とは何か?**
●**石井和義**インタビュー
●**サダハルンバ谷川**インタビュー
●**ターザン山本**インタビュー

ドラマティクな特集とファンタスティックなゲスト陣

第18号 巻頭緊急座談会 高田延彦さんへ愛をこめて

高田「引退」発言の読み方



特集すてきな奥さん

大山倍達未亡人
大山智弥子さん
佐々木健介婚約者
北斗晶さん
獣神サンダー・ライガー夫人
●●千景さん
ザ・グレート・サスケ夫人
村川メリーさん他

第17号 特集実況パワフル北朝鮮!



◎闘魂二人三脚対談
アントニオ猪木vs永島勝司
◎北朝鮮イベントを肌で感じる3大インタビュー
ブル中野・橋本真也・村松友視
◇巻末超ワイド特集
藤原組の逆襲!!
緊急スクープ座談会
「ツボ原人とは何か?」他

第20号 特集劇的(ドラマチック)格闘技



◎闇の世界の伝道師
K—1を初めて語る **村松友視**
角田信朗/真樹日佐夫/大槻ケンヂ
◇山口昇と東京シュガーベイブ結成!
ユセフ・トルコ/上田馬之助/遠藤幸吉
◇**豊田軍団、W井上の人生相談開始!**

第19号 特集さようなら紙のプロレス

『紙のプロレス』告別式



◎越境初顔合わせ凸凹対談
高野拳磁vsザ・グレート・サスケ
◇負けず嫌い座談会
K—1三兄弟+1
◇**巻末特集**
こんにちわ紙のプロレス
●**山崎一夫**インタビュー
●**ミスター・ポーゴ様**インタビュー

第22号 特集この人が喝っ!



◎撃墜王 **坂井三郎**インタビュー
◎元・白間津の大海女
田仲のよインタビュー
◇新春ウルトラ対談
前田日明×養老孟司
◇お年玉ロングインタビュー
ジョージ高野
◇『週プロ』手法の幻の仕掛人
二木隆インタビュー

第21号 特集幻的〜ファンタスティック〜格闘技



"俺だって女房、子供を殺されたらヒクソンが100人おったって百人組手やるよ"
謎の古武道・珍法宗師 **前田日明**他
◇山口昇と東京シュガーベイブ
今月のお題『21世紀』 **ユセフ・トルコ**
この人もシュガーベイブ入りか? **高田文夫**
◇愛のない発行人&編集長のページ
●**石井和義**インタビュー
●**ガッツ石松**インタビュー

●大好評『何か?』シリーズ●



猪木とは何か?

2大緊急
ロングインタビュー
アントニオ猪木/村松友視
◎告発仕掛人・**仙波記者**に迫る!
◎**立川談志**メッセージ
◎**新間寿**記者会見誌上再現



大山倍達とは何か?

押して忍んで
11大インタビュー敢行
大山智弥子/大山茂/石井和義/前田日明/遠藤幸吉/松井章圭他
◎ゴッドハンドの告白発掘
「マス大山の歴史的証言一挙公開」



極真とは何か?

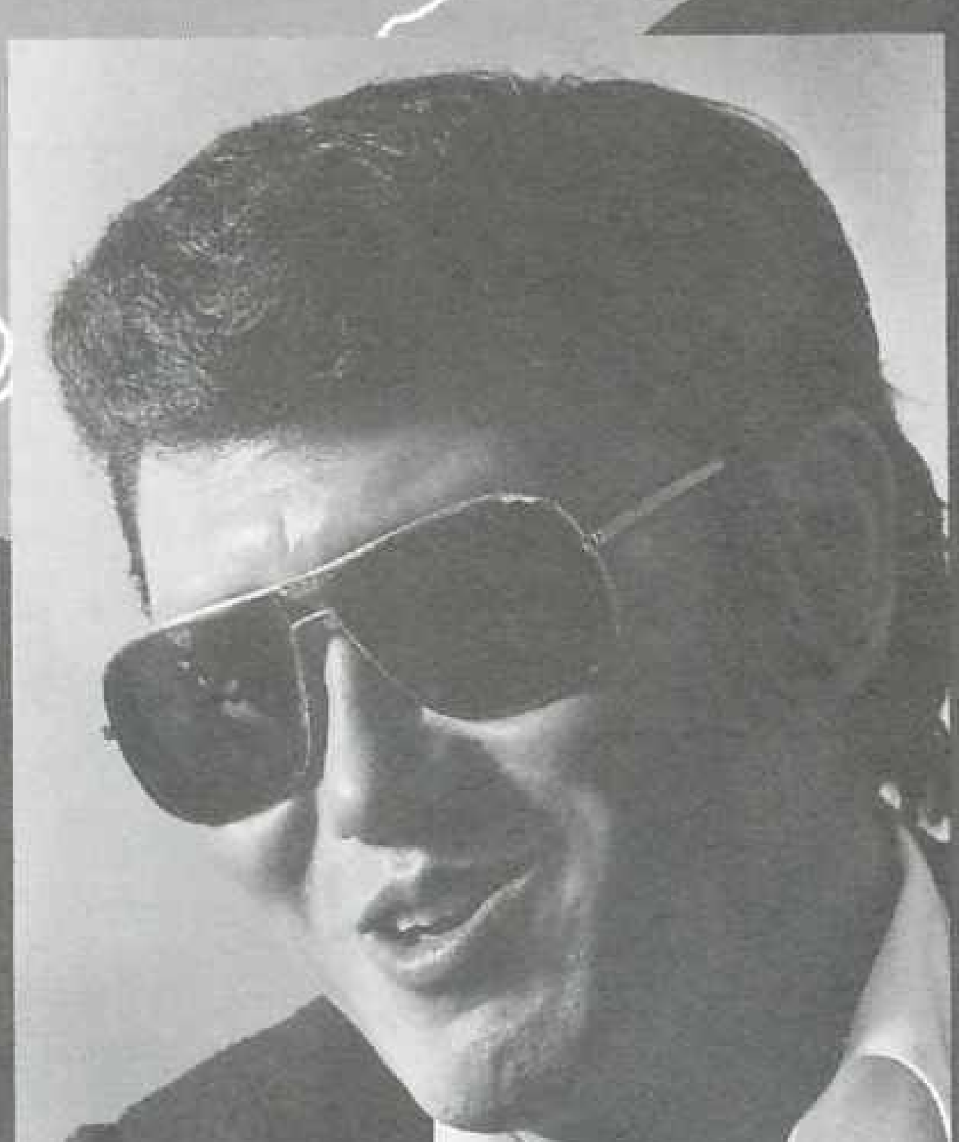
極真魂溢れる
16大インタビュー
黒澤浩樹/フランシスコ・フィリョ/村上竜司/ウィリー・ウィリアムス/中村誠/大沢昇/磯部清次/松井章圭他

「何か?」シリーズの送料は310円です。

無比人

Muhito

新宿で用心棒暮らしをする若者が、
プロレスと巡り合った時、
その運命は転がり始めた。
エロティシズムとバイオレンスが交錯する
本格格闘プロレス小説第2幕。



真樹日佐夫

レスラーこそ最強…それは幻だったのか？

【前号までのあらすじ】
バーリ・トゥード大会でプロレスラーが総崩れになるのを目の当たりにし、激しい衝撃を受けるプロレス専門誌社長・千堂。そんな彼の目の前で一人の若者が、インディー団体のレスラーに一方的に暴行を受ける。だが、千堂は次の瞬間、不思議な光景を目にする。レスラーたちが去った後、若者は何事もなかったかのように立ち上がったのだ。「客のいかなる暴力をも甘受し、事態を円く治める。これ用心棒心得の一」。時代にそぐわぬ台詞と、人懐こい笑顔。若者はディスコの用心棒、万無比人と名乗った——。

(4)

その寝室の窓から東京タワーが、ほぼ正面に眺められる。

真澄によればタワーは、日没時に合わせてライトアップされるとのことで、冬場だと五時を待たずして灯を点す。時刻は六時になんなんとしており、闇が段々に深みを増すのと比例しイルミネーションの輝きを鮮明にしていく。

千堂は、生まれたままの姿でベッドの縁に腰を下ろして紫煙を燻らせながら、ここからの景観が寂寥感を掻き立てずにおかぬのはタワーが高すぎるせいかと、窓外を見やって今更のように思いを巡らしていた。

ベッドは窓に対して真横を向いてい、そうやって坐るとタワーが目の先にくる。こちらの位置も高いこともあり、周辺の建造物などは一切視野に入らない。三百メートルを超す鉄塔のみ天を衝いて屹立するさまは実際、目もあやな電飾の彩りにもかかわらず隔絶感を際立たせ、またこよなく侘びしげでもあった。

元麻布にある高層マンション最上階の真澄の居宅はメゾネット・タイプで、千堂の『四角いジャングル』社のざっと倍の広さはあろうか。真澄はメード二人と住んでいるが、二人とも階下の方に詰めてい、インターフォンで呼ばれでもせぬ限り二階寝室へ上がってくる心配はなかった。新宿コマスタジアム裏のディスコで万無比人と出合って十数時間、約束通り電話をかけて寄こした真澄にせつかれるままに、千堂は通い慣れたここへ足を運んだのである。

夜のタワーのありようが心に沁みるのは、人の子の侘びしさと呼応し合うものが感じ取れるからでは……。そんなふうに自分に言い聞かせ、吸いさしの煙草をサイドテーブルの灰皿に消すと、待っていたようにベッドの足許に見られる浴室のドアが開いた。

真澄はバスローブを纏い、頭にタオルをターバンのように巻いていた。

「あらあら。タワーを相手にまた、なんだかよく解らない独り言？」

好きねえ、と言わんばかりに鼻翼を蠢かしつつ、千堂の脇を通過して真澄は窓へ寄った。手を伸べてカーテンを閉めようとした。

「勝手なことを」

と、すかさず千堂。

真澄が手を止め、訴えかけるような面差しを向けてきた。

「閉めてもいいでしょう。ねえ」

「駄目だ」

「お願いよ、夜景がちらちらして集中できないの」

「俺は逆だね。自分がタワーのように巨大化する気がしてくるんだな。パワーが漲るというか」

「意地悪をおっしゃらないで。ねえ、後生だから」

前戯はすでに始まっているのだ。真澄の表情からわざとらしさが急速に失せ、身を捩るつもりか無意識のように腰がまず回りだす。

「物を頼むには頼み方があろうが。違うか」

千堂はベッドの縁に座したまま、まるで無防備な前を隠すこともせずに応じた。先にシャワーを使っていたが、室温調節はエアコンにより過不足なく、裸でいても寒さは感じなかった。

真澄は思い出したような顔で何度も頷き、差し迫った身ごなしのうちに窓辺を離れた。千堂の前へきて跪くけぶりを見せた。

無比人

夜の新宿で力のみを頼りに生きる若者

「そいつは邪魔だろう」
とバスローブを顎の先で示すと、彼女はためらいがちに紐を解き、それを肩から滑らせた。次いで頭のタオルも取った。洗い髪と、一糸も纏わぬ肌からシャンプーと石鹸の香が入り交じって寄せてきた。束の間、程良く熟れた裸像におののきが奔った。
「さて、いいぞ」
真澄は、そのまま膝を落として千堂の足許に蹲り、股の間に顔を埋めた。
千堂の男の物は頭を垂れたままだったが、口で吸われると忽ち硬度を増し、舌を用いられるに至ってタワーほどではないまでも天井を向いて怒張した。真澄の髪を掴んで頤を上げさせ、目顔で許可を与えた。
起って行きカーテンを閉めて戻るのを待って、千堂は、真澄を膝に乗せると股を開かせた状態で合した。言うところの茶臼ながら、彼の腰はベッドの縁に置かれたままだ。変形茶臼とでもするべきか。
真澄は一物を口に含んだ辺りで早くも蕩けんばかりの表情を見せており、ふくよかな臀部の肉置きを千堂が両手で抱え、引きつけて結合の度合いを深くすると、それだけでもう震えがきて大きな波に攫われかけた。
「まだ、まだ。腰をもっといやらしくくねらせて、こっちもよがらせろよ」
力を失って後方へ傾いていた半身が迫り上がってき、我に返った様子で顎を引き加減に真澄は腰を遣いだした。心持ち眉を寄せた変に生真面目な印象の顔が、千堂から見てやや仰角をなす位置に捉えられる。
白磁を思わす冷たく取り澄ました顔と、いまにも蕩けそうな放縦さ丸出しの表情と、眼鏡を掛けさせたら似合いそうなどことなく堅物風のそれと――。千堂には三つ目にこそ真澄の本質が最も表れているように感じられ、いままたその顔を目の当たりにして、思いはおのずと彼女と知り合った四年前に遡るようであった。
『四角いジャングル』を隔月刊にするかどうかで苦慮していた千堂のところへ、会わせたい人間がいる、話の持ちかけよう如何によっては援助が期待できるかも、と言ってきたのは中堅広告代理店の主任で、この男とは大学で一緒で社会へ出てからも互いに仕事抜きで年に何度かは声をかけ合い、梯子酒を重ねるといった程度の交遊が続いていた。
相手はサービス業関係の会社社長とのことであり、千堂は、なんとなく男性と決めてかかっていたが、当日セッティングを任せた代理店主任に随いて先方のオフィスへ赴くと出てきたのが真澄というわけで、本人が問わず語りに明かしたところでは創業者である夫を交通事故で失くし、後釜として担がれるのを余儀なくされたのだそうな。
この夫がジャイアント馬場の大ファンで連れられて試合場へもよく足を運んだ、供養の意味からもできたら何等かの形でプロレス界をサポートしたいがと、そのような話を真澄が出入りの代理店主任にした。主任は千堂と飲んだ折に金繰りの問題で愚痴られたばかりであり、そこで『四角いジャングル』の件を持ち出し小当たりしてみたら手応えありで、ということだと知れた。
初会のその場では千堂が実状報告をしただけで、検討させてもらうとのことでお開きとなり、半月ほどして真澄から直接電話があった。出向くと近くに席を用意させているので昼食を一緒に、と言われて神宮前のレストランへ連れて行かれた。真澄の会社はオパール観光といい、渋谷宮益坂の社交ビルにオフィスを構えている。自社ビルとのことであった。
予約の表示のある奥まったテーブルへ、真澄は勝手知った様子でさっさと歩を進めた。後に続いた千堂が席に着こうとしてふと見ると、真澄の動きが止まっている。椅子の際に佇立したまま手をつかねた格好なのが、いかにも不自然だ。目が合った。
――なにか？
用事を思い出したかと気を回したが、そういうことでもないようで、するうちボーイが近づいてきて真澄の椅子を引いた。あ

れを自分にやらせたかったのか、と悟り知らされたところで千堂は、援助の話はなかったものと諦めることにした。そうした外国映画にあるような所作をなんの抵抗もなしにスマートにこなせる男もいようが、彼には無理な注文だった。女と街を歩いていても、ややもすると先を行きがちで、家庭でも持った日には亭主関白になるのは間違いなしと己を視ていた。

食事を馳走されるだけで暇を告げることに決め、黙りがちにフォークを口へ運んだ。真澄の方でも千堂の胸中を読み通したものか、本題には触れずじまいで、レストランの前で二人は右と左に別れたのだった。

さらに十日ばかり経ち、深夜、千堂が社に一人居残って記事校正に取り組んでいると、いきなり社長室のドアが開いて真澄が現れた。件の広告代理店主任と飲んでいたとのことで、それにしてはしかしアルコールの匂いもせず、前二回とは別人のように真摯なものを感じさせた。

――この前はごめんなさい、勝手にテストをしたりして。

椅子を引かせようとしたことを言っている、と千堂は思いを致しつつ苦笑いして、

――そうとも知らずボーイに先を越されて、阿呆だね、俺は。見事に不合格したこの阿呆面を、飲んでいて急にまた見てやりたくなったたってわけかい。

――違うの、その逆。合格だわ。

真澄はデスクを隔てて立つと、真っ向から視線を注いだ。見下ろす形となり顎が引かれたせいもあろうか、真面目一途とでもいった印象がいや増した。



――あなたがあそこでわたしの椅子を引いたら不合格、気がつかないままだったら合格とさせてもらうことに決めていたのよ。改めて言わせていただくわ、この度はどうもお目出度うございます。

そう言われても千堂としては、素直には喜べなかった。白けさせられたということもあったろうか。

――合格なら合格と、なぜあのときに。

――あんな形でテストされたと知れば、あなたが怒りだすんじゃないか、なぜかそんな気がしたの。それが怖くて。

この女は思いのほか正確にこちらを視ている、と見直す気になったのと、

――わかって欲しいの。人と人との出合いを大事にしたいと考えればこそで、わたしなりに慎重を期したつもりが、小細工を弄したみたいになっちゃって。

こうして一人で訪ねてくるには勇気が要ったのだと、近寄りがたいような外見とはそぐわぬひたむきさで言い継ぐ真澄に説得力が感じられたせいもあり、矛を収め誘われるままに彼女と飲みに出かけた。

赤坂界隈の終夜営業の店を何軒か巡る途中、真澄が酔漢に絡まれ抱きつかれた。千堂としても腕力沙汰に及ばないわけにいかず、取っ組み合いの末に撃退したものの、気がつくと手の甲に裂傷を負っていた。

――大変。手当てをしなくちゃ。

タクシーで真澄のマンションへ同道することとなり、そこで二人は肌を合わせるに至ったのだった。

真澄は、繃帯を巻き終えた千堂の手を両手で掻い込み、いとおしげに頬に押し当てながら、

――わたしのために血を流してくれた、そのことがこんなにも感動的だなんて……。ああ、あなた。有難う、有難う、有難う。

有難う、を熱に浮かされたように繰り返した。するうち千堂の方も妙な気分になってき、腰に手を回して引き寄せると、待ちかねた様子で上体を倒してきたのである。

男はその若者に一筋の光明を見いだす

翌日、千堂のところの銀行口座にオパール観光から一億円が振り込まれた。真澄に電話をすると、自由に遣ってくれていい、足りないようならいくらでも追加するとのことで、千堂も深くは考えないことにした。肉体関係が生じたこととの関連性に於て、忸怩たるものがないではなかったが、ハイリターンで報いることだと割り切り、その一億を注ぎ込んで『四角いジャングル』をまずは隔週刊とした。そして二年後、念願であった週刊化に踏み切った。

二人の仲は互いに相手の領分を侵さぬとの不文律の下、これといって波風も立たずに進行し、千堂は一億のほかは一度として追加を要求することなく、それも四年の間には相応の利息をつけて完済した。そのことを彼は密かに矜りとしていた。

女には多かれ少なかれマゾの気があるというが、その点、真澄も例外でないことはじきに知れた。わかってみればレストランでのテストの判定規準が通常の逆であったのもむべなるかなと、千堂は手品の種明かしをされたような思いをしたものだ。



『目隠しをして……』女からの妖しい誘い

当初、真澄は目隠しされることを好み、自分でそれをしてベッドへ入ったりもしたが、千堂の側からすれば京人形にも似た精緻な美貌の崩れていくさまを観賞する上では邪魔で、言い含めて止めさせた。代わりにおもちゃの手錠を買ってきて嵌めてやると、余程気に入ったとみえて随喜の涙をこぼした。

千堂には別段過剰なサドとの自覚もないが、夫を失くした身で大勢を顎で使わなくてはならぬとあっては色々厄介な問題もあろうかと斟酌し、ニーズに応えてやるべくあれこれ腐心した。一緒に出歩くような場合、人目を惹きすぎる嫌いさえあり、千堂の方が供に見られかねないほど颯爽とした真澄が寝室では絶対服従の奴隷と化し、このところ彼女は言葉嬲りに翻弄されていた——。

「なんだ。その助平なぶす面は」

「ああ、もう駄目。死んじゃう」

「死にたいか、みっともなく」

「死にたい、死にたい。殺して、お願い」

「よし、死ね」

直後に真澄は魂消るような絶叫をはじけさせ、反りかえると万歳をする格好のうちに頭からゆっくり床に沈んで行った。虚飾をかなぐり捨てて横たわる女の肉は、淫らというより滑稽で珍獣の類を思わせた。

（この女を俺は愛しているのか）

プロレス界を揺るがすスキャンダル！

見下ろして千堂は自問してみる。
答えは、出なかった。

（5）

行く手に東都プロレス、と外壁にペンキで大書された仕舞屋風の建物が見えてきた。
千堂は、路上に明かりが漏れている玄関先へ車を寄せ、サイドブレーキを引いた。社用で使っているワンボックス・カーで、万無比人を助手席に乗せていた。
「着いたよ」
無比人に言い、千堂は腕時計を見た。九時五分前。植野次郎に電話で告げた時刻は九時であった。
薄笑いの顔で頷く無比人を降ろしたところで、千堂も運転席側のドアを開けて降り立った。晩秋の夜気が幾分冷たく感じられた。
二人は肩を並べて玄関へと歩を運んだ。民家に手を入れたとおぼしい二階建てで、インディーズの東都プロレスは、ここに道場とフロントを置いている。蒲田西口商店街も外れに近く、千堂は、真澄のところで床にずり落ちてぐったりした彼女に獣の姿勢を取らせて二度殺した後、七時過ぎにマンションを辞すと途中新宿へ寄り、ディスコの店先に出て待つ無比人を八時にピックアップ。それから車を回したのだった。
真澄は一緒に出て、日課のチェーン店回りをする前に食事に付き合わせる腹積もりでいたようだが、急な仕事が入ったのでとやさしく言うと、うつろな表情であっさり頷いた。余韻が尾を曳いているとみえ、ベッドに平たく臥したまま千堂を見送った。
玄関のガラス戸を開けて入ると、とっつきがフロントでスチール机やキャビネット、応接セットなどが並び、そこに植野が一人でいた。トレーナー姿でソファでゴルフクラブの手入れをしていたのが、無比人を従えた格好の千堂と目が合うと弾かれたように立ち上がった。
「千堂さんよ、本当に訴える気か」
「夜分にどうも」
微笑って植野へ近づいた。無比人も随いてきた。
「電話で指示した通り、人払いしてもらえたかな」
「勿論だ。こんな話、みっともなくて下の者に聞かせられるか」
植野は、傍に立った千堂を睨みつけ、次いで無比人へも険しい目を向けた。
奥が道場で二階は内弟子や前座の選手たちの宿舎なのを、何度か取材で訪れて千堂は知っていた。静まり返って、ほかに人のいる気配はなかった。
「掛けてもいいかね」
「ああ」
植野がソファに腰を戻すのを待ち、向かいに無比人と並んで席を占めた。
「なあ、社長。俺とおたく、うちと『四角いジャングル』とは持ちつ持たれつで、通り一遍ではないいい関係できたんじゃないのかい。それをディスコの従業員を酒の勢いもあって小突いたくらいで、やれ告訴だ、やれ詫び状だは、いくらなんでも水臭過ぎるってもんだぜ」
植野は、堰を切ったように性急に言いだした。高圧的な物腰も影を潜め、肉厚の頬の辺りには媚びるかのような笑みが見て取れた。
「それとこれとは別で、植野さん、あんたのリング外での傍若無人な振舞いには赦しがたいものを感じていてね。噂に聞くだけだったのが、この目で見てしまった以上、放置したのでは自分をも欺くことになりはせぬか、ということで腰を上げた次第」
朝、出社した直後から千堂は方々に電話をかけまくり、午近くに植野を掴まえると昨夜ディスコに行き合わせたことを明かした上で、女客への仕打ちといい従業員に加えた暴力といい目に余る、告訴するか詫び状を書かせるか、とにかく出向くので一人で待つようにと言い渡したのである。
「告訴されるよりは詫び状の方が増しだが、そいつを書いたとして、おたくの雑誌にそのまま載せられでもしちまったら……。なあ、千堂社長、なんとかいま一度だけ目溢し願えんか。今後は身を慎むと誓うから」

千堂が取り合わずにいると、植野の視線は無比人へ流れて、
「名前は」
「万です、万無比人」
「万くん、当事者のきみはどうなんだ。やはりこの植野を犯罪者に仕立て上げたいか」
「自分は社長に一任してまして、はい」
と、しれっとした顔で無比人。
植野は肩を落として項垂れた。虚勢もすっかり剥がれ落ち、抜け殻を見るようだ。
「告訴もされず、詫び状も書かずにすませられる方途が一つ」
頃合いと視て千堂は、用意してきた台詞を口にのぼせた。
「え？ そりゃ一体……」
言いさしたが束の間、植野の口許に得もいわず下卑た笑いが結ぼれて、
「そうか、金か。口止め料に慰藉料な。そういうことでいいんなら、なぜ早く——」
「聞くんだ、一度しか言わんよ」
ぴしゃっと千堂は言い放った。
「いまから道場のリングで彼とセメントをやってもらう。勝ち負けは問わない。それで昨夜、新宿で見たことは忘れるということで、どうだね」
セメントはプロレスの業界用語で、筋書きなしの真剣勝負を意味する。
「セメントを、この青年と？」
植野の三白眼が真意を測りかねた様子で、せわしなく二人の間を行き来した。
「それは構わんが、怪我でもさせせたら誰が責任を取るというんだ。そういう意味じゃ、なにが怖いって素人相手が一番——」
「私に一任している、と彼が言ったのを聞いたろう。その点についちゃ、そちらはなんの心配もしなくていい。それに、植野さん」
千堂は押しかぶせるように言い、ひと呼吸置くと目の前の盤台面をまっすぐに視て、
「酔っていて憶えがないかもしれないので付け加えておくと、あんたは店で蹴りを二発、表で頭突きを一発と都合三度の攻撃を加えているんだ。律義にも一々転倒して見せはしたが、些かもダメージを負っていないなによりの証拠に、ほれ、頭突きを浴びた顔にも痕跡一つ見られない・酔余のことにしろ、メーンを張るレスラーの狼藉を三度も凌いだ事実だけを取っても素人の域は超えている、と視といていいんじゃないのかね。店での蹴り二発は手加減したとするとしても、最後の頭突きが力に任せて放たれたのは、あんたがどう言い繕おうと、プロレスの観戦記事を十年以上も書いてきた私の目が見極めていることだし」
そう見極めたにもかかわらず、涼しい顔で起ってきた無比人との以下のやりとりが千堂を衝き動かした、といえようか。

レスラーとの深夜の死闘、そして——

——万無比人、随分とまた欲張った名前だな。
——親父の願いが込められているんだろうよ。とっくに死別したけどさ。
——しかし大したもんだ。頭突きは植野の言うなれば十八番でね。そいつをまともに食らって平気なんだから。
——目じゃないさ、プロレスラーなんか。けどまあ体力負けしちゃ格好がつかないんで、掴まれたまま精一杯腰を割り、下へ逃げることでショックを吸収するだけはしたが。
それは千堂もなんとなく感じていた。そのこととプロレスラーを目じゃないと、いともあっさり断じたことが呼応し、胸苦しいような気分にさせられた。そして自分の声とも思えない上ずった声で、こう言った。
——場所を移して、用心棒という立場を忘れ存分にやり合えば植野次郎に勝てる、ということかね。
——さて、そいつは蓋を開けてみないことには。勝負は天の時、地の利を得るかどうかで決まるっていうし。
古めかしい言い回しをして無比人は確答を避けたが、それが逆に説得力を感じさせた。
——では質問を変えよう。プロレス週刊誌『四角いジャングル』の千堂という者だが、こちらで然るべく御膳立てをしたら勝負するかい？
——プロレス雑誌の人だったのか。そうとわかってりゃ、目じゃないだなんてことは。

——どうなんだ。
——やるのは構わないけど、あいつに後で店へ捻じ込まれでもしたら事だしなあ。用心棒の立場を忘れろったって、我慢だけしてりゃほかよりずっと高給が保証されるし、まだしばらく辞めたくないんだよ。
——だから然るべく、と言ってるじゃないか。万事私に任してくれさえすれば、皺寄せが店へ行くようなことには間違ってもならんと約束する。それと、もう一つ。明日、店を休むか早退するかしてもらう埋め合わせとして、十万円を進呈しよう。臨時のバイト料でもいいし、ファイトマネーということでもいいか。それでどう。
——明日やるわけね。十万とは悪くないけど、でもそこまでして二人を噛み合わせたい狙いは？
——義憤に駆られてと言っとこう。業界の鼻摘みを懲らしめられるなら、それくらいの出費ですめば安いものだ。
——おっと、こいつは責任重大だな。
こうして交渉成立し、携帯電話の番号を教え合ったところで無比人と別れた千堂は、翌る日、植野との通話を終えるとすぐに連絡を取って落ち合うについての取り決めをした。東都プロレスを訪うのを夜にしたのは、所属選手などの出入りがない方が隠密裡に事を運ぶには好都合ということと、真澄との約束の件が頭にあったからにほかならない。

観客のいないリングで展開される戦慄の場面

「そこまで言うならシャワーを浴びちまったが、もう一度リングへ上がるとするか。確かにちょいと揉んでやる程度なら耐えられそうな打たれ強さではあるようだし、それで昨日の件がちゃらになるなら」
言うと植野は、勢みをつけるようにして立ち上がった。顎で無比人を促した。
五分後、道場のリングで両者は相対した。
植野はトレーナーの上だけ脱いで見事な大胸筋を誇示しており、無比人も上半身裸で下は着てきたチノパンツだが、この方はどちらかといえばぽってり形ながら僧帽筋の発達ぶりが尋常でなかった。
「打たれ強くとも、プロレスにゃ投げもあれば絞め、固め技もあってなあ」
リング中央、無比人をヘッドロックに巻いたところで植野がエプロンに身を置く千堂に聞こえよがしに言い、巻き込むように強引に捻り倒した。
すかさず馬乗りになるや、左の喉輪が入った。一方で膝によって両腕とも殺されたのを知るに及んで、少なからず千堂は慌てた。
次の瞬間、信じられないような事が起こった。



（6）

「レスラーに？　冗談でしょ、社長」
無比人は、酔いも吹っ飛んだ顔で千堂を掬い見た。
新橋烏森口のガードに近い、千堂の行きつけの小料理屋のカウンターである。東都プロレスを十時前に後にして二時間近く経っていた。
「冗談でこんなことが言えるか。いいかね、私は真面目そのもので、それも植野をきみが一蹴したから閃いたなんてことではなくて、昨日のうちから頭にあったんだ。植野に勝

救世主登場!? 新たな修羅の始まりか

ったからプロレスラーにしたいというんじゃなく、自分の直感が的外れでないのを彼との勝負に持って行くことで確認したかった、と言ったらわかってもらえるだろうか」

温燗の浦霞をひとくち口に含み、喉越しを褒めると千堂は刻むように語を継いだ。

言ってしまって、そうだ、無比人を嗾けたその時点ですでにして彼をレスラーにせんとの計画は動き出していたのだと得心できた。植野の頭突きをもろに受けながら、怪我もなければ気絶もしない男の行く手に、沈滞気味のプロレス界にとってカンフルたり得る新ヒーローの誕生を重ねていたことは否定できない。義憤云々は付け足りでしかなかった。

とはいうものの、道場のリング上に展開された戦慄のシーンに千堂が狂喜したこともまた事実である。両腕を膝で殺しつつ喉輪で攻める植野を、無比人は後頭部への蹴りで昏倒せしめたのだったが、アルティメット勢の強さを見せつけられたばかりの千堂の目には、安生が、そしてビガロが散々に苦しめられたあのマウント・ポジションを植野に取られながらも、物ともせずに逆転してのけた無比人の姿は救世主のように映った、と言ってもいいだろう。

二十年の昔、アントニオ猪木とウィリー・ウィリアムスの異種格闘技戦で、マットに仰向けに沈んだウィリーを押さえ込むべく猪木が蹴りを警戒して頭の方から近づいたところ、空手に言う前蹴上げが伸びてきて額を一撃。その場面は千堂もテレビで見ていたが、馬乗りになられてもなお頭を蹴ることが可能だとは思いも寄らなかった。膝のバネが余程柔軟にして、強靭でもあるのか。

植野はほどなく意識を取り戻し、なにがあったのか解しかねるといった緊まらない面持ちだったが、その手に千堂がインスタント・カメラで何枚か撮った伸びたままの無比人にピンフォールされている写真のうちの一枚を取らせ、他言は無用だよと耳許に囁くと、ようやく正気に返った様子で頚を何度も性急に縦に振った。

帰途、話をどう切り出したものかと考えながら新橋まできてしまったのは、一つには無比人をスカウトした後のあれこれが見えていなかったからだが、車に揺られるうちにそれらに関してもほぼ纏まりがついた。そこで車を社の近くの駐車場に入れ、一杯飲りがてら食事に誘ったのであった。



無比人は止めていた箸をまた動かし、おでんのジャガ芋を突き崩しながら、

「冗談でないのはわかったけど、でもなあ」

と気乗り薄の体。間を置いては、と自らを鼓舞しつつ千堂は彼の方へ肘を寄せた。

「プロレスが好きじゃないようだが、自分でやってみれば外から見るのとは違い、びっくりするほど奥が深いことはじきにわかるはずだ。手前味噌と言うんであれば、ではこういう捉え方はどうだろう。

口さがない連中がよく言うように、八百長だらけのまやかしでしかないならば、どうしてグレート・ガマや絞め殺しのルイスの時代から渝らずファンに支持され続けてきたのか。プロレス嫌いから入って、その核としてある真実を掴み取り、きみと同じような臍曲がり諸君に身を以て提示する。それができたら素晴らしいと思うがね。面倒は総て見る。勿論金銭面でも――」

「社長だけあって弁が立つっていうか、どうもつい丸め込まれちまいそうだな。言っとくと、自分の躰は自分のものであって自分のものではない、そういうことになるかな」

投げ出すように無比人が口を入れた。

「というとつまり、後見人的な人物でも？」

「まあね。だから一存では決めかねるわけ」

「会おうじゃないか。どういう男だ」

「いいや、女だよ」

（以下次号）

キミは笑っちゃうほど「怖い虎」を見たことがあるか!?
創刊号での読者支持率ナンバーワン奪取記念特別企画!

佐山聡

またも懲りずに爆弾発言!



聞き手／吉田豪
interview by Go Yoshida
撮影／斉藤ユーリ&松永勉
photographs by Yuri Saitou & Bensan

某『マガジンBANG!』(マガジン・マガジン発行)誌上でボク(吉田)が好評連載している『初代タイガーマスクの虎の穴伝説』という企画がある。ズバリこれは我が国を代表する格闘家たち(これまでに村上竜司氏、角田信朗氏などが登場)が「喧嘩」「女」「金」という男の三大テーマをモノローグ形式で語り下ろす、とことんまで男気溢れまくりの企画なんだが、佐山さんの喧嘩の話があまりにも面白すぎるので本誌で完全掲載することとした。なぜわざわざネタを使い回すのか、そう疑問に思ってしまったキミも読めばわかる。とにかく、これこそが佐山聡のラディカルな姿なのである。見た目は丸いが中身は鋭利。全てのレスラーよ、この姿勢で行け!!

—突然ですが佐山さん、今日は**喧嘩の話**を聞かせていただきたいんですけど。

佐山　ボク、喧嘩はしたことないで～す。

—いきなり何言ってるんですか（怒）。

佐山　ちょっとボクが喋ったら、すぐ変な噂がバ～ッと大きくなっていっちゃうみたいなんで、ええ。ボクは喧嘩大嫌いなんですよぉ。

—**え～っ（笑）⁉　実はキレたら半端じゃないってよく言ってるじゃないですか！**

佐山　ボク、キレたことないですから（キッパリ）。変な噂ばかりが先に行ってねえ。リング上でもボク、キレたふりしてるだけですから。基本的に**綺麗な男**ですから……って、話にぜんぜんなんないですね～。**アハハハハア。**

—だったら話して下さいよ、ちゃんと（笑）。

佐山　喧嘩についてですか？　喧嘩っていうのは、やっぱりやっちゃいけないですねぇ。

—まあ、そうでしょうけど（笑）。

佐山　昔、闘いと喧嘩がどういうふうに関わり合いがあるのかと思って、カーッと熱くなったらどうして殴っても痛くないんだろうとか、そういうことで一生懸命試していた時期はありましたけどねぇ。だからカーッとくるとすごいチャンスが来たなって思ってました。

—チャンスですか（笑）。佐山さんは昔から表面的には温和な性格だったんですか？

佐山　ええ、**温和**ですよ～。っていうか温和ではないですけども、どうなんですかね。（小声で）ボク、出身は山口県ですんで学生時代からけっこう……やってましたから（笑）。

—**やっぱりやってましたか**（笑）。

佐山　やっぱり普段のボクは温和なんですけど、そういう闘いのシチュエーションになると駄目なんですよねぇ。

—**意識的に自分でキレないようコントロールしているって感じなんですか？**

佐山　いや、キレようと思えば**いくらでもキレる**んですけども（笑）。

—そういえばシューティングのトレーニングでも、佐山さんが意識的にキレて竹刀で選手を追い込んだりとかしてましたよね。

佐山　ええ、あれもそれこそ選手のアドレナリンを上げるために、わざとキックミットを蹴らせるんですよ。これはもうバレちゃったから言いますけど、ある選手に「今までの最高の力で蹴ってみなさい」って蹴らしても、そんなの本物の力じゃないんですよね。本物の力は自分を越えたところ、つまり常人を越えたところにあるんですけど、書いちゃいけない言葉で言えば**キ●ガイ**ですよね（笑）。

—ああ、黒崎健時先生流に言えば、**必死の力・必死の心っていうやつですね。**

佐山　そうです、そうです。そこでボクがわざとね、（ウェイトレス登場）あっホット（コーヒー）はボクです。それで話を戻すと**ボクがホット**……あっ、ホットじゃないなぁ（笑）。

—ホットじゃないですね（笑）。

佐山　ええ、常人を越えたところにいかないとキックのスピードは早くできないわけですね。それを打つためには、気持ちの問題なんですよ。だからアメリカに**PHS**っていう……PHSは電話だなぁ（笑）。

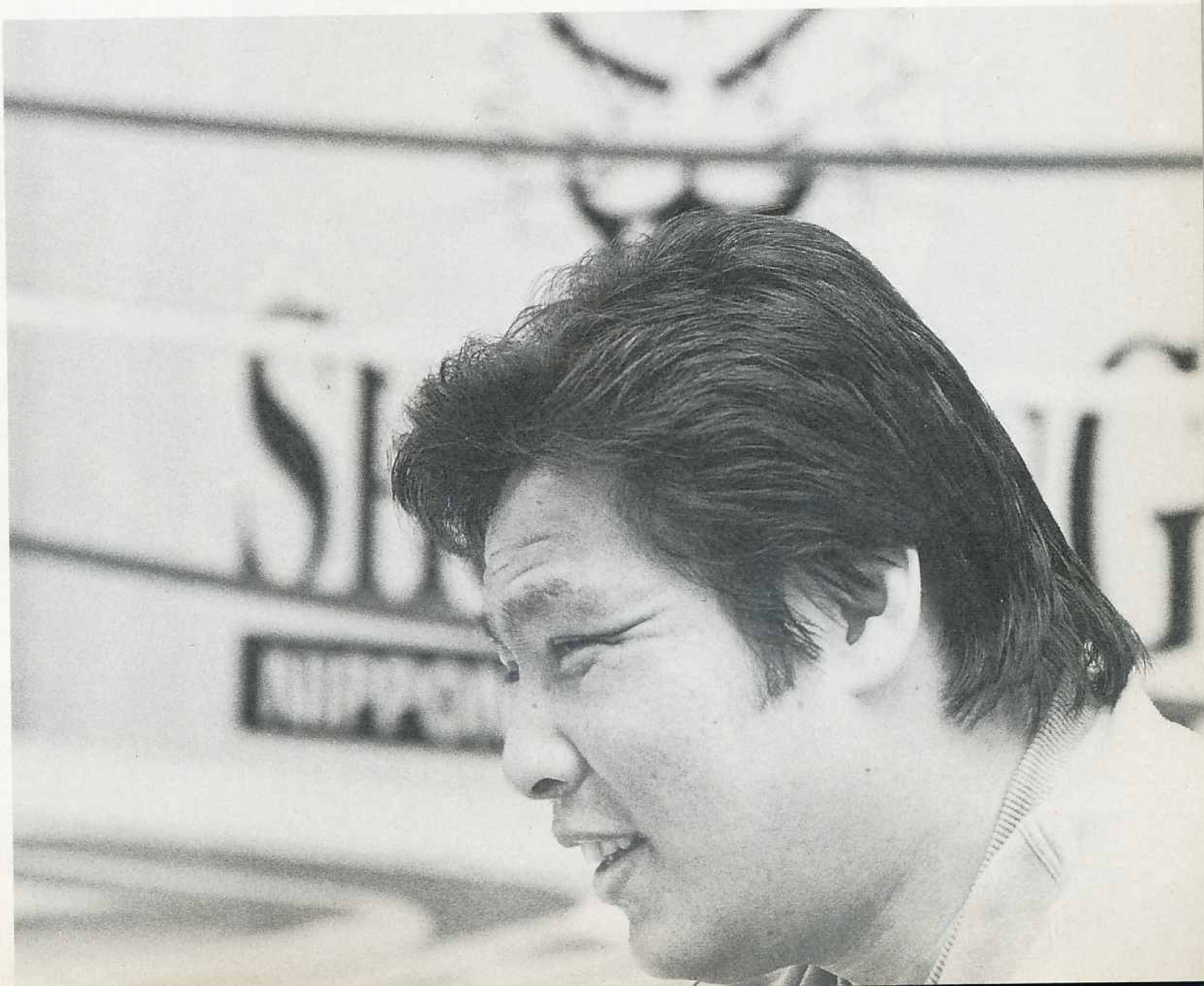
—**電話ですね**（笑）。

佐山　なんて言ったっけ、麻薬のすごいのがあるんですよ。ああ、PCPだ。その中毒患者はこ～んな細い奴でも、オマワリが10人ぐらいでかかってもかなわないんですよ。それは自分がスーパーマンになったっていう錯覚を起こす薬なんですけども、そのPCP麻薬を自分の身体の中に入れなさいって言うんです。それが喧嘩のファイトですよね。そこでボクはミットを蹴らせるときも、竹刀も音が出るように輪っかの部分をズラした痛くないヤツをウチの弟子に作らしたりとかしてね、それがまたすごい音が出るんですよ、**ウフフフ。**

—ウフフフフフって（笑）。

佐山　そこで「テメェ、この野郎！　俺が思い切り蹴れって言ったのがわかんねえのか！」**バンバンバ～ン、ビンタもバチ～ン**と、これも痛くないように叩くんですよ。でも、相手はわかりませんから。それをやると、今まで見たことのないようなスピードで蹴りますからね。下手したら殺されると思って1時間でも蹴ってますから。まあそれと喧嘩とは、あんまり関係ないんですけど～。アハハハハ。

—あっ、関係ない（笑）。



佐山　ええ、格闘技と喧嘩っていうのは関係ないですね（キッパリ）。はい。あと喧嘩でいちばんいい技術っていうのは、やっぱり**目突き**ですよ。先に目を突いたほうが勝ちですよねぇ。

—**真樹先生もそう言ってましたね。**

佐山　あ～、真樹先生がそう言うんなら間違いないですね。（小声で）実際にやってますからねぇ、ウフフフフフ。

—ガハハハハハ。さすがだ！

佐山　要するにジャブが早ければね。それから相手がジャブを早く打ってきてもパーンとくっついちゃって、そこから**目を掻きむしる**とかね。これが勝ちパターンですよ。技術とか関係ないですからねぇ。ただ、よく言うじゃないですか。「相手に飲み込まれる



秘密の虎の穴！

まだ新日に入った初日だったんですけど、パーンってスリーパーで取っちゃったんです、ボク（笑）。

な」とか。**関係ないですよ、そんなもん（キッパリ）。**

――というと、佐山さんは子供の頃からかなり喧嘩されてきたわけですね。

佐山　いや、してないです、してないですぅ。ガハハハハハハハ。言い張りますね（笑）。実際、中学高校ぐらいの頃っていうのは、どうだったんですか？

佐山　ええ、喧嘩しないです（キッパリ）。中学生時代はボクは柔道やってましたから、プロレスに入るためにね。中学校2年生で、もう黒帯だったんですよ。で、プロレスやりたくて投げる技投げる技が全部バックドロップだったんですね（笑）。**人間風車**やって反則負けになったこともありますし。

――**『1・2の三四郎』**状態ですね（笑）。

佐山　いや、ほんとそんな感じだったですよ。それで友達見つけちゃあ、カナディアン・バックブリーカーってあったじゃないですか。180センチ80キロ以上ある奴がいたんですけど、そいつを**持ち上げるのが楽しみで**ですねぇ（笑）。廊下に通りかかったらグワーッと。まあ、今で言う「いじめ」ですねぇ（笑）。

――昔でもそうですよ（笑）。

佐山　あとテニス部かなんかにカッコいい男の子がいてね、女の子に「キャー」なんて言われてるから「ちょっと来い」ってバーンとブン投げちゃったりとかしてね、**「ギャー！」**とか言ったりして、アハハハハハハ。

――笑いごとじゃないですよ（笑）。

佐山　黒帯ですから、最後には先生がボクに授業をさせましたからね。理科の時間だったかな、「佐山やっといてくれ」って言われて、ボクが睨みを効かすとみんなやってくれるっていうか（笑）。だからボクもけっこうイジメてたりするんですけど、でもそんなネチネチとイジメるんじゃないですよ。**プロレス技で一生懸命投げたりとか、アハハハハハハア。**

――一生懸命って（笑）。

佐山　だから悪い奴らはボクの側に来たくないわけですよ、投げられちゃうから（笑）。それで黒帯でしょ。ボクが卒業するとき「いやぁ、佐山君がいたから、この学校は番長グループができなかった」って言われましたもん（笑）。田舎帰ったとき、バンバンけっこうブン投げてた友達に聞いたら、やっぱり番長グループ作りたかったらしいんですよ。でも、ボクがいたからできなかったって言ってましたもんね、アハハハハ。

――**つまり喧嘩にはならなかったわけですね。**

佐山　ならなかったですよ、全然。みんな怖がってましたから。ボクが歩くだけで、みんな逃げてましたから（笑）。やっぱ人間、嫌ですよねえ。平気で落としましたから（笑）。

――**それは非常に嫌ですねえ。**

佐山　そうそう、スリーパーホールドっていうのは新日本プロレス入る前からボクは使ってたんですよ。それで四つん這いの練習してた新日本プロレスの先輩に「おい、坊や。来な！」って呼ばれたとき、これ藤原さんじゃありませんよ。まだ入った初日だったんですけど、パーンってスリーパーで取っちゃったんです、ボク（笑）。「あれ、おっかしいなあ」って言うんですよ、そいつ。いや、その人が。

――**いま、確かに先輩に対して「そいつ」と言いましたね**（笑）。

佐山　いまは「そいつ」って呼ぶけれど、当時は「その人」だったから。それで「あれぇ、もう1回来な」って、そしたら**ポーン**ってまた取っちゃったんです（笑）。ギブアップするわけですよ、先輩が。「あれ、おかしいなあ。じゃあもう1回やってみよう」って結局3回連続で取っちゃって、それから入門して今までその人とスパーリングしたことないで～す（笑）。

――**あ～、無茶苦茶いい話ですねえ**（笑）。

佐山　それからウィリアム・ルスカ。ボクがまだ入ったばっかのときスパーリングやったんですけど、それでボク勝ったんですから。世界チャンピオンですよ、柔道の。それが**「よろしくお願いしま～す」**って言ったらパーンと取っちゃって、アハハハハハ。それから、ボロクソにやられましたけどね（笑）。

――**やっぱり油断があったんでしょうね。**

佐山　ルスカの場合は油断でしたねえ。先輩は実力だったみたいですよ（笑）。それはなぜかっていうと、中学時代にボクがプロレスのいろんな技を発明しようとして、**座布団とか締めてたん**ですよ。だからボクがスリーパーホールドを作ったんだと思ってましたから。

――**バーン・ガニアとかじゃなくて**（笑）。

佐山　ええ。そしたら坂口さんがやりだしたんで、「ああ、なんだ」と思ったんですけど。それぐらい自信持ってたんで、友達みんなにかけてましたから（笑）。そんな状況ばっかりが続いてて。あとスリーパーで後ろから羽交い締めにして「ギブアップしろ」とか言ってたら、全然ギブアップしないんですよ、そいつが。そしたら、一生懸命締めちゃって、**白目剥いて**るんですよ（笑）。アハハハハハハ。

――かなりヤンチャだったんですね（笑）。

佐山　っていうか180センチ80キロの奴をガーンと持ち上げてたら、やっぱりビックリしますよね（笑）。相手が**ジャンプ**してるわけじゃないですから、もう思いっ切り力で持ち上げてるわけですから。ブルーノ・サンマルチノだと思って。それは噂になりますよねえ。

――**近所じゃ敵なしって感じですか。**

佐山　そういうことも意識しませんし、先生が授業を任せるぐらいですから、けっこう真面目だったんですね（キッパリ）。でも高校行きだしてからは、ちょっと変わりましたけどね。

――どうなっちゃったんですか？

佐山　やっぱり……、軍隊学校みたいなとこでしたから、先輩が「（喧嘩）やれ」って言いますし、やらないとブン殴られますしねえ。その辺から、ものすごい気が強くなったんですよね。もう絶対に誰にも負けないみたいな気持ちが出てきまして。

――となると、かなりの無茶ぐらいしているわけですよね。

佐山　**喧嘩しないですから、ボク**（キッパリ）。

マネージャー　あ～あ、まだ言いますか（笑）。

マネージャー　だけど、ホントに危ないときありますよ。

佐山　ホントホント。ボクは何もやってないのにボクがやったようになっちゃって。

マネージャー　違う違う（笑）。

――洒落にならないような危ないことをしちゃったんですね（笑）。

佐山　いや、話していいやつと話しちゃいけないやつがあって……、**人殺した話は止めといたほうがいいな。**

――何を言ってるんですか（笑）。

佐山　もう時効だから言いますけど、これは

メンチ切り合いになったんですよ。ボク、メンチ切るの大好きですから(キッパリ)。

ものすごく綺麗な話ですからね。ある所でボクが友達と飲んでたら、20代ぐらいの男の人と**ヤクザ風**の方が暗闇で話してたんですよ。まぁ、ヤクザなんですけどね。すごい神妙に話してるんで、住宅街で。バーッと行ったら一人女の子がいて、神妙そうに見つめてるんですよ。「あれ、絡まれてるの?」って聞いたら「そうだ」って言うんですよ。「これはチャンスだ」と思ったんですね。

——**どんなチャンスですか**（笑）。

佐山　でも、ボクの友達は頭いいんですね。その男の子の肩叩いて「おっ、待ってたよ」な〜んて待ち合わせしてたフリして「行こ、行こ」って連れてっちゃったんですよ。「な〜んだ、俺の出る幕なくなっちゃったな」と思ってガッカリしてたらそのヤクザ風の男が、ヤクザなんですけど、「待て、この野郎!」と。で、ボクがパッと振り向いて「なんだ、この野郎!」と。

——**始まりましたね。**

佐山　それで、**ウフフフフ♥**　色々と向こうが言うんですよ。ボク、マズいことにスーパータイガージムのジャンパーとトレーナー着てたんですよ（笑）。まあ、わかってんだろうなあと思って、そうしたらヤクザが「どこの組のもんだ!」って聞くんですよ。「俺、ヤクザじゃないしヤクザ風でもないし、何言ってんだ、この馬鹿!」と思って、**『俺、全国区だよ』**って言ったんですよ（笑）。

——また、**わけのわからないことを**（笑）。

佐山　ちょうど選挙か何かやってたからそう言ったんだけど、そいつはわかんないんですよ。「ああ、これはシメシメ」って、自分からは一応やっちゃいけないんだけど、相手が出てきたらカウンターだと思ってたんですよ。だから**早く来い、早く来い**と思ってね、ウフフフフ。で、女の子たちが心配そうにしてたから「ああ、見ないで帰ってくれ。見られたくないから」と。もう、そこまで言ったのにこの男、わかんないの。馬鹿だから（笑）。

——**馬鹿だからって**（笑）。

佐山　それで2人っきりになったらパーンと出てきたんですよ。でも、そいつの後ろが壁だったからカウンター合わして後頭部打って死んじゃいけないでしょ。**パンチはちょっとヘビー級**ですからね。そのとき瞬間的に首相撲にいって、膝蹴り3発ガーンガーンと入れたんですよ。なんか色々言われてるから頭きて「この野郎!」って。そうしたら男はのたうち回りますよね。苦しいですよね。それで襟首捕まえて、竹薮みたいな所で滅茶苦茶にしてやろうと思ってガーッと引きずってったんですよ、住宅街をこうやって、ウフフフフフ（立ち上がって実演を始める）。

——**ノッてきましたね**（笑）。

佐山　そいつが「助けてくれ〜!」って叫んだら近所の電気が**パッパッパッパッ**と点いて（笑）。ウフフフ、それで俺の友達が逃げるんですよ、車でバーッと（笑）。だからそいつを置いてきたんですけど、まだその話には逸話があって、ウチの弟が病院やってるんですよ。

——**あっ、それは初耳ですねえ。**

佐山　整骨医なんですけど、そこにその女の子の上司が来たんですよ、たまたま。そしたら女の子はボクだってわかってて、「帰んなさい」って言ったのに全部見てたらしいんです（笑）。「良かった〜」と思って。無茶苦茶やってやろうと思ってましたからねぇ（笑）。

——**夢を壊さずに済んだわけですね**（笑）。

佐山　だから、そういう**綺麗なもの**はありますよね。

——**汚いものも多々あるわけですね**（笑）。

佐山　いえ、汚いものはないです、ボクは。そういう**正義心を煽る**っていうんでしょうか、そういうときはやりますけども。それ意外はほとんどやらないです。ええ。

——**やりすぎちゃうことも、たまにある、と。**

佐山　あ、う、……あまりないですね。ないですよ（笑）。

——**噂によると、ヤクザ相手に無茶したこともあるらしいですよね。**

佐山　いえいえ、ボクが駄目なタイプはヤクザじゃないんですよ。身体が大きくて「俺は強いんだぞ」って歩いてくる奴が駄目なんですよ。目の前からそういうのが現れると、**もうボク駄目。**

——**すると、どうなるわけですか**（笑）？

佐山　いやいや、「やるのか?」って感じになるわけですよ。昔はねえ……。言っていいのかなぁ……。

——**言って下さいよ**（笑）。

佐山　たとえばあちら（道路の反対側）から肉体労働者の方2人がバーッと歩いてきますよね。身体デカいからこんなになって歩いてくると、道路を渡って行って**「てめえ、この野郎!」って始めますからね、アハハハハハハ。**

——**そこまで黙ってられませんか**（笑）。

佐山　そしたら肉体労働者の方がシュンとなってるんですよ（笑）。だから身体がデカくて挑戦してくるような感じ? それがもう駄目ですね。あと**ボディビルダーも頭くる**んですよねぇ（笑）。「そういう歩き方するなよ」「人の前だからってそういう態度するなよ」って。ボクはそういう態度しないじゃないですか。普段はもう。

——**「すいませ〜ん。よろしくお願いしま〜す」ですからね**（笑）。

佐山　ええ、もう**チョコチョコ**歩いてるでしょ。なのにそういうふうにやられちゃうと「何なんだ?」と思うわけですよ、ボクはね。

——**俺が腰低くしてるのに、強くもないお前らが偉そうにするな、と**（笑）。

佐山　まあ、そんなことじゃないんですけどね（笑）。面白いのは昔どこだったかなぁ、190センチの100キロぐらいですか。ガーッと偉そうに歩いてるんです、地下鉄で。それでメンチ切り合いになったんですよ。ボク、メンチ切るの大好きですから（キッパリ）。

——**ああ、大好きでしたか**（爆笑）。

佐山　あ〜っ、書かないで書かないで〜っ!

——**書いちゃいま〜す**（笑）。

佐山　**書かないでよ〜ん!（笑）。**それでメンチ切ってグ〜ッとお互いに睨み合ってさ、俺もう頭きちゃってそいつんとこに駆け寄ってったんですよ。（再び実演）こう睨み付けて、「てめえ、この野郎!」と思って走り出したら「佐山さんですよね! ファンだったんです!」とか言われて**「は〜い♥」**って（笑）。

——**「は〜い♥」ですか**（笑）。

佐山　あとね、TBSの前で傘さしてたんですよ。そしたら横断歩道のあっち側で、どう見ても身体のデカい人がボクのことをグーッと睨んでるんですよ。ホント挑戦されてるみたいな感じですから、ホント頭きて傘捨てて、横断歩道の信号も赤ですよ。車が来ても「うるせぇぞ、この野郎!」って止めて、**「てめえ、この野郎! なんだコラ! グワ〜ッ、ワ〜ッ!」**と言ったら「佐山さん! ボク、ファンなんです!」って言うの（笑）。「ボク柔道やってて、みんなにお前の目付きは悪いって言われてるんです。すいません!」って言われてボクは**「エ〜ッ! そうなのぉ!」**なんてねえ。恥



秘密の虎の穴！

ずかしくてどこ行ったらいいかと思って電話ボックスに逃げ込んだら、そいつが追いかけてくるんですよ。「佐山さ〜ん、許して下さ〜い！　悪気はなかったんです〜！」って（笑）。そういう話でいいんですか？

──まったく問題ないです（笑）。

佐山　本当に殴った話はしないよ、ヤバイですからね（笑）。それとか下北沢駅でこうやって立ってたらさぁ、身体のデカい2人組がわざとボクの目の前を歩いてくるんですよ、こう肩で風切って（再び実演）。**みんなの駅前**なのに。

──みんなの駅前（笑）。

佐山　それでスーッと目が合いだして「この野郎！」と思って見てたら、後ろ姿でコソコソ2人で話し合ってるんですよ。多分、「佐山だよ」って気付いたんですよ。それでパッと振り返ったときはさぁ、狼のような目が少年少女マンガの主人公みたいな目になって「佐山さんですよねぇ♥」って言ってきたから**「（ドスの効いた声で）殺すぞ、この野郎！」**って言ったら、もう真っ青な顔してUターンしちゃいましたね、ウフフフフ。

──そりゃあUターンしますね（笑）。

佐山　それでサウナ入ってたらさぁ「佐山さんですよね」って言われて「あっ、そうです、そうです。どうもこんちわ〜っ」とか答えたら「私の知り合いが下北沢で佐山さんに失礼なことをしたらしいですね」って（笑）。

──そういう噂が一人歩きするんですね（笑）。

佐山　そうですねぇ。こういうのがデカくなっちゃったりとか、ボクがメキシコでやった話とかが大きくなったりとかね。イギリスに行ったときも、ゴッチさんっていうのは凄かったわけですよ。確かに技術も凄いですけど、イギリスで「**ゴッチさん**の得意技は何ですか？」って聞いたら、みんな**「拳とヘッドバッドだ！」**って言うんですよ（笑）。それぐらいみんなに怖がられてたんですよねえ。

──サブミッションじゃなかったんですね。

佐山　ええ、控室でも生意気な選手とかを滅茶苦茶にしちゃったりとかね。だからボクはゴッチのボーイでしたから、みんながほんとにボクのこと怖がってました。で、ボクも**これ**（シュートサインを出す）やりますから、イギリスでの地位を得るのはすっごい簡単でしたね。そういうのが逸話になったりとかね。まぁ、色々やったこともありましたけどね。

──やってるんじゃないですか（笑）。**佐山さんは、リング上で気に入らない選手に制裁を加えたりは？**

佐山　あっ、そういうのはリング上では絶対やりませんよ。リング上はもう仕事ですから。

──でも、相手がちゃんと仕事しない場合もあるじゃないですか。

佐山　あっ、そういうのはほとんどないですよねぇ。ときどきこれ（シュートサインを出す）になって**バーン**とブン投げたりとかしたことありますけど、それを言ってるんだったらほんとに大したことじゃないですから。ただ、イギリスで1回何だっけなあ。デカいのがいて。

──またデカいのですか（笑）。

佐山　ええ、130キロぐらいある選手に場外乱闘ガーッとやられて、頭きて引きずり倒してバーンと片足タックルいって**クロックヘッドシザース**をガーッと極めに入ったら、ピート・ロバーツがボクが沈まなければいけないところを起こすんですよ。ボクは必死になって沈もうとして、控室にまで怒鳴り込んでいったらシュンとなってましたけど（笑）。そんなのはありましたけど、リング上ではほとんどないですね。

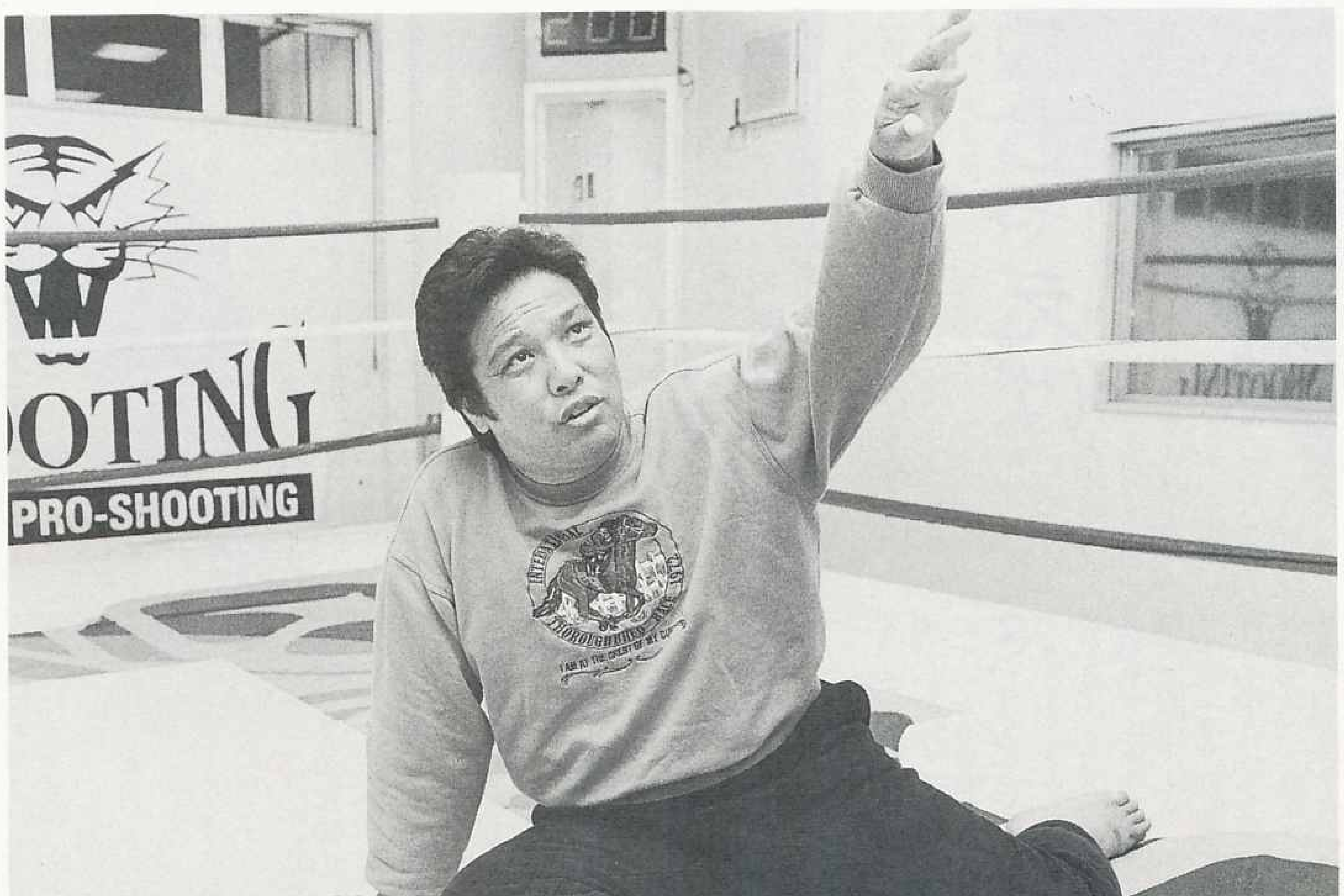
──リング上ではちゃんと仕事する、と。

佐山　やっぱり、それはやんないといけないでしょ。リング上では反対に燃えないですよね。仕事の場だから。

──リングを降りると燃えるんですね（笑）。

佐山　だからファイトのときと喧嘩っていうのは最初に言ったように全然違うんですね。たとえば相手がナイフ持ってたりとか……、ボクは**包丁持ってる相手**ともやりましたしね。

──うわ〜っ！



佐山　そういうの神経的に向かって行っちゃうんですよ、ボク。普通、逃げたりするじゃないですか。女の子に包丁持たれたりしたときには逃げましたけど〜。

──そういうこともあるんですね（笑）。

佐山　嘘ですよぉ。これ絶対嘘ですからね、今の。本ッ当〜に冗談ですからね、今の！

──そんな必死に否定しなくても（笑）。

佐山　今のは冗談ですけど。だからフッと懐に入るのは天性のものがあると思うんですけど、天性だけでも駄目ですよ。天性のものプラスそこで相手を**襲撃**するには、……襲撃って別にこっちからやってるわけじゃないんだけど。

──こっちからやってるんだから、襲撃でいいんですよ（笑）。

佐山　いやいや、やるには独特の入り方があるんですよ。あと、やっぱり自分より強いなっていう相手とは止めたほうがいいですね。

──佐山さん的には街の喧嘩で「こいつ、強

相手の技が見えるようになっちゃえば
おしまいですからね。
あとは目を突けるかどうかですよね。

いな」っていう相手とかいました？

佐山　**いないですよ、そんなもん**（キッパリ）。

——ガハハハハハハ。カッコいいですねえ！

佐山　ある程度、相手の技が見えるようになっちゃえばおしまいですからね。あとは目を突けるかどうかですよね。**目ン玉に指入れるとか、鼻の中に入れるとか、指の関節取ったりとか、これも格闘技ですから。アルティメット以上ですよ、これは。**

——ゴッチさん流に言えば、尻の穴に指突っ込むとかですね。

佐山　うん、それは相手が気持ちよくなっちゃったら困るんだけどぉ（笑）。

——ガハハハハハハ、最低ですね（笑）。

佐山　あんまり尻の穴やっちゃ駄目ですよぉ。ポジション崩すのにはいいですけど、あれはそんなに武器にはなりませんからねぇ。後で**指洗わなきゃ**いけないしねぇ（笑）。

——ところで佐山さん、包丁の相手にはどうやって立ち向かったんですか？

佐山　包丁の相手には、**おぼん**持ちましたね。これは10代でアルバイトしてたときなんですよ。プロレス入る前に喫茶店勤めてたんで、……これはちょっとヤバいなぁ（笑）。

——ヤバいことしちゃったんですね（笑）。

佐山　……とにかく話を戻すと、ボクに言わせれば「殴り合い」はただの女の子のお遊び。殴り合いの間合いを取って「あ〜っ、一生懸命にやってるな」ってだけですから。そんなもん懐に入っちゃえば関係ないですし、なんでカウンター合わせないんだとか、そういうふうにボクは見ちゃいますよね、ウフフフフ。

——喧嘩版ケーフェイですね（笑）。佐山さんは喧嘩を売られることとかないんですか？

佐山　**ないですよ、全然**（キッパリ）。

——じゃあ売ってばっかりなんですね（笑）。

佐山　……メンチの切り合いにはなりますよ。ボクの出身は山口県の下関ですから、東京出てきたとき「なんてみんないい人たちなんだろう」と思いましたもん（笑）。あちらではメンチ切り合うのが普通だったんですよね。プロレス入って日本全国巡業廻って、そこでわかったんですから。「あっ、ウチの田舎がいちばんガラが悪い」って（笑）。

——ガハハハハハハハ。

佐山　漁師の町ですから、10代の頃はものすごい喧嘩っ早かったなぁ。凄かったですねぇ。

——3日に1度ぐらいの調子ですか。

佐山　いや、そんなもんじゃないでしょう。

——負けた経験とかってあります？

佐山　**ないです、ないです**（キッパリ）。

——無敗ですか！　何戦ぐらいしてます？

佐山　（小声で）ここだけの話ですよ。**数は数えられない**です。

——じゃあ何百っていうレベルですね。

佐山　（うなずきながら）こちらがもう一方的ですから。あまりやり合ったこととかもないですねぇ。闘いにならないんですよ。最初にガーンといっちゃった方が勝ち、最初に殴った方が勝ち。これの世界ですね。

——つまり喧嘩になると佐山さんが先にガーンといっちゃう、と。

佐山　メンチ切り合いになっても、まさかこないだろうと思いますよ、相手も。でもボクは、いっちゃいますから（笑）。それが相手はビックリするんじゃないですかねぇ。**…**

…なんで俺、ここまで喋っちゃったの（笑）？

——ガハハハハハ！　面白いですねえ、やっぱり佐山さんは（笑）。

佐山　今は全然ないですよぉ、そんなのぉ。今はボクは止めるほうですから、喧嘩は。

——それにしても、最近の物腰の柔らかい佐山さんを見て、ナメてかかってくる人とかもいるんじゃないですか？

佐山　そりゃあ、やっぱりいますよね。

——でも佐山さんは全国区なのに、前田さんや高田さんと違って喧嘩しても雑誌ネタにならないから不思議ですよね。

佐山　顔がわからないんだと思いますね。ボクがマスク被ってやったら雑誌ネタになるかもわかんないんですけど〜（笑）。それに、相手がボクのこと知ってると思ったらやらないですしね。

——上手いですね、やり方が（笑）。

佐山　上手いですよ〜。（小声で）要するに**頭がいい**と言うか（笑）。**ズルい**と言うか（笑）。

——さすがです（笑）。マネージャーさん的に言ってもいい話っていうのはないんですか？

佐山　ないよ、ないない！

マネージャー　ほんとに急にキレちゃいますからねぇ。洒落にならないことばかりで。

——全部バレたら死刑ですかね（笑）。

佐山　いや、死刑にはなんないですよぉ。殺したことはないですし。**死んでるかもしれないですけどぉ〜。**

——え？

佐山　死んでるのかもしれない。ボクの友達に面白いのがいてね。こうやってブン殴って、ウフフフフ。そしたら翌日の新聞に「浮浪者が公園で死んでる」って出てたんですよ〜、ウフフフフフ。

——**笑い事じゃないですよ**（苦笑）。佐山さんも思わず新聞見ちゃったこととかないんですか？

佐山　ないです、ないですぅ（ニヤリ）。そんな無茶苦茶やらないですもん。だから最近は止めるほうが多いんですよ。

——本当ですか？（笑）。

佐山　でも最近ボクがバーッと止めに入ったら、みんなボクが喧嘩やりだすんじゃないかと思って、止めに入ろうとしたボクの方を止めるんですよぉ（笑）。

——**じゃあ、そろそろ喧嘩は卒業ですかね。**

佐山　喧嘩だなんて思ったことないですもん。なんかのファイトの修行みたいな、ファイトを**練習するための一環**だと思ってますから。

——**その考え方は非常にステキですね。**

佐山　例えば気持ちで負けないことっていうのが、やっぱり大切なことでしょ。その一環ですからね。（小声で）だからいまも……修行だと思ってるし……。

——**いまも現役で修行中なんですね**（笑）。

佐山　いや、修行じゃないです、全然。一貫性のもので今も続いているだけで、今はもうやってないですから、全然。

——どっちなんですか、それ（笑）。

佐山　最近は殴ったりとかないですねぇ。だからボクが「てめえ、この野郎！」とか言うときは、**「俺にかかってくるなよ」**って言いたくてやってるだけですから。ホントにやるときは何も喋んないで**スッと入ってパーン**ですから。みんなそうじゃないですかね。一生懸命口で言うのは優位に立ちたいからだと思いますよ。そんな喧嘩見てても面白くも何ともないですよ。そうやってワーワー言ったとき、もう喧嘩にならないだろうと思いますからね。

——いや〜、しかし佐山さんには幻想持てますよねえ。

佐山　幻想？　エヘェ〜（笑）。



秘密の虎の穴！

——エヘェ〜ときますか（笑）。

佐山　でもほんとは基本的には喧嘩はやらないということで、そう書いて下さいね（笑）。

——**やるときにはやっちゃうけど。**

佐山　やるときにはやる。それはどうしようもないときとかね。前から歩いて来た人がいきなり殴りかかってきたとか。あっ、殴りかかられたこともありますよぉ。

——**それって佐山さんが睨んでたからじゃないんですか（笑）？**

佐山　いや、違う違う！　酔っぱらい。パーッと歌ってて、帰ろうかなあと思ったらいきなり殴りかかってきやがって、どれぐらいの酔っぱらいか知らないけど**空手何段**かやってる奴で。パーンと外して関節取ったら（脇固め状態）、そいつが睨んでるんですよ、関節取られながら。それで頭きちゃって引きずり上げて膝蹴りパーンと軽く入れてたら、ボクの友達が止めてくれたんですけども。（小声で）結局そいつは、**病院送り**になったけどぉ（笑）。

——**それって佐山さんの歌が気に入らなかったんですかねえ（笑）。**

佐山　……いや、上手すぎるからってことですね、アハハハハハハ（パチパチと自分で拍手）。でも飲み屋で思い出したけど、腕まくりして「俺は腕が太いんだぞ」とかやってるの見ちゃうと駄目。もう**ブン殴りたくなる**んですよ（笑）。もうホントにぃ、ウフフフフ。

——**思い知らせたくなっちゃうと。ほんとにステキですね、佐山さん（笑）。**

佐山　でもやっぱり、喧嘩なんか駄目なんですよね。やっちゃいけないんです。

——**何言ってんですか、いまさら（笑）。**

佐山　やっちゃいけないのはなぜかって言うと、カーッとなったら格闘技は負けなんです。喧嘩のときはしょうがないですよね。たまたまボクはカーッとなることを自分から憶えていって、これはどういうふうに使えるのかっていう研究材料の一つであって、それがちょっと続いてるだけで。

——**続いてるんじゃないですか（笑）。**

佐山　いや……**ち、違いま〜す。**要するにホントはカーッとなったら負けですからね。

——**カーッとなったら駄目なのに、デカいのが来るとカーッとなっちゃうんですね（笑）。**

佐山　…………俺、今日はどうやって切り返そう、ホント（笑）。原稿見せてもらわないとなぁ、危ないよぉ、これ絶対（笑）。

マネージャー　ホントにすぐメンチ切ったりしてカーッとなっちゃいますからねえ。

佐山　喧嘩じゃないですからねえ、メンチの切り合いは。でもね、ハッキリ言ってボクは謙虚ですよ。メンチの切り合いもホントはする必要ないですよね。だからボクが言いたいのは、**道を歩くときは普通に歩きなさい、**と。

——**しかし佐山さんを含め、昔の新日にはつくづく喧嘩っ早い人が多かったんですねえ。**

佐山　そうですねぇ。だからボクが新日の中でちょっとやってるんですけど、それは言えないですよね、ワ〜〜〜ッ。

——**それはヤバい話ですか（笑）？**

佐山　ヤバい、ヤバい。それはほんと目ェ突きましたね。

——**先輩とかとやっちゃったんですか？**

佐山　はぁい。やっちゃいました。1回ね。果たし合い！　道場の中でのね。

——**それは極めっこみたいなのじゃなくて？**

佐山　いやもう、名前は言わないけど、ほら。耳齧られた跡あるでしょ。そこまでの喧嘩だと思わなかったのに、いきなりガ〜ッと噛じられて**肉片をペーッ**と捨てられたの。普通だったら怯むでしょ。俺、怯まないでいっちゃうんですよ、性格がアレだから「この野郎！」でガーンと目ェ突いて、そのままハイキックをバチ〜ン！と入れて、ヨロヨロっとしちゃったから、もう1発ハイキックをバシ〜ン！とやってバ〜ンとひっくり返したら、**イビキ**かき始めちゃったの（笑）。

——**そりゃヤバいですねぇ（笑）。**

佐山　危ないでしょ。死ぬってことですから。それで慌てちゃって、「ああっ、殺したな」と思って、キャハハハハハハ。

——**キャハハハハハハって、ちょっと（笑）。**

佐山　それで必死に人工呼吸やって、「死ななくて良かった」と思って、2人で「このことは黙っていような」と。それで翌日、上野駅から巡業ですよ。で、ボクは耳齧られて包帯して、先輩は目が真っ赤になっちゃって（笑）。それで「お前ら、何なんだ、それは？」「いや、俺は何か出来物できちゃって」とか2人でごまかして、もうそっから仲良くなっちゃって（笑）。

——**ステキだぁ（笑）。**

佐山　でも、先輩とかにもそういうことすることって、ほとんどないですよ。よっぽどのことがないと絶対ない。誤解してほしくないのは、普段はボク絶対に大人しいですから。

——**それはもう誰もが知ってますよ（笑）。**

佐山　誰もが知ってると思うんですけど。それは確かにキレることもありますけど、キレたら駄目です。カーッとなったら負け！

——**それでもカーッとなっちゃう、と（笑）。**

佐山　それはわかってます。ボクはカーッとなってもカーッとなったフリしてるだけです。ほんとの闘いのときはどういうふうなのかって、いつも勉強してるだけですからね。そう





秘密の虎の穴！

はぁい。やっちゃいました。1回ね。果たし合い！ 道場の中でのね。

いうのをテストしているというか……、そういうことです……（小声）。（マネージャーに）これ原稿回してもらおうな、ちゃんと（笑）。

——話のまとめようがないですか（笑）。

佐山　原稿チェックして戻ってきたら、み〜んな赤印になってるだろうけど（笑）。やっぱり、変なイメージが残らないようにしてもらいたいですね。

——でも佐山さんのこういう話はステキですよ。もうドキドキしちゃいますから。

佐山　いえいえいえ、そうですかぁ？　タイガーマスクのイメージありますもんねえ。

——でも、その裏付けとして「キレたらすごい」っていうのがあるのはいいですよね。

マネージャー　ほんと、一緒に車に乗ってると、すぐキレちゃいますからねえ。

佐山　昔、弟子と一緒に車乗ってたらオバちゃんが割り込んできて、急ブレーキかけたことがあるんですよ。それで謝りもしないで行っちゃったからカチ〜ンときちゃって「なんだ、この野郎！」って叫んでフロントグラス叩いたら、ビシビシビシ〜ってヒビ入っちゃったんですよぉ（笑）。

——ガハハハハハハハハハ。

佐山　それでボクもビックリしちゃって、「あっちが悪いよねぇ」って弟子に言ったんですけど、返事もしてくれないんですよぉ（笑）。

——いやぁステキすぎますね、佐山さん（笑）。そういえば佐山さんって、けっこう子供とか嫌いじゃないですか？

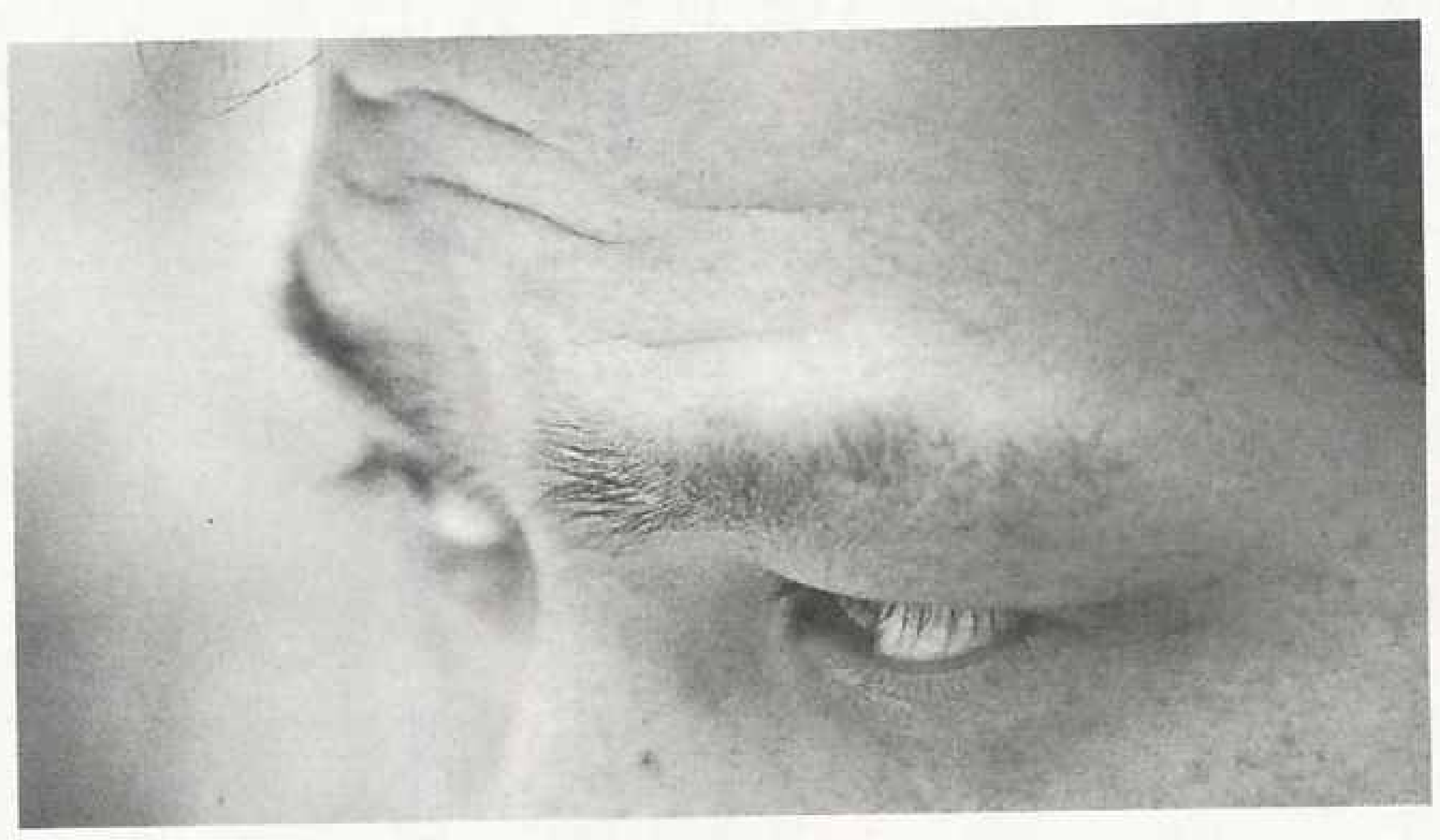
佐山　そ〜う？　そんなことないよ。

——でもタイガー時代のビデオとか見てると、チビっ子に囲まれて頭をバシバシ叩かれたりしてるから、これは子供嫌いになるだろうなあと思ってたんですけど。

佐山　あ〜れは頭くるよね！

——やっぱり（笑）。

佐山　ホント頭くるんだよ、バンバンバンバン叩かれるとさあ。「こんの野郎！」って。



一回、試合で入場するとき目ェ突かれたことあるの。それでカッチ〜ンときちゃって、振り向きざまにブン殴ってやってさあ。

——ガハハハハハ、子供相手にですか！

佐山　いや、リング入るときに花道でね。ガーッと突かれたから頭きて「こんの野郎！」ってバーッとやったら、セコンドに当たったの。仲野っているじゃん。あいつに当たっちゃった、アハハハハハ。

——仲野信市選手ですね（笑）。

佐山　振り向きざまにバチ〜ンってやったら、あいつがバタっと倒れちゃった（笑）。「ハッ、やばい！」と思って、テレビだったからそのまま行っちゃって。仲野に謝ろうと思ったんだけど、その後で聞いたらすごかったらしいよ。こうやって起き上がってさ、「……お前らが悪いんだ！」って暴れちゃって（笑）。

——いい話ですね、それはまた（笑）。そういえばこれも噂で聞いたんですけど、この間も『サムライ！』の収録中に喧嘩したらしいですね（笑）。

佐山　あの野郎！　ホントねえ。

——でっかい奴がジロジロ見てたからって。

佐山　うん。（再び実演）だってさあ、こうやって見てるんだよぉ！　ディレクターみたいな人と話してたら、後ろで体のデカい奴がさぁ。よせっていうの、俺そうやられたら駄目なんだから。「はいはいは〜い」って打ち合わせしていて、パッと見るとメンチ切ってたのに目を逸らしたりしてるの。何なのかなあと思って「うんうんうん」って打ち合わせして、またパッと見たらメンチ切ってるからさあ、「てめえ、この野郎！」って（笑）。

——とんでもないですねえ（笑）。

佐山　それでバーッと走って行ったら、そいつ土下座しようとしたの。それは止めさせてさ、そこまでやらしたらいけないと思って。

——相変わらず素敵ですね、佐山さんは（笑）。

佐山　**面白いねえ、ボクってねぇ（笑）。**

——その姿勢で行ってほしいですね。

佐山　いやいやいや、あと1年で40歳になったら、やんないですよぉ。もうそんなこと30代で卒業しま〜す。でも『サムライ！』はその前に、1時間前に来てくれって言ってきてね。それも**「来ていただけますか？」とかじゃなくて「来て下さい！」**っていうような喋り方をされたから**頭きちゃって。**それで車混んでたら「まだですか？」みたいな話されたから、また頭きちゃってて。そこでそいつが来たんですよ。でも、その話がなくても多分そいつのことやっちゃったと思うんですけど。

——ガハハハハハ、別に関係ないんですね。

佐山　すごいんですよ、身体デカい奴で。頭きたなあ、もうホント。

——しかし、そんな性格じゃ前田さんと上手くやっていけるわけもないですよねえ（笑）。

佐山　違〜〜〜〜う、そんなことないよぉ（笑）。そんなのレスラーみんなそうじゃないですか。俺、アンドレ好きだもん。猪木さんだって身体デカいじゃないですか。

——でも前田さんは身体がデカくて、さらにゴンタ顔ですからね。

佐山　いやいやいや、そんな人いっぱいいるじゃないですか（笑）。……前田、嫌いじゃないよぉ、別にそんなに。ボクはホントに常識人ですから。ただ、非常識なことをやられると、やっぱり誰でもキレちゃいますよねえ。それがちょっと早いだけの話で。

——ちょっと早すぎるんですけどね（笑）。

佐山　『サムライ！』では、ホントにストレートパンチかまそうと思ってたんですから（笑）。「すいませ〜ん！」とか言ってるから頭きちゃって**『殺すぞ、この野郎！』**ってパーンと脇締めて一歩踏み込んだんですから（笑）。そいつがガーッと下がって土下座しようとするから、「ああ、もういい」って、そんな感じですよ。ホント、そのくらい頭にきたの。

——ボクも今後は気を付けますよ（笑）。

佐山　いやいや、あなたはそんな顔してないですよ。身体大きくもないですから（笑）。

——今後もその調子で頑張って下さい（笑）。

佐山　いやいや、もうそろそろ卒業しないと。変なこと書かないでね。原稿チェックして、全部違うこと書いちゃおうかなぁ（笑）。山口さんによ〜くお願いしておこ〜っと。

——ボクも常識のわかる人間ですから、佐山さんに殴られない程度にしておきます（笑）。

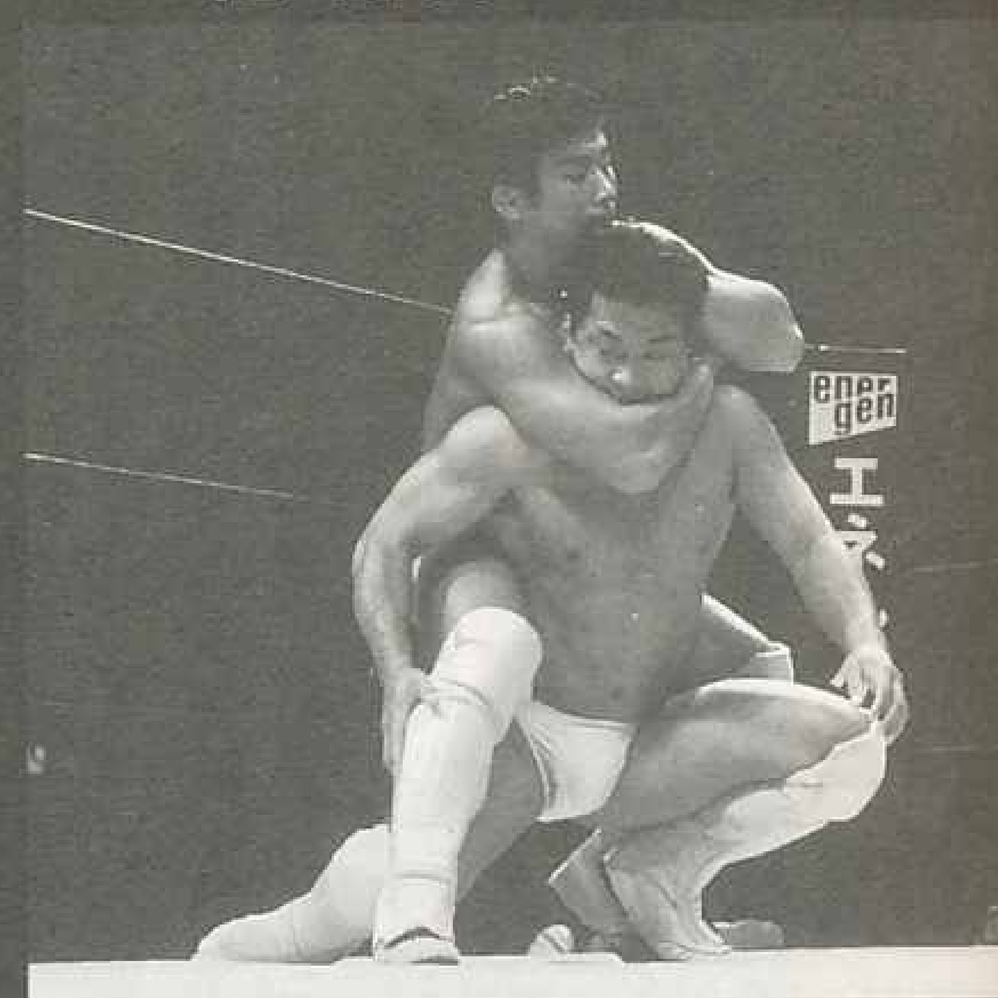
佐山　**ね！**

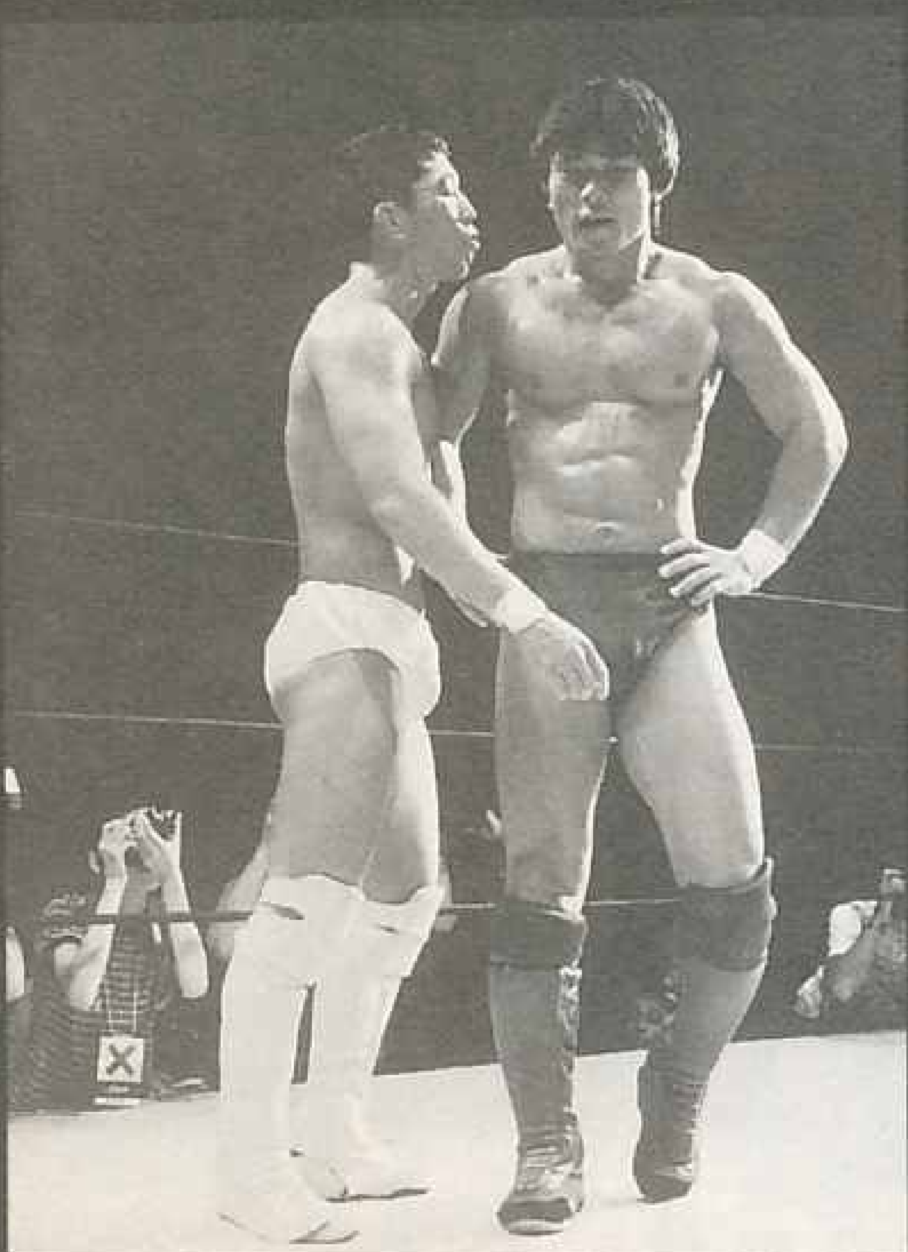
Uから全日へ上がる怪物!!

P パンクラスとは何だ!



構成／Show氏
写真／乾 晋也



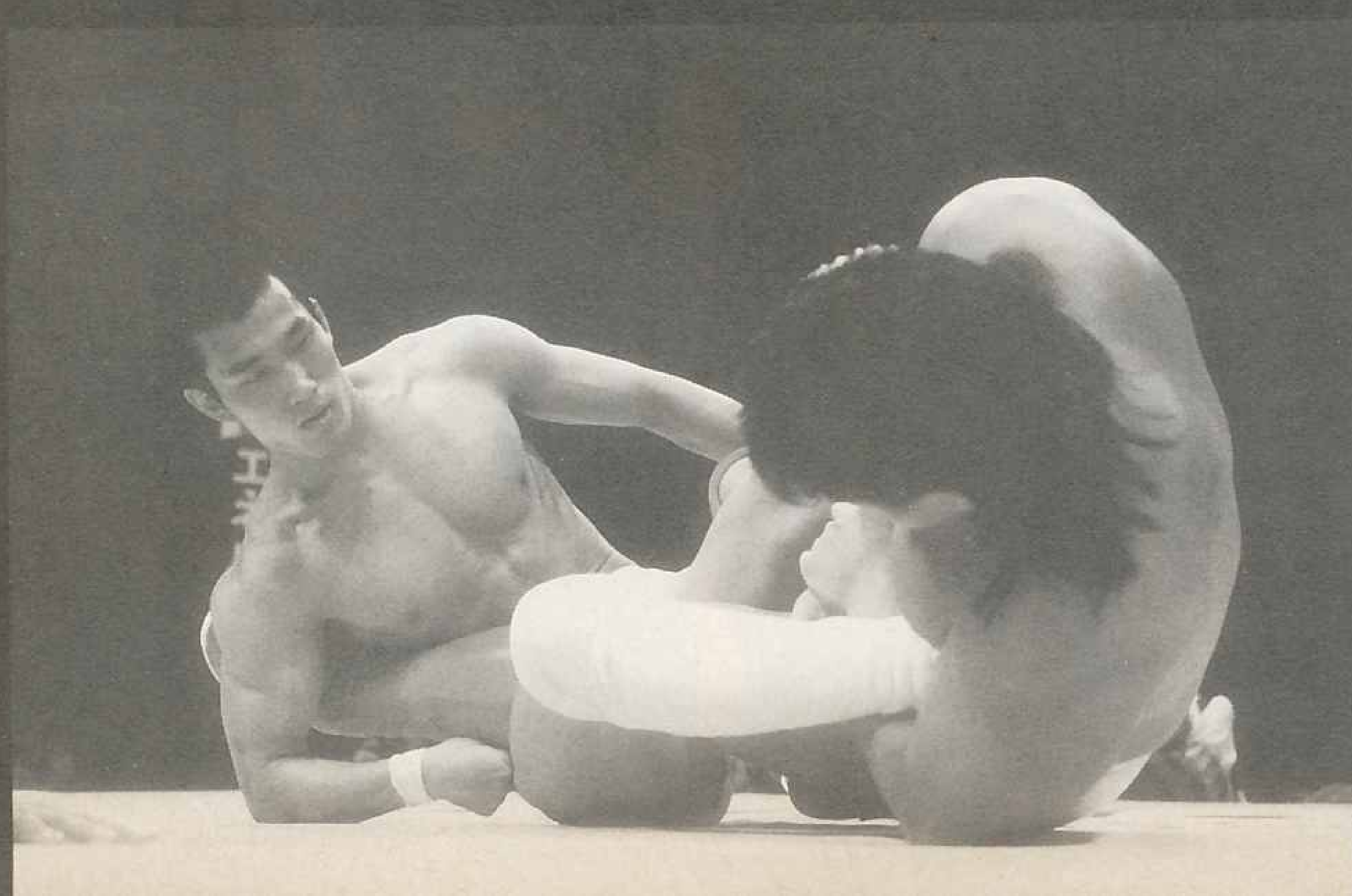


PANCRASE
HYBRID WRESTLING

OPENING FILE

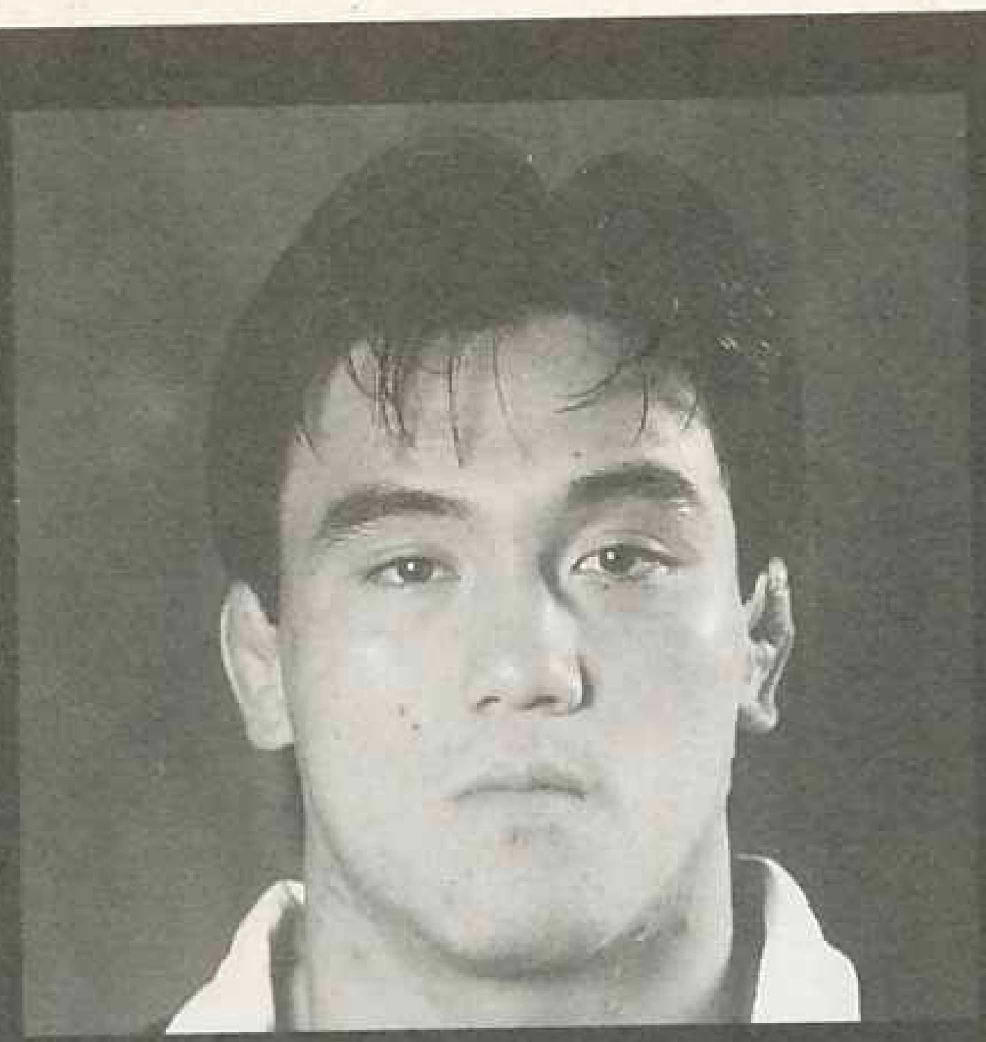
若手BAKA一代

RADICALニュース！ 髙橋義生がアルティメット大会で日本人初勝利をもたらした。パンクラス……、今、最も注目しなくてはいけない団体である。そして、そのパンクラスを背負うヤングラスたちこそが、これからのプロレス界を復興していくのだ！ ガオー！



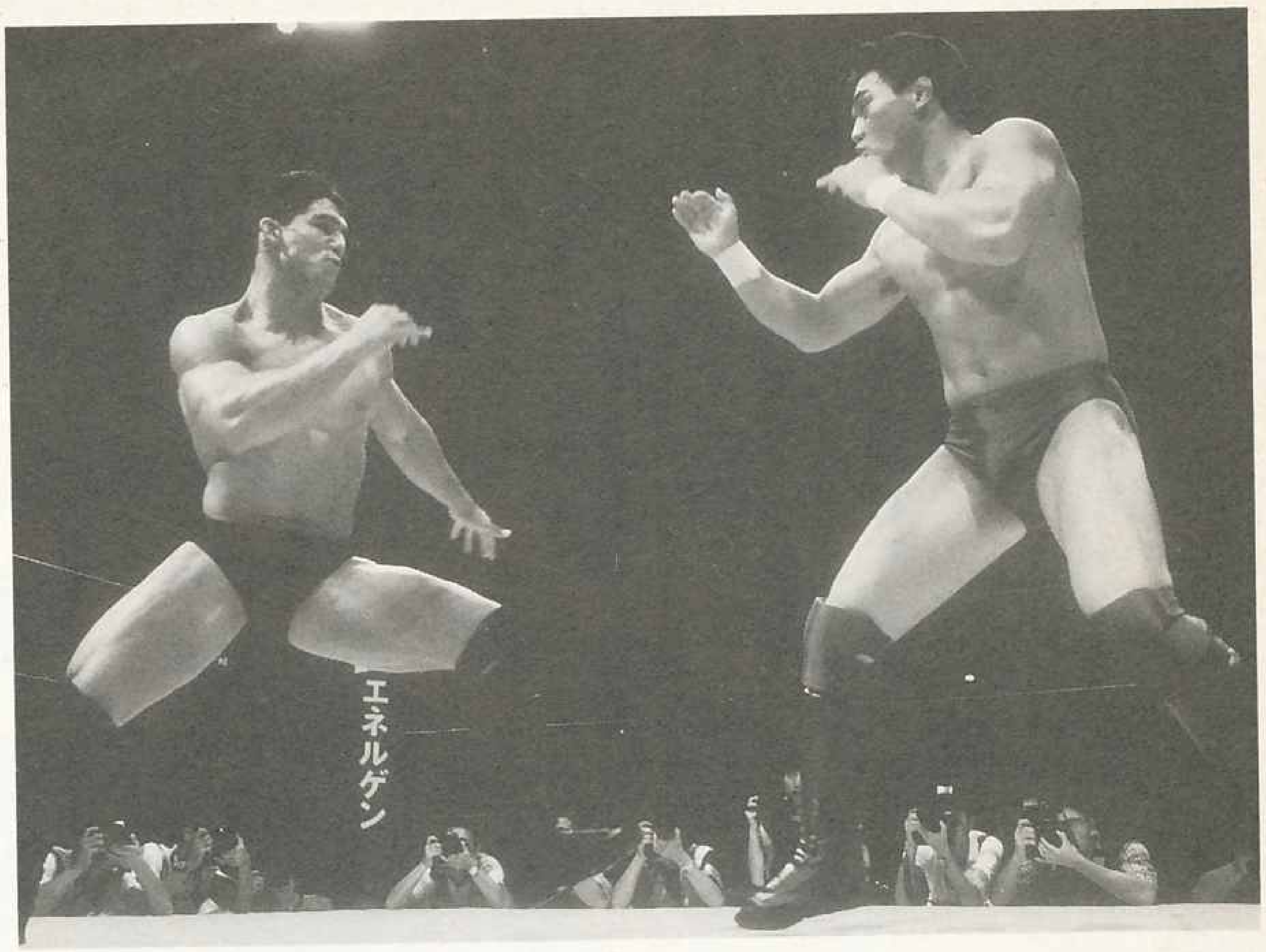






近藤 有己

こんどう・ゆうき●1975年7月17日生まれ。新潟県長岡市出身。A型。身長 180センチ、体重90キロ。第2回入門テストに合格。昨年1月28日、横浜文化体育館での伊藤崇文戦でデビュー（2分21秒、レフェリーストップで近藤の勝利）。



PANCRASE HYBRID WRESTLING

Yuki Kondo

デビュー1年にして、パンクラスのランキング1位にまで成り上がった男、それが近藤有己である。

と、そこまで書いたところで、ふと「なんで近藤が注目され出したのか？」を考えてみた。

答えは明白だ。

昨年、近藤が注目されたのは、何と言っても6月に福岡で行なわれた鈴木みのる戦から。鈴木の不調をよそに、判定とはいえ、勝利を手に入れた瞬間に近藤の成り上がりははじまった、と言える（この時、わずかデビュー5カ月）。

実は、4月には後楽園ホールで行なわれる予定だった船木誠勝との一戦に、船木の欠場から不戦勝まで手にしており、船木、鈴木の両エースから勝利を上げているのだ。これは日本人選手としては、山田学と近藤だけ。しかも前述通り「デビューして1年」というのだから、いかに近藤が〝驚異の新人〟かがわかるというもの。

なおかつ、その後には難敵セーム・シュルトを撃破し、『第2回ネオブラッド・トーナメント』にまで優勝。そんなこんなで勝ち続けた近藤は、10月のジェイソン・デルーシア戦での初黒星まで、いつのまにか8連勝（1引き分けを挟む）というパンクラスの連勝記録まで樹立してしまったのだ。

そういえば、昨年、連勝街道を驀進中の近藤がこんなことを言っていたのを思い出す。

「今度、リング上でジャーマンを出したいですね。しっかりした効果的な技だと思うんですよ。失敗したらカッコ悪いですけどね。そういえばこの間、スパーリングでドラゴン・スクリューが決まったんですよ」

パンクラスのマットは他団体のマットよりも堅いと言われているので、もしもジャーマンが決まったら痛いだろうな、と思うのだが、ぜひとも今年中には披露を願う。

リング上の話はそれくらいにして、一度リングを離れれば、根はまだまだ純朴な若者。今年に入って、念願の「六本木」にまで足を伸ばすことに成功した、という怪情報まで入っていることから、今後は今以上に目が離せそうもないであろう。

若さとは、やはりどこまでもすばらしいものである。

また、最近の変化としては、髪の毛を伸ばしはじめた、とのこと。会う度に少しずつ後ろ髪が長くなっている姿を見かけるが、果たして、憧れのジャッキー・チェンのような髪形にしたいのか、はたまた船木のようにしたいのかは定かではない。まあ、どんな髪形になるにせよ、これまでと変わらぬ快進撃だけは続けてほしい――。

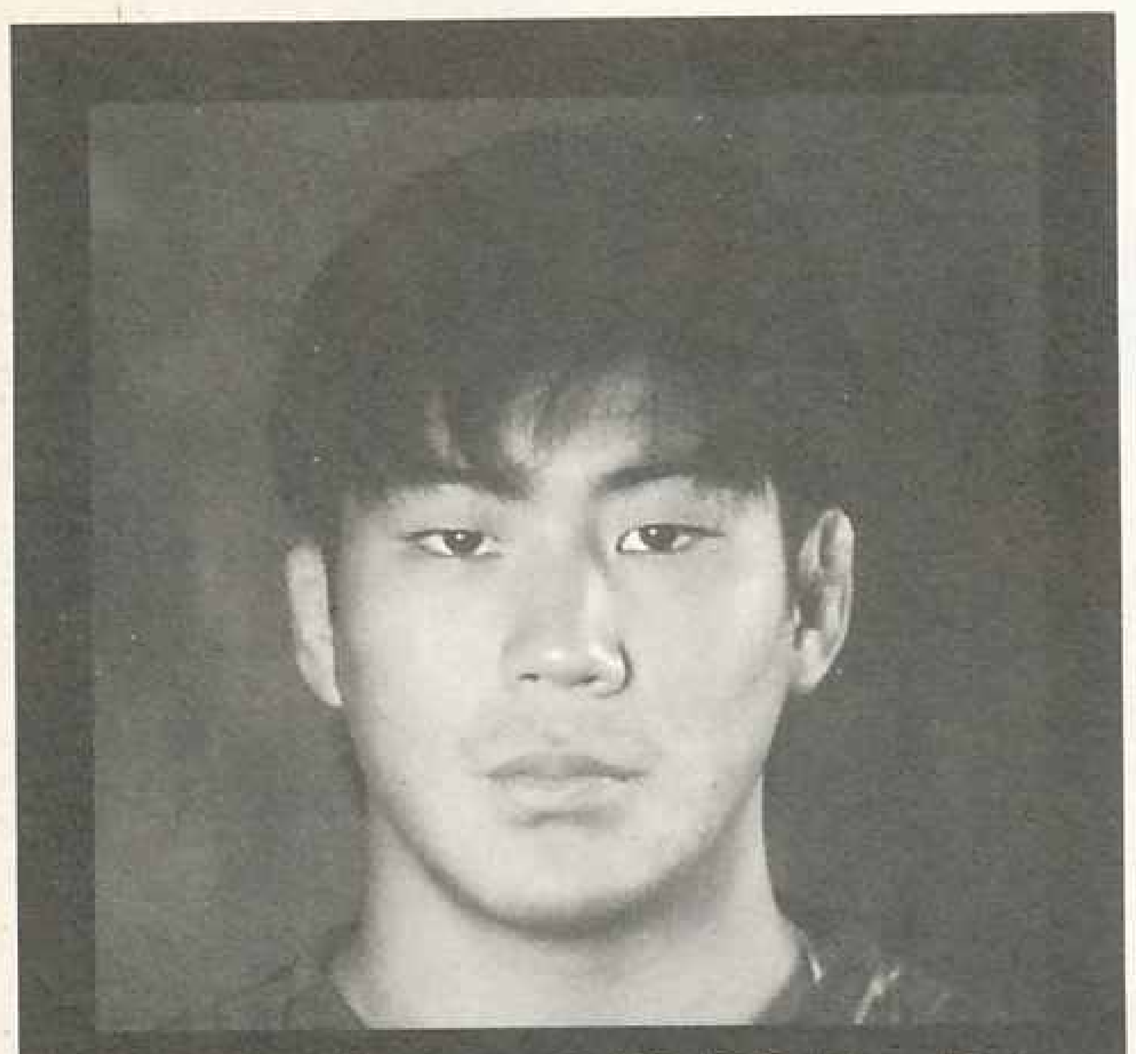
それが近藤自身、ひいてはパンクラスのためになるのだから……。

ところで、昨年の11月に神戸で、近藤が船木との一戦に敗れた直後のリング上で「一生、船木さんについていきます」と耳打ちしたらしいが、そんなことを軽々しく言い放ち、後でとんでもない目にあうんじゃないかと、今からとっても期待し、早くも胸躍っていることをつけ加えておこう。

Uから全日へ上がる怪物!!

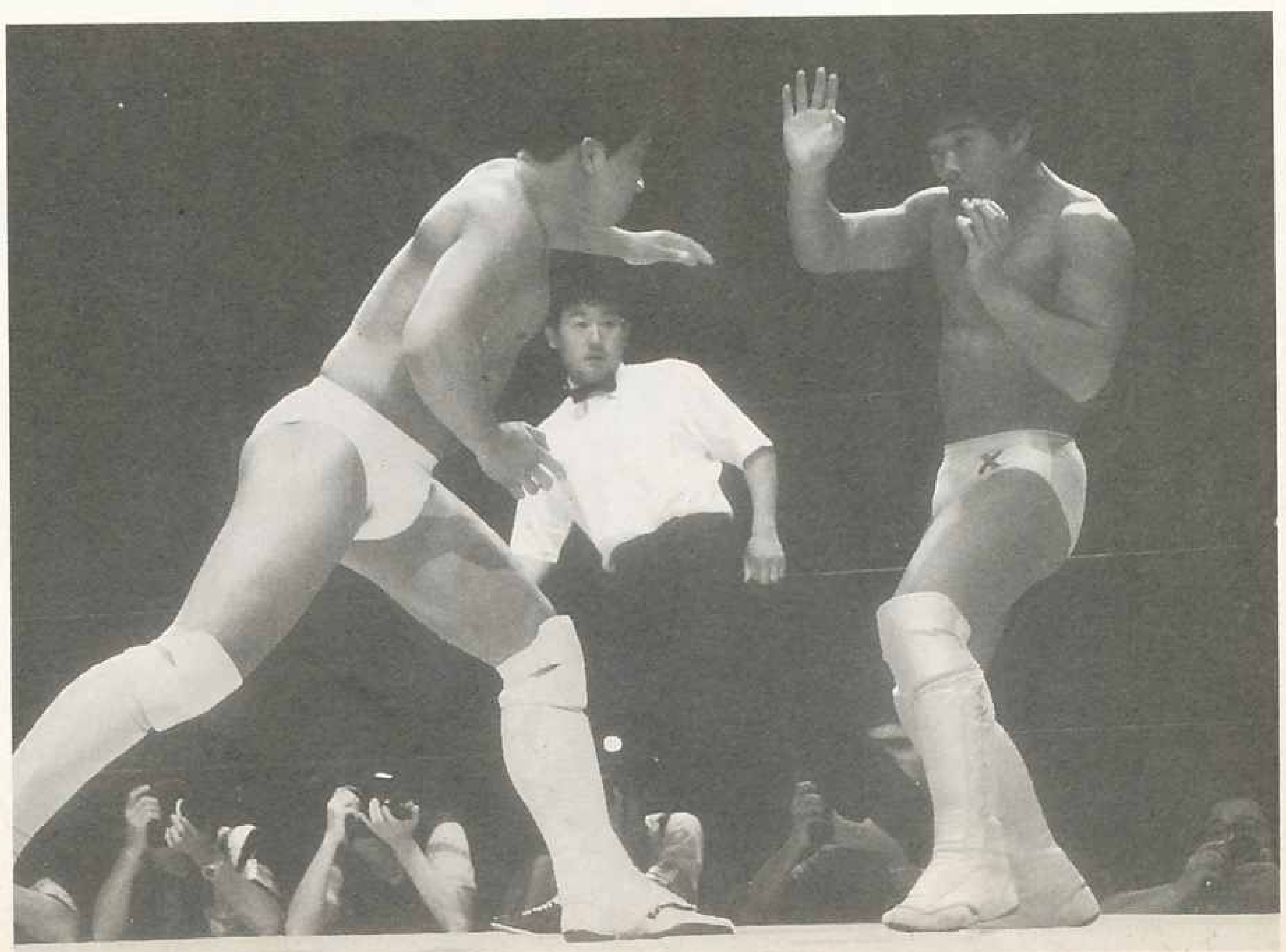
Kiuma Kunioku

現役選手生活、約1年。
プロレス業界歴、約5年。
ところが、パンクラスの全選手中、最年少（20歳と4カ月弱）。
そんなアンバランスな経歴を持つのが國奥麒樹真である。
なにしろ、藤原組時代からの練習生で、パンクラスの旗揚げメンバーにも入っており、旗揚げ記者会見にも、ちゃんと写っているのだから驚きである。
さて、この國奥の魅力もなかなかのものがある。
「去年の重大ニュースは？」と聞くと、こう答えたのだ。
「そうですねえ。アメリカがイラクを攻撃したことですね」
確かに、重大ニュースではあったけれど、すんなりそう答えたのは意外というか、単純に驚いた。そして、その後がまた國奥らしい。
「どう思いました？」
そう聞き返してくるのだ。この「どう思いました？」という攻撃が一番多いのが國奥の特徴というか、魅力のひとつでもある。
昨年、『週刊ファイト』のターザン山本の『往生際日記』にも書かれていたが、「前から聞きたかったことがあるんですけど……」と筆者に対して前置きをした後に、「（全日本プロレスの）パトリオットの正体って誰ですか？」と質問してきたのが國奥だった。
そんな國奥だから、生き馬の目を抜くようなパンクラスのリング上が、一見すると非常に不釣合に映るのだが、ランキング1位という実績にまで駆け登るほどの術を、若干1年の選手生活の中だけでなく、キャリア約5年の業界経験で、ちゃんと身につけているのである。
恐るべし、國奥麒樹真！　知らぬ間にしてやられた、という表現が最もしっくりいくのではないかと筆者は思う。
そう考えると、昨年12月の日本武道館におけるガイ・メッツァーとのランキング1位の座をかけた一戦は、非常に興味深いものがあった。
結果は20分時間切れ引き分けの末、判定で國奥に凱歌が上がったが、それよりも何よりも印象的だったのは、國奥の入場時にレッド・ツェッペリンの『移民の歌』が館内に鳴り響いたこと。そう、故ブルーザー・ブロディの入場テーマ曲である。
思わず我を忘れて〝ブロディ・シャウト〟をしてしまいたくなるくらい、なぜか嬉しくなってしまった。
そして、そのテーマ曲に乗って、ワイルド系のブロディではなく、ピンク色のタイツとシューズ姿のいかにも「小兵」と言った感じの國奥が、颯爽と入ってきたのだから、そのセンスというかギャップは抜群だった。
意図的にそうなったのかは定かではない。ただ、あの日の観客の心には確実に「國奥麒樹真」の名前が刻まれたことだけは間違いない。おそらく、無意識の感覚が備わっているのだろう。
やはり國奥恐るべし、である。



國奥 麒樹真

くにおく・きうま●1976年11月12日生まれ。大阪府大阪市出身。A型。身長 174センチ、体重80キロ。藤原組に入門。約4年の練習生期間を経て、昨年1月28日、横浜文化体育館の渋谷修身戦でデビュー（10分時間切れの末、判定により引き分け）。







渋谷修身

しぶや・おさみ●1976年1月7日生まれ。神奈川県三浦市出身。B型。身長185センチ、体重92キロ。第1回入門テストに合格。デビュー戦は一昨年3月10日、横浜文化体育館でのスコット・ビーザック戦（10分時間切れの末、判定で渋谷の敗退）。

Osami Shibuya

　さあ、待ちに待った渋谷修身の番だ。こう書き出すと、何かありそうだが、別に特筆すべきことはない。強いて上げれば、渋谷に話しかけると、ニタニタッと、謎の含み笑いで返されることくらい。どう考えても、笑ってごまかしているような感じがするのだが、本人は「ごまかしてませんよ」と、また独特の笑みを浮かべる。きっとニッコリ笑って人を切るタイプかもしれない。

　船木誠勝の他流試合対策用の選手として、今回の高橋義生のアルティメット大会出場に際しても、必ず道場のリング上には渋谷の姿が見受けられ、連日、両腕にハイブリッド・グローブを装着する姿を、筆者は何度も目撃している。本人自身も昨年、米国のアルティメット大会に船木に同伴し、ウエイン・シャムロックのセコンドについたことが、何らかの衝撃を与えたようでもある。

　しかしその一方で、現在ランキング入りしながら、リング上では馬乗りになっても、自分から相手の顔面を攻撃する姿が、ほとんど見られない、という特異な一面も持っている。

　実は『紙のプロレスRADICAL』創刊号の船木インタビュー後の雑談の中で、「パンクラスのトンパチは誰ですか？」と山口昇という人が聞いたところ、「渋谷ですね」と、船木は答えた。ただ、実際に渋谷を観察していくと、かつて言われた「トンパチ」とは質が違うのがわかる。その件に関して船木は……。

「ええ、違うんですよ（笑）。『トンパチ』が流行らない時代になっちゃったんですね。ある意味で、きっと平和な時代にいると、『トンパチ』が出てくるんじゃないですか。でも平和じゃない時代に出てきたら、ハッキリ言って、邪魔でしかない。今、パンクラスは平和じゃない。いつ潰れてもおかしくない、そういう感覚ですから。昔のタイプの『トンパチ』は邪魔でしかないですよね」

　渋谷の名誉のために言っておくが、前述通り渋谷は旧タイプではない。新旧の違いはやっぱり謎だが……。

　余談だが、船木と渋谷の両者共にそっくりなのが、裸体になった時の上半身の後ろ姿。最近は見間違うくらい筋肉のつき方が酷似してきた。

　それともうひとつ、渋谷は大の読売巨人軍ファンでもある。一度、この種の話題に入ると、なかなか許してくれないほど超がつくほどの熱狂的。プレゼントはソレ系の物がよいのでは……と明記しておこう。

　と、そんな渋谷だが、その甘いマスクの下には、実はまだまだ多くの隠された謎が、山のように存在しているのに違いない。それをこれから探求していくのが楽しみなのだ。

　渋谷修身のますますの健闘を心から祈る。

　追伸。

　一時期、筆者を見る度に言っていた「太ったんじゃないですか？」は、悔しいが、非常に的を得ている指摘である。観察能力も非常に優れていることをつけ加えておきたい。

Uから全日へ上がる怪物!!

Takafumi Ito

「パンクラスの生え抜き第一号選手」として伊藤崇文がデビューしたのは、一昨年の1月、横浜文化体育館でのことだった。デビュー直後は「天才」とも呼ばれ、判定ながら先輩の柳澤龍志を下し、『第1回ネオ・ブラッド・トーナメント』に優勝するなど、なかなかの活躍を見せた伊藤。

ところがその後、勝利には恵まれず、昨年は引き分けはあったものの、ついに勝利の女神は伊藤に微笑むことなく、年を越した。リング下に降りた伊藤が、500㎖のペットボトルを振り回すと、中に入った水が当然のように観客に飛び散ったが、そんな狙った演出もなかなか痛快だった。

つまり結果として、この2年の間に〝闘いの裏表〟らしからぬ、表裏一体の実績を持つことになってしまったのが伊藤なのである。

本人は連敗中、「そのくらい起伏が激しい方が僕らしい」ニュアンスのコメントを残していたが、今年1月の後楽園ホールでの試合で、一昨年7月以来の勝利を得た後に、見るからに嬉しそうな、満面の笑みを浮かべていたのが記憶に新しい。

読者の興味を損なわせるような堅苦しい文章を羅列してしまったことを詫びると共に、伊藤は堅苦しさとは無縁の選手ということを改めて書き記したい。こんな書き方しかできない自分が情けなく、涙が頬を伝う。

なぜなら伊藤は、一端リング上から離れると、地元大阪で培われたのか、お笑いのセンスには一目置くものがあり、サービス精神旺盛で、カメラを向ければポーズを忘れず、女性が通れば声をかけるのを忘れず。

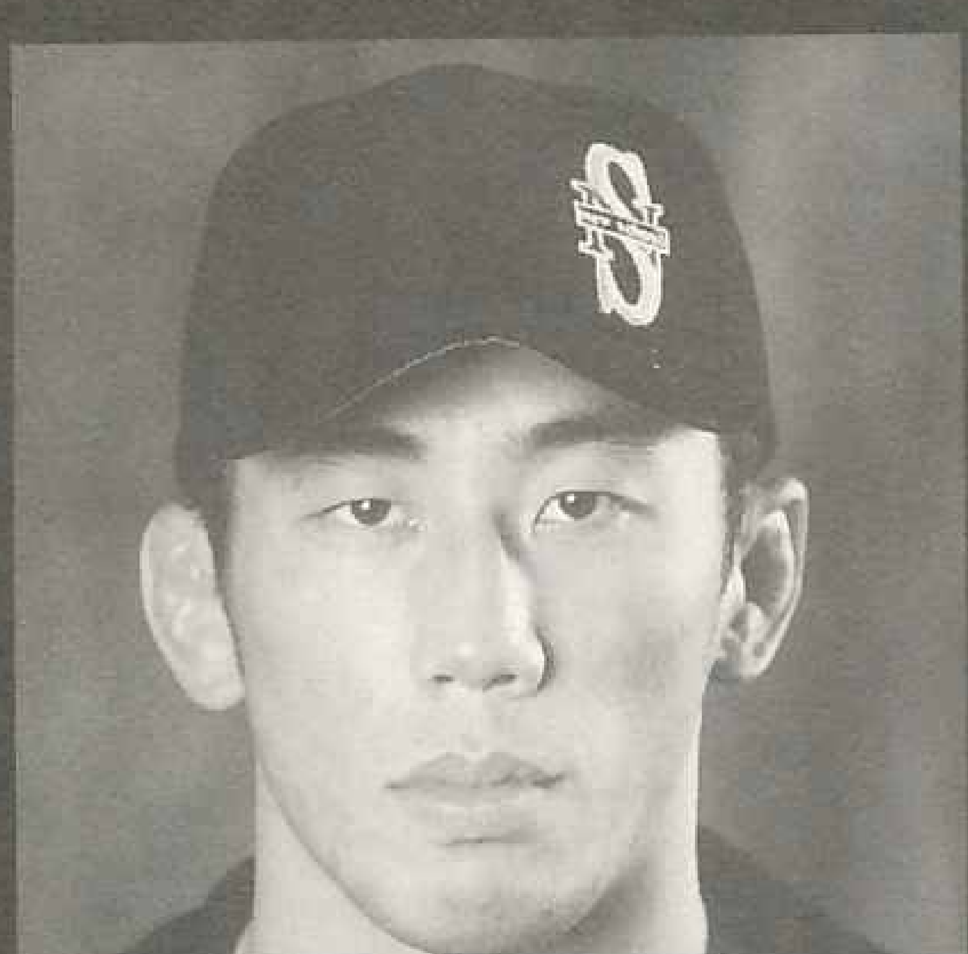
とにかく、良い悪いをひっくるめて「やかましい」（またはこやつも沈黙恐怖症に侵されているのか？）の一言。

ただ、それはある意味で伊藤が、パンクラスのムードメーカー的な存在の証しとも言えるのだが……。

その一方で、あの坂本竜馬に関しても詳しく、関連書籍の読書が趣味という、まったく意外な一面を持つ伊藤。パンクラスの全選手中、唯一、筆者に対して年賀状をくれたのが伊藤だった（筆者のパンクラスへの愛は一方通行であるということなのか？）。しかも、筆ペンでなかなかの達筆だったのも、ある意味ではキャラクターのギャップを感じさせてくれた。

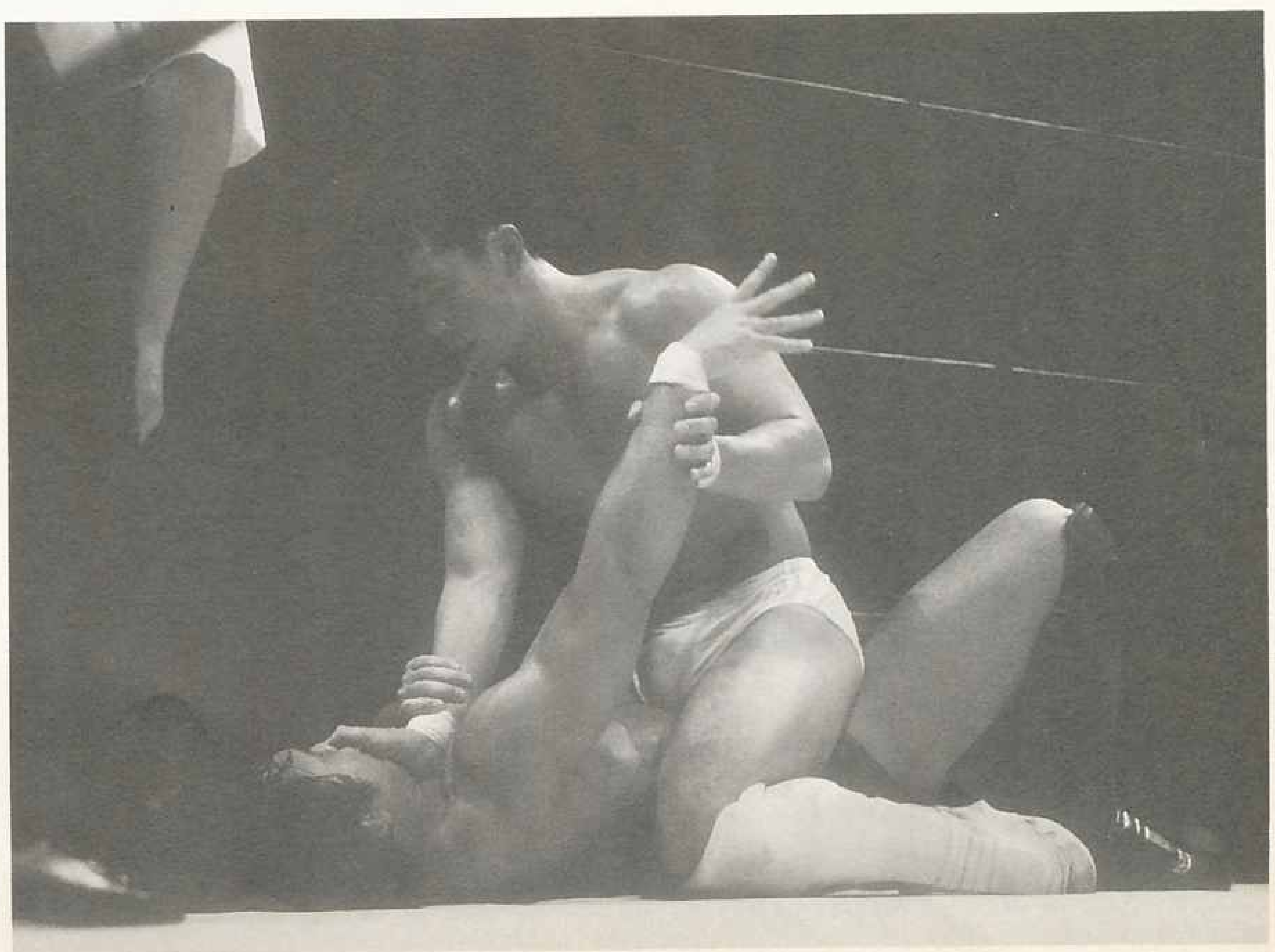
さて、そんな伊藤の新骨頂は「体の小ささをハンディとしない、スピード感あふれるレスリング」らしいが、決してそうは言いたくないのに、この「至極ありがちな表現」でしか伝えられないというか、結果として、そのフレーズが当てはまってしまうのが、現在の伊藤の課題かもしれない……とおせっかいながらも思ってしまう筆者だった。

せっかくリング入退場時に、コスチュームと同色の帽子を、後ろ向きにかぶるのがトレードマーク化してきたのだから、スタイルはどうあれ、もっともっと普段の面白さをノビノビとリング上に出せれば……とまたもやおせっかいながら切に願うのである。



伊藤崇文

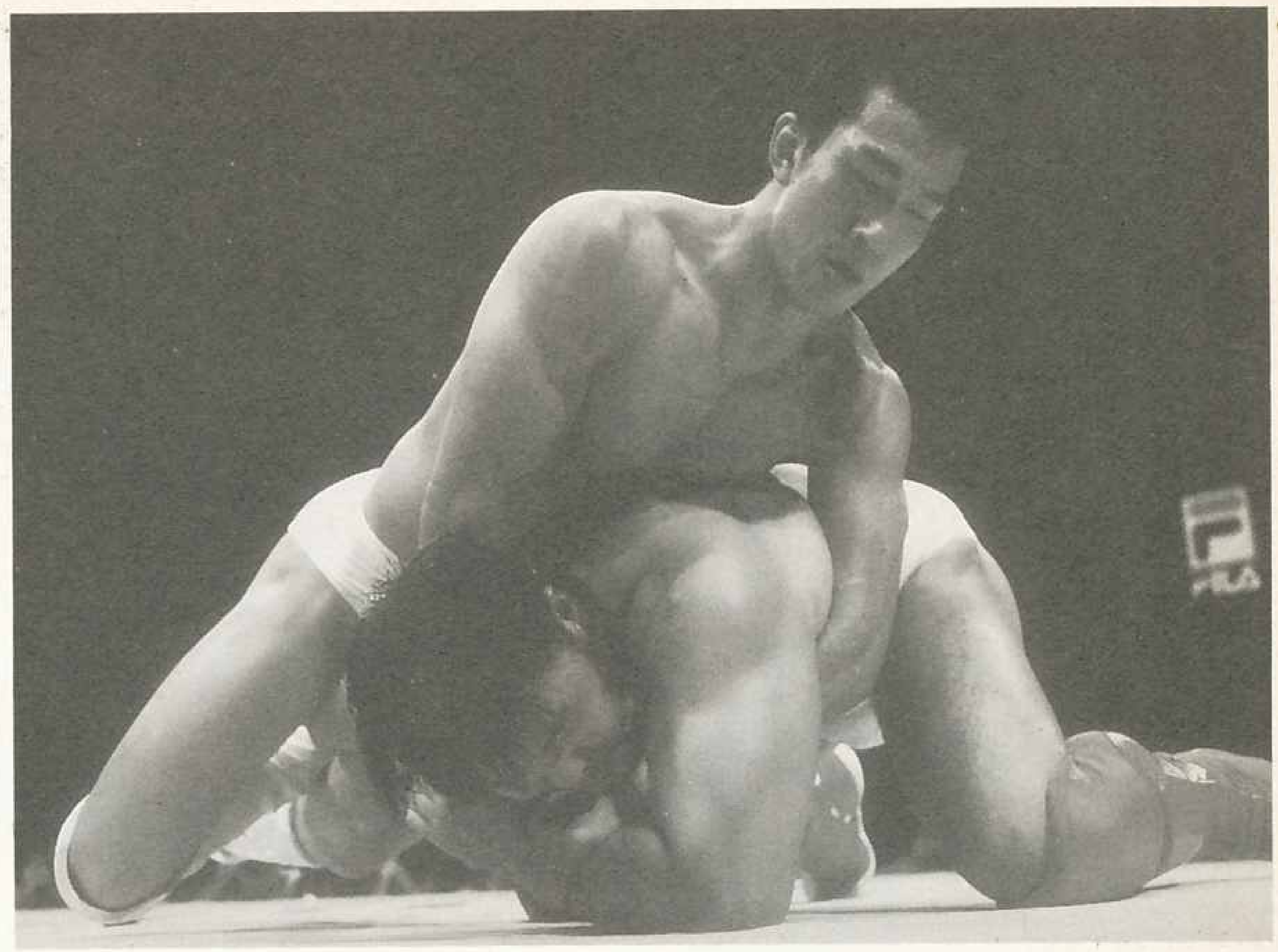
いとう・たかふみ●1972年6月21日生まれ。大阪府大阪市出身。B型。身長176センチ、体重78キロ。第2回入門テスト合格。デビュー戦は一昨年1月26日、愛知県武道館におけるグレゴリー・スミット戦（8分47秒、レッグロックで伊藤の勝利）。





長谷川 悟史

はせがわ・さとし●1976年6月19日生まれ。神奈川県横須賀市出身。O型。身長 176センチ、体重76キロ。第4回入門テストに合格。デビュー戦は昨年7月22日、後楽園ホールにおける山宮恵一郎戦（10分時間切れの末、判定で長谷川の敗退）。



長谷川悟史と言われて、筆者が印象深いのは、昨年11月9日に神戸で行なわれた國奥麒樹真戦。國奥に対して、独特の構えから前へ前へと向かっていく長谷川の姿に、なぜか共感を覚えてしまった。

試合後、ある人から「あの闘い方は関心しないね」と、ドランカーを懸念する旨の指摘を筆者は受け、「両手を上げて賛成」というわけにいかないパンクラスの厳しさを知ったのだが、怖がらずに前へ前へ出ていく姿勢は、どうしても捨て難いものがあった。

現在、日本人選手の中で、最も細身の身体をしている長谷川。衣服を纏った、見た目だけで判断すれば、その辺を歩いている一般人と変わらないようだが、これが実は「筋肉」の言葉通り「筋」と「肉」だけを感じさせる肉体をしているのだから驚きを隠せない。裏を返せば、それだけ芯の詰まった選手とも言えるのが、現段階で長谷川を語る上での重要なキーポイントである。

と、ここまで書いて、この後どう書けばいいのか、正直に言うと迷っている。なぜかと言えば、パンクラスにおける長谷川の明確なキャラクターと位置付けが、まだまだまったく浮き彫りにされていないからだ。

ただ、一見すると、パンクラスの「おとぼけ君」的な存在でありながら、実を言うと筆者は長谷川に対して、密かに最重要チェックをマーキングしていることを明記しておく。

その理由を現段階で言語化するのは、かなり難解な作業となってしまうが、そこをあえて言うとすれば、長谷川にはパンクラスの他の選手には決してない〝奇妙な面白さ〟が潜んでいるように思えてならない。ムリヤリに分類すると、渋谷修身系に入るような……。

何だか抽象的な話が続いた。

ここで長谷川に関する具体例を紹介する。

実は筆者は、昨年6月、『プロレス謎読本』（別冊宝島274号）の取材で、パンクラスの道場に一日泊めてもらったことがある。

その際にリング上をベッド代わりにさせてもらい、その証拠写真を、当時まだ練習生だった長谷川に頼んで、カメラのシャッターを切ってもらった、という恩がある。しかも、実際に掲載した写真には、撮影者の名前を入れてもらえるように頼んだので、ちゃんとその書籍には刻まれているのだ。

つまり長谷川は、大袈裟に言うならば、「選手」としてデビューする以前に「カメラマン」として、一瞬だが世に出ているのである。　……長谷川の具体例と表記しておきながら、筆者の与太話になってしまい大変申し訳ない。

ただ結果的にそうなっただけとはいえ、世の中、いったい何がどうなるかはわからない。とにもかくにも、長谷川の内側に潜む〝奇妙な面白さ〟が全貌を現わす日を、今から心待ちにしているのだ……。

Satoshi Hasegawa

Uから全日へ上がる怪物!!

今回のアルティメット大会に出場した、髙橋義生のスパーリングパートナー兼セコンドとして、米国まで同伴したのが山宮恵一郎だった。

実は、髙橋が日本を経つ前の道場での練習に、筆者は何度も立ち会わせてもらっているのだが、その痛さが今にも見ているこちらに直撃してくるようなスパーリング風景に、何度も目を細めてしまった。

ガッツンガッツン!!

擬音で現すなら、こんな表記になるだろうか……。

「大丈夫です」。

山宮はあっさりとそう言っていたが、当然、山宮の顔面は原形をとどめていないのだから、そんなはずがあるわけがない。

「お前、(ヴァリッジ・)イズマイウのビデオ見たのかよ!!」と、本番を前にした髙橋のイライラ感の矛先を、最前線で受け止めなければならなかったのが、この山宮ではなかったかと思う。

本項の〆切りの段階では、髙橋のアルティメット出場の結果がどうなったのかを記すことができないので、何とも言えないが、どんな結果が出たにせよ、米国から帰国した山宮が大きく何かを感じて帰って来たのは間違いがないだろう。おそらく、人生における最大級の〝何か〟を感じたはずである。

というのも、本場のアルティメット大会とは、オクタゴンに入った選手はもちろん、あの空間を経験した者特有の感性が、様々な角度から刺激されるからなのだ。

どういうことかと言うと、〝何でもあり〟という危険度の高い闘いが、日本人よりも数倍〝何でもあり〟度の高い米国人たちの中で行なわれるからである。

簡単に言うならば、主役はリング(オクタゴン)上のファイターよりも、実は観客だ、ということ。少なくとも、筆者はリング上と同等、もしくはそれ以上にあの空間にいる〝狂った観客〟を見るために、アルティメット大会に足を運んだ。

ただ、やはり髙橋の出場がなければ、それさえしたいとは思わないのだから、髙橋の出場ありき、のスタンスは変わらないのだが……。

本題から逸れたが、そういった意味においても、あの空間を「一観客」としてではなく、髙橋のスパーリングパートナー兼セコンドとして経験した山宮には、やはり目が離せないのである。

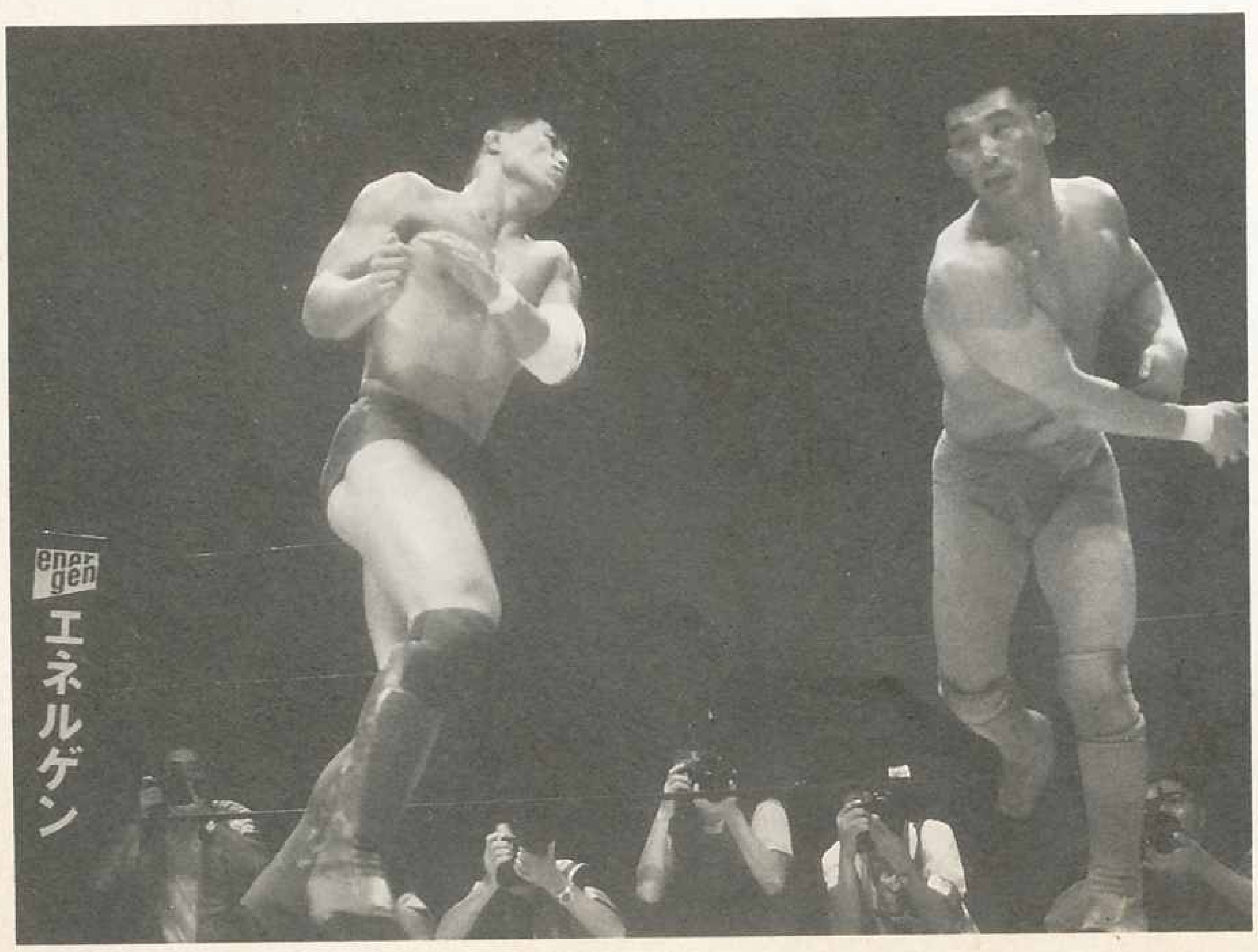
さて、その山宮だが、パンクラスでの練習生生活を、わずか9カ月という最短でクリア。國奥麒樹真のように約4年も練習生を経験し、満を持してデビューした者もいれば、山宮のように実戦の中で育てる場合もあり、船木理論の多様性を垣間見ることができる。

とはいえ、前述通り今年の山宮は、ひと味違うことを覚えておく必要があるのは間違いがない……。

アルティメットの〝新生〟山宮に注目すべし!!

PANCRASE HYBRID WRESTLING

Keiichiro Yamamiya





山宮恵一郎

やまみや・けいいちろう●1972年7月12日生まれ。神奈川県茅ヶ崎市出身。B型。身長 178センチ、体重87キロ。第5回入門テストに合格。デビュー戦は昨年7月22日、後楽園ホールにおける長谷川悟史戦(10分時間切れの末、判定で山宮の勝利)。

船木誠勝が語る「若手とはなにか？」

——船木さん、若手って何ですか？

船木　パンクラスには本当に年齢が若い「若手」もいるし、キャリアが若い「若手」もいるんですよ。伊藤とか山宮は結構、年齢はいってるけど、デビューしてキャリアが少ないから「若手」っていう。伊藤はデビューして2年経ってるんですから、中堅でもいいんですけど、「若手」っていうイメージありますよね。

——じゃあ、船木さんは各選手をどう分析してるんですか？

船木　伊藤は勝っても負けても、「伊藤崇文」っていうキャラクターでいける選手だと思いますね。勝っても負けても絵になるんですよ。で、長谷川、山宮っていうのは、まだわかんないです。全然、まだ色がついてないです。あとは、國奥も勝っても負けても絵になるタイプですよね。「國奥麒樹真」っていう存在感でお客さんの興味をひける。

——では、渋谷選手と近藤選手は？

船木　逆に渋谷と近藤っていうのは、ちょっとタイプは違うんですけども、同じような場所にいるんですよね。即戦力としてちゃんと活躍できるっていう。だから負けたらいけないんですよ。実力で強さを見せて、実力で上に上がっていかないといけない選手なんです。

——実力で上がっていかないといけない選手ですか……。

船木　今のでわかると思うんですけど、体の小さい選手は、存在だけで絵になるんです。「負けても小さいからしかたない」って見られるじゃないですか。逆に大きい選手は勝たないと貧弱に見えちゃうんですよね。柳澤（龍志）なんかそうじゃないですか。勝って当たり前。負けたら「なんで負けたの？」って言われますからね。

ハッキリ言って、体格的には有利ですけど、人からそういう風に見られるっていう意味では不利ですよね。

——体格的には有利でも、人から見られるという意味では不利。過去の選手でもそうですよね。

船木　ええ。ジャンボ鶴田でも、前田日明もそういう記憶はありましたからね。負けてる時はすごくバカにされるんですよ。勝ち続けて、実力があるってわかってくると、頼もしい、って見られますよね。それは今までプロレスの歴史にあった宿命だと思いますね。ヤマハ・ブラザーズとか獣神ライガーって、勝っても負けても納得するじゃないですか。だけど、デカイ選手は負けるとすごい弱く見えちゃう。しかたないですね。

——近藤氏とか國奥氏の年齢の時に、船木さんは「ＵＷＦに行きます」と言って、話題になったんですけど、同じ年齢と考えると、どっちがいいというか、幸せっていうと変ですけど、その辺はどうなんでしょうか？

船木　やっぱり俺の方が幸せだったでしょうね。まだ枝分かれできる時代だったし、分かれる要素もあったんでしょうね。それが今はない。選択の要素がないですから。パンクラスがなくなったとしたら、他にどこに行きます？　妥協して他団体にいく、とかしかないと思うんですよ。それを考えると、パンクラスは最後の砦だと思うんですよね。

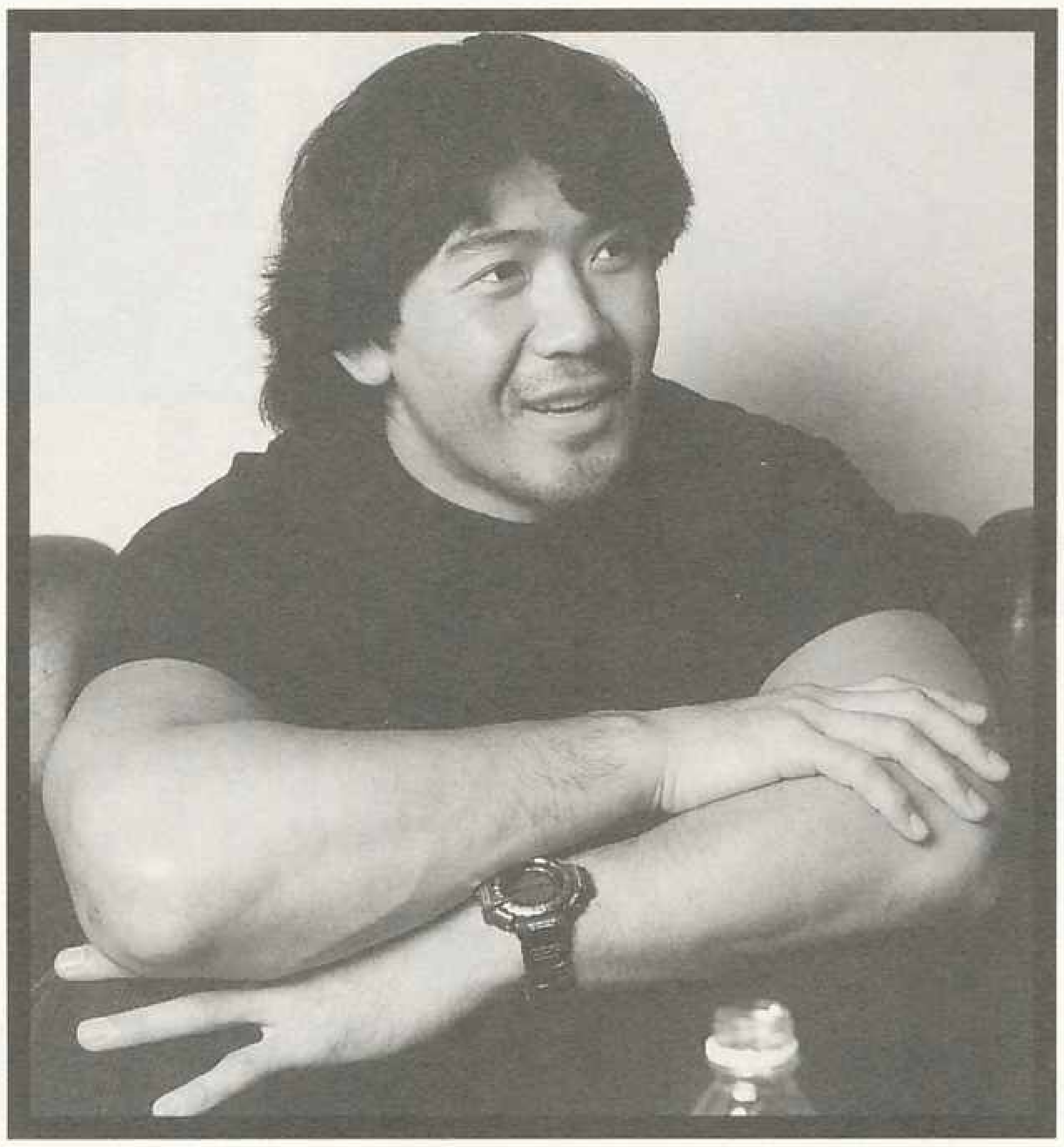
——パンクラスは最後の砦。

船木　それよりも居心地のいいところが今はないってことですよ……。

〔私見〕正直な話、パンクラスにはもはや「若手」という言葉は存在しないのかもしれない。なぜならば、通常プロレスにおける「若手」とは、即戦力ではなく、将来、トップクラスになるまでの通過点を指すからだ。

ところが、パンクラスではデビュー1年でも、平気で先輩をさしおいてチャンピオンに肉薄する選手が出現してしまう。そんな逆転現象が可能な場所、それがパンクラスである。

とにかく今後、船木誠勝によって純粋培養されたハイブリッド・レスラーたちがどうなっていくのか、興味はどこまでも尽きない——。



無菌状態で育ったパンクラスの若手勢は、果たして雑菌に免疫はあるのだろうか？　そして、船木が猛獣と闘ったら？　夢は広がるばかりである

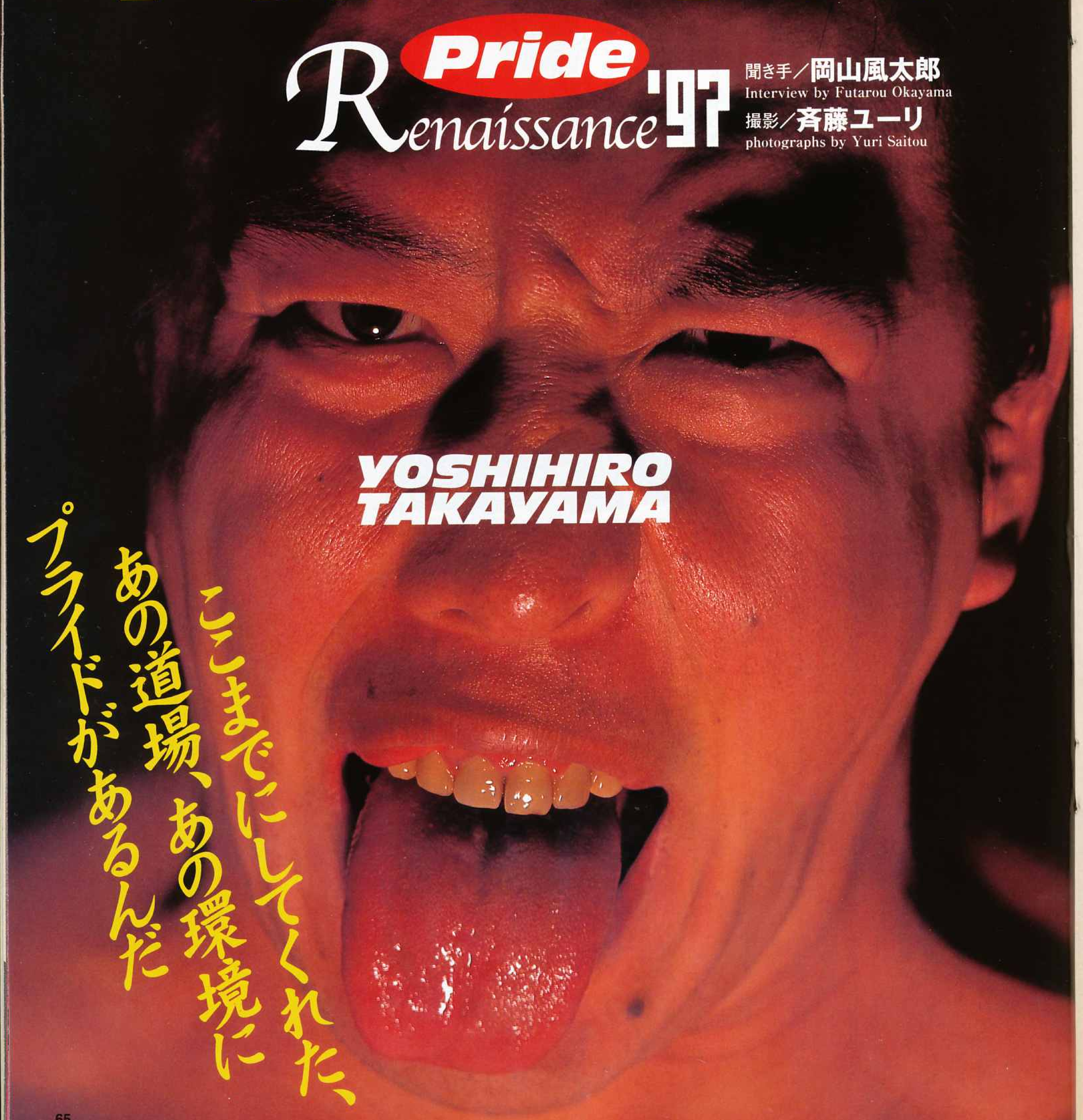
パンクラスとは何だ！はP81へ続きます

Uから全日へ上がる怪物!!

高山善廣

Pride Renaissance '97

聞き手／岡山風太郎
Interview by Futarou Okayama
撮影／斉藤ユーリ
photographs by Yuri Saitou



YOSHIHIRO TAKAYAMA

ここまでにしてくれた、
あの道場、あの環境に
プライドがあるんだ

——全日本（プロレス）マットへの出場が決まって今、時の人ですよね。
高山　旬ですよね（笑）。
——全日本ってどんなイメージがあります？
高山　全日本は……、みんな大きいっていうイメージがあって、結構叩き上げじゃなくてアマチュアである程度実績がある人が活躍する場所っていう。昔から全日本は見てましたよ。（アブドーラ・ザ・）ブッチャーとかがテリー・ファンクにフォーク刺したりしたヤツとか、ああいうの見てましたよ。印象に残ってるのは、ブッチャー組ＶＳファンクス。
——ああ、定番の。
高山　定番の。夢にブッチャーが出てくるくらいねえ、強烈な印象。
——夢にブッチャーが（笑）。フォークでメッタ刺し？
高山　そう。追いかけられる夢。
——高山さんは全日本のスタイルって何だと思います？　昔と今じゃ全然違うと思いますけど。
高山　スタイル？　……何だろ。全日本のスタイルっていうか、新日本も全日本も同じような感じですけどね。僕にとっては。
——新日本に対抗戦で上がりましたよね？　あの新日本マットに上がった時と、今度全日本に上がるっていう気持ちにはそんなに差はないんですか？
高山　あん時より抵抗なく行けちゃいますよね。一回、他団体を経験しちゃったから。あん時の方が葛藤とか緊張とかありましたから。
——全日本でもＵスタイルでいくんですか？
高山　そうですねえ。Ｕスタイルっていうか、今まで自分がやってきたスタイルでやろうとは思ってます。ただ、それプラスアルファ、ルールが違うから。スリーカウントとか5秒以内は何やってもいいとか、（タッグマッチで）組んでる人が危なかったら行っていいとか。今までの僕のＵＷＦのリングでの闘い方にそれがプラスされるだけです。だから、去年一年間やってきた事と変わんないですよね。
——でも、はじめプロレスラーになろうとしてＵインターを選択したって事は、やっぱりＵスタイルが好きだったからだと思うんですけど。
高山　そうっスねえ。ＵＷＦの選手ってみんな道場に入門して、そっからの叩き上げで強くなっていった人ばっかじゃないですか。アマチュアとかの経歴が何にもなくて、ただプロレスが好きで入っちゃったら、藤原さんとかがいて滅茶苦茶やられてだんだん強くなったっていう。自分は格闘技の経験ないから、やっぱ自分がもしやるんだったら、そういう道じゃないと強くなれないんじゃないかって思って。
——じゃあ特にＵスタイルだからっていう理由でもないんですか？
高山　Ｕスタイルも好きでしたけどね。
——でも高山さんっていろいろスタイル変えてるじゃないですか。Ｕスタイルやらゴールデン・カップスやら。そうやってスタイルが変わっちゃうっていうのは、どうなんですかね？
高山　うーん……。凄く大げさな話なんスけど、ＵＷＦスタイルっていうのはあのルールがあるからそうなるだけであって。だから、あのルールをとっぱらったら、普通のプロレスに戻ると思うんですよ。
——はいはい。
高山　だから、スタイルを変えるとかそういう事じゃなくて、ルールが変わった土壌に行くから（スタイルが）変わったように見えるだけで。
——僕も、Ｕスタイルって何なんだろうって思うんですよね。ＵスタイルとかＵイズムって言葉の意味がよくわかんなくて。
高山　意味無いんですよ、あれ。僕が勝手に思うのは、前田さんとかが、場外乱闘とか軍団抗争とか、変な流血とか、そういうのヤダとか言って、ちゃんと一対一で勝負をつけるためにって言い出したと思うんですよ。ただ、それでルールをちゃんと作って、あの中の闘いだから。それがＵイズムなんじゃないですかね（笑）。
——何かやたら本物志向って言われてたじゃないですか。
高山　本物っつったって、別に全日本も本物のプロレスですからね。
——Ｕ系の人達ってみんな高山さんみたいな考えなんですかね？
高山　違うんじゃないスか。やっぱＵスタイルにこだわりあるんじゃないスか？　ＵＷＦが出現してからプロレスを見るようになった人っていうのは。それで例えば前田さん、高田さん、船木さんとかしか見てなくってＵＷＦ好きになって入った人と、昔から猪木さんや馬場さんや、下手したら力道山のフィルムまで見ちゃってる僕なんかは（笑）、明らかに感覚が違いますよね。
——高山さんにとっては、Ｕイズムも何も関係ないと。
高山　決して関係なくはないんですけど……、何ていうんでしょう、リングの外の人が思うほどのものは、僕の中にはないと思います。
——Ｕ信者とか周りが思っているほど、Ｕにはこだわりがないと。
高山　ああ（笑）。ああいうレベルじゃないなぁ、ちょっと次元が違う。
——なるほど。で、いきなり話は変わるんですけど、高山さん、サラリーマンだったんですよね？
高山　ホントにいきなり変わりますね（笑）。
——どんなサラリーマンだったんですか？
高山　生活態度ですか？（笑）。
——職種は？
高山　営業ですよ、出版社の。サンケイグループ。
——営業!?　スーツ着て毎日行ってたんですか？
高山　そりゃもう毎日。
——今ね、これだけプロレスラーがたくさんいるから、元サラリーマンってあんまり珍しくないんですけど、高山さんだけは……ねえ？（笑）。



「全日本行っても今まで通り本名で試合するんですか？」と尋ねたら、「ジャイアント高山にでもしてみようか？（笑）」と！……めちゃめちゃしてほしいです！

YOSHIHIRO TAKAYAMA



高山　何でですか？（笑）。有楽町に通ってたんですよ。

――有楽町！　コテコテのサラリーマンだ（笑）。

高山　もう江戸のド真ん中で就職するんだ、っていう、そういう意気込みで有楽町の会社選んだんですから（笑）。

――もちろん、アフター5は有楽町のガード下で一杯？

高山　いえいえ、会社終わったらピタっと帰って。家で腕立て伏せとかヒンズー・スクワットとかやってました。

――その時にはプロレスラーになるって決めてたんですか？

高山　いや、そん時はそういう気持ちはなかったんスよね。僕はサラリーマンになる前に、一回20歳でUWFのテスト受けて辞めてますから。

――ああ、知る人ぞ知るお話ですよね。UWFってその頃は……

高山　えーっとね、旧UWFが潰れて新日本と一緒にやっていた頃。前田さんが（ドン・中矢・）ニールセンとやった後ぐらいです。

――でもハタチっていったら、学生ですよね？

高山　大学生だったけど受けたら、受かっちゃたんですよ。

――学生だっていうのは、隠してたんですか？

Pride Renaissance '97

高山　いやいや、隠してないっスよ。大学行ってますけど、辞めますからって。で、受かっちゃって、親に「俺、受かっちゃったから大学辞めるよー」っつってねえ。そしたら親が、「どうせ辞めて戻ってくるから、休学にしとけ」とか言って、親が休学届けだしてねえ。案の定、三ヶ月ぐらいで!!（笑）。

――もたなかったんですか？

高山　駄目でしたねえ（笑）。

――何でですか？　聞きたいです！

高山　うーん。今思えばただの根性なしなんですけど。僕高校の時、ラグビーやってて、右肩を手術してたんスよ。で、入門してもうレスリングとかバシバシやるじゃないですか。毎日関節決められて。それで最初に痛くなったのが、その手術した肩だったんですよ。それでも、まあ続けてて。んで、ある日ね、バーベルでベンチプレスやったら右肩が痛くて、自分の上にバーベル落っことしちゃったんスよ。

――ほげっ、それは危ない！

高山　ちょうど、首と胸あたりだったんで大丈夫だったんスけど。でも「ああ、もう駄目だなあ」とか思っちゃって。恐くなっちゃったんスよ。これでね、もし肩輪になって「お前もう、使えないから帰れ」って言われたら俺どうしようとか、いろんな事考えちゃっ

YOSHIHIRO TAKAYAMA

て、ほんで逃げちゃった。

――じゃあ、練習がきつくて辞めたんじゃないんですか？

高山　体力はビシバシありましたからね、確かにきつかったんですけど。「腕立て無制限やれや～」って前田さんに言われたりとか（笑）。あと当時、三羽ガラスといわれた、中野（龍雄）、安生（洋二）、宮戸（優光）さん達と相撲とか取らされて「3人のうちの誰かを倒してやる」とかね、そういう野心に燃えてる奴だったんですよ（笑）。

――へぇ～。じゃあ、安生さん達とはその頃から知り合ってたんですね。

高山　その頃に知り合ってたからインター選んだってのもあるんですよね。

――辞めてからは……。

高山　さっさと復学して、チャラけた大学生に戻りました（笑）。

――その後、就職したわけですが、またプロレスやりたいって思ったのはいつですか？

高山　入門のギリギリ前くらいですね。辞めた直後は、プロレスのプの字も出ないって感じ。テレビも雑誌も見ないし。で、何かのきっかけでまたトレーニングするようになったんですよね。でも、プロレスにはもう区切りつけてるから。ただ鍛えて「チャラチャラ遊んでるけど、ごっつい自分が好き」って思ってた（笑）。

――僕それ、わかる、すっごくわかります！（笑）。

高山　それでね、新生UWF全盛期の頃に、江ノ島の海で宮戸さんとバッタリ再会したんスよ。

――江ノ島で！

高山　はい。僕がライフ・ガードやってパトロールしてて、で宮戸さんが遊びに来てて。「高山ーっ」って声掛けられて、「何やってんの？」って話になって。それから、たまに宮戸さんとか安生さんと飲むようになったんスよ。

――へぇ～、そんなことがあったんですかあ。その時、高山さんは学生？

高山　まだ学生。向こうは新生UWFバリバリだった頃で。ほんで、たまに飲みに連れてってもらったり、UWFのチケット貰って見に行ったりするようになって。その頃、ちょうど垣原（賢人）さんとか冨宅（飛駈、現パンクラス）とか長井（満也、現リングス）さんとか入った頃。だから、冨宅さんとか長井さんとかとも一緒に飲んだことありますよ。

――へぇ～。

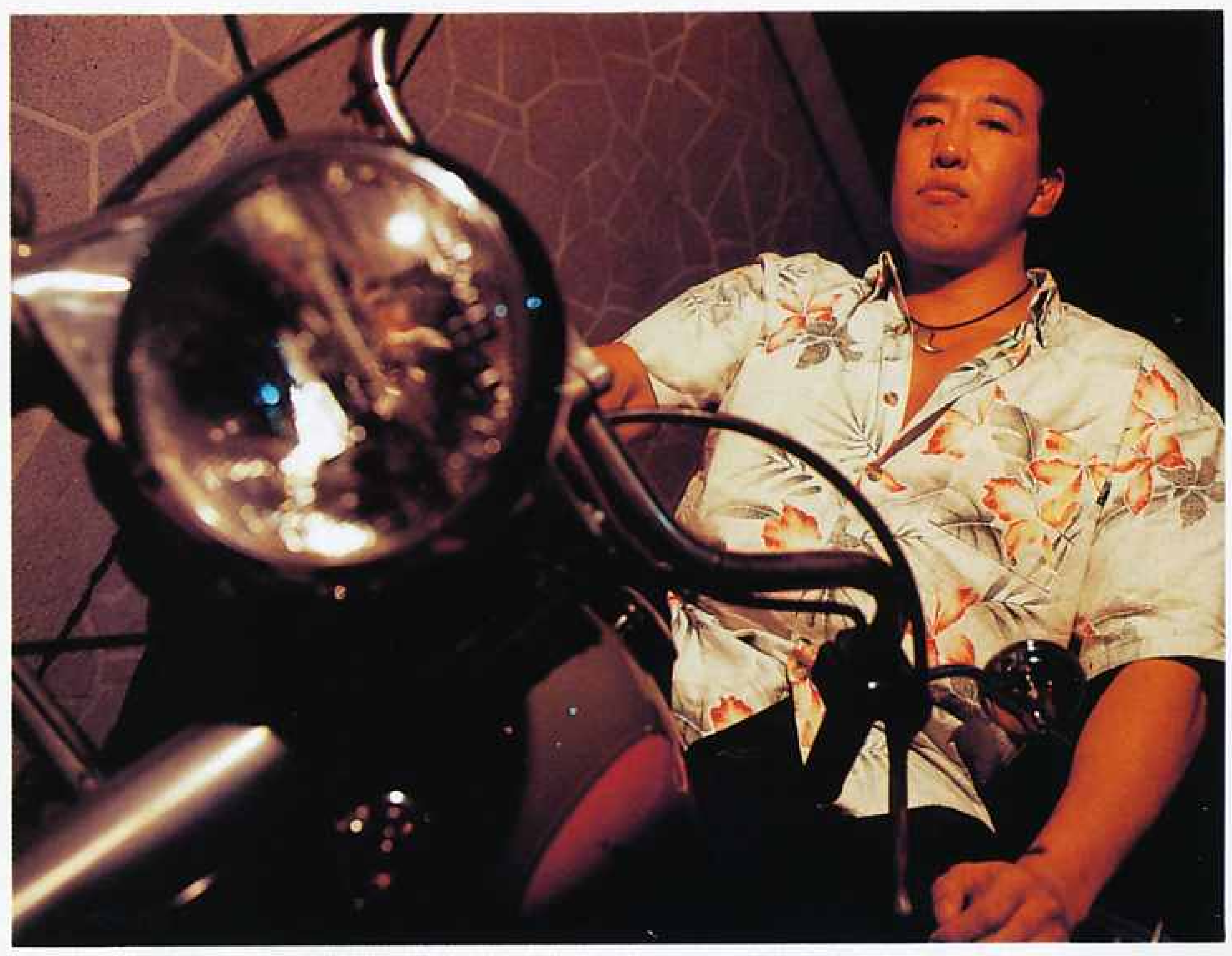
高山　あと今リングスの山本（宜久）選手も一回UWFにいたときに、飲み会にいたことありましたね。

――仲良かったんですねえ。辞めた人間なのに。

高山　可愛がってくれてたんで。結構気さくなんですよね。安生さんとか。

――気さく！　戻ってこいよ～、みたいなことは言われなかったんですか？

高山　まあ冗談っぽく言ってましたけどね。その新生UWFの頃はね、「お前、フロントに入れ」とか言われてましたね（笑）。そのうちサラリーマンになって、そしたらUWF解散になっちゃって。Uインターになって。その時、宮戸さんから連絡があって、「新しくやるけど、お前プロレスラーになんないの？」って言われて。



普段はこの男にこの車というほど高山キャラにマッチしたアメ車を乗り回す高山選手。デカイ男にはデカイ物がよく似合う……

――あー、そうだったんですか。インターに入門したのはいつでしたっけ？

高山　旗揚げした年の、確か9月にテスト受けて、11月に入門。

――というと、高田VSバービック戦の一ヶ月前だ。

高山　そうそう。あの試合が初めて僕がセコンドについた大会です。

――そういう事があったんだあ。え、これって知らないの僕だけですか？

高山　知ってる人は知ってます。でも、あんまりドーンと出てないから。

――で、そんなこんなで今回、Uインターも解散……したんですか？（笑）。

高山　しましたねぇ。

――ホントにしたんですか？（笑）。

高山　うへへへへへ。したから今日だって運転手もなく自分で来たんじゃないですかあ、ここまで（笑）。

――すいません（笑）。じゃあ今、みんな何やってるんですか？

高山　いや練習してますよ。まだ道場使わせてくれてるから。高田さんが何か企んでるじゃないですか、誰かとやるとかいって。毎朝練習してますからね、高田さん。結局、自分の練習場所を押さえとかなくちゃいけないから、（道場を）キープしてるんじゃないですか。別にケンカしたわけでもないし、自分たちも行く場所も練習する場所もないからね。

――高田さんは何を企んでるんですか？（笑）。

高山　何企んでるんスかね？（笑）。

――え？　今皆さん何なんですか？

プー太郎？（笑）。

高山　プー太郎集団ですね。プーレスラーですね。ロが抜けてるんですよ。

――じゃあ解散してないんじゃないかって、……ファンも馬場さんもそう思ってると思うんですよ（笑）。

高山　でも、会社組織として動いてないスからね。

――現時点で闘いの場所が決まってるのは、高山さんだけですよね。

高山　そうっスねえ。とりあえず決まってるのは、僕だけですねえ。やっぱこだわりのない人間だから！（笑）。すぐ場所変えられるんですね。

――絶対そうだ！（笑）。他の選手に何か言われました？

高山　「（専門誌の）表紙になっちゃってるね～」とか（笑）。そんぐらいですねえ。僕、解散する前から「川田さ

んともう一回やるために全日本のリングに上がりたい」って言ってたから。突然場所がなくなったから、慌ててどっかに飛びついたっていう話じゃないですからね。

――「俺も一緒に行く」って言う人いないんですか？

高山　言わないですねぇ。みんなイヤなんですかねぇ、やっぱり。

――ほら、他の人は、こだわりがあるから（笑）。

高山　あ、こだわりのある人達なんだ（笑）。自分では、こだわり派だと思ってるんですけどねえ。違うのかなぁ？

――グハハハ、どうなんでしょう！　高山さんのこだわりって何ですか？

高山　「俺がいいんだから、いいじゃん」って感じ？（笑）。U系っていわれるプロレスラーって、何ていうんですか、U信者といわれてる人達に自分の気持ちを縛られてるような気がするんですよ、いい意味でも悪い意味でも。

――Uという幻想みたいなものに？

高山　うん。だから、それをちょっとでも踏み外しちゃ、人の道に反するっていう。優等生ですよね、そういう意味じゃ。だから僕は劣等生なんスよ。「こんなとこ歩きたくねえから、俺はこっち歩くよ」って感じでね。対象物によりますけどね。対象物によっては、かなり不マジメな男かもしれないですね。なんかね、まあ名前は言いませんけど某元Uインターの選手が、新日本との初めての対抗戦の時って、（Uインター勢に対してお客さんが）すんげえブーイングだったじゃないスか。

――はいはい。

高山　それでね、「そういう所で試合するのが嫌だ」って言ってたんスよ。「しょーがないじゃん、敵地なんだから」って僕は思ったんですけど。UWFってもう、UWFを温かく応援するっていうお客の前でしか試合してないんですよね。

――ヒールはいないですもんね。

高山　そう。しかもUWFは、第一試合からお客さんがちゃんと見てくれて、技を一生懸命出して拍手してもらう、そういう温かい空間っていうのあるじゃないですか。そういうトコで試合してたから、そう感じるのかなあ、と。



こだわりのない人間だから、すぐ場所変えられるんでしょう

Pride Renaissance '97

――ブーイング経験って安生さんぐらいですか。ヒクソンに敗れた直後の。

高山　安生さんだって結局、もろブーイング受けたのってあん時が初めてでしょうね。僕はね、たまたまオーストリアに試合しに行ってて、メチャクチャ、ブーイング受けたことがあるんですよ。そん時結構、快感だったんで（笑）。もっと騒げって感じで。

――やっぱ、高山さんはUってものに縛られてないんですかね。

高山　みんなマジメなんですよ。だから、「ボブ・ディランはずっと生ギターしか弾いちゃあいけない！」とかそういう世界？（笑）。

――高山さん的な例えですね（笑）。

高山　も～う、エレキを持ったディランは、ブーイングの嵐（笑）。

――でも、そういう不マジメな人が真っ先に次の場所が決まっちゃうってのも、皮肉な話ですよね（笑）。

高山　世の中そういう風に出来てるんですよ（笑）。大体、ずるい奴が得してますから。だから、こだわりっていえば、自分自身何にこだわるかって言ったら、自分がド素人から五年間でこ

こまでのレスラーにしてくれた道場、あの環境にプライドを持ってる。UWFっていう文字じゃなくて、あそこの道場、あそこの道場で中で一緒に練習してきた仲間にプライドを持ってるんスよ。フフっ、カッコいいっスね（笑）。

――うん、かっこいい！（笑）

高山　だから、看板は何でもいいんスよ。（みんなは）ブランド志向なんですよ、要するに。

――あのー、高山さんって音楽好きで有名なんですけど、ストーンズとかビートルズとか割と古いロック、昔のヤツが好きなんですよね？

高山　そう。古いのばっかですねえ。

――最近のは聴かないんですか？

高山　最近のは……、うん。聴かないですねえ。

――興味がないんですか？

高山　うん、あんまり好きにならないですねえ。

――好きにならないというか、なれない？

高山　なれないスねえ。なぜか。

――それってなぜなんですかね？　例えば、高山さんがストーンズとかビートルズばっかり聴いて、最近のは聴かないっていう感覚と同じ感覚で、プロレスファンでも、猪木さんとか馬場さんの全盛期の頃とかは凄い好きだったけど今のプロレスは見ない、っていう人って結構……

高山　いるでしょうねえ。

――いっぱいいると思うんですよ。それと同じ感覚だと思うんですけど、なぜだと思います？

高山　古いものにこだわってるんですかねえ。

――そう思う人って、単純に「昔の方が凄いから」っていう理由だと思うんですけどね。プロレスでも音楽でも。

高山　そういうのもあるでしょうねえ。もうその人が思っちゃったら、そうなんでしょうねえ。だから、その人の価値観ですよね。プロレスと音楽の話したけど、車だと、僕、古いの乗ってんじゃないスか？　メチャクチャ不便なんすよ、あれ。ガソリンは食うし、場所は取るし、エアコン効かないしラジオはAMしかないし（笑）。だけど、どうしても新しい車には乗りたくないですよね。カッコ悪いと思っちゃって。単純に「なんで？」って言われても「こんなカッコ悪いもん乗れるわけねえじゃねえか！」って言うしかない。

――確かに。音楽も、そういう感じですか？

高山　うーん、そうですね。でも最近、だいぶ柔軟になりましたよ。『スマ・スマ（SMAP×SMAP）』も見るようになったし（笑）。

――スマ・スマ！（笑）。でね、高山さんはレスラーなんですけど、もしレスラーになってなくて、ファンとしてプロレスを見てたら、今のプロレスは面白くないと、思ってたかもしれないですよね？

高山　思ってたかもしれないですね。

――レスラーの目から見て、現在は昔と比べるとどこがどう違うんですか？



高田延彦に高山のことを尋ねたら「もう僕の配下じゃないんで、何をやるのも個人の自由ですよ」という答えが。高山はこれをどう受け止めてるのだろうか？

高山　うーん、どうなんスかねえ……。もう見る目が違っちゃってると思うんですよ、僕自身が。（プロレスに対して）今、僕が面白いと感じるところと、昔の僕が面白いと感じるところが。だから、昔のビデオ見るじゃないですか？　猪木さんの試合とか、最近では、前田さんのUWFの初期の頃とか。現代に近いほど、面白くなくなるんですよね。

――面白くない。それはなぜですか？

高山　技術が未熟なんですよ。今の基準からすると。

――技術的なトコを見ちゃうんですか？

高山　見ちゃいますよね。

――でも、その技術的なトコじゃなくて、見る側はその時代の、その時のレスラー自身のテンションの高さを……。

高山　ああ、ああ。そういうのでは凄いな、と思う時もあるんですよ。でも、それって一概に昔の方が良かったとかいうんじゃなくてね。ただ、記憶に残る試合って、全部いい試合じゃないですか？

――言われてみれば……。

高山　やっぱり素晴らしいものしか頭に残ってないんですよ。

――なるほど！　でも、それは高山さんがプロレスラーだからこそ、プロレスに関してそう思うのかもしれないですよ。音楽は昔のしか聴かないとか、車は昔のしか乗らないとか高山さんの価値観があるじゃないですか。高山さんがプロレスラーだからこそ、プロレスに関してもそういう技術的な方向にいっちゃうのかもしれないですね。

高山　うーん。車だってねえ、今の方が凄く便利で快適じゃないスか。音楽だって今の方がテクニックはあるかもしれないじゃないですか。

――そうですよね。でも高山さんは昔の方が好きなんですよね？

高山　なんか昔の方が味があるっていうか。

――なんで味があるんですかねえ。

高山　う～ん……。一言で言うと、個性なんじゃないかと思いますよ。昔の方が個性あったんじゃないですか。変なキャラクターとかじゃなくて。昔のプロレスラーって何か独特の雰囲気があったじゃないですか。自分で作ったのか、本当にそういうのを持ってたかは知らないけど。「技」っつったらカール・ゴッチだし、「チャンピオン」っていったらルー・テーズだし、「アイアン・クロー」だったらフリッツ・フォン・エリックだし。

――ですね。

高山　個性が凄く強いんじゃないですか、昔の人は。ただ、昔の人が強いっていっても、それは一流の人しか記憶に残ってないからであって。今の人も一流になったら個性的じゃないスか、本来だったら。ただ、今の時代だからブワーッと見れちゃうし。だから何とも言えませんよね。車だって音楽だって、昔の物にも駄作はあるし。だから、今、生き残ってる人は、素晴らしいですよね。

――あ～。

YOSHIHIRO TAKAYAMA



僕の行動は、細分化されたプロレス界を統一する第一歩

高山　要するに、結局そうでしょ？素晴らしいものが生き残るんですよ。

―う〜ん、あと、決まったスタイルなんてほとんどない所から、自分達で新しいスタイルを創造していくというテンションの高さがあったんでしょうね。

高山　あったでしょうね、それは。あと、現代はもう枠が出来ちゃってるじゃないですか。何でも。全くゼロからのスタートのものって、なかなかないじゃないですか？

―そう言われてみればそうですね。

高山　プロレスにしたって、もう枠があって、もっとコアにすると、さっきも言ったけどUWFっていう枠から出れないとか、音楽もロックって枠があったら、そこから出れないとか。

―また音楽に例えますね（笑）。

高山　ええ（笑）。昔はほら、ジャズとかブルースとかいろんなものが交ざってロックになっちゃたりとかあったじゃない。そういう枠が出来ちゃってるから、なかなか刺激的なものが出来ないんじゃないですかね。だから今、ちょうど色々細分化されて枠も細かくなってるじゃないですか？　UWFだ、FMWだ、全日本、新日本だとか。細かく細かくなってるじゃないですか？それが、その細かい枠がバーンって爆

Pride Renaissance '97

発してまた大きいものに戻る時期なのかなあと。

―えっ、その時期が来てると言うんですか⁉

高山　そろそろ来るんじゃないですかね？　……わかんないスけど（笑）。

―高山さんは、そういうのがきて欲しいと思っていますよね？

高山　う〜ん、どうなんスかねえ……。そういうのがもしきたら、本物しか生き残れないでしょうね。そういう意味じゃあいいんじゃないスか？

―本物だけが残る、と。

高山　本物だけが残る！

―高山さんは、もちろん残る自信がおありだと。

高山　う〜ん。残らないとねえ（笑）。グハハハハハ！

―グハハハハハ！って（笑）。

高山　まあその先兵ですよ、僕は。


―先兵？

高山　「なんでUWFが全日に⁉」ってみんな思うでしょ？　まさにそれですよ。バーンと爆発してまた大きいものに戻る第一歩なんですよ！


―はは〜。

高山　……って、今思いついたんだけど！　ガハハハハハハハハ‼

〈97年2月6日、六本木アートセンターにて収録〉


YOSHIHIRO
TAKAYAMA
Pride
Renaissance '97

アイ・ラブ・U されど心は全日にあり!!




TAKA
MICHINOKU
Pride
Renaissance '97

みちプロという「おもちゃ箱」にいる憂うつ

TAKAみちのく



聞き手／羽賀玄太
Interview by Deppa Haga
撮影／斉藤ユーリ
photographs by Yuri Saitou

サスケ！
おまえ一人で遊べ!!
俺らまで巻き込むな!!

ターザン追悼興行なんてやった奴はブッ殺してやりたい!!

——今日は何の取材かご存じですか？

TAKA　『紙プロ』じゃないんですか？

——『紙のプロレスRADICAL』という雑誌です。ご覧になったことありませんか？

TAKA　あのデカイやつ？

——そうです。ターザンが表紙の。

TAKA　ああ（無愛想に）。

——読まれたことはありますか？

TAKA　立ち読みでちょっと。

——感想はいかがですか？

TAKA　まず、買おうとは思わないっスね。

——あら（笑）。TAKA選手の志向するものと『紙プロ』は違いますかね？

TAKA　まあ、ハッキリ言えば。

——もっとハッキリ言ってもらっていいですよ。最近ハッキリ言ってくれる人がいないんで。いったいどんなところが合わないですか？

TAKA　じゃあ、ハッキリ言わせてもらいますけど、去年の12月26日の川崎のチッタ。あれはもう……、「お前ら殺すぞ！」っていうくらいムカつきました。

——ああ、ぜひ山口昇を殺ってください（笑）。あの男は動物……いや、ミジンコ以下ですから。

TAKA　なんかもう、何の興行かわからないし、プロレスをバカにしてんのかっていう。去年一年やってきたことが一気に崩されたようなね。一年の締めくくりをあんなふうにされて。あの山賊男？　誰がやってんのか知らないけど、ああいうのと同じリングに上がりたくなかったっスね（無愛想に）。

——そういったリング上以外で、プロレスをバカにしたような感じがしたっていうのは、どういうところでした？

TAKA　いやもう、最初のセレモニーから全部。

——はあ。でも、サスケ社長みたいに喜んで『紙プロ』と遊んでくれる人もいますけどね。計算してやってるのかカンなのか、よくわからないですけど（笑）。

TAKA　サスケはそういうの好きで、『紙プロ』とも仲良くしてるみたいだけど、「お前一人で遊べ！　俺らまで巻き込むな」と言いたい！

——まあ、『紙プロ』はそういうレスラー側からの反発は受けてますけどね、ずっと。反発というかやってることが理解されないというか。まぁ、それはいいんですけど、TAKA選手が『紙プロ』に対してそういう反発をするというのは、自分自身、「これがプロレスだ！」っていうのがしっかりあるからなんでしょうね。

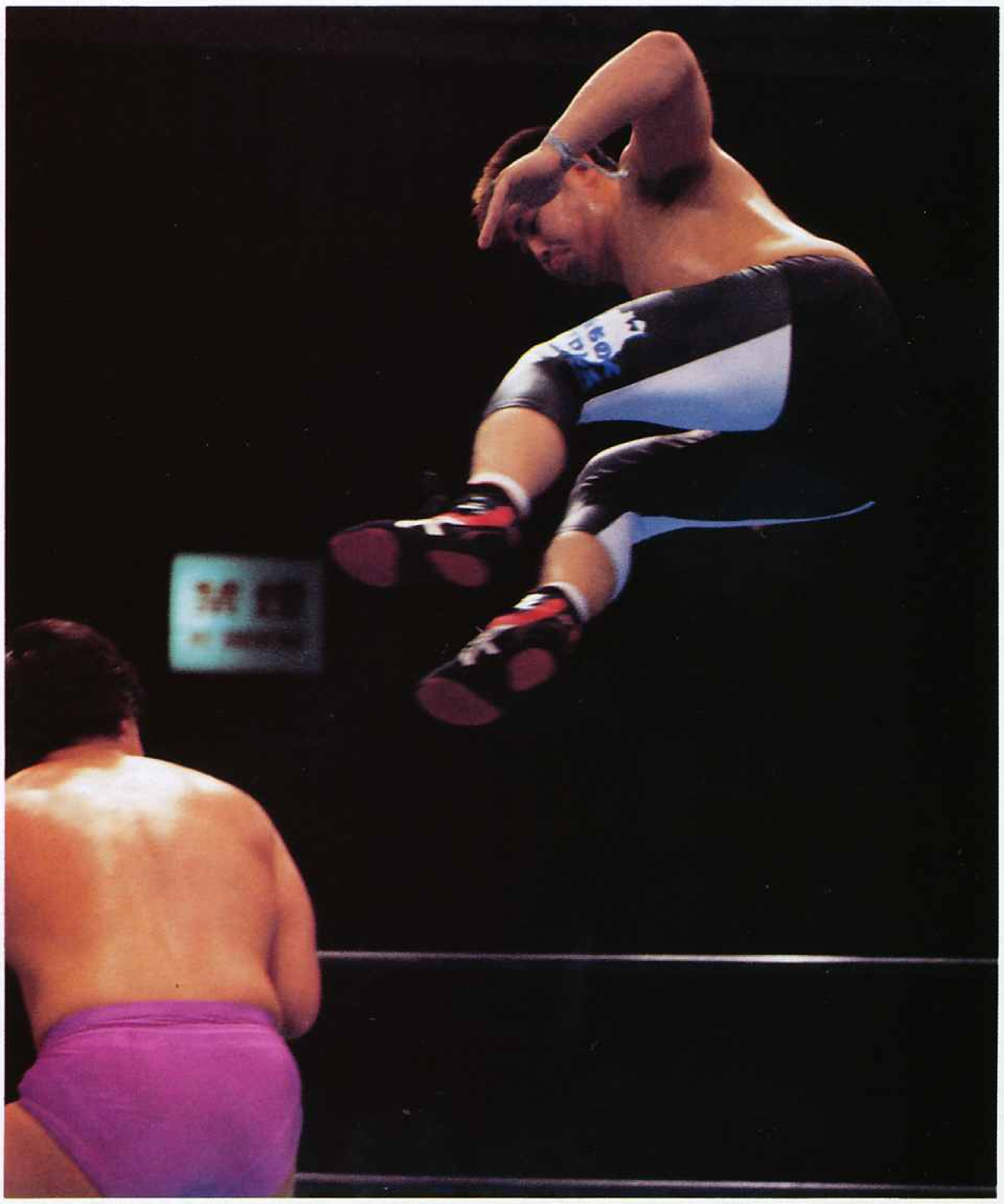
TAKA　ありますね。

——どんな興行や会場でも試合の中身でファンの首根っこをつかまえて振り向かせるっていうのがレスラーの基本だと思うんですけど、ボクが最近、TAKA選手って面白いなって思ったのは、札幌の対初代タイガーマスク戦なんですよ。あの試合が決まった時ってどんな気持ちでした？

TAKA　正直言って、ヤだなあって思いましたね。

——あ、そうなんですか？

TAKA　やる前は、あの人は過去の人だと思ってたんで。今さら出てきて、しかも四代目もいるのにね。四代目嫌いだけど、それじゃあ四代目の立場がないんじゃないかって。だからハッキリ言ってやりたくなかった。怖いとか



TAKAの空中殺法は高くて速くて美しい。新日参戦時にファンの度肝を抜かした！

Pride Renaissance '97

そんなんじゃなくって。……でも、やってみてその考えはガラッと変わりましたけどね。

——ボクはあの試合は、TAKA選手のたっての希望で実現したカードだと思ってたんですよ。

TAKA　いや、全然。そんなこと思ったこともなかったですよ。まあ、悪く言えば会社に決められたカードだったから。ただ、決められた以上、プロだからやらなきゃいけないし。

——そういった気持ちはリングに上がるまで続いてたんですか？

TAKA　いや、それはお客さんに失礼だから。やる時は、いちレスラーとして潰してやろうとしか考えてなかったし。もちろん、その上でいい試合にしたかったし。

——で、試合が始まったわけですが、組み合った瞬間、「これは強い！」とわかりました？

TAKA　うーん、なんだろうなあ……。ホント、何もできなくて、大きな山みたいな感じで、「なんだ、この人は!?」みたいな。

——ウェイトの問題ではないですよね（笑）。

TAKA　レスラーとして凄いなっていう。昔、（獣神サンダー・）ライガー選手とやった時も同じような感じだったんですけど。

——ああ、なるほど。佐山聡さんは表向きはとてもマヌ……優しそうだけど、ひと皮むけば、本当に虎になりますからね。なんでも試合後に泣いてしまったらしいじゃないですか。

TAKA　あれはホント、自分自身の不甲斐なさに悔しくてもう……。あんなのは初めてでしたね。去年一年、いろんな団体に出て、かなり自分に自信がついたんですよ。どんなヤツが来てもそこそこいけるだろうと。（初代タイガーと闘っても）もしかしたら勝てるかもしれないし、いい試合になるかもしれないと思ってたんですけど、もう何をやってもダメで。

——全く通用しなかったと。



TAKA　バトラーツスタイルでいっても、プロレススタイルでいっても、何やってもかなわなくて、「オレの去年一年間は一体なんだったんだ」と思うと悔しくて……。これが初代タイガーマスクなんだなと思い知らされました。あれだけブランクがあるのにあんなに動けて、現役時代はいったいどんなだったんだと思って。

——それで思わず泣いてしまったと。

TAKA　リング上では我慢したんですよ。だけど控室に戻ってる途中に我慢できなくなって、ボロボロ涙が出てきて。

——「怖かった」とコメントしてましたよね。

TAKA　最初、ヘタに突っ込めなくて、キックが来るか、パンチが来るか、全然わからなくて……。しかも全然スキがなくて。

——しかし、悔しくて泣くっていうのもなかなかないですよね。

TAKA　ただ単にストレートにやってるつもりですけどね。よく「TAKAは大口叩く」とか言われるけど、オレは正直なだけなんスよ。相手が強いと思ったら強いって言うし。

——例えばね、ザ・グレート・サスケ選手が、あるいはスペル・デルフィン選手がね、佐山さんとやったとしますよね。しかも、TAKAさんのように何もさせてもらえなかったと。あの人たちは泣くと思いますか？

TAKA　泣かないでしょう。

——でしょう？

TAKA　それはプロレスに対する思いですよ!!　特にデルフィンなんかそんなのないでしょうね。自分のことしか考えてないし、いい試合をしようということすら考えてないんじゃないですか？　お客さんを笑わせることしか考えてないし。

——まあ、プロレスに対しての思いというより、考え方の違いですよね。例えばデルフィンさんが初代タイガーと闘って、全然力が及ばなかったとしても、きっとあの人たちの中では「これは俺と違う職業だから」という意識が働くと思うんですよ。

TAKA　そんなんじゃダメなんですよ！　全てひっくるめてプロレスなんですよ！

TAKA MICHINOKU

——でも、みちプロなんかルチャの専門家が集まってるところじゃないですか。そんな団体でなぜ、TAKAさんはそこまで総合的なプロレスにこだわるんですか？

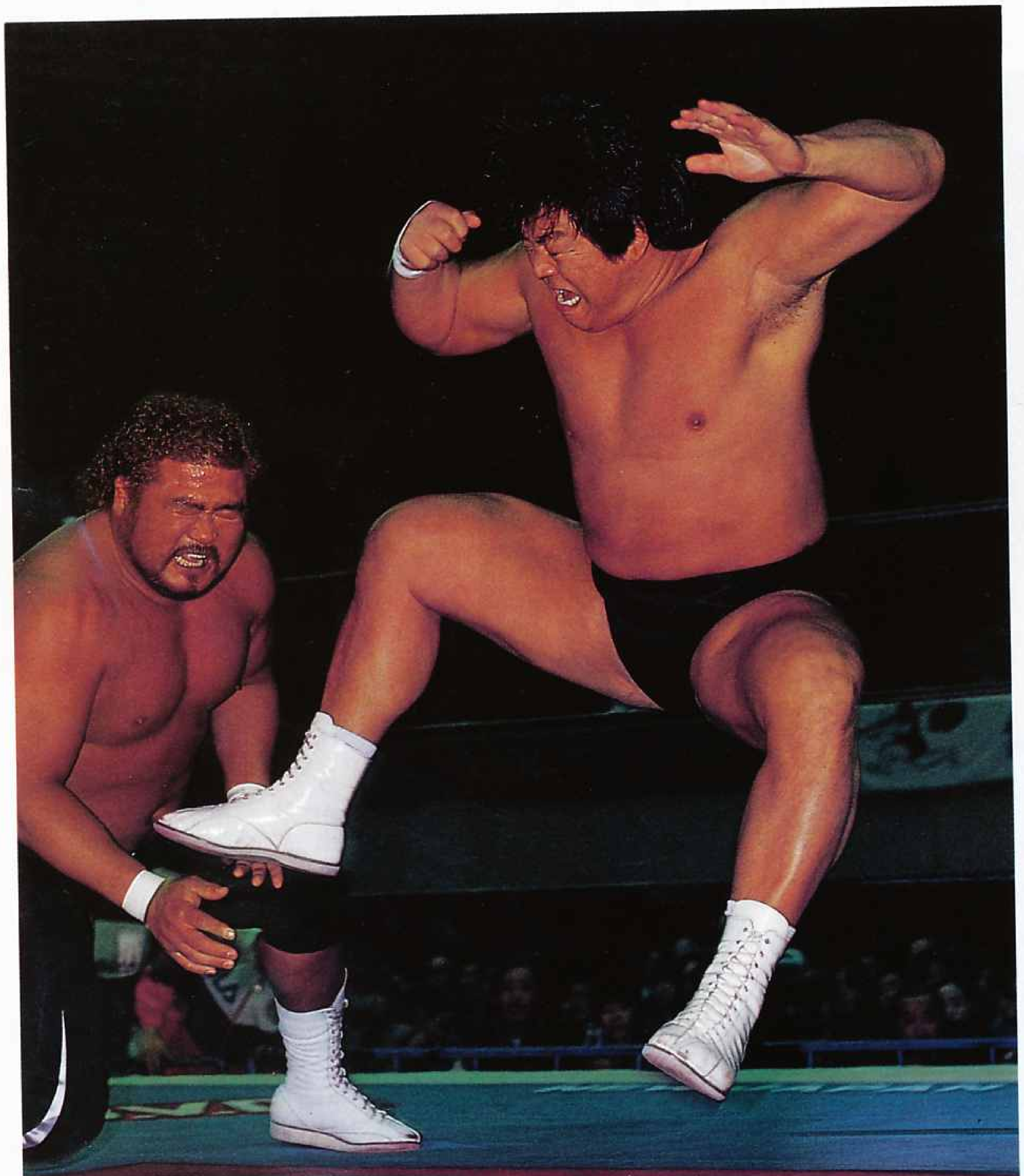
TAKA　やっぱ新日本に出たのが最初ですね。あそこに行くまではホント、ルチャしか知らないし、飛んだり跳ねたりやってて、「ま、こんなもんだろう」と思ってたんですけど、新日本に出て、大谷（晋二郎）選手とかとやって、ホントいいようにもてあそばれて。でも、そこで「これこそが本当の闘いなんだ」と目覚めたんですよ！　それまでは強くなりたいっていう気持ちはそんなになかったんですよ。もう飛べばいいやって感じで。グラウンドもできなかったし、体も今以上に小さかったし。「どうせ俺ら小さいし、インディーだし、飛んでりゃ何とかなるだろう」って。まあ、飛び技には自信あったし。

——ルチャだけをしてた時ってそれはそれで納得してたんですか？

TAKA　うーん、どうだろうなあ。まあ、あの頃はそれでよかった

道場破りが来ても
素人には絶対勝つ自信がある!!

んじゃないですか？
――で、グラウンドに目覚めた時、周りの選手の反応はどうだったんですか？
TAKA　デルフィンには色々言われましたね。「お前は飛ばなきゃダメなんだ。飛ばないで何ができる！」って言われて。それが逆に悔しくて「今に見てろよ」って思って。
――TAKAさん風に言うと「今に見てろよ、クソイルカ！」って感じですね（笑）。
TAKA　はい（笑）。それからみちプロと藤原組の交流があって、田中みのる（現・稔）選手と闘ったんですけど、もうボッコボコにされたんですよ！　フォールがあるルールだったんで、最後は丸め込んで自分が勝ったんですけど、「これがUスタイルか！」と思い知らされたけど、でも「こいつはおもしれえや！」と思って。短い期間だけだったけど藤原組の道場にも通って、どんどんUスタイルにのめり込んだんですよ。
――ほほぅ、TAKAさんは、できることの範囲の中でだけ何かをやるっていうのは嫌いなんですね。できないことに挑戦して、無力感を感じるところから全てが始まるという。
TAKA　そうっスね。例えばFMWでデスマッチをやるにしても、やる前には怖いっていうのもあったし、自分はデスマッチに関わることはないだろうと思ってたんですけど、やってみるとドンドンのめり込んで。やっぱりね、いろんなスタイルをやりたいんですよ。



ファンを寄せ付けないことで有名な長州だが、実はファン主権の団体運営が大好評。
TAKAもこういった矛盾をも納得させる超一流レスラーにならなければならない。

ライガーさんなんかもそうでしょ？　ルチャでもUスタイルでも何でもできるという。ああいうのが理想なんですけどね。
――佐山さんもそうですしね。でも、いろんなスタイルができるのはいいんですけど、そこには「芯」が必要ですよね。でも、そういう人ってなかなかいませんよねえ。
TAKA　いや、自分がなりますよ！　今はその過程にいるだけで。
――なるほど。でもね、申しわけないけど、ボクがTAKA選手の試合で一番凄いなと思うのは、やっぱり飛び技なんですよ。あの空中殺法は凄いなあと思ってるんですけど。
TAKA　でも、自分はルチャはできませんから。ルチャって独特の流れがあるじゃないですか。そういうの全くできないっていうか、ハッキリ言っちゃうと嫌いなんですよ、ルチャ。そういうのはやりたくないんですよ。自分は「ここぞ！」という時しか飛ばないんで。サスケみたいに毎日飛ばないし、飛び技を単なる見せ技にしたくないし。
――あぁ。他誌でそう発言してるTAKAさんのインタビュー読みました。でもその時も思ったんですが、あの飛び技だけを極めれば、それはそれで凄いと思うんですけど。
TAKA　でも、それだけじゃ他のリングに上がれないですよ。やっぱりグラウンド、キック、スープレックスができないと。
――うーん、こだわりますね。みちプロの道場って道場破りなんかは来ないんですか？
TAKA　ウチの道場はないですね。山奥だし、いつも人がいるわけでもないし。
――山奥！（笑）

TAKA　でも、もし仮に素人が道場に来たと。で、素人と闘ったとしたと。それで俺らが勝ってたかと言うと……。正直絶対勝ってたと言う自信はないですね。でも今なら勝つ自信はありますよ!!　そういう練習をしてるんで。強くなる練習をしてるんで！

——どんな素人がやってきても勝てるというのは凄いですね。

TAKA　とにかくプロレスをナメられるのが一番嫌なんですよ！　俺なんか体小さいし、そのへんのヤツと体変わらないわけじゃないですか。だから試合でガンガン見せなきゃいけないんですよ。この人はプロなんだって思わせないと。

——TAKAさんにちょっとでもふざけたことを言ったら、きっと大変なことになってしまいますね。

TAKA　だから、時と場合によっては客にも手ェ出しますからね!!　ムカついたら、自分のプロレスラーとしてのプライドをちょっとでも傷つけられたら、人前であろうがなんだろうがブン殴りますよ!!　プロとして失格かもしれないけどそれは仕方ないっスよ。

——その姿勢で行け！って感じですね。昔の新日本なんか、「八百長！」なんて野次とばすヤツがいたら、猪木さんが「つまみ出せ！」ってやってたらしいですけどね（笑）。

TAKA　もう、そんなヤツいたら半殺しですね!!

——半殺し！（笑）。

TAKA　当時は猪木さんで、今は長州さんかな、そういうプライドを感じる人は。

——ああ、ここにも長州イズムがあったんですね。

TAKA　あの人はプロ中のプロって感じじゃないですか。だから、長州イズムって言ったら変だけど、そういうのは俺は持ってますよ。

——具体的にどういう部分ですか？

TAKA　みちプロって、試合前、Tシャツ売ってるじゃないですか。ああいうの見てると「お前ら何なんだ！　Tシャツ屋か？」って言いたくなりますよ。

——Tシャツ屋！

TAKA　「そこまでして金稼ぎたいか！」って。これから試合する人間が、つい何分前までお客さんの前でヘラヘラTシャツ売ってんスよ。やっぱり試合が始まるまでは客の前に出たくないですよ。前はやってましたよ、売店入って。でも去年、海援隊☆DXに入ってからは一切やめましたよ！　とにかく客との接触を一切避けてるんです。だからいまはファンサービスも全然してないですよ。昔はファンレターの返事書いたりしてたんスけど、今は全く書いてませんし。



——へぇ～、昔とは言ってもTAKAさんがファンレターの返事を書いてた時期があったとは（笑）。そういえば長州さんもファンと接触はしないですよね。でも、猪木さんの「つまみ出せ！」と長州イズムというのは質が違うような気がしますけど。

TAKA　だから、生意気だって言われるかもしれないけど、リング上の俺だけを見ててくれって感じですよ。だからヘタに近付くと痛い目にあうぞと。みちプロ自体がファンに近い団体だから、その中でも自分だけは客から遠い存在になろうと。それがホントのレスラーじゃないかなと思うんですよ。最近のレスラーはファンに近付きすぎですよ。

——でもね、ぶっちゃけた話、一番ファンにナメられる危険性を持ってるのはみちプロですよね。

TAKA　まあね。だから、みちプロは他の団体とは違うというふうに見られるし、やってる選手たちもそう思ってるかもしれないけど、俺はそれが腹立ってしょうがないんスよ！　だから、あえていろんな団体に出て同じなんだっていうところを見せたいし。

——TAKAさんはみちプロという団体にプライドを持ってます？

TAKA　なきゃいけないんでしょうけどね。ないですね！（キッパリ）。

——ガハハハ！　言い切りますね！

TAKA　みちプロに対してこれだっていうポリシーを持てないんですよ。「俺はみちプロの選手なんだ！」って（人前で）言えるもんじゃないなという。

TAKA MICHINOKU

——そこまで言いますか！　でも、サスケさんはじめ、他の選手はルチャとしてのプライドは持ってるんじゃないですか？

TAKA　でもあの人、ルチャできないじゃないですか！　あの人がやってるのはルチャじゃなくてムチャですよ！

——ギャグまで飛び道具ですね（笑）。しかし、みちプロの中でそういう考えを持つっていうのはしんどいですね。でもサスケさんなんかは考え方がどんどん転がっていくから見えにくいけど、サスケさんなりのプロレスに対するプライドは持ってると思うんですよ。自分の役割にシッカリとプライドを持っててその役割以上のものをやる欲も併せ持ってるからトップでいられるんじゃないですか。

TAKA　……。

——いっそのこと、みちプロから飛び出して強くなれる団体に行こうと思ったことはないんですか？

TAKA　考えたことはないと言えばウソになりますけどね。でも、みちプ

サスケがやってるのは
ルチャじゃなくてムチャですよ!!

ロあっての自分だと思うんで。みちプロのTAKAでありたい。よっぽどのことがない限り抜けることはないでしょうね。

——何なんですかね、そこまでみちプロにこだわるのは？

TAKA やっぱ、今は敵対してるけど、サスケと当時いた米河と俺の三人で、何もないところからサスケの家を改装して事務所を作って、三人で始めた団体なんですよ、みちプロは。だから思い入れが強いですね。やっぱ、敵だけどサスケのことは裏切りたくないなと。

——情の部分の絆ですね。しかし、心中引き裂かれるものありません？ プライドを持てない団体にいながら、その団体を起ち上げたのも自分だという。

TAKA ……プライド持てないですね、やっぱ。

——例えばね、また昔の新日本の話になりますけど、前田さんや佐山さんたちが抜けて、逆に新日本を批判したりしましたけど、でも、あの人たちは必ず「自分たちのいた頃の新日本は凄かった」って言うんですよ。そういう言葉を聞くと、ボクらはもう、たまらなく嬉しいというか、選手たちがプライドを持ってこそ、団体に幻想が膨らむんですよね。ボクなんか、当時の新日本はやっぱり最強軍団だって信じて疑わないですからね。

TAKA ……何とも言えないですね。

——団体よりも個人ですか？



現・バトラーツの田中稔との闘いを通じてUスタイルに目覚めていった。船木勝一との『夢狩人』もその一環。プライドが持てない団体を変えようとしている。

TAKA いちプロレスラーとしてのプライドしかないですね。思い入れはあってもプライドはない。

——うーん。例えば海援隊でガンガンやってますけど、海援隊がみちプロを乗っ取ると。そして、TAKAさんがやりたいようなスタイルでずっとメインを張ると。そうすると、お客さんが入らなくなるんじゃないかって思いません？

TAKA 入らないんじゃないですか。

——ハハハハ。じゃあ、みちプロを乗っ取るっていうこともできないなら、何を目標にするんですか？

TAKA そうそう。だからこの先、何をやっていいのかわからなくて。それに例えば「みちプロはお笑いじゃねえか！」って客にバカにされたとする。でも、デルフィンがそういうのをやってるから言い返せないんですよ！「そんなことはねえ」って言えないんですよ。だから、サスケやデルフィンには頑張ってもらわないといけないんですよ。なんでサスケからデルフィンの側へ移ったかというと、あの人の強さを知ってるから。あの人のケツを叩いて目覚めてくれればいいと思ったから。

TAKA MICHINOKU

それが今はこうでしょう。だから、あの人たちには頑張ってもらわないと俺たちもやりがいがないから。

——なるほどねえ。いやあ、でもルチャ専門家揃いのみちプロの中で、TAKAさんは5年10年後どうなってるか楽しみですね。もしかしたら大化けする可能性があるんじゃないですか。

TAKA いや、可能性だけじゃないですよ。化けますよ！ 頭の中ではこの先のプランが出来上がってるんで。自分の考えてるスケールはデカイですよ！ それも近いうちに必ず実現します！

——そのプランを教えてくださいよ。

TAKA それは今は言えないですね。みんな驚くでしょうけど。

——聞きたいなあ。

TAKA ただ、これだけは言えます。俺はゴキブリみたいにタフだから、どこへ行っても生きていけますね。

——ゴキブリ!!

TAKA いざとなったら人を喰ってでも生き残ってやるから!! それがヒントです。

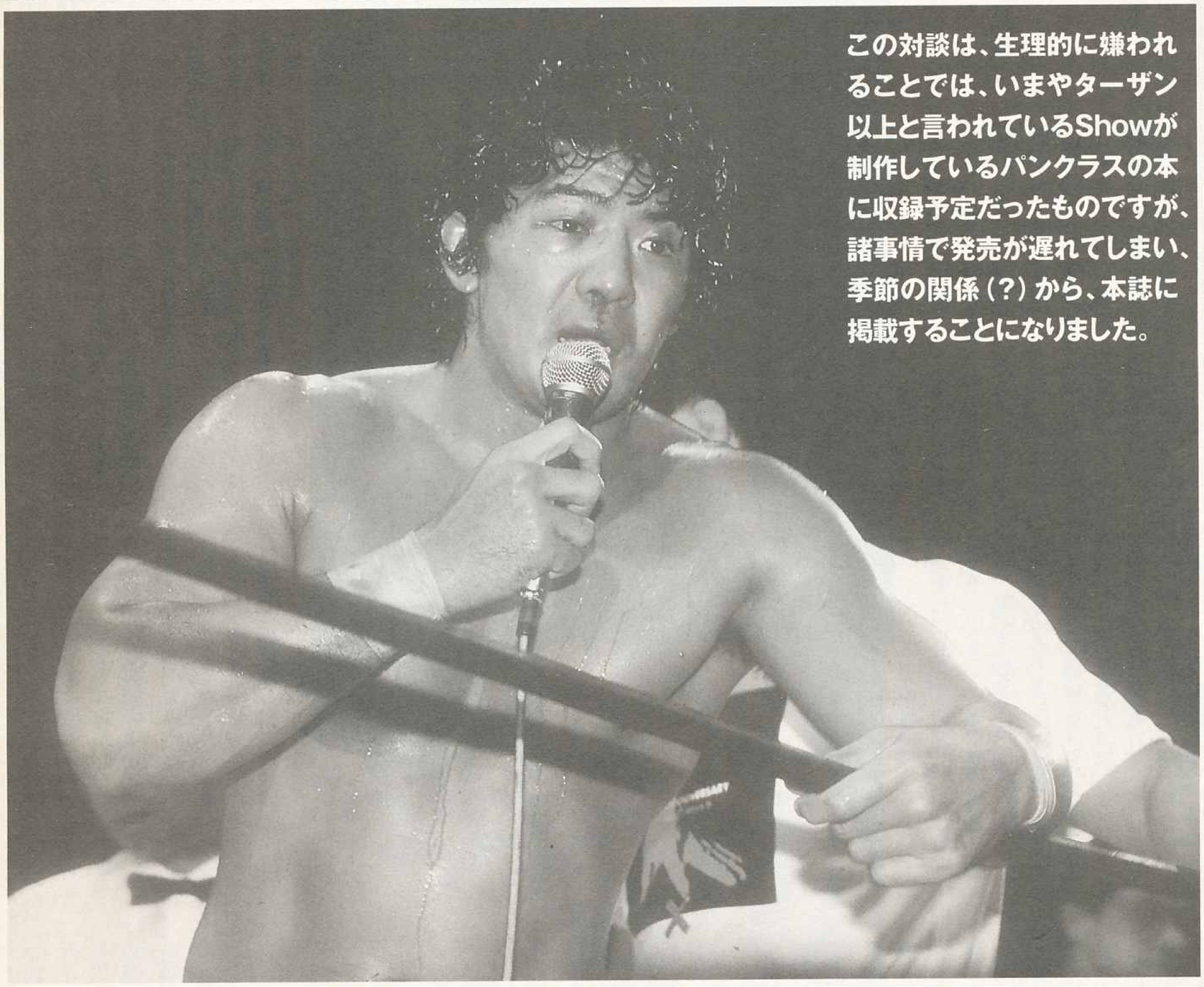
——ああ、それは楽しみだなあ。今日はどうもありがとうございました。

＜96年2月4日、水道橋グリーンホテルにて収録＞

Pride Renaissance '97

パンクラスとは何だ!

SECOND FILE ザ・対談編



この対談は、生理的に嫌われることでは、いまやターザン以上と言われているShowが制作しているパンクラスの本に収録予定だったものですが、諸事情で発売が遅れてしまい、季節の関係（?）から、本誌に掲載することになりました。

撮影／乾晋也
司会／Show

前『週刊プロレス』編集長・現亡霊
ターザン山本

『紙のプロレス』専属運転手
山口 昇

サスケがやってるのは

山口　最初に言っときますけど、ズバリ言って、僕はパンクラスはほとんど見たことありません！　旗揚げ戦とか初期しか見たことないです。でも、見たことなくても、失礼なことを言っちゃってもいいわけでしょ、今日は？

――そうです。山口さんとパンクラスについて話をしていると、パンクラスに足りないものというか、いつも面白い話が出てくるんもんで。

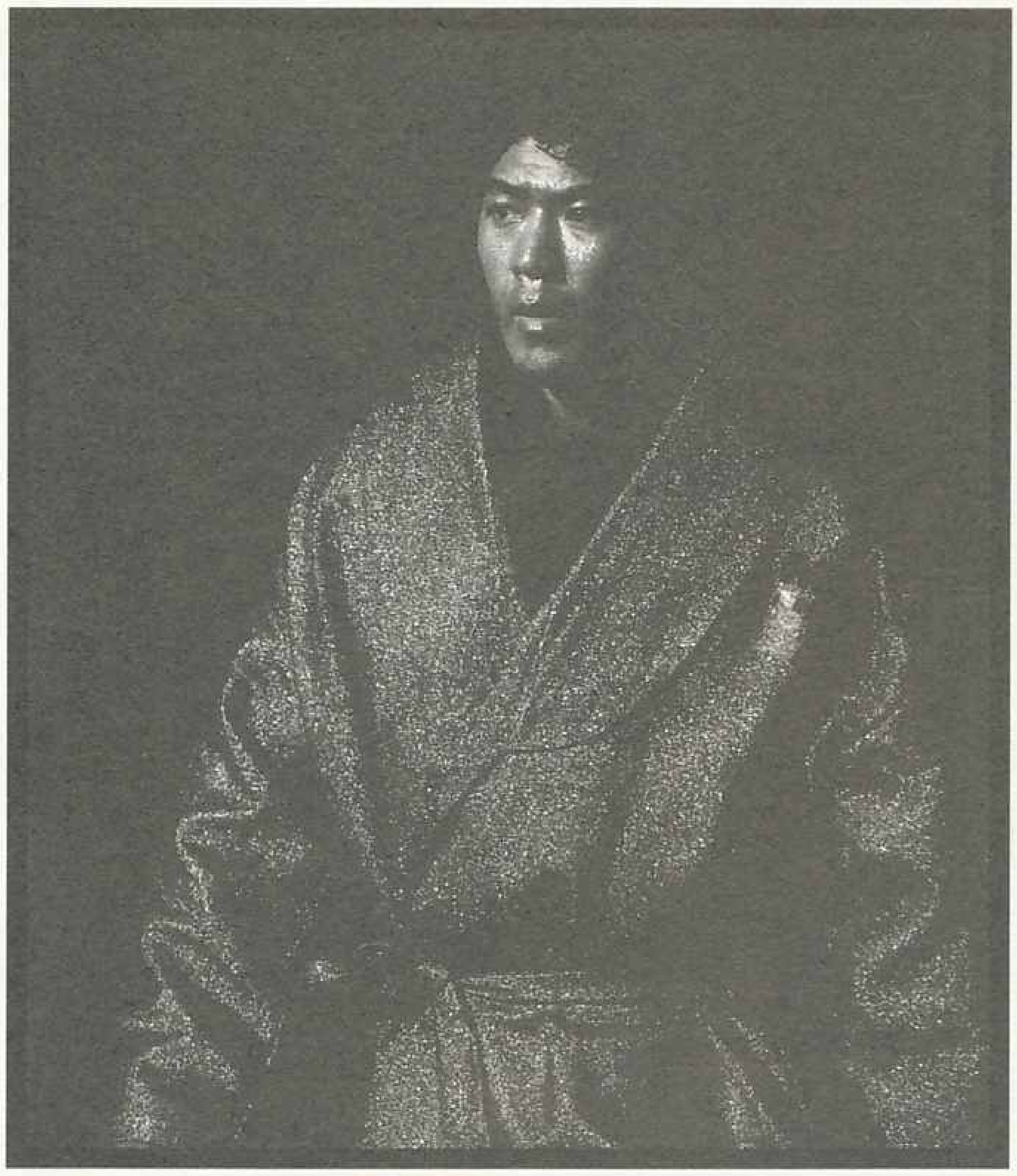
山口　質問！　パンクラスは失礼なことを言うと怒るの？

山本　いや、パンクラスは怒りませんよ。パンクラスは怒ったらパンクラスでなくなるわけです！

山口　うーん、いきなり結論だ（笑）。

山本　つまり、前田日明はいつも怒ってたよね。パンクラスは前田日明という人を反面教師にしているので、前田日明的世界というものは方法にとらないんですよ。パンクラスにとって一番重要なのは、「前田日明とは何か？」ということなんです。山口さんは前田日明が好きだから、パンクラスは好きじゃないと思うんだ。

パンクラスにとって重要なのは「前田日明とはなにか？」だ



山口　ああ、そういう意味でなら大嫌いですね、パンクラスは（笑）。

山本　ガーッハッハッハ！　あのー、僕は要するにマット界のシュート野郎だったから（笑）。シュート野郎の発言に対しては、普通は過剰に反応するわけじゃない？

山口　はいはい。

山本　過剰に反応するというか反撃してくるというか。あるいは噂をするというか、影でグチグチ言うとか。そういうのがいわゆるスタイルだったわけ。

山口　うんうん。

山本　そういうこともパンクラスの人たちはやりたくないというスタイルをとってるわけよ。それはポーズなのかスタイルなのかは知りませんよ。僕はそれをわかっているので、パンクラスにとっては思い切り、ズバリ、シュート野郎がシュートできたわけですよ。だから、船木が旗揚げ戦でシャムロックに負けた時、「弱いから負けた」と言ったわけよ。ね？

山口　実に気持ちいいですね（笑）。

山本　そんなこと、他の団体には言えないわけよ。そんなこと言ったら、出入り禁止もいいところだし、その人間をすごく気にするわけよ。ところが船木とか鈴木というのはそういう世界を否定していたので、「船木は弱いから負けた」と言ったら喜ぶんだよ。快感を呼ぶんですよ。

山口　快感を呼ぶ！　自虐的だなぁ、彼らは（笑）。

山本　普通、そんなことを書いたら、切った張ったの世界になるでしょう。でもそれに対して反発したら、自分たちのやってきたことが嘘になるから、僕がそう言ったら、それを素直に受け止めるという。または好意的に解釈するわけですよ。好意的に何ていうかさ、逆転する思考回路なんですよ。

山口　彼らは大人？

山本　彼らはメチャクチャ大人で、メチャクチャ子どもですよ！　要するに、そういう少年の心が360度回転しながらグルグルグルーッと回ってるのがパンクラスという世界。だから俺は、「声変わりしないウイーン少年合唱団」と呼んでるんだよね。

山口　ガッハハハハ！　パチパチパチッ！　グーです（笑）。

山本　声変わりしてしまったら、向こう側に行ってしまうわけよ。新日本プロレスとかアントニオ猪木とか前田日明の世界にいっちゃうの。声変わりを拒否して、声変わりをしないような声帯をしているのがパンクラスなんですよ。だから、ウイーン少年合唱団のように清らかな少年の声がバーッと響いちゃうわけです。僕と一緒ですよ。

山口　ピュアだと言い張りたいわけですか？

山本　俺は高～い声でしょう？　馳浩かターザン山本かなんだから。これが嫌なんだよね。この声の高さは（笑）。

山口　ガハハハ。実に不快でしょうね。世の人々は（笑）。

山本　不快ですよ～。

山口　要するに嫌われてるということですよね。山本さん的世界というか、猪木さん的世界というのは、必ず自然発生的に嫌われる。世間一般からね（笑）。でも、パンクラスという世界にはそれがないでしょう。

山本　パンクラスはそういった意味では行儀がいいから。"大人の世界に染まらないという世界"に生きてるんだよね。ひと言でいっちゃうと、プロレス

界の中で、「空気清浄器の世界」に生きてるんだよ。空気清浄器！　無菌状態なんですよ、彼らは。プロレス界というのは菌がウジャウジャしてるわけでしょ。

山口　はいはい。

山本　それこそ空気が汚れてるわけよ。その汚れてる中で自分の自我を表現したいとか、そういう気持ちを持ってる人間が少年心ですよ。それがアントニオ猪木とか前田日明だったわけ。そういった意味では山口さんのさっき言ったことは正しいかもわからんねぇ。

山口　じゃあ、パンクラスの人たちっていうのは自分を表現したいっていうのは持ってるんですか？

山本　持ってない。そういうパンクラス理念を実践しようとしてるわけです。空気清浄器の無菌状態の中では何をやってもいいんですよ。で、型にハマッたことしかやってないところにパンクラスのパラドックスがあるんですよ。一番重要なのは、何をやるかではなしに、無菌状態の世界をつくることと、空気清浄器をつくる。つまりパンクラスというハードが重要だってことです。ソフトは考えてないわけです！

山口　つまり僕がパンクラスをあまり見る気がしないと思うのは、ズバリ言ってそこに原因があるわけですね。

山本　その通りですよ！

パンクラスとは何だ！
ザ・対談編

山口　ガハハハハハ！　おしまいッ！

——ナ、ナハハハ、そんなあ。

山本　要するにハードをつくろうとしてるわけです。でも「パンクラスというソフト」はないわけよ。ソフトというのはどういうことかというと、ソフトとハードというのは全部、観客論から来てるんだよ。要するに観客が望むハードと、観客が望むソフトがあるわけよ。ね？　観客が望むソフトというのは内容、クオリティですよね。で、観客が望むハードというのは空間の心地よさですね。

山口　心地よさか。

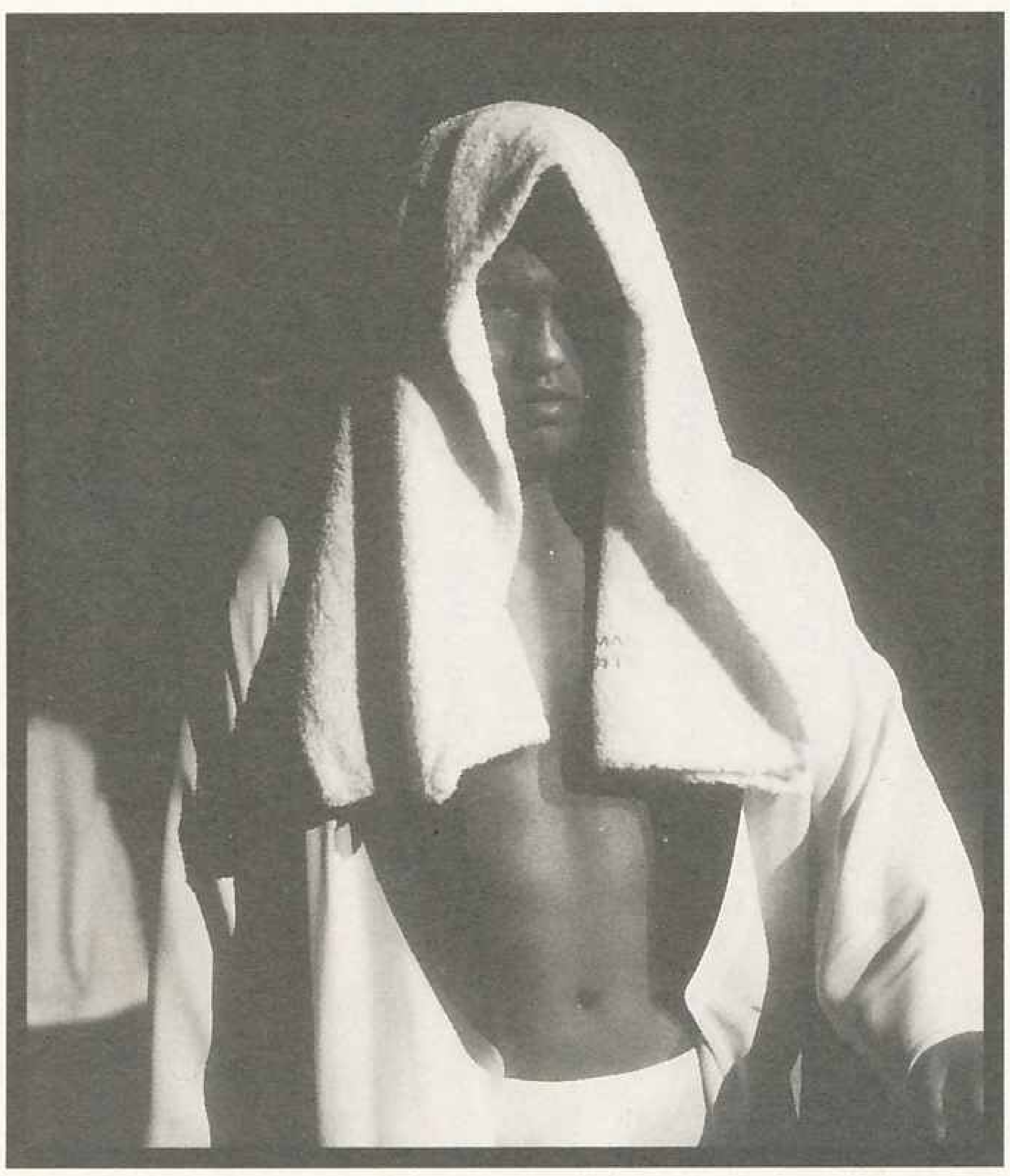
山本　つまり新日本みたいなメジャーやK—1というのはハードが優れてるわけよ。で、その中にも染まっていないので、一番マニアのファンとか、コアなファンが最後の駆け込み寺としてパンクラスを望んでるわけよね。

山口　本当は上質で刺激的なソフトを望んでるわけだ。

山本　ものすごーくクオリティの高いソフトを望んでるんだけど、パンクラスはそれに対して、ハードの面だけは提供したけども、ソフトの面で提供していないから面白くない。

山口　それですよね。

山本　それがパンクラスの最大の定義。ここの中に本質はすべてである。ハードはつくったわけ。パンクラスという巨大な空気清浄器を。でも試合の結果はこうなった時にこうなる。相撲だったら手をついたら負けとか、そういうソフトをつくれない、考えられないで空気清浄器の世界に固執してしまったから、つまらなくなったんです。



山口　その固執というのはどっから出てきたんですか？

山本　頭脳の限界からですよ！

山口　ガッハハハハハ！　船木個人のものですか、それとも全体のもの？

山本　船木個人。船木個人がひとつの頂点に立っていてつくっているから。つまり船木はね、パンクラスの最後の遺伝子なんですよ！

山口　最後の遺伝子？

山本　これはどういうことかというと、あのー、近親交配みたいなもんなんですよ。つまり種がなくなる動物というのは、遺伝子が二つとか三つしかないわけよ。それをかけ合わせていっても、雑種がいないから、その種は滅びていく。近親になっていって。そういう状態にパンクラスは陥っているわけ。これが一番マズイことなんですよ。

山口　はっはー。

山本　要するに、船木と鈴木しかいなくて、それが純化された空気清浄器をつくっているから、種としてのパワーというか、選手としてのパワーも落ちてるわけよ。そこに問題があるわけ。ハイブリッドというのは、これ「雑種」という意味でしょ？

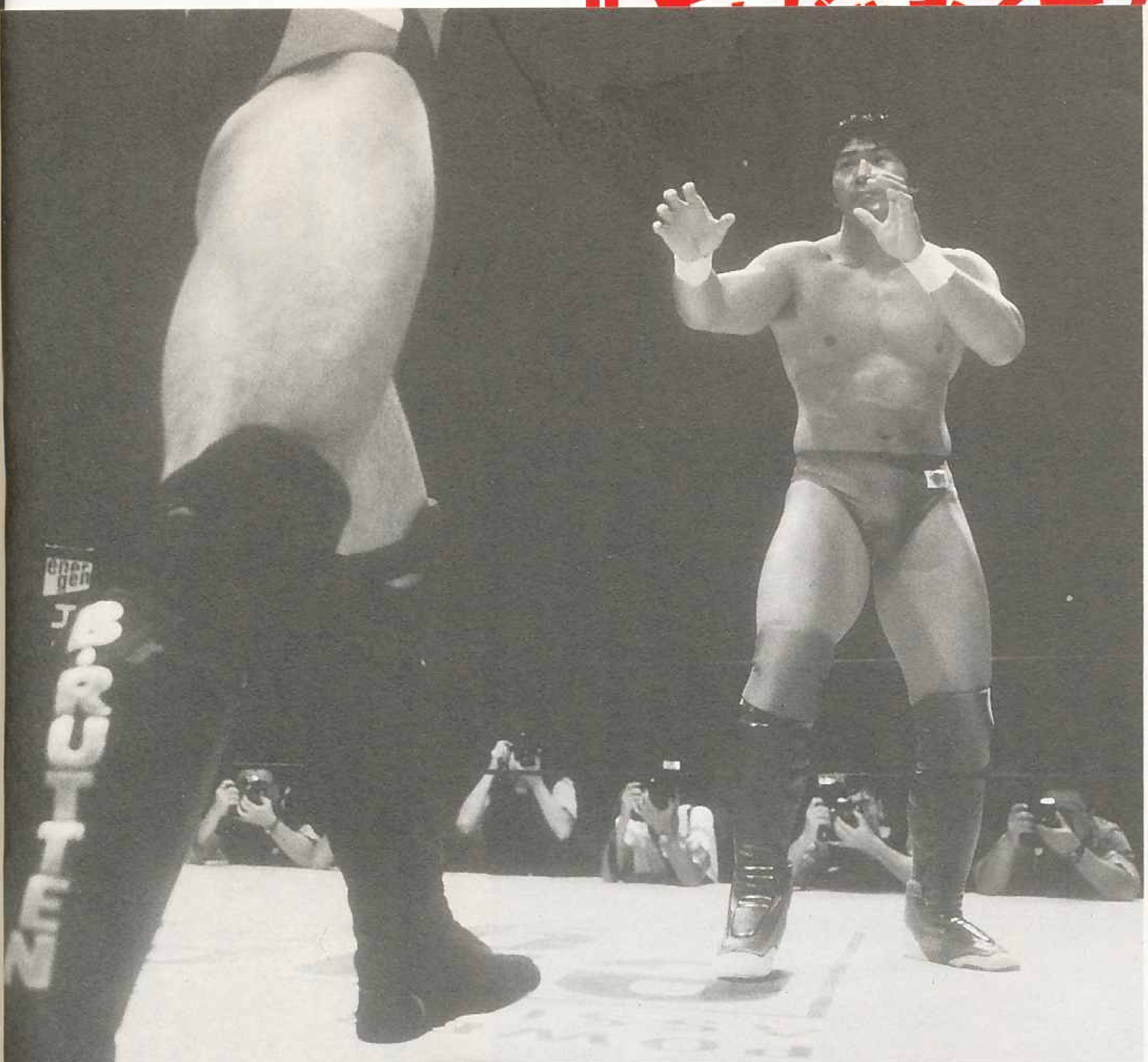
山口　昔そんな時計がありましたね（笑）。

山本　「雑種」というんだったら、もっと外にある違ったものと交配しなきゃいけないわけです。これを拒否してるでしょ。だから全部、種のパターンが同じになってきて、精子の力も弱くなって、どんどん先細りしていってるわけ。ここにパンクラスの一番の問題点があるわけよ。

山口　その代わりハードだけは肥大化してるわけだ。

山本　ハードというか、イメージだけは肥大化してるわけ、パンクラスという。そこにコアなファンは来てるんだけど、ファンというのはダイナミズムを求めるんだよな。ダイナミズムというか面白さ、それに答えられるものが全然な

サスケがやってるのは



いんだよ。いつも空気清浄器の中にいて、いい空気を吸って帰ってくるっていうだけ。ホントの頭脳を刺激するようなソフトというか、闘いがパンクラスにはないんだよ!

山口 先細りしないように船木は見えない部分で考えてるんだろうけど、どうしてもそれが見えづらいですよね。今は爆発させる時期じゃないという考えはわかるんだけど。

山本 もっと外に出て行って、新しい遺伝子を獲得していって、そしてハイブリッド、雑種というものをハイにするというか、高いレベルにしなきゃいけないんだけど、外に向かずに、内に向かってしまってるから、そこに先細りの論理ができてしまってるんだよ。

山口 つまり胎内回帰っていう部分に関しては、思いきり「少年心」を持ってるっていうことですか。

山本 そうそうそうそう。要するに、菌がウジャウジャしていたりとか、そういう汚れた世界から彼らは逃げ出してきたわけよ。逃げ出してきたから、その菌のいる状態の方が健康的だということがわからないわけ。

山口 フィットネスクラブの論理だ(笑)。フィットネスクラブっていうのはとても不健康な世界なのにねぇ。エアロビなんて見てるとブロイラー養成所みたいだもん(笑)。

山本 マット界はバイ菌とかバクテリアとかウジョウジョある世界でしょ? それをそっくり「逃亡者」になって、子どもの情景みたいな王国をつくったわけでしょ? 凄いことですよそれは。普通そんなバカなことしませんよ。

山口 その中で溜まっていく生理っていうのはないんですか?

山本 エ?

山口 そこで暴発するくらいの男の生理は溜まんないんでしょうかね。

山本 普通なら溜まっていくんだけれども、彼らはさらに自分の論理に擦り替えちゃうわけ。それがまた巧みなんですよ、船木誠勝というのは。そういう意味において、自分のストレスを擦り変えてしまうということは、(なぜか小声で)プロレスラーということだね。立派な、最高の。

山口 ストレス浄化装置を持ってる。

山本 そう! ストレス浄化装置というの持っているということは、もの凄いプロレス的センスがあるからできるわけですよ!

山口 そうですね。

山本 だから、船木だけがあの中でプロレスラーなんです!

——鈴木みのるは違うんですか?

山本 鈴木はヘタなプロレスラーですよ。鈴木っていうのはもの凄い宝なんだよね、パンクラスの中では。でもそれを船木が抑止力をかけて……。それはなぜかと言ったらね、鈴木には理論性がないから、理論の整合性が。船木は自分がつくりあげる世界を、とりあえずは理論整合型に組み立てようとしてるわけ。バベルの塔みたいに。

山口 バベルの塔!(笑)。

山本 その理論整合性というか、キチッとした世界をまったく鈴木はできないわけよ。それよりも鈴木みのるの生理が言葉をしゃべらせたりしてしまうんだよ。だから船木にとっては鈴木はパンクラスのいけない人間なんです!

——ナハハハ。いけない人間!(笑)。

山本 そう。だってその整合性を崩しちゃうじゃない。生理の方が表に出るから、鈴木というのは。前田日明という生理、新日本プロレスという生理に苦しんだんだから。あと藤原喜明の生理。だから船木にとって生理というのは抑えなきゃいけない。

山口 要するにわがままね(笑)。でも前田の生理と鈴木の生理っていうのは違いますよね。出てきてるものは。

山本 違うんだけども、元は一緒だったんです。鈴木みのるは体質が似てたわけです。ところが船木誠勝みたいに理論構築しないことにはパンクラスとは言えないんだよな。鈴木みのるは理論武装できないから。

山口 なるほどなぁ。で、そういった男の生理が噴出する世界が好きな山本さ

パンクラスとは何だ!
PANCRASE HYBRID WRESTLING
ザ・対談編

んが『週プロ』でパンクラスを応援した部分っていうのは?

山本 空気清浄器の世界が好きなんですよォォォ! ウイーン少年合唱団が好きなんだよォォォォ!

出前持ち 毎度ーっ! お待ちどお様ッス(けんちんうどんが到着)。

山本 ファンは船木誠勝が構築した、純粋培養された世界をこよなく愛してるんだよね。というのは、こちら(従来のプロレス)の方のいかがわしいものも、ホントのいかがわしさがなくなってしまったわけ。

山口 ホントのいかがわしさか!(笑)。まるでターザン山本みたいな(笑)。

山本 ホントは、いかがわしいのはもの凄く魅力あるんだよ。でもいかがわしい部分を全部削り取って、全部スポーツ志向に行ったでしょ? これがプロレスをダメにした最大の原理なんだよね。プロレスというのは、元々ややこしくて、いかがわしくてさあ、アバウトで、いい加減なもんなんだよ、とてつもなく。それを全部、青年将校みたいなのが出てきて、「ダメだ!」と全部削ってきたわけじゃない?

山口 青年将校! 誰だ?(笑)。

山本 それに対して、だったらこっちの空気清浄器の方がいいなと思って行ったんだけども、ダイナミズムがないわけよ。ダイナミズムというのはハレンチなことだからね。

山口 ダイナミズムとはハレンチ!(笑)。こういう問題になると相変わらず冴えてますね(笑)。

無菌状態の「空気清浄器」の中に彼らは生きている

山本 いかがわしいというのもハレンチじゃなくなったし、空気清浄器の世界もハレンチじゃなかったから、両方ともコアのファンがソフトで満足するところがなくなっちゃったわけよ。

山口 うんうん。つまり従来のプロレスもパンクラスもハードの部分だけで均一化しちゃってるわけだ。ソフトの部分が空洞化しちゃってると。

山本 そう! ハードしか残ってない。

山口 嫌な世界ですねえ、今のプロレス界は。

山本 もうノッペラボーですよォォ!

山口 ガッハッハッハッ! うどん伸びちゃいますよ。

山本 うん。

——でも、山口さんはパンクラスの旗揚げ戦を見てどう思ったんですか?

山口 衝撃はあったはずなんだけど、すぐに風化しちゃった(笑)。その後、見続けてないからかもしれないけど。

山本 ズズーッ、ズルズルーッ(うどんをすする音)、それはプロレスを深く愛してないからだ!

山口 ウッ! 核心を突かれた(笑)。

山本 キミは単に愛してないんだよ〜!

ヒッヒヒヒ! 愛がないからパンクラスの面白さがわかんなかったんじゃない?(不気味な笑み)。

山口 でもまだ旗揚げ戦の頃はソフトとハードの関係が、微妙な関係を保ちつつ爆発してましたよ、今よりは。

山本(うどんを食べるのをパタッとやめて)たまにはいいこと言うねえ!その通りなんだよ! まだ意識化されてなかったから、船木の中にも鈴木の中にも。どういう道を歩いているのか方向性もわからないし、マジョリティだったから。

山口 混沌としてましたよね。

山本 そっ! カオスの状態だったから。固まってないわけ、自我が。

山口 で、第二戦、第三戦とだんだんとつまんなくなってきてる。

山本 ズルズルーッ(ジャケットの袖で口を拭く)。

山口 プロレスというのは混沌とした状態が面白いんだけど、スキャンダル排除主義なんですよね、パンクラスは。

山本 ズルズズズーッ。うん。いや、船木たちだって、凄いスキャンダルだよ! 船木はバス・ルッテンと闘って(96・9・7、東京ベイNKホール)、ボロクソになってるのに、勝った人間よりも目立ってマイクパフォーマンスするんだよ! ハッキリ言ってこれは一大スキャンダルだよ!

山口 ああ〜、パンクラスの世界では。

山本 ズルズズズーッ。これはハッキリ言って、パンクラスの世界から言うと張り付け行為だ! 張り付けにしなきゃいかん。獄門台に昇らなきゃ!

山口 大罪を犯してるわけだ(笑)。

山本 大罪もいいとこですよォ。負けた人間が勝った人間よりも目立って、マイクでメッセージを言ったわけ。これはある意味でパンクラスという空気清浄器をものすごく汚したんだよな。

——ああ〜、そうか。

山本 あれは大罪!「パンクラスの大罪」と書かなきゃ。絞首刑、さらし首ですよ(笑)。違う? ウイーン少年合唱団としてはあるまじき行為ですよ。

山口 確かに純化されたスポーツの中では、最大のスキャンダルですよね。

山本 大大大スキャンダルですよ! 隠されたスキャンダルがビュ〜ッと出たんだよ!

山口 俺はあの興行を見に行ってないんですよね。ただ確かにパンクラスではスキャンダルかもしれないんだけど、大きなプロレスというフィールドから見ると、ものすごくちっぽけなスキャンダルに見えちゃうんだよな。

山本 ズルズ、ズ、ズズーッ。いや、それは子どもが学校の先生とか、お父さんお母さんとか親類にエエカッコして、「一等賞になる」とか、「駆けっこで一番になる」と宣言していて、負けた時の格好悪さですよ。それが船木の中で「うわあ〜、カッコ悪いぃ!」となったわけよ、ものすごく。よく少年時代にあったよね、そんなの。

山口 なるほど。恥ずかしいんだ(笑)。

山本 「うわあ〜ッ!」となった。負けたとか、ドベになったとか、自分が好きな女の先生の前で恥をかいたとか。同僚の前で恥かいたとか。その時のもの

サスケがやってるのは

凄い気持ちってあるじゃない？　もうそれを再現してるわけよ、船木は。ウヒャヒャ！（パチパチと手を叩く）。

山口　ガハハハハハ！

山本　そん時にどうしようもない、いたたまれない、そん中で消えてしまいたい、恥ずかしいとなった時にあれを船木はやったんだよな。

山口　ああ～。じゃ素敵なことじゃないですか、あれは。

山本　だからウィーン少年合唱団なんですよ。

山口　う～ん、そういうふうに聞いてると素敵だねえ。

山本　そう考えると、ものすごく魅力的でしょ？

山口　う～ん。ものすごく面白いね。

山本　そうやって解釈しなきゃあ。修行が足らないよ、キミはぁ。物事を肥小化してるよ。

山口　ガッハッハッハッ！　これは一本とられましたね（笑）。

山本　だって、みんな勝つと思って見てたんだから。チャンピオンになると思って。船木の一生で一番カッコ悪かったことなんだから、あれは。

山口　なるほどねえ。

山本　うん。一番みじめでカッコ悪いこと。血を流して傷だらけで負けて……。史上最大、もう地球規模的な彼の恥をさらしたわけよ。

山口　地球規模的な恥！（笑）。でも今の話を聞いていると、パンクラスってすごく面白い団体ですよ（笑）。

山本　面白いですよ、頭のいい人間にとっては。頭のよくない人間には何でもない。キミですよ！　ウヒャヒャヒャ（パチパチパチと手を叩く）。

彼らは、「声変わりのしないウィーン少年合唱団」です

山口　喜んでるよ（笑）。

山本　勝ったあ～ッ！（と、いきなり立ち上がり叫ぶ）。

山口　お、おい、ちょっと待て！

山本　勝利者だあ～ッ！　もうこれは終りだあ～！　ガッハッハッハッ！

山口　ちょ、ちょっと待て、この対談は勝ち負けなのか？

山本　バンザーイッ！

山口　クッソ～！　よ～し、わかった、俺は無効試合に持っていくぞ！

山本　もう遅いですよ～！　ハハハ！

山口　プロレスに遅いもクソもない！

山本　ズルッ、ズズズ、ズズーッ。味が濃いーな、これ。味が濃いとダメなんだよな。薄くしろ、もっとお（シャツの袖口で口を拭く）。

山口　プロレスは味が濃くなきゃダメです。で、山本さん、船木たちが美学の部分を打ち出したいと思ったら強くならなきゃならないですねえ。

山本　そういうことですよ。外に向かって強くならないと。自己満足に陥ってるとダメだよ。「強い」ということはね、自分より外側に強い人間がいるということがわかってはじめて強いと言えるんだよ。

山口　そうですね。

山本　世界には自分よりも強いヤツがいて、もの凄いヤツとか、偉いヤツがいるとわかった時にはじめて「強い」という言葉が意味を持つんだよ。それがわからない人間は、まったく「強い」と言っちゃいけないんだよ。

山口　船木とか鈴木はそれをわかってないんですか？

山本　わかってない!?

山口　ぶぇっ！　わかってない

山本　半分わかってるんだけども、考えないようにしてるんだよな。

山口　認めたくないんだ。

山本　そこの部分だけが彼らの卑怯なとこだよ。卑怯な存在だよな。

山口　それに対しても彼らは理論武装はしてるんですか？

山本　一応してるんだけども、俺から見たらスカスカに見えるわけよ。これは卑怯だな、ということが（ニヤリ）。「強い」ということは、負け戦に出ていく根性があるということなんだよな。でも、勝ち戦にしか出ないということが一番卑怯なことだよ。負け戦に出ようとしてないわけ。

山口　勝ち戦に出て行って、負けちゃうからダダをこねるわけだ（笑）。

山本　そうそうそう！　勝ち戦だなあと思って負けたから（笑）。勝ち戦だと思って負け続けたのが鈴木で、一個だけ絞ってやって、その一個に船木は負けたんだよ。ガッハッハッハッ！

山口　喜んでるよ（笑）。

山本　……ボツだなあ、この企画は。調子に乗りすぎた！　ちょっとシュート野郎がフライングしてしまった（笑）。

山口　ガハハハ。目も当てられないな、そのシュート野郎のフライングっていうのは（笑）。プロレスラーがフライングしたら面白いけど、シュート野郎がフライングしたら見苦しいだけですよ（笑）。自爆です。ガッハッハッハッ！

山本　……………………。

山口　勝ったーッ！　勝ったぞーッ！──これは何だ一体、もう（笑）。

山本　……チンケな勝ちだなぁ、おまえの勝ちはぁ。クックック。

山口　3本目はお先にどうぞ（笑）。

山本　だから、子どもの世界の中にはスキャンダルはないよな。大人だからこそスキャンダルがあるわけよ。欲望とか野望とかうずまいてるんだから。それさえも彼らは濾過しようとするから、すべて。濾過装置なんだから。

山口　それは子どもに対して失礼ですよ。子どもが一番スキャンダルを求めるんですから。

山本　うん、ホントはね。

山口　子どもが一番、砂場の中でさえスキャンダルを求める存在なんだから（笑）。だから、子どもっていう部分でも純化してるんですね。

山本　そう、それさえも濾過してるわけ。パンクラスというのは。

山口　童話の世界ですね。

山本　そうそう。でも、童話というのはホントは残酷なんだよな。

山口　なるほど。その残酷さがチラチラ垣間見えれば、俺なんか見に行くんだけど、見えないんだよね。

パンクラスとは何だ!

PANCRASE HYBRID WRESTLING

ザ・対談編

山本　つまり今、現実的に成功してる新日本なんかを超えなきゃいけないんだよな。そういう発想がないんだよ。「21世紀のプロレスだ」と言った場合には、今ある現実的な新日本を超えなきゃいけないんだよ。現実的成功を超えられる？　超えられないでしょ。

山口　超えられないですよね。じゃあ山本さんの中では、今のパンクラスの方向性は正しいと思いつつも、今のまんまじゃダメだと思ってるわけですね。

山本　ダメ。

山口　ですよね。どういうふうに変えていったらいいと思ってるんですか？

山本　いや、別に変えなくていい。そのまま存在してた方が楽しい、俺は。ありのままでいい、ありのままで。船木だけを見つける、見つめられる楽しさってあるよね。

山口　ああ、なるほどね。そうか、それは鈴木は面白くなくなりますね。

山本　脱落していったね。鈴木は船木の世界から脱落していったんだよ。

山口　パンクラスからじゃなくてね。

山本　うん。船木の世界から取り残されたわけね。

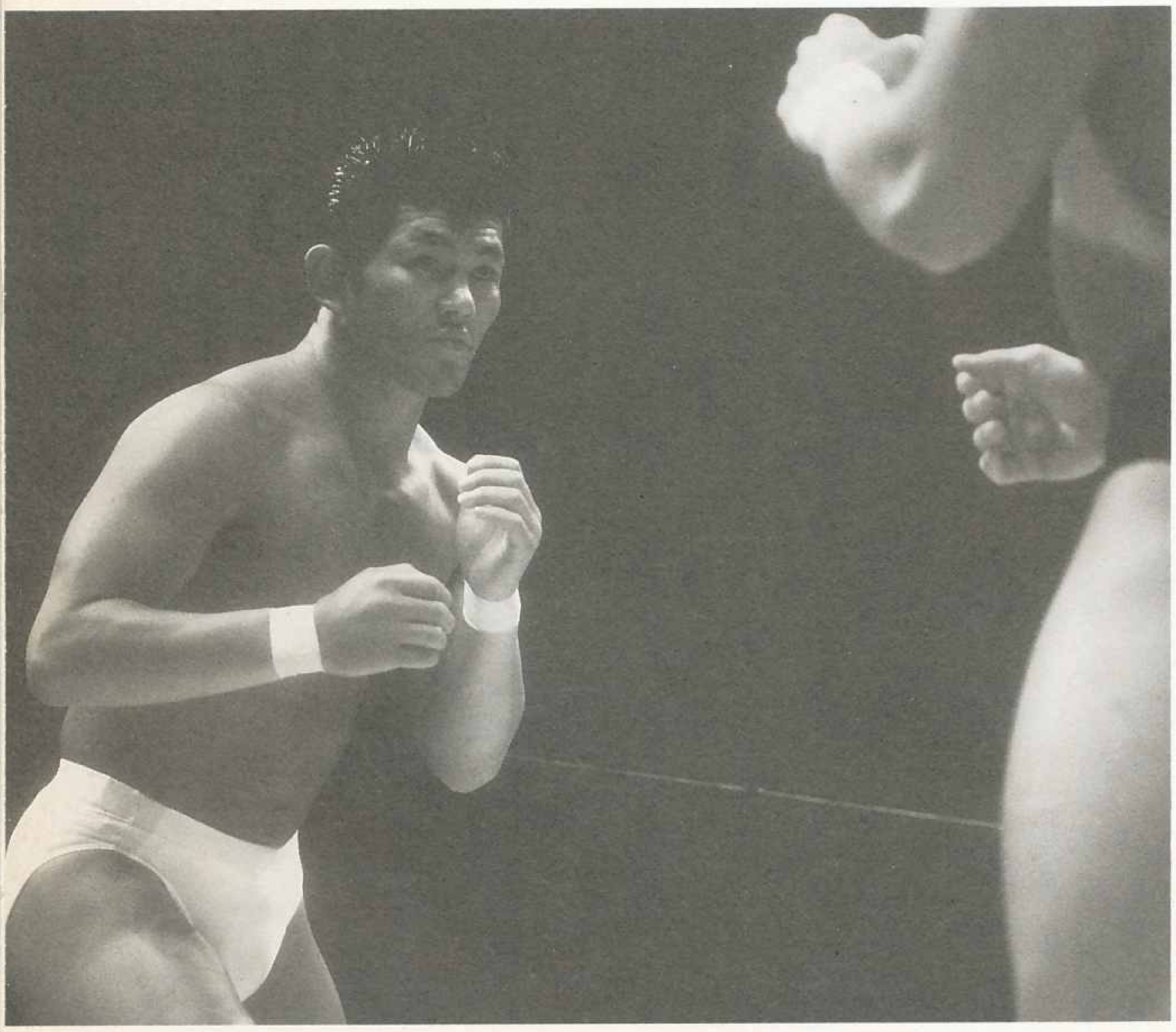
山口　船木っていうのは頑固者ですね。

山本　したたかですよ。全部それを視界に入れてるもん。俺がこんなことを考えているというのも視界に入れているという意味では、俺よりも上手かもわからん。

山口　まだまだ船木には謎があるということですね。

山本　もの凄くある。まだまだ要するになんていうかさ、地下に隠れてる。埋蔵量があるんですよ。これからひとつひとつ進む世界を見ながら、パンクラス的な方向性を考えようとしてるんだよね。こういうアクションがあって、アクシデントがあって、こういうものが起こったら、じゃあどうしようかということをまた考えるんだよね。その船木が俺は好きなんだよ。

山口　ものすごく頭のいいレスラーじゃないですか。



山本　ハッキリ言って、マット界で一番頭がいいかもわからんよ。マスコミ的センスを持ってる人です。

山口　で、つまり船木は自分の人生全部に対して、整合性を持ちたいということですね。

山本　そう。それにこだわっていて、整合性を持ちたいと思ったら、努力しなければいけないでしょ？　努力家ですよ、船木は。でも彼らは迷路にハマッてるんですよ！　こういった世界に、たましてしまって、迷路にハマッたわけよ。もう抜け出せないんだよ！

山口　でも、迷路にはまりこんだという泣き出しそうな心情を表現しませんね、リング上で。

山本　それを表現してくれたら面白いんだよ、ダイナミックに！　さらけ出せばいいんだよ、自分を！

山口　さらけ出さない美学があるんだよね、パンクラスには。俺はそのさらけ出さないところがしゃらくさい。どっかカッコつけてる（笑）。

山本　さらけ出さないで空気清浄器の無菌状態の世界をつくったんだよ！

山口　でもさ、山本さんは雑菌がたくさんウヨウヨいる世界と、パンクラスのような無菌状態の両方が好きだと。これはどういうことなんだろう？

山本　あのね、それは贅沢に生きるという感覚！

山口　あ、贅沢か！　それだ！（笑）。

山本　そう。両方好きになる。で、片一方だけ好きになるのはダメなわけね。その反対の部分も好きになるというのが僕のアイデンティティです。プロレスはとてつもなく贅沢なものなんだよな、本来。

山口　なるほど。やっぱり面白いなあ、亡霊と話すと（笑）。

山本　でもね、人間というのは免疫というのがあるんだよね。自らの免疫が生物の根拠なわけよ、一番重要な。この世界で生きるということは、雑菌とかバクテリアと全部同居して、免疫体をつくるわけですよ。（突然小声になって）それを拒否したんだよなぁパンクラスは。そうするとダイナミズムが生まれない

サスケがやってるのは

パンクラスとは何だ!
ザ・対談編

わけ、生きていることに。免疫そのものを拒否しているわけですよ。プロレスというジャンル、プロレスという世界に対しての免疫性というものを。だから彼らがパンクラスの世界からポーン！と他の世界に行った場合には、免疫がないから……。

山口 あっという間にアウトですか！

山本 アウト！

山口 そこに逞しさがないですね。

山本 うん、逞しさがない。でも、プロレスラーというのは逞しいとか、タフであるとか、打たれ強いという世界で成り立ってきたわけじゃない。その中でひとつの論理性というか、美学で成り立ってきたわけでしょ？　そういうものと違う世界をつくったという意味では日本プロレス史上、稀有な団体だよね。それをUWFがやろうとしたんだけど、UWFには欲望が渦巻いてた。そういうものを見てきてしまったから、空気清浄器をつくろうとしたんだよ。

山口 ははー。

山本 裏切られたんだよォ。挫折したんですよォ、絶望したんですよォォォ。その意味では俺といっしょだ！

山口 なんでやねん（笑）。

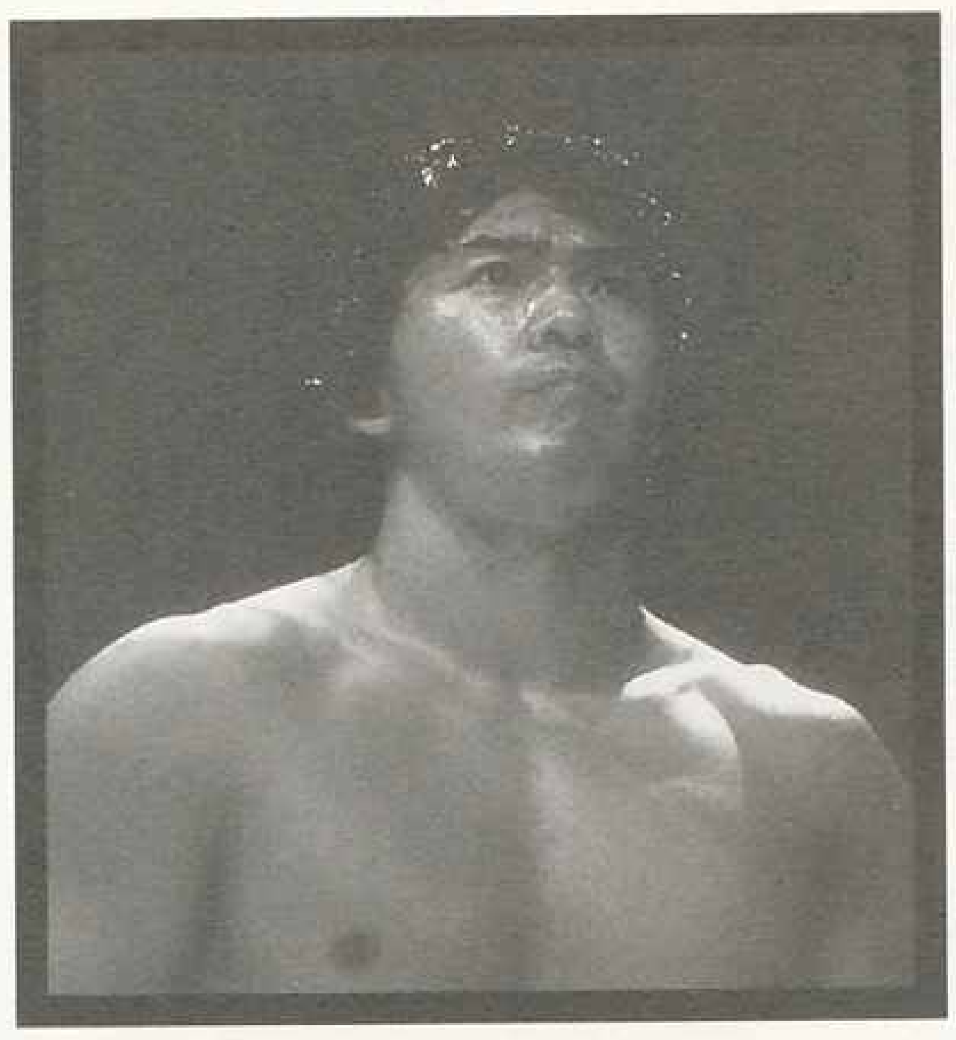
山本 いや、俺もこの世界に絶望してるんだから。

山口 ま、山本さんのことはどうでもいいですけど、船木の整合性が崩れないかなあと思ってしまうのが僕の欲望なんですよね。

山本 うん。そういうところが山口さんのセンスのいいとこだね。

山口 ダハハ。こういうこと言ってるから嫌われるんですけど（笑）。今のパンクラスを否定するとかそういうことじゃなくて、その整合性が破れた瞬間に、もし船木が自分をさらけ出したら、一体どんな刺激的なことをやってくれるんだろうっていう期待感があるんですよ。でも船木っていうのは美学的には我慢の美学ですよね。

山本 うん、我慢の美学。いわゆる辛抱強い。青森県出身ですよ。



山口 同じ東北出身でも、そこがグレート・サスケと違うところで（笑）。

一同 ガッハッハッハッ！

山口 サスケもある意味では我慢する美学っていうのを持ってるんだけど、船木っていうのは頑なに我慢するじゃないですか、そこが凄いなと。サスケは野グソをする快感を知っちゃってるわけですよ、野っ原に。やっぱ東北だから野っ原がいっぱいあるから（笑）。

山本 サスケっていうのはウンコをしまくる男だ。野グソをしまくる男。

山口 でも船木は野グソを我慢しなきゃいけないという美学があるんだよな。

山本 いや、人に見られちゃいけないわけです。

山口 あ、なるほど。

山本 サスケは見られても、しますよ。野グソを観察しますよ、こんなクソが出たっていうので。

山口 ガッハッハッハッ！　その野グソを乾燥させて売っちゃうからな、サスケは（笑）。そこら辺にもサスケ流の刹那を感じて、俺はサスケが好きなんだけどね。

山本 あのー、野グソをするからサスケは覆面レスラーになったわけ。

山口 ああー。

山本 船木は覆面レスラーになる必要がないほど、ハンサムだよな。ハンサムと非ハンサムの違いですよ！（笑）。

山口 ああ、なるほどね。ハンサムと非ハンサムで、パンクラスとみちのくプロレスに分かれちゃうわけだ（笑）。

山本 片一方は覆面を被らなきゃいけないわけ。でも、船木には覆面を被る必要がない苦しさ、つまり覆面を被れない苦しさがあるわけよ、パンクラスには。というより船木には。

山口 でも、そこで面白いのは、船木はマスクマンが大好きで、マスカラスからプロレスに入って、タイガー・マスクが大好きで、海外遠征に行った時には、自分でデザインしてまでマスクマンになろうとしたわけですよ。

山本 マスクマンになった時には自分を消すことができるでしょ？　その自由がほしいわけよ。自分を消すという。

山口 だから船木は野グソをした時の快感も求めてたということですよね。

山本 うん、ホントは。それをやらないというところに、要するに船木はダンディズムで、サスケは非ダンディズムですよ。結論から言うと船木というのはダンディズムだから、マスクも被れないわけ。

山口 うんうん。でもサスケの非ダンディズムと船木のダンディズムと、両方好きな俺もやっぱ欲望が深いんだなあ（笑）。はじめて欲望が深いって俺はわかったよ、今日。

山本 ウヒャヒャヒャ。

山口 でも、ここが問題なんだけど、船木に野グソをさせてあげるようなファンはつくれないんですかね。

山本 そういうことだね、結論は。船木に野グソさせろ！

山口 だから、パンクラスが今つまんないのはファンがいけないよ。船木とか鈴木に思い切り野グソをさしてやりゃあいいんだよ。それと「野グソをさせてやれ！」っていうキャンペーンを張るマスコミがなくなったのが良くない。ってことは“ピー”が一番良くないということです（笑）以上！

山本 そういうことですよ～。

※この対談は、96年11月4日、もちろんアルティメット・フィーバーが起こる前に収録されたものです。

プロレスについて考えることは狂喜である

復興！「ザ・ドマイナーパワー」

山本隆司

1997年2月7日、私にとってその日は運命の1日となった。長年、お世話になったベースボール・マガジン社と、完全に訣別することになったからだ。

残念！

無念！

仕方なし！

結果として私はやっと〈自由の身〉になることができた。これで「野に放たれた狼」にならなかったら、私はそこまでの人間だったということである。

怨念！

復讐！

それもまた楽し！

『週刊ファイト』の記者応募に受かりプロレス記者になったのは、今からちょうど20年前の1977年2月だった。そこで〝変人編集長〟の井上義啓氏に出会ったのが、私を狂わせ、そして勢いづかせた。

奇人！

変人！

一代限り！

君はＩ編集長を

見たか？

ＮＨＫの看板アナウンサー、草野満代が退局した。激怒したＮＨＫ。あれはとてもみっともなかった。辞めるものは辞めるのだ。私だってベースボールを辞めた。



▶Ｉ編集長を見たばかりに人生が狂ってしまい、とうとう「暴走亡霊」と化した山本氏。されど心にドス！　である！

メシア（救世主）だった私でさえ辞めるはめになるのだから、草野さんはＮＨＫなんて辞めますよ。やっぱり真実は一つしかなかった。

「さよならだけが人生だ」

このせちがらい世間に〝さよなら〟以外に何があるというのか？　もし〝さよなら〟のほかに何かあるとしたら、それは「出会い頭の一発…一期一会」しかない。

辞表！

絶縁！

すべては

夢のまた夢！

人の出会いなんて〝交通事故〟か袖振り合うも他生の縁ぐらいのもの。「傷つきあうこと」を共有することで、人の出会いは始まり、終わりも始まる。

それを考えたら〝さよなら〟なんて誰だってできるのだ。

未練！

惜別！

みんな捨てた！

私は一匹の働き蜂だった。会社に腕を買われて雇われたわけだから、優秀である以外に私の存在理由はない。

そのかわり私は自分の懐にドスをしのばせて、いつでもそれを取り出す覚悟を決めていた。もうその必要はなくなった。

会社が〝世間〟に成り下がってしまったら、私の方から「ハイ、それまでよ」といってさよならしたのだ。

働き蜂！

一寸の虫！

どこかの馬の骨！

されど

心にドス！

1996年3月。新日本プロレスから『週刊プロレス』が取材拒否を受けると、ベースボールは〝世間〟の顔になった。

もはや終わりである。

何が終わりなのかは私の知ったことではない。一つだけ明らかなことは新日本とベースボールが、お互い世間同士でバッチリ握手して、ターザン山本をこの世界から葬ったことである。

そうだ、新日本とベースボールは共犯者だったのだ。両者の利害は一致した！

世間からみて私は〝悪〟だった。何も私は悪いことをしていないのに〝悪〟となってしまう。世間では「無実の悪」が必要なようである。それを必要悪という。

20年間、どっぷりと私はプロレスの世界につかってきた。もはや〝回れ右〟するしかないのか。あらゆる〝世間〟に対してもし〝さよなら〟がいえるとしたら、みんな〝回れ右〟して「悪よ、こんにちは！」といおう。

それが私のメッセージである。ガオー！

別章＝時代の中の落武者！〈第1回〉

男の必読書

「女子供は読まないでも結構！」という男尊女卑イズム溢れる、男のための書評コラム。

第一章

作・吉田豪

◆

思えば劇画王・梶原一騎が志半ばで急死した直後、実弟として知られる我らが真樹日佐夫先生はその名もステキな『さらばアニキ』という自伝的傑作劇画を発表したことがある。

内容はズバリ、葬儀の席で真樹先生がアニキとの様々な思い出に心巡らすというものなのだが、その思い出の中身がこれまた尋常じゃない。

なにしろアメリカで兄弟揃って現地女性とチョメチョメ(山城新伍調)していた最中、いきなり文句を付けてきた売春宿の黒人用心棒を真樹先生がカラテ・アクションで怯えさせたという素晴らしいエピソードを、「俺たち兄弟の女好きもこれに極まれりだな。黒人相手の売春窟への探検も辞さぬとは…」なる台詞と共に紹介したりしているのだから、もう強烈すぎである。

良くも悪くも一般常識を持つ者であれば、よりにもよってこんな赤裸々な告白を、ましてや兄弟の死亡直後に決して公表しないものだと思うのだが、真樹先生はその手の下らない常識に縛られるごときチンケな男なんかではない。

格闘家は非常に非常識でなければいけないと、これまた我らのアントニオ猪木も身体を張ってボクらに教えてくれたように、真樹先生もアグレッシブな己の生き様によって梶原劇画に匹敵するファンタジーを生み出してきたのだ。

「ああいう思い出は強烈に残ってるんだよ。要するに一般のイメージから言うと、悪さしたみたいな方がな。綺麗事を語ったってしょうがねえしさ、ガハハハハハハ!」(真樹先生・談)

やはり男は、こうありたい。

ボクは常々、格闘家たるもの全てに強くなければいけないと主張し続けているのだが、真樹先生はステゴロ(素手での喧嘩)にも酒にも女にも強く、さらには原稿まで書けちゃうんだから、まったくもって文句なしなのだ。

で、真樹先生の新作『兄貴』(有朋堂)である。

「石原慎太郎の『弟』の向こうを張ってみたんだよ。並べて置けば、こっちもベストセラーになるんじゃねえかってな、ガハハハ!」

石原兄弟をライバル視し続けた真樹先生は本書をこう語るが、とりあえず説明しよう。



▲『現代カラテマガジン』の裏表紙では、いついかなるときも真樹先生が某社のプロテインをお奨めしていたものである。

要するに、これがまたアニキが急死した直後、日本文芸社から出版されていた梶原一騎物語『荒野に一騎咆ゆ』(かなりレア)に書き下ろしを100枚追加したニューバージョンなのだ。

激レアな真樹先生本を怒涛のように再発しまくるだけでなく、ターザン山本やゴジン・カーン(『プロレスを10倍楽しく見る方法』のゴーストライター)らの著書まで発売してしまう有朋堂恐るべし、であろう。

ここでも真樹先生は、いわゆる「悪さした」話ばかりを中心に、偉大なるアニキを語り尽くす。それも徹底的に。

たとえば極真総裁・大山倍達に同行したというラスベガスでの思い出にしても、真樹先生にしてみればアニキと二人でコールガールを呼び、「ジャンケンで相手を決め、ベッドを並べての兄弟タッグと洒落こんだ。日米決戦だ」と相成ったことこそが強烈に残っているのだから。

そういえば、これまた我らが猪木の芸風も実はこんな感じだったりしたものである。

シンコーミュージック発行の単行本『悶絶!プロレス秘宝館』でもすでに書いたことなのだが、10数年前に猪木が『エモやんのああ言えば交遊録』に出演したときのことである。

「猪木さんがアメリカ行ってたのって20歳ぐらいでしょ。こう、カッカしなかったの、下半身は」

身ぶり手振りも交えて下品な質問をぶつけるエモやん(スポーツ平和党での元相方・江本)に、猪木はアントン・スマイルでこう答えた。

「しましたよ、カッカ(アクション付)!ホテルに着いたらすぐベルが鳴って、玄関に出てみると非常に素晴らしい金髪女性がいるんですよ。何かと思えば『100ドル』って言うから『駄目だ』って言ったら、50ドル、30ドルって下がってきてねえ。お相手したら毎日きちゃって非常に困りましたというか」

まさに下半身も「元気ですか!」な猪木。

さすが『YOU』(NHK)出演時、「ヒーローの条件は強いこと」と言われれば「俺も女性には強いけどね、ムフフフ!」と言い出し、再婚時の記者会見でも誰も聞いてやしないのに「俺はプロレスだけじゃなく、あっちの方も強いんですけどね、ムフフフフ!」なんて言い出しただけの男である。元・美人秘書には売春を告発されてたが。

必読!!



▲まさに男の必読書というべき梶原一騎没後10年追悼記念作品。読まずに死ねるか(by陳)！発行／飯倉書房 発売／有朋堂 定価1800円。



▲大山総裁が、梶原一騎が、そして真樹先生が監修していた男の雑誌『現代カラテマガジン』。初期に連載されていた真樹先生の小説『青春賭博』の煽り文句は「空手・プラス・ジャズ!オール読物新人賞作家が描く鮮烈の青春――」であった! さすが真樹先生、横浜の軍人相手のナイトクラブで用心棒兼バンドマンをしていただけのことはある。

なお『紙プロ』の新人・坂井結核とやらも面接の際、将来の夢を聞かれて「本宮ひろしの漫画で読んだんですけど六輪車っていうの……、やってみたいんですよね……、ゴホゴホッ！」と答えたものだが、その心意気や良しである。

さて、我らの猪木と比較することで、梶原兄弟の魅力がキミにもわかってもらえただろうか。

たとえばこの兄弟、2人してホステスの奪い合いをすれば、『兄貴』によるとこうなるのだ。

梶原「男の風上にも置けん野郎だな。一度譲ると約束したものを、反古にしやがって」

真樹「そうとんがるなって。ほれ、下半身には人格がないっていうだろうが」

そして梶原がユセフ・トルコらとプロレス＆空手界の黒幕となって暗躍していたアナーキー＆バイオレンス時代になると、こうである。

『クラブ五月』のチイママに袖にされた梶原は、いきなりチイママの首根っこを掴んで押し倒したあげくにパンストまで引きずり下ろし、やむなく止めに入った真樹先生に対してもこう言い放つ。

「真樹、相手を間違えてるんじゃないのか。協力しろ、協力を。俺の秘書だったら、こいつの脚を押さえつけることぐらい喜んでやるぜ」

後にボクがインタビューでそのときの話を聞くと、真樹先生はサングラスの奥の目を細めて遠くを見るようにしながら、こう呟いたものだ。

「嫌な夜だったなあ……」、と。

ボクはそのとき本気で思ったね、「この人になら抱かれてもいい！」と。いや、マジで。マジか？

まあ、これらは『荒野に一騎咆ゆ』にもすでに書かれていたイイ話なので、コアな真樹ファンのために、新作パートの紹介もしておこう。

真樹先生が中学2年にして、初めてお酒を飲まされたときのことだ。スタンドバーで二十歳前後の女子と飲んでいたアニキに呼び出された真樹先生は、店に来るといきなりこう言われる。

梶原「弟が二人いて上のはジェームス・ディーンに似てると言ったら、是非会いたいってそれはもううるさくてな」

女「本当によく似ているわね」

すると真樹先生は、こう原稿に記したね。

「ジミーに似ているとはクラスの者たちにも言われはするが、自分ではそんなふうに思ったことはなかった」、と。

裕次郎、ジミー、真樹先生。どれもステキだが、ボクは断じて真樹先生を支持する！

そういえば石原軍団にも、地方ロケなどを取材にきたマスコミには数万円だかを手渡すというしきたりがあったと書物で読んだことがあるが、それも、「この金でソープにでも行って来い！」というボス二流の粋な計らいだったという。

裕次郎もまた、男であった。それも学生時代の後輩や極真の若い選手たちを「なんだ、お前まだ童貞か。ちょっと来い」とばかりにソープに連れて行きまくった真樹先生の如く、だ。

「女知らねえより知ってたほうが絶対喧嘩は強いって。間違いねえよ！」（データハウス発行・『格闘界ケンカ列伝』取材時の発言より）

その他、新ネタとしては『評伝梶原一騎——夕焼けを見ていた男』という非常によくできた本の作者・斉藤貴男が真樹道場所属だということや、大山倍達との和解話、梶原と偽装結婚して騒動を起こし母国へと帰って行った白氷氷との台湾での再会などだけでなく、『小説あしたのジョー』（真樹先生・著）のちばてつやによる復刻差し止めや『タイガーマスク・ザ・スター』（真樹先生・著）の辻なおきによる発売差し止め問題などにもキッチリ言及しているから、もう衝撃的。

これこそまさに真樹先生にしか書けない、男が男であり続けるためには必ず読まなくてはならない男の必読書なのである。押忍！



▲入手困難な『男の星座』最終巻。「梶原も私も人後に落ちず女には目がなく、とりわけ芸者遊びが好きで円山、向島、中野、新橋などでよく座敷を共にした」との記述もある真樹イズム満載のエッセイ『男の星座よ、永遠に』と、名作『さらばアニキ』収録。

発掘コラム2連発

大文字三郎とは何か？

相撲界のみならず、新日とSWSからも放り出されて途方に暮れていた北尾に礼儀作法を教え込んだ「とにかく闘争的な格闘技」（北尾・談）空拳道の創始者・大文字三郎を御存知か。

「タレント名簿録では『落語・漫才・講談他』の項に登場」「謎の芸能プロダクション・ゲイリープロ所属」などの情報が古き良き『紙プロ』誌上を賑わせた彼の、プロ空手時代の晴れ姿を昭和51年3月30日号の週刊ファイトから遂に発掘！

当時の肩書きは、なんと東洋のブラック・シャドウ！ 若きドラゴン・ホースこと天竜一馬ってのも、キャッチフレーズの直訳ぶりが実にステキですね。

なお大文出版という、あからさまに自費出版然とした版元からリリースされていた『大文字三郎伝・空拳の道』（「図書館勤務。現在に至る」という謎の著者紹介もステキ）によると彼氏、路上での一撃必殺な殺人経験まであるとのこと。「燃える空手の必殺拳！殺るか、殺られるか！」というコピーは伊達じゃない様子。

さすがだぜ、大文字！



若きマッチョドラゴン・藤波が和製フライング・スコーピオだった頃！

無我マットに衝撃走る！ 弱冠19歳の藤波辰巳（現・辰爾）ファースト・プロフィールを、昭和47年3月の『新日本プロレスの旗揚げ記念パンフレット』から奇跡的に発掘した！

そこには、こうあるのだ。

「趣味はゴーゴー、練習の合間にレコードをかけ踊っている」と！

若さ爆発、まさに和製フライング・スコーピオ。早すぎたストリート・ダンサーである。

これが破壊王よりも破壊的だった名曲『マッチョ・ドラゴン』（もちろん廃盤）絶唱時での、不可思議な空手ダンス（振付はジャズ空手の沢村先生）披露に至る原因なのか。根がダンス好きなんですね、城だけじゃなくて。



ちなみに現・RINGS北沢レフェリーの場合、「趣味はレコードを聞くこと。特に演歌のファン」で、現・アパート経営レスラーの木戸の場合、「趣味は一人でクラシック音楽を聞くこと」だそうです。そりゃゴーゴーは踊りませんよね、普通。



米山サトシの部屋

今月のお客様
高山善廣さん
（30・東京都在住）

プロレスラーには音楽が好きな輩が意外にも多い。長渕剛を心から愛するパンクラスの山田学、尾崎豊に深く傾倒する熱い男・カッキーこと垣原賢人、レスリング時代、中村あゆみを死ぬほど聴きまくっていたという鈴木みのる、などなど。彼らがそれぞれのミュージシャン達にほとんど人格形成されるほど強烈なインスピレーションを受けていることは、プロレスファンの間ではあまりにも有名な話だ。が、本田多聞が**ラモーンズ**が大好きであることはあまり有名ではない。

週プロの新年号恒例の選手名鑑で毎回、［好きな有名人］ジョーイ・ラモーンと載っているにも関わらず、その極度の**ラモーンズ**好きがあまりファンの間でも、マスコミにも取り上げられない我らが多聞。［趣味］髪を伸ばすこと、だぞ！　**ラモーンズ**が多聞の生き方にバックボーンとして君臨しているのは明白ではないか？　なぜ専門誌はインタビューでその点に触れないのか？（しかも多聞は**タモーンズ**（！）という**ラモーンズ**のコピー・バンドまで結成している。ライブビデオが流出しているので多聞マニアは必見。MCかなり笑える）僕は非常に悲しい。

そのほか、高野拳磁は**ドアーズ**や**ハイロウズ**が好きだ。そして今回登場の高山善廣も、多聞の**ラモーンズ**好きより多少有名な、**ローリング・ストーンズ**をはじめとするロックンロール大好きっ子だ。

そんな高山選手に先日お会いする機会があったので、音楽の話を聞いてみました。実は単なる立ち話だけど。

ちなみに多少矛盾するが、僕の持論では音楽センスの良さと人間の魅力にさほど関係はない。

◆

——プロレスラーの音楽センスについて、どう思います？

高山　ああ、これは色々ありますねえ。なんか、うーん。なんて言うんだろ……。

——某団体の入場テーマがエイベックス系ってのはどうですか？

高山　ハイブリッドな団体ですか、それ？　あれ、全然印象にないんですよね、僕2回か3回見に行ってるんですけど。どの選手がどの曲だとかね。

——そうなんですよね。みんなそうだと全然わかんないんですよね。

高山　まあオシャレのつもりなんだろうけど、僕はあんまり好きじゃないですねえ。まあ趣味ですからね、あれは結局。自分の曲がね、これが凄く気分乗るから使ってるんだっていえば、そこまでですからね。

——でもね、高山さんが使ってる**マディ・ウォーターズ**とかね、プロレス会場だと凄く違和感あるんですよね。逆に。

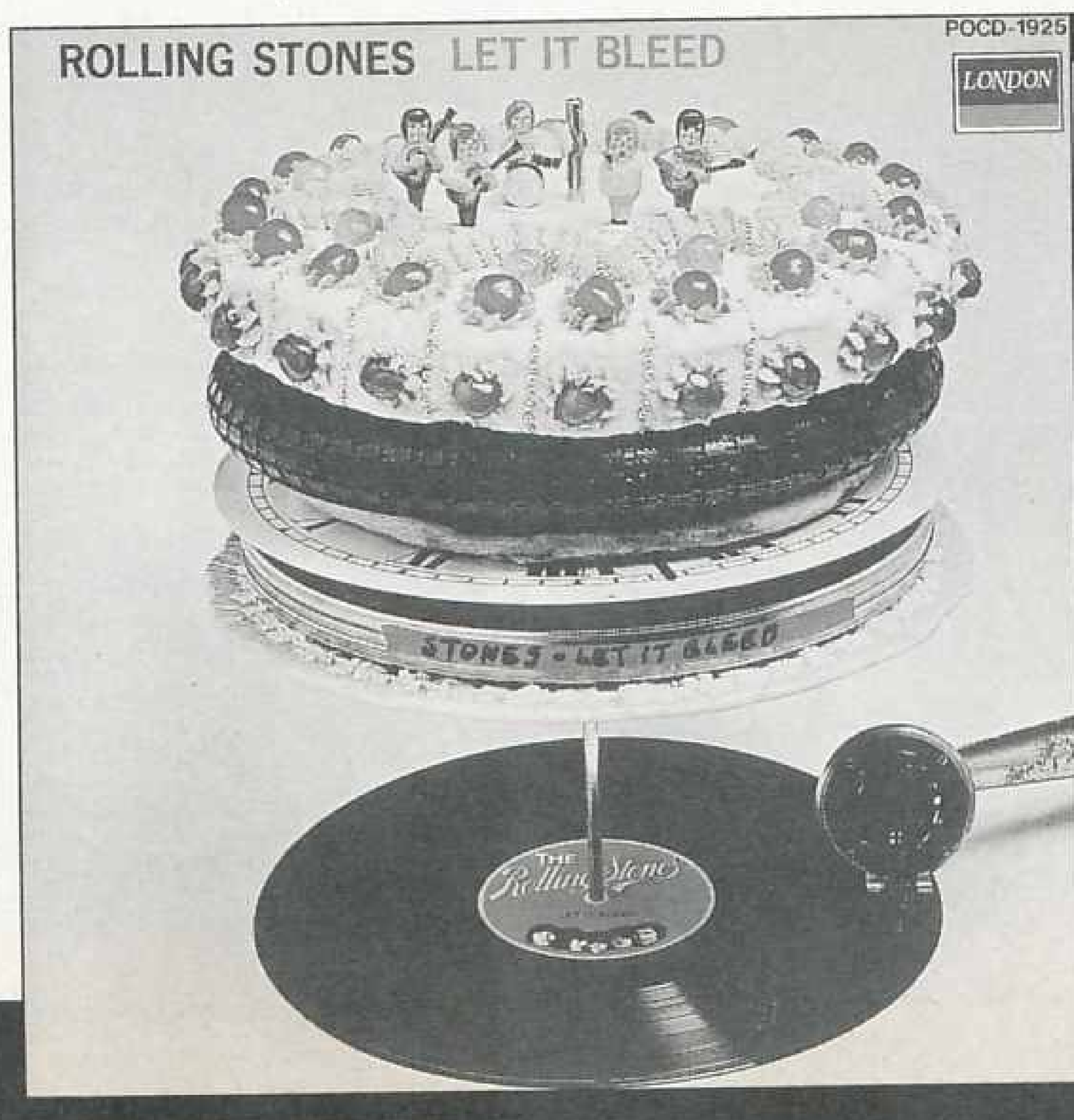
高山　ありますねえ。ムチャクチャありますねえ！

——**マディ**の『マニッシュ・ボーイ』。あのイントロとか聞くと「こりゃ、この人当分出て来ねえな」とか、思っちゃったりして（笑）。何か違和感あるんですよ。でね、試合が終わって勝ったらまたテーマ曲がかかるじゃないですか。ああいうブルースものって、なんかあんまり勝利感がないんです（笑）。

高山　へへへ。あー、そうですね。でも**マディ**は結構気にいってんスけどね。

——確かにカッコイイ！　僕の周りのロック好きな友達とかも、「あれはいい！」と。「あんなレスラーはいない！」と（笑）。

高山　フフフ。そういうコアな人に受けるんですけどね（笑）。音楽はね、以前**マディ**使う前は、**ストーンズ**の『ミッドナイト・ランブラー』。あれがライブ・バージョンで。それもかなり気に入ってたんですけど。



甲本ヒロトさんも絶賛、ローリング・ストーンズの『LET IT BLEED』。「ミッドナイト・ランブラー」6曲目収録

――グッド・センスです！　あ、今思い出しました。Uインターで、高田さんが一日二連戦やった大会ありましたよね？　あの日、金原さんが入場してきた曲が、**セックス・ピストルズ**の『アナーキー・イン・ザ・UK』。なんでだ!?（笑）。当時若手だったからそれでリング・インして、お客さんにペコリだって（笑）。全然デストロイな感じがしなかったんですけど（笑）。

高山　（笑）。あれはですねえ、謎を今言いましょう！　**ピストルズ**の『アナーキー・イン・ザ・UK』、あれはねえ金原さんのデビュー戦の相手、今はなき前田（雅和）選手が入場テーマに使ってたんですよ。

――あっ、そうなんですか？

高山　そう。それで金原さんがあの曲を使った日がデビュー一周年記念の両国の大会だったんですよ。その記念に前田選手が使っていたテーマ曲を使ったんですよ。誰もわからない！（笑）



マディ・ウォーターズの『HARD AGAIN』。「マニッシュ・ボーイ」1曲目収録。ちなみにマディ・ウォーターズを訳すと"泥水"

――そんな意味があったのか（笑）。

高山　そう、それでね前田選手が使ってたから、その日だけ使ったんです。誰も気がつかなかった（笑）。誰も気づかないといえば、僕が山崎さんと試合してね、勝った試合。勝ったときに**ボブ・ディラン**の『時代は変わる』が入ったんスよ！　これも違和感あるっしょ？（笑）。ちゃんと意味持たせてんのに誰も気がつかなくてねえ。ウチの兄貴とね、兄貴の友達の昔っからディランとか好きだった人だけ喜んでたらしい。

――音楽にはこだわりがあるんですね。Uにはないけど（笑）。

高山　ありますねえ。そういう意味じゃ。

――音楽聴き始めたのっていつ頃ですか？

高山　もう小学校の時に。ウチの兄貴が、三つ年上なんスけど、兄貴が中学一年ぐらいの時に**ビートルズ**とか聴き始めたんですよ。**ビートルズ**とか**ストーンズ**とか、**FEN**とか聴いてて。「何でそんな英語の雑音聞かせるんだあ!?」って思ってね。同じ部屋だったんで。「もう、こんなんウルサーイ」とか「寝れないぞお！」とか思ってね（笑）。だけど文句言えなくて。それがね、すっごい頭にこびりついちゃって。小学校四～五年生ぐらい。で、どんどんウチの兄貴、**ビートルズ**に狂って。レコード買っちゃあポスターを部屋に張りまくって、寝るとき部屋を暗くすると、ポール・マッカートニーとかジョン・レノンが睨んでるんですよ。それが恐くてねえ（笑）。あと**ストーンズ**の『ハイド・パーク』とかのねえ、NHKの放送であったんで、それを見ちゃったりしたんで、夢でうなされてたんですよ！（笑）。

――ガハハハハ。ブッチャーの次は**ストーンズ**！（笑）。

高山　**ストーンズ**でもうなされてたんですよ（笑）。**ストーンズ**って昔なんか気持ち悪いじゃないですか。今は全然そんな気ないですけど。小学生の、子供心に凄く気持ち悪かったんですよ。「狂ってる、これ」とか思ってて。そういうのが段々段々、何か自分で聞くようになってたんです。

――ライブとかよく見に行ってたんですか？

高山　あんまり行かないですね。ほんと自分が凄い好きで好きでしょーがない人がきたら行くくらいで。

――でも、あんまりいないでしょう。レスラー仲間で音楽の話が合う人って。

高山　いないですねえ。まあ金原さんがちょっと合うかなあ。そうだ！　去年ビガロと会った時、ビガロが「俺は**ブルース・スプリングスティーン**とは友達だ」って言うんですよ。「え～、マジィ？」とか言ってて。で、もし**スプリングスティーン**が日本に来たら、マネージャーのなんとかって奴に「ビガロの知り合いの○○だ」とか言えば、**スプリングスティーン**に会わせてもらえるよ、って言うんですよ。

――えっ、ほんと？　それは凄い。

高山　凄いでしょ？で、こないだ来たじゃないですか、**スプリングスティーン**。晴海に金原さんと見に行ったんだけど、係りの人に「バンバン・ビガロの知り合いなんですけど、なんとかってマネージャーを呼んでください」って言ったんですけど、「そんな名前のマネージャーはいない」って言われちゃって（笑）。

――ハハハハハハハ。

高山　何なんでしょうね、ビガロ（笑）。見に行く前、金原さんとか道場で英語の練習してたのに。あとオブライトも**ストーンズ**とか好きですよ。僕、**ストーンズ**の日本のツアーとかのTシャツとかサイズが小さくて着れないんスよ。だからオブライトに頼んで向こうのツアーTシャツ買ってきてもらったりして。

――ああ、そういえば『週プロ』でオブライトの家の壁に**ストーンズ**のポスターが張ってある写真を見たことがあるな。

高山　で、インターの頃オブライトが来日するとウチの道場で練習するんですけど、**FEN**とか大音量でガンガンかけて練習するんスよ。そしたらリングで練習している田村さんがチラっと睨んだりして（笑）。

※米山サトシは格闘探偵団バトラーツの米山サトシ選手とは、一切関係ありません。

ARE GIRLS

ガールズはガールズ

LOVE LOVE HAKAIOH



セクハラも豪快な破壊王。「乳、揉ませろ！」と強引に触っておきながら……（下へ）

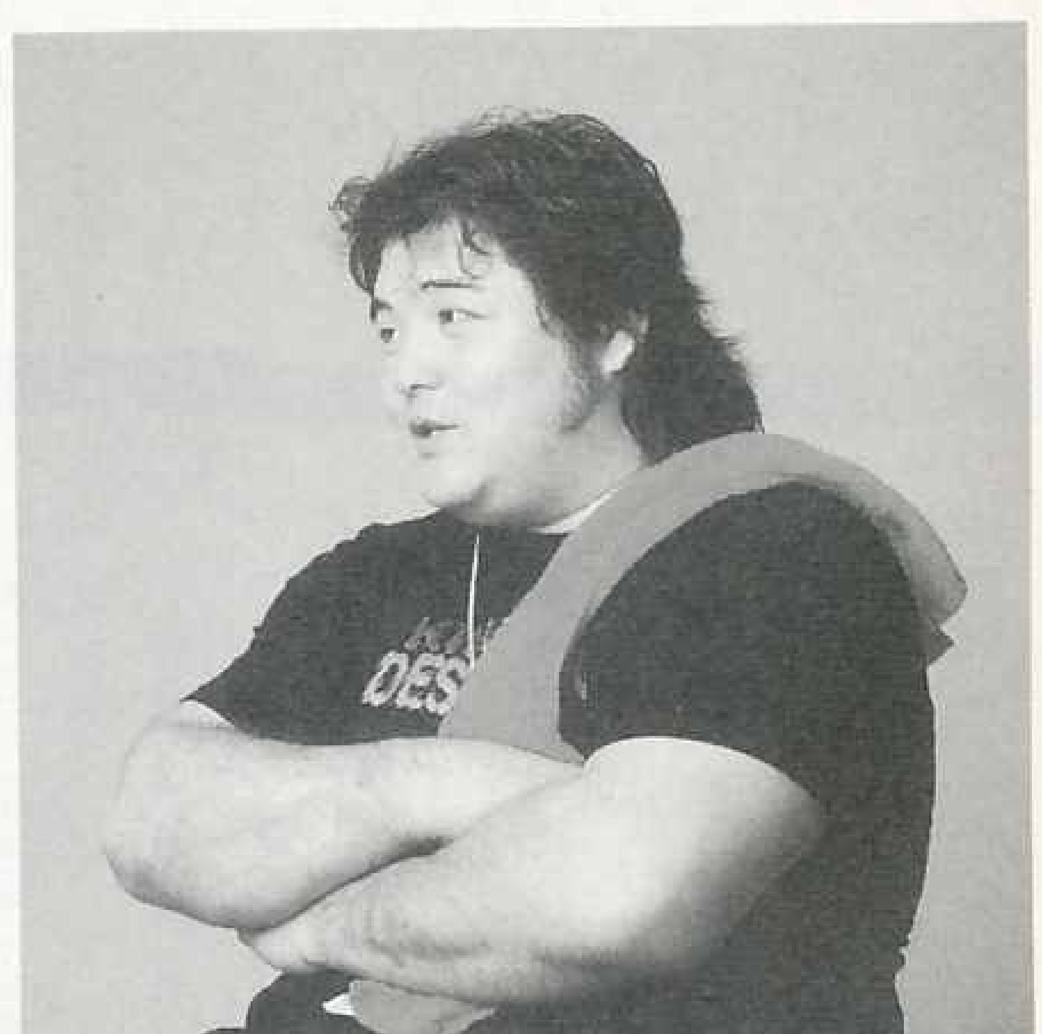
みんなぁ、破壊王のこと好きぃ〜？　のものもは大好きぃ〜♥　と、いうわけでみんながもっともっと破壊王のことを好きになるように、『破壊王こと橋本真也選手のちょっといい話』を教えてあげるですぅ。ぐふ〜。

みんなぁ、破壊王が超のつくほどの「時代劇ファン」って知ってたぁ？　のものもは全然知らなかったぁ。だからね、某プロレスビジュアル誌で破壊王の取材を申し込んだ時に倉掛氏（新日本プロレスのナイスガイ・広報）から「橋本は『秀吉』（NHK）の第35話〜第40話のビデオを用意しないと、取材は受けないと申しております」と告げられた時はド・びっくりだったよ。取材受けてもらわないと困っちゃうから、のものも必死になって『秀吉』のビデオ手に入れたの。で、無事一件落着って思って安堵に浸ってた年末に1本の電話が！

「あ、もしもし、のものもちゃ〜ん？　愛しの橋本だよ」「ほぇぇぇ？　あの、どちらの橋本さんですか？」「橋本だよ、橋本！」「ほぇぇぇ？　もしかして、破壊王の橋本さん？」

……天下の破壊王が何の用事かと思ったら、何と！「『秀吉』の続きのビデオが見たいから貸して〜」ってなことだったのだ。うちは貸ビデオ屋じゃなーい！　って思いながらも、愛しの破壊王たっての頼みとくれば用意しないわけにはいかないもんね。で用意したのはいいけれど、問題はビデオの受け渡し方法。「宅急便で送ります」って言ったら、ぬ、ぬわんと！「どうしても年が明ける前に見たいから、取りに行くゾ！」という一言。うっそぉ〜、破壊王自らのものもハウスへ？　そ、それはちょっと……、もしも何かの間違いがあったらば？（あるわけないけど）「橋本さん自ら取りに来てもらうのは申し訳ないので、私がお届けしますぅ」と言ったら「じゃあ若いモンに取りに行かせるから」と優しい答えが返ってきた。うふ〜ん、さすがーIWGPチャンピオン！　というわけで無事ビデオは若いモンに取りに来ていただいて……、あ、あれぇ？　来たのは何と！　安田っス（安田忠夫選手）だーっ！　ほぇぇぇ、ど、どうしよ〜。

……次号『LOVE LOVE YASUDASSU』続く。



「何だ巨乳じゃねーじゃねーか！」だって。んもおぉ〜失礼しちゃうわねぇ。ぷー！

LOVE LOVE HEARTS

みんなぁ、バトラーツのこと好きぃ〜？　のものもは大好きぃ〜♥　というわけで、みんながもっともっとバトラーツのこと好きになるように『バトラーツ・ちょっといい話』を教えてあげるですぅ。ぐふ〜。

バトラーツといえば、この人なしでは語れない！　越谷のバカ社長こと石川雄規社長の登場ですぅ。トーイ君（フミ斉藤さん調に呼ばせて頂きましたぁ）といえば、知る人ぞ知る、超がつくほどのイタズラ小僧！　道場のサウナにマネキンの首を置いといて「ちょっと日高、サウナ見てきて」なんつって驚く日高っちょを見ては喜び、ある選手の靴ヒモを隙を見て結んじゃってその選手が転ぶのを見ては喜びと、とにかくイタズラといえばトーイ君、トーイ君といえばイタズラっちゅーほどのイタズラ大好きっ子なの。で、話はバトラーツ東北巡業へと変わりま〜す。

試合を終えたバトラーツ勢のその日の宿は、ある旅館の大部屋でした。みんなで枕を揃えて寝てる姿を想像するだけでもおもしろいのに、何と！　石川社長の号令のもと、『枕



3・19には1・21後楽園ホールのビデオが出るよ！

……のです。ほぇぇ？

ラーツファンクラブに入会しちゃってんの。

by NOMONOMO



GIRLS AR

LOVE LOVE PROWRESTLING

みんなぁ、プロレスのこと好きぃ〜？ のものもは大好きぃ〜♥ ということで、みんながもっともっとプロレスのこと好きになるように、『プロレス界・ちょっといい話』を教えてあげるですぅ。ぐふふ〜。

いきなり『紙プロ』に現れ、レスラー以上に露出しまくってるのものも（気分悪い読者＆関係者の方ごめんね。でも私が考えたんじゃないんですぅ〜。ぐふ〜）。そんなのものもはバトラーツとみちのくプロレスが大好きなんだけど、みちプロも『ちょっといい話』に事欠かない団体なの。「みちプロ石鹸」や「サスケちゃん」「人生君」などのイカしたグッズ、「グレート・サスケはいかがでしょう」や「ルチャバカ日誌」などのシリーズ名など、何をとってもハイセンスなみちプロ。はっきり言って団体の長なる愛すべき東北のバカ社長こと、ザ・グレート・サスケ氏の爆走している遊び心の賜物ですよねぇ。そんな中で、「この団体を好きでよかった」と思わせてくれた、とっておきの秘話をご紹介しちゃうですぅ。

どこの会場だか忘れちゃったけど、東北のド田舎で試合をした時のこと。せっかく東北のド田舎まで見に来てるわけだし、手みやげに『週プロ』の「私のPHOTO自慢」に送れるような写真を撮って帰ろうと考えたのものもは、寒空の下（季節は夏だったかもしんないけど）、"出待ち"なることをしてたんであります。でもただ待ってるだけじゃ退屈なんで、選手がリングを解体してトラックに積み込む作業を、ボケーッと見てたわけであります。

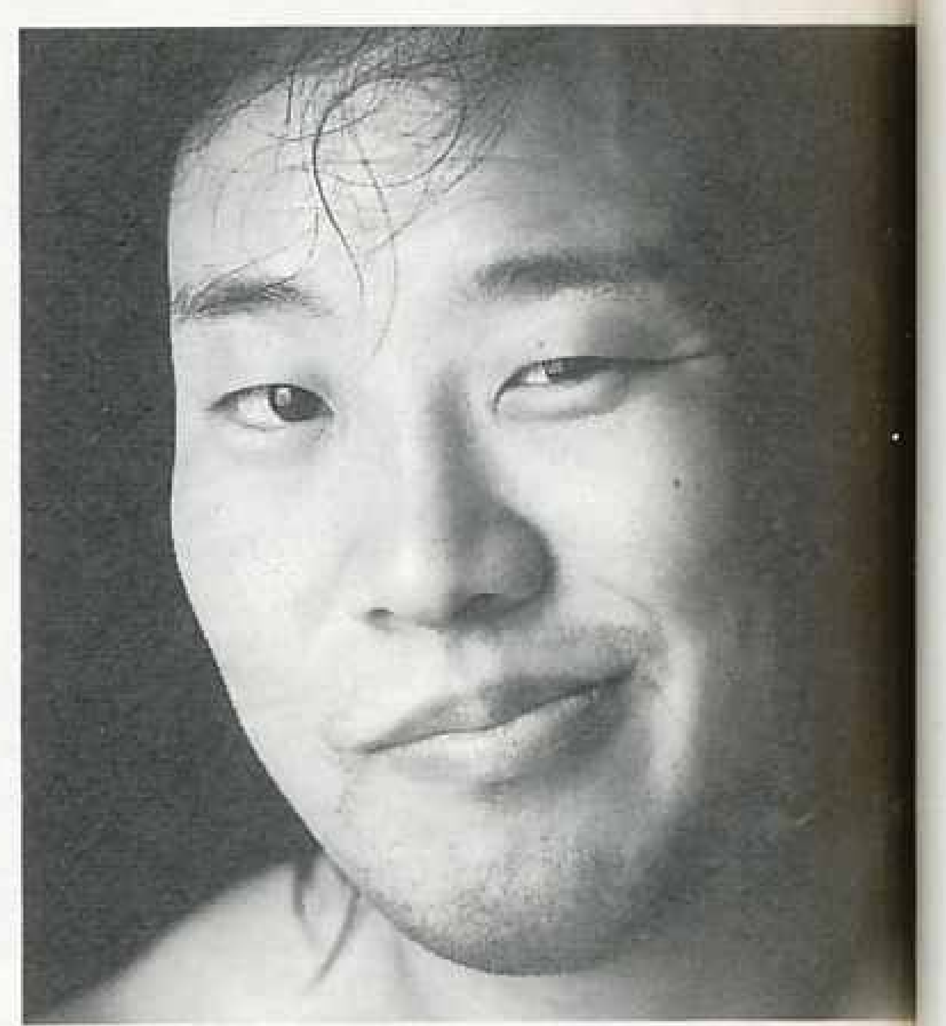
すると一人のマスクマンが鉄柱を運んできました。でもそのマスクマンに見覚えはなし。「ほぇぇぇ？ だれ〜？」と思いながらも「プライベートマスクだからいつもと違うマスク被ってるのかな？」なんて思ってたら、また同じマスクマンの姿が。「ほぇぇぇ？ 同じ人？ でもさっきの人と着ている服が違うぞ〜、あれあれ〜？」と思ってたら、また同じマスクを被った人が……。「ほぇほぇぇぇ？ むむ〜、もしかしたらみんな同じマスク被ってるの〜？ ほぇっ！ ウソだろ、オイっ！」と思いチラッと体育館を覗くと、想像通り、同じマスクを被ったマスクマンがうじゃうじゃとリング撤収作業を行っていたのでありました。

普段マスクを被ってない人＆フロントまでもがマスクマン！ しかもみんな同じマスク！ しかもしかも、試合後に残ってるファンなんて、ほんの一握り！ ダイ・ウイズ・ガッツ！ パンクス・ノット・テッド（タナベ）！ 少ないファンを楽しませるため？ それとも自分たちが楽しいの？ ハァ〜、スーパーVIVA（ドン）！ こんなみちプロがのものもは大好きぃ♥



高山善廣選手が着てきたダウンジャケット＆靴を着用し、はしゃぐのものも。めちゃめちゃデカくてびっくりぃ〜。そんなことより、のものも誌面に出過ぎで食傷気味ぃ？ でも、のものもはみんなのこともだ〜い好きぃ♥

LOVELO BATTLART



ステキな話では事欠かない石川社長（トーイ君）。現在、ビンゴで当てたプレステにハマってるそうだ

投げ』がはじまったらしいのです。ほぇぇ？ 君たち、一体いくつ？ 今時『枕投げ』なんて、修学旅行生だってやらないよ。そしたら案の定旅館の亭主に「今、何時だと思ってるんだっ！ 子供じゃないんだからいいかげんにしろっ！」って怒られちゃったらしいですぅ。そりゃそーだよね。団体を支えるトップ自ら「『枕投げ』やろう」なんて。しかも誰も止めないバトラーツってば……。でもそんなバトラーツが、のものもは大好きだよ。だってのものも、ここだけの話、バトラーツファンクラブに入会しちゃってんの。カうふ。ちなみに会員ナンバーは5番だよ！

タブツ君（『紙プロ』編集部の出来損ないキャラ）もバトFCの会員なの。

2人して何やってんだぁ、オイ！



バトバトファンクラブは絶賛会員募集中！ 今すぐ入ろう、楽しいよ！

のサウナにマネキンの首を置いといて一ちょ

のに、何と！ 石川社長の号令のもと『枕



3・19に

PRO-WRESTLING WRESTLE ASSOCIATION WAR

PRO-WRESTLING INTERNATIONAL UWF

プロレス界きっての名勝負製造器

天龍vs高田

★各ビデオ絶賛発売中!!

★表示価格は全て税抜きです

天龍源一郎と高田延彦
2人の闘いから目をそらすな!



頂上対決、再び!倒すか、倒されるか
神宮決戦をも凌ぐ名勝負が生まれた!

天龍vs高田 両国REVENGE

1996年12月13日両国国技館
カラー180分/¥9,515/SPA-4912

かってない激闘に国技館が沸き返る!
天龍の剛拳vs高田の剛脚
両雄が真正面からぶつかり合った
リベンジマッチ!

【収録内容】◆時間無制限1本勝負/天龍源一郎vs高田延彦◆時間無制限1本勝負/北尾光司vsジョン・テンタ◆ジュニア8冠戦　60分1本勝負/ウルティモ・ドラゴンvsレイ・ミステリオ・Jr◆インターナショナル・ジュニアヘビー級タッグ選手権　60分1本勝負/安良岡裕二&ランス・ストームvs初代タイガーマスク&望月成晃◆30分1本勝負/北原光騎&荒谷信孝vs山崎一夫&飯塚高史◆30分1本勝負/嵐&大刀光修vsバンバン・ビガロ&平井伸和◆30分1本勝負/中野龍雄vs米山サトシ◆30分1本勝負/剛竜馬vs冴夢来MAX◆30分1本勝負ドインク&超電戦士バトレンジャーvs山田圭介&松田慶三◆30分1本勝負/岡村隆志&多留嘉一vs神風&福田雅一◆30分1本勝負/菊地淳&石井智宏vs石川孝志&大黒坊弁慶

プロレス界を大激震が襲った あのU.W.F.が突如として解散
大観衆が、選手が泣いたU.W.F.インター最後の一日!

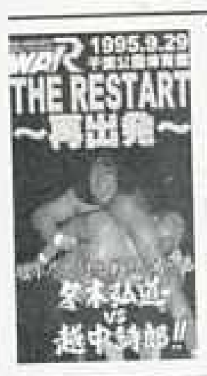
U.W.F.インターナショナル最終戦 U.W.F. FINAL

1996年12月27日東京・後楽園ホール
カラー145分/SPA-4912/UWFV-1063

試合前の全選手による記者会見から、
入場式、最後の激闘全5試合、
そして感動のフィナーレにいたるまで
カメラは克明に追った!

【収録内容】◆メインイベント(60分1本勝負)/高田延彦vs高山善廣◆第4試合(45分勝負)/垣原賢人&山本健一vs金原弘光&桜庭和志◆第3試合(30分1本勝負)/安生洋二vsビリー・ジャック・スコット◆第2試合(30分1本勝負)/佐野友飛vsジェームス・ストーン◆第1試合(10分1本勝負)/松井駿介vs上山龍紀

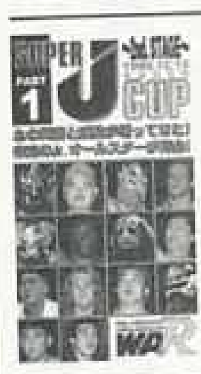




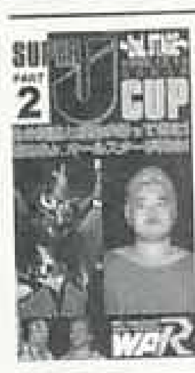
THE RESTART ～再出発～
1995.9.29　千葉公園体育館
カラー90分/¥9,515/SPA-4901
「レッスル・アソシエーション-R」として再スタートを切ったWAR。その記念すべき第1戦を収録。冬木が平成維新軍の越中と激突。理不尽大将の作戦が勝つか?越中のサムライ魂が爆発するか?注目の一戦に加え、天龍と北尾が再び激突した6メンタッグマッチ、邪道&ライオン道vs佐藤昭雄&タイフーンなど激闘全7試合を収録。



理不尽大将三戦紀
カラー90分/¥9,515/SPA-4902
「越中、あんなヤツは腰抜けだ!」「正々堂々とやってやる。ただし50キロ減量して来い。」「負けたら天龍は坊主だ!俺は負けても坊主になんかならないけどな。」まさに言いたい放題の理不尽大将が、その実力者ぶりを遺憾なく発揮したシングルマッチ、越中詩郎戦、北尾光司戦、そして天龍源一郎戦を収録。理不尽語録も特別収録。



SUPER J CUP～2nd stage～ PART1
1995.12.13　両国国技館
カラー140分/¥9,515/SPA-4903
団体のワクを超えた最強戦士を決めるトーナメントとして大反響を巻き起こしたジュニアの祭典SUPER J-CUP、その第2弾。ペガサス、ドスカラス、ダミアンら海外の強豪に加え、W.A.Rからウルティモ・ドラゴン、外道、ライオン・ハート、新日本プロレスから獣神ライガー、エル・サムライ、大谷、みちのくプロレスからの愚乱・浪花、中島半蔵、レッスル夢ファクトリーの茂木、バトラーツの船木勝一、北尾道場の望月ら実力派、個性派が集結。



SUPER J CUP～2nd stage～ PART2
1995.12.13　両国国技館
カラー130分/¥9,515/SPA-4904
激闘に次ぐ激闘。ジュニアの最強戦士14人が栄冠を争ったトーナメントは、第1回をしのぐ名勝負の連続となった。迎えた決勝戦、そのリングに立ったのは獣神・ライガーと外道の2人だった。そして、トーナメントに勝るとも劣らない名勝負でセンセーショナルな日本デビューを飾った音速の戦士ミステリオJr。誰もが興奮と感動を押さえきれない素晴らしい大会となった。



男気・天龍vs女傑・神取
1995.12.8　東京・大田区体育館
カラー120分/¥9,515/SPA-4905
男vs女、前代未聞の激突が公式戦で実現した!男はミスタープロレス、あの天龍源一郎。女は"女子プロレス界最強の男"神取忍。性別を超えた2人のアスリートの激突は必見!天龍組、冬木組、北尾組、シンジャ組など、8チームが一夜で激突したタッグトーナメントSUPER HEAVY-WARの激闘全試合を収録。



激突!理不尽軍団vs新日蝶野軍
1996.4.19　札幌中島体育センター
カラー120分/¥9,515/SPA-4906
怒声、嘲笑、渦巻く中、乱れ飛ぶバナナと共に入場した冬木弘道率いる理不尽軍団。対するは、新日本プロレスの狼軍団、蝶野&天山&ヒロ。プロレス界を自らの実力だけで我が物顔に渡り歩く身勝手軍団同士の激突となった世界6人タッグ選手権試合。天龍は極悪大王ボーゴとの決着戦。さらにJ-CUPの感動を再び、あのミステリオJrとシコシスが再来日。脅威の大空中バトルで観衆の度肝を抜いた。



冬木理不尽軍団vsゴールデンカップス/卵乱
1996.5.26　横浜文化体育館
カラー120分/¥9,515/SPA-4907
W.A.R vs U.W.F.ついに開戦!天龍対中野、冬木軍対安生軍が実現。冬木、邪道、外道の理不尽軍団と安生洋二率いるゴールデンカップスが世界6人タッグ選手権をかけて全面対決。冬木は予告通り生卵攻撃で安生の顔面をヌルヌルに!「!?さらに、中野の熱意が天龍をついに動かした。天龍対中野の一騎打ちが実現。天龍をして「ここ数年のうちでの俺のベストバウト」と言わしめた白熱の好勝負も収録。



拳骨・天龍vs蹴撃・高田 初対決
1996年7月20日両国国技館
カラー180分/¥9,515/SPA-4908
W.A.R、U.W.F.インター、そして新日本プロレスの3団体から総大将の天龍、高田、長州が出場。さらには、W.A.R冬木軍、ゴールデンカップス、山崎隊という実力派の3チーム、そして因縁深い北尾とテンタ…かってない程の超豪華メンバーが結集して争われた世界6人タッグ選手権王座決定トーナメント。1回戦で実現した注目の天龍組と高田組の激突は?注目のトーナメント全試合に加え、タイトルマッチ2試合を収録。



Mr.プロレス 天龍vsMr.200% 安生
1996年7月21日両国国技館
カラー120分/¥9,515/SPA-4909
W.A.R両国2連戦の大トリとなった天龍vs安生。安生が硬軟取り混ぜた攻めで200%の実力を見せつけ、その全てを耐えた天龍が、怒涛のグーパンチを叩き込む。両雄の初の一騎打ちは力と技の激突で満員の大観衆をうならせる名勝負となった。他に北原vs垣原のU.W.F.ルール戦、高田&金原組vs藤波&越中組、冬木軍vs長州組、ジュニア8戦士による夢のタッグマッチと、すべてが対抗戦として行われた両国大会全試合を収録。



拳骨 天龍源一郎vs毒華 グレート・ムタ
1996年10月11日大阪府立体育会館
カラー120分/¥9,515/SPA-4910
遂に実現した天龍vsムタ、初の一騎打ち。悪の化身グレート・ムタが変幻自在の残虐ファイトを繰り出せば、その攻撃に耐えに耐えた天龍が怒りのグーパンチで反撃。想像を遥かに超えた激闘に、W.A.Rマットは文字どおりの修羅場と化した。さらに、冬木、ビガロ、安生の異色トリオが高田&佐野&垣原のU.W.F.軍と激突した世界6人タッグ選手権試合、サスケvsドラゴンの8冠戦、邪道&外道の5番勝負FINAL、そして音速の戦士ミステリオの大阪初登場!文字どおりのオールスター揃い踏みとなった10・11大阪大会を収録。



怒髪天龍、新日本拳骨制裁
1996年11月9日後楽園ホール
カラー120分/¥9,515/SPA-4911
天龍、怒りの鉄拳が手負いの山崎を襲う!「病人には一度も出させない」(天龍)「ジイサンは早く辞めさせないと」(山崎)激しい舌戦から始まった両雄の対戦。意地の山崎か、不機嫌パワーの天龍か?注目の初対決!そして、ヤス&ランスが大役を果たす!ライガー&サムライの新日最強軍からI・Jタイトルを奪還。さらに空飛ぶ入れ墨モンスター・ビガロが大変身を遂げた平井伸和と合体。新たなる闘いに挑む!



高田延彦vs越中詩郎
1995.3.1　東京・日本武道館
カラー144分/¥9,515/UWFV-1049
新日本プロレスの武藤を倒し新IWGP王者となった高田の初防衛戦。挑戦者は平成維震軍の大将である越中…かってIWGPジュニア王座を賭けてマット史に残る激戦を展開した2人が、8年の歳月を経て、再び火花を散らす!ほか佐野vs武藤、山崎vsゴールデンカップス、垣原vs大谷、チャンプアvs金原、田村vs桜庭の必見の全7試合を完全収録。



高田vs長州頂上対決
1995.4.19　大阪府立体育会館
カラー97分/¥9,515/UWFV-1051
8年の歳月を経て再びリング上で相対した高田vs長州は、タッグマッチとはいえ、互いを執拗に意識、凄まじい闘いを展開。長州のバックドロップで高田が大の字に伸び、高田の蹴りの連打で長州の前歯が吹っ飛ぶ!金原、健介もフルファイト爆発。他にも正規軍vsゴールデンカップスの抗争、若き闘志が真正面から火花を散らした垣原vs永田、"越境ライバル物語"第1章、高山vs高岩、桜庭vs石沢、そしてオープニングマッチの田村vsスコットまで全6試合をパーフェクト収録!



撃破!U.W.F. 包囲網
1996.5.27　日本武道館
カラー120分/¥9,515/UWFV-1052
U.W.F.インターの旗揚げ5周年記念大会第1弾。メインイベントではあの組長・藤原喜明が高田との5年7カ月ぶりのシングルマッチに挑んだ。U.W.F.の旗揚げからの歴史を感じさせる田村vs桜庭、平成維震軍との異色対決・垣原vs越中、金原vs野上、さらに、U.W.F.正規軍を敵に回したゴールデンカップスと冬木軍とのファイトぶりも必見!(あの200%マシーンも遂に登場!)そして、中野龍雄とW.A.R北原のシングル対決は、Uインター戦士としての中野のラストマッチだ!!



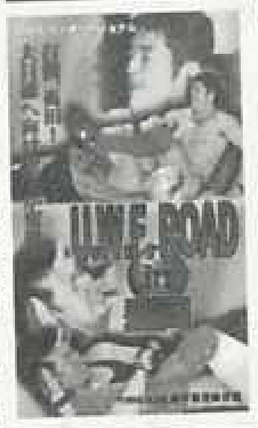
スクランブルウォーズ
1996.6.26　名古屋レインボーホール
カラー136分/¥9,515/UWFV-1054
天龍、藤波がUインターマット初登場を果たした名古屋大会。高田は垣原と組み、藤波&藤原の越境コンビと激突。セミファイナルではミスター200%安生洋二が佐野友飛と激突。嵐と組み高山&200%マシーンと激突した天龍は、顔面へのグーパンチ、そしてサッカーボールキックを連発。新鋭・桜庭和志はオランダ・チャクリキジムの2メートルを越す巨人キックボクサー、レネ・ローゼを撃破する快挙。



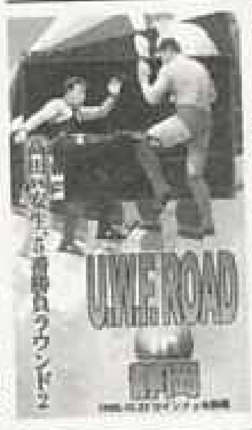
真夏の神宮大決戦
1996.8.17　神宮球場
カラー180分/¥9,515/UWFV-1056
U.W.F.頂上対決—U.W.F.インター旗揚げ後、初めて高田vs安生シングルマッチが実現した!手の内を知り尽くした2人の攻防の行方は…!?W.A.R大将の天龍は、佐野を撃破。仮想・高田となる一戦を制し、一騎打ちへ向け期待はますますヒートアップ。さらに復活した初代タイガーマスクvsグラン浜田、Uインター新時代を切り開く垣原vs桜庭。高山vs怪人・キモのアルティメット戦、ゴルドー軍団の参戦と、まさに最強のラインナップ。完全ノーカット収録。



高田延彦vs天龍源一郎
1996.9.11　神宮球場
カラー150分/¥9,515/UWFV-1057
文字通り立錐の余地がないほどの大観衆が神宮球場を埋め尽くした!高田と天龍の初の一騎打ちに加え、ミスター200%・安生洋二のアルティメット戦、新日本プロレス・橋本真也、佐々木健介との対抗戦、初代タイガーマスクと復活ザ・コブラのスペシャルマッチ。まさに真のオールスター戦となった神宮決戦。この日、神宮につめかけた4万の大観衆は、歴史の証人となった!



U.W.F. ROAD in 盛岡
1996.9.30　岩手県営体育館
カラー140分/¥9,515/UWFV-1058
「ワリィけど一回ぐらいでオレはまいんねえよ!」神宮決戦では高田のハイキックでKO負けを喫した安生だったが、主役の座を狙う意欲は衰えず、早くもやってきた雪辱の機会に闘志満々。天龍を倒して乗りに乗っている高田を相手に、虚々実々のハイスピードバトルを展開した。さらに、全日本プロレス川田との対戦を経験した高山は、実績ナンバー2の垣原と対戦。ゴールデン・カップスがU.W.F.を乗っ取る日も間近か!?



U.W.F. ROAD in 静岡
1996.10.23　ツインメッセ静岡
カラー140分/¥9,515/UWFV-1059
確実な回転と進化を続けるUインター・ロード。次の主役を掴むのは誰だ!?高田と安生の両エースが激突する5番勝負。その闘いに割って入るのは、佐野か、高山か、それとも桜庭か?Uインターのマットは、完全な戦国時代に突入した。初対決にも臆せず高田を追いつめた桜庭。先輩の垣原を圧倒した金原。実力者ビリーと互角に渡り合った山本。誰もがフル回転の好ファイトで魅せた静岡大会。



U.W.F. ROAD in 札幌
1996.11.20　札幌テイセンホール
カラー140分/¥9,515/UWFV-1060
打倒!高田、大目標に向け、熾烈な争いがスタート!高田と安生が、それぞれパートナーを変えて挑むダブルバウト5番勝負は、1勝1敗の後を受け、高田は垣原と、安生はビリーと組んで激突。4人が一歩も引かぬ変幻自在の攻防で、観衆を魅了した。さらにこの日から、金原、高山、桜庭、山本の4人によるリーグ戦が、高田との対戦権を賭けてスタート。実力伯仲の闘いを制し、トップへの階段を駆け昇るのは誰か!?



U.W.F. ROAD in 仙台
1996.11.23　仙台ワッセ
カラー140分/¥9,515/UWFV-1061
U.W.F.新時代到来!「みんな力をつけて来ているので高田さんもうかうかしていられないですよ」不敵に言い放った金原だけではなく、高山、桜庭、そして山本と、レベルアップを果たした新鋭達が素晴らしい好勝負の連続で実力をアピール。念願の高田戦へ向け熾烈な争いを勝ち抜くのは誰か!?第4戦を迎えた高田と安生の5番勝負。安生のパートナーに抜てきされたニコ・ゴルドーと高田との注目の初対決は、安生、佐野を巻き込んだ大熱戦となった。



U.W.F. ROAD in 福岡
1996.12.25　博多スターレーン
カラー140分/¥9,515/UWFV-1062
高田の突然の宣告、Uインターの解散。しかしそんな激変の中でも手たちは精一杯の全力ファイトで「これがUだ!」とアピールした。Uインター最後の両エースの激突、高田vs安生、実力者同士の壮絶なシバキ合い、垣原vs佐野、そしてラストマッチとなる後楽園大会のメインイベント出場権をかけた金原、高山、桜庭、山本の気迫に溢れた闘い。西の聖地・博多スターレーンは、選手たちの確かな明日を予感させる熱気に最後まで包まれていた。

新

ザッツ・レスラー②

山本隆司

裏切りと戦犯。私の不徳のいたすところです。

イラストレーション＝松本晴夫



私はこれまで「俺は猪木だ！」とみんなにさんざん言い触らしてきたが、どうやらその看板は降ろさざるを得なくなった。

事の起こりはこうだ。

ある日、私は友人にこうつぶやいた。

「俺はさあ、昨年、3人の部下に裏切られたんだよな」

そう、3人の部下にである。

戦犯その1！　谷川貞治。愛称"サダハルンバ"で親しまれている男が突然、私に冷水をぶっかけた。

「山本さん、大変に申しわけないんですが、私、ベースボール・マガジン社を辞める決心をしたんです」

何、辞める？

私はその時、間髪を入れずに「お前、衛星放送に行くのか？」と言い放った。

一瞬、谷川はあわてた。そのあとサダハルンバの目にはうっすらと涙が流れた。

俺は言って欲しかったよな。あの時「衛星放送に行きます」と。俺はあとで自分の人徳のなさを嘆いたよ。

戦犯その2！　小島和宏。週プロではインディー番の帝王といわれた男が、あれは深夜の4時から5時頃だったと思う。

「すいません、体の具合いがよくないので、週プロを辞めさせてもらいます。1ヶ月ぐらい病院でリハビリをしたあとにこれから先のことはゆっくり考えます」

それは、そうだ。なんといっても体が一番だ。よし、わかったと私はそういった。

その小島もグローバル衛星放送に行ったんだよな。俺ってこんなに人望がないとはあらためて知ったというわけだ。

戦犯その3！　佐藤正行。新日本プロレス担当の佐藤記者に「話があるんですが」と呼び出された。その頃、私は週プロを辞めて数ヶ月が経っていた。

「今度、結婚することになりましたので山本さんに仲人をお願いします」

何、お前が結婚、そんなバカな！

私は自分の耳を疑った。おかしい。佐藤に彼女がいたなんて一体、どうなっているんだ。でも、目出度いことである。私は仲人をその場でOKした。

「知らぬは亭主ばかりなり」という諺があるが、私は「知らぬはターザンばかりなり」と気が付いたのである。

佐藤のヤツ、なんと週プロが新日本プロレスから取材拒否されている時、彼女と知り合い、そしてねんごろになった。

新日本担当記者としてはヒマができたというわけだ。ひょっとするとその時しかチャンスはなかったかもしれない。

だが俺たちが取材拒否で苦しんでいる時、恋愛をしていたとはけしからん。不謹慎きわまりないヤツだ。許せん！

ブルータス、お前もかじゃないが、佐藤記者、お前ってやつは、本当に！　裏切りはいつも身内から起こるというが、まったくすべては私の不徳のいたすところです。

裏切りと戦犯。

しかし、この話をきいて友人は私に同情しなかった。むしろ私に怒った。

「なんだ、バカバカしい。それぐらいの裏切りでガタガタいうな。A・猪木をみてみろ。お前なんかの何百倍、何千回と人の裏切りに会ってきたんだぞ。フン！」

かくして私は「俺は猪木だ」という看板を自分から降ろしたのであります。

問い合わせ不可

ホットライン　文通しよう

前略。トンネルを抜けるとそこは雪国だった、という気分に浸りたい貴女。僕と大正ロマンについて語り合いませんか？　ゴホッゴホッ！　草々。（坂井結核・20歳。手紙は紙プロ編集部まで）



革命戦士 長州力 VS 落武者亡霊 ターザン山本

「猪木イズム世界一決定戦」

昨年起こった新日本プロレスによる『週刊プロレス』取材拒否事件は実に衝撃的でした。不謹慎なことにリング上よりもこの事件の方に関心を持ったファンも多かったようです。でも本来はこれじゃいけませんよね。そう、すべては落武者が悪いのです!

マスコミである落武者が自惚れすぎて業界のバランスを



完全再録！

崩してしまい、長州選手の逆鱗に触れ、結局、落武者はプロレス界から追放されてしまいました。それもこれも落武者がすべて悪いのです！

　ところで94年に小社から発行した『猪木とは何か？　キラー編』（絶賛品切れ中）の中で長州選手と落武者は「猪木イズム世界一決定戦」というテーマを掲げて対談を行っているのです。これもいま考えれば実に無謀な企画です。かたや、誰もが認める猪木イズムの伝承者・長州力。かたや、自称猪木の現亡霊・ターザン山本では並べるには格が違いすぎます。

　ということで、「落武者がすべて悪い！」ということをプロレスファンの皆さまに確認していただくためにこの対談を再録してみました。

は？　落武者にも五分の魂はあるはずだって？　いえいえ、すべては天下の長州力を本気で怒らせたターザン山本が悪いのです。





べつに「アントニオ猪木が不滅です」とかそういったものじゃない
猪木さんに接近戦を挑んだら、その人間がいかれちゃいますもんね

長州　今日は**会長**の話だろ？　べつにオレが話さなくたって、**山本**だったら全部書けるじゃないか。会長のことはな……、いつも同じことばっかり喋ってるから、たまにはちょっとアレンジして話そうとも思うんだけどさ、もう疲れちゃったよ。でも、**最近調子いいじゃん**会長。

山本　いま……、一時に比べると実に何というか、猪木さんはいいですね。

長州　顔色もいいね。

山本　なんかあの、ここにきて猪木さんの持ち味って言ったらおかしいけれど、すごい勢いで回復してきて、もう一度猪木さんという存在がマット界の中で大きな光を放っているような気がするんですよね。

長州　もともと……そういうものじゃないか。

山本　やっぱり長州さんは、猪木さんのことをよくわかっているね。

長州　まあ、**暗い事件**とかの部分はあったけど……、それは確かにあったよね。会長自身はそれはもう、会社に対してもプロレス界に対しても、すごく迷惑かけたっていう部分の考えと、自分がそのトラブった問題の対処の仕方で苦しんでたからさ。あれはホントは会長自身は自分の問題として対処しようと思ったけど、マスコミがそうさせなかったじゃない。何でもかんでも猪木寛至じゃなくて、アントニオ猪木にしちゃってるからさあ。そういう部分での苦しさもあったんじゃない？

山本　そうですね。

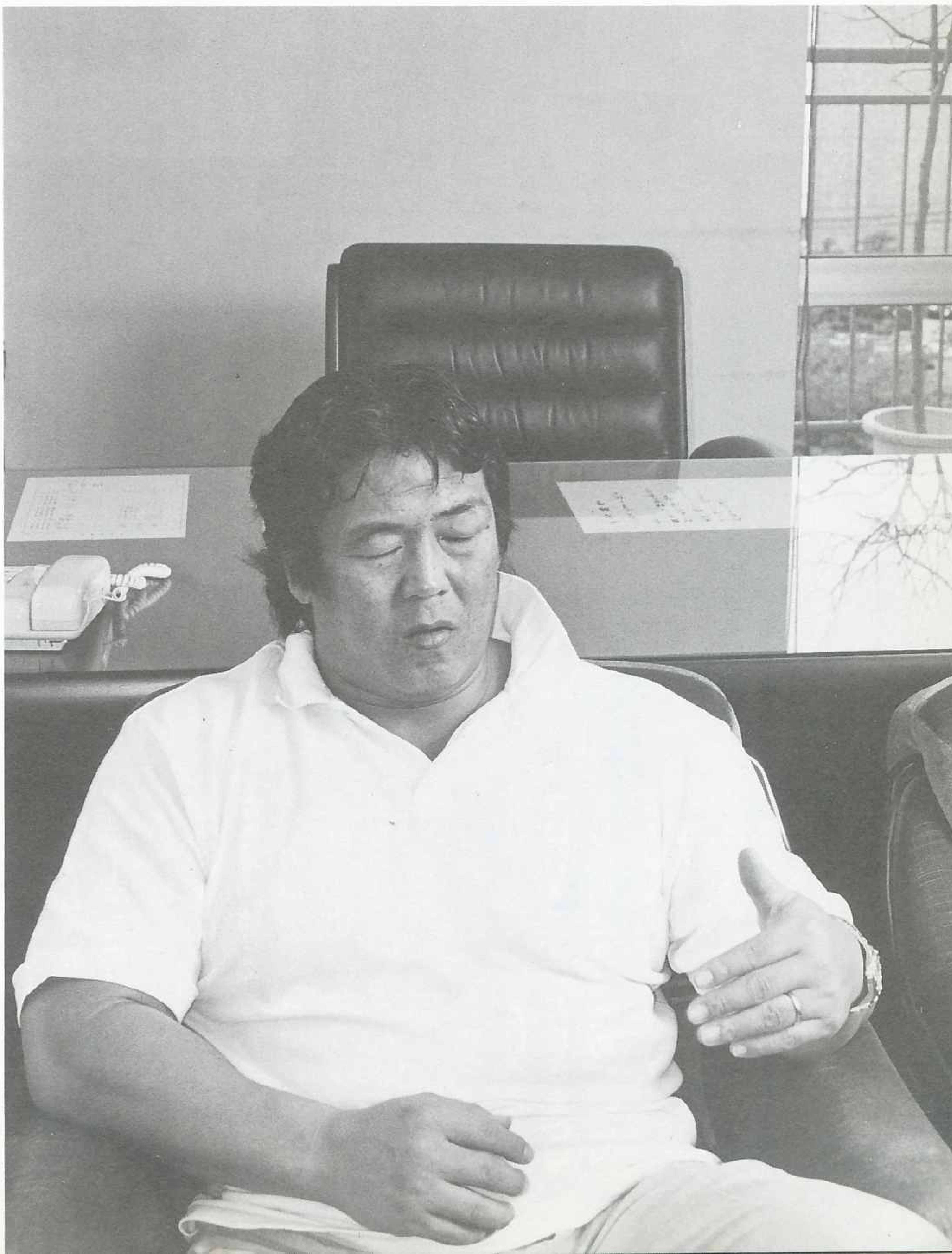
長州　だから、ああいう問題がなければ、べつに試合をやってようがやってまいが、いま山本が言ったような大きな光のバリアに包まれてるんじゃないの？　それは会長がやめたところで消えはしないって。

山本　それは長州さん、たとえ100年経ってもその光は消えないと思う。

長州　この会社が存続してる限りは消えないだろう。

山本　うん。

長州　新日本プロレスが存続してる限りは消えないよ。それは、消そうと思ったって消せるものではないしさ。山本はマジで消せると思う？



山本　いやぁ、例えば消そうとして、もし猪木さんに接近戦を挑んだら、その人間がいかれちゃいますもんね。

長州　べつに試合でどうのこうのってんじゃないよ。

山本　アントニオ猪木という全体的なイメージにですね。

長州　いくら、新しい団体がいろいろ出てきたからって、太刀打ちはできないだろう？　太刀打ちできるんだったら、オレが**ジャパン**で成功してるよ、ハハハハハ（笑）。

山本　長州さんもそういった意味では、一番手に挑んでいったタイプですよね。

長州　まあ、挑んだっていうほどでもないけどなぁ。挑んだって言ったらそれはちょっとカッコ良すぎるよ。気持ちのどこかで「やっぱりかなわない」っていうのはあるよ。
山本　でもあの**パキスタン遠征**終わった直後から、新日本を離脱していく過程というのはね、気分的にはもう、長州さんの中では爆発してたでしょう。
長州　そんなこと言ったって、いまでもこうやって、みんな会長のこと追いかけてるんだから。そんなもの、そうでしょ。会長の光が消えていれば、会長じゃなくて、**橋本**や**馳**やそういう若いのを追いかけているでしょう。いまの世代の横に会長の名前が出るだけで、どうしても影が薄くなっちゃうんだから。オレたちでさえ薄くなっちゃうんだから。
山本　そういう意味でいうと、猪木さんの**「カウントダウン」**に指名された選手たちはシンドイですね。
長州　いや、それはな、いまの世代のほうが重苦しく考えてないんじゃない？　意外と重苦しく考えるのは**オレたちの世代**くらいでさ。でも、どういう意味合いをもって指名されて試合をやるのか、会長より、やる相手を見てみたいよな。
山本　あの、確かに長州さんにしろボクにしろ、実に重たく考えているね。だって猪木さんから学ぶというのが、ボクの永遠の気持ちですからね。
長州　山本は重く考えてるって言うけど、重く考えてるつもりはないんだよオレは。
山本　いやぁ、ボクなんかはある種、この仕事をしていると猪木さんを**拠り所**にしないとだめなんです。
長州　それは個人個人の接し方の中でさ……。オレたちは自分たちのリングの中での闘いもあるし、山本たちは山本たちでまた違った部分での触れ合いがあるから……。
山本　その若い世代の人たちは、猪木さんに対して、あるスタンスを保って接していますよね。
長州　たぶん、それは縮められないよ。
山本　ええっ？

RIKI CHOSYU VS TARZAN YAMAMOTO

長州　縮められないでしょう。
山本　う～ん（と考え込む）。そうしたら離れていったほうが楽ですよねえ。そう考えると天龍さんというのは、ラッキーなのかアンラッキーなのか、わからないところがある。
長州　だから、ラッキーにするか、アンラッキーにするかは本人次第の問題でしょ。
山本　実際問題としては1・4東京ドームで**天龍**選手が勝ったわけですから……。
長州　オレたちからすれば、天龍が勝とうが負けようが、やったことに対してはラッキーだと思ってるけどな。天龍だってラッキーだと思っているんじゃない？
山本　ああ……（と沈黙）。
長州　べつに「アントニオ猪木は不滅です」とか、そういったものじゃないんだけどね。
山本　でも、とりあえず一番デカイ存在ですよね。それはもう、消えないですよ。
長州　まあ、デカイと我々は思ってるだけであってさ。決めつけることはないけど、我々の中では一番デカイんじゃないか？　うん。

オレたちより下の人間は、時間が来るのを待ってるって感じじゃないか



ああ、もうだめだ。何も来やしないですよ。そのうち自意識が腐ってくる



山本　じゃあ、長州さんのポジションは、いまの新日本プロレスの中で、若い人たちがいろんな形で出てきて、猪木さんは別の形で再生してきたし、いまはどういうスタンスなんですか？
長州　オレ？　元気バリバリの選手じゃん（笑）。
山本　（笑）いや、そうとばかりはいかないでしょう。猪木さんがいて、長州さんがいて、その横に**藤波**さんや**藤原**さんがいて、**闘魂三銃士**と馳さんがいて、という。
長州　まあ、考え方の拠り所をさ、ここ何年間かどこに持って行っていいかわからないままに来てるよね。その流れの中で下からもいろんなことを言われるし、当然上がって来る中ではそういうものはあるんだけど、こっちからそれに対してどうのこうのっていうのがね……。
山本　めんどくさいわけですか？
長州　しんどくなっちゃってさぁ（笑）。簡単に言やあ「じゃあ1回、本気にさせてみろ！」ってね。そういう部分では細かいコメントはだしてんだけど。自分でも本気になって「よーし！」っていうのが、ここ何年間か完全に見失って流れているところがあるから。まあ、大きな試合とかは、それなりに対処してやっていくという考え方はもっているんだけどな。それでもやっぱ、物足りないっていうのはあるよな。でも、物足りないってえのも、よく考えるとオレのせいでもねえなっておもうんだよな。やる相手のせいじゃねえかってな（笑）。
山本　じゃあ、いまは意外と心地よいということじゃないですか。それとも逆につまんないということですか？
長州　オレたちの立場だと、それは心地よいってことはないよ。そういう状態になったら。反対だよそれは。あれだけギャアギャア言いながらやってきたんだから、このままで終わってもしょうがねえなとも思うし……。
山本　リアクションが欲しいわけですね？
長州　反対にねぇ、オレたちより下の人間たちは、時間が来るのを待ってるって感じじゃないかと思うんだよな。時間ばっかりはオレが止めるわけにはいかないからね。つまらない状態で時間が進んでいって、いつかはオレたちが降りなきゃいけないって時が来るからさぁ。
山本　ああ、もうだめだ。待ったって何も来やしないですよ。そのうち自意識が腐ってくるだけなんですよね。
長州　だから、オレが悪いんじゃなくて「言ってるオメエたちがそういう状態にしてくれよ」って。確かに、そう言うのもなんだけど、自分から下の人間に対してひとりひとりにっていうのも気が乗らないんだよな。まあ、

流れの中で世代闘争っていうのに入ってるけどさぁ。オレが言ってた時の**世代闘争**や口から吐いた言葉と違って、コイツらが言ってることはコイツらが考えて吐いた言葉じゃなくて、マスコミに作られたという部分があるからな。だから**「時代はオレたちのものだ！」**ってケツ掻かれるようなエネルギーは感じないぜ。だからって、のんびり構えてるワケでもないんだけどさ。

山本 時代に対してもっと本能的・皮膚感覚的に生きて欲しいという感じはあるんだけど、それが足りないのかなあ。

長州 若い奴らにそれだけのエネルギーがあったら、当然オレたちはもう追い越されて、出る幕もなくて、ある意味では嬉しいけど。反面、オレはすごくプロレスを難しく考えてるから、ある程度の見極めをつけているんだけど……。見極めがついてないっていうのはさ、やっぱりオレのせいじゃないと思うんだよ。

山本 いまの言葉でボクは感じることがありましたよ。ボクなんか当時の**維新軍団**時代の長州さんを追っかける楽しみがありましたよ。疲れきっているのにホテルまで追っかけて「あっちに行け！」と言われたこともあった。

長州 ああ、なつかしいなあ。

長州 オレも他人を追っかけてる時のほうが楽しかったよな。

山本 長州さんも？

長州 それだけやっぱり、追っかけ甲斐があったよな、アントニオ猪木ってものはね。やり甲斐があったよ。だからといって、彼らにはないように言うわけじゃないんだけど、やっぱりウチは駒が多すぎてそのエネルギーが1本にまとまらないっていうのはあるんじゃないのかな。みんな「そのうち誰かが」って思ってて、それだと時間ばかりがどんどん経っていくから、オレたちがしんどくなっちゃうよ。ある意味では、いまはいいペースなんだけど、このままでいいのかなとも思うんだよな。まあ、いいほうに考えりゃ、それだけ組織も力も大きくなったってことなんだけどな。

山本 新日本のキャパシティがデカくなったということですかねぇ。ひとりの人間がどうのこうのできる世界じゃないというか……。

長州 オレたちの時は、人数が少ない部分で、藤波、長州って部分がやっぱり目立って流れの中にあったからさ。いまは藤原さんとか、たまに流れの中に入ってくるとあれだけのエネルギーが出るというか……。ひとりだけでやっていくんじゃ藤原さんもギブアップに近いんじゃないかと思うよ。でも、こっち側に入ればそれだけのものが出せるしね、あの人は。……オレの話ばかりになっちゃったけど、今日は会長の話しなくちゃならないんだろう？

もうめんどくさくなっちゃったんだよ、あの人のことは……A・猪木にすがりつくか、食いつくか、それしかないんです





山本 ハッキリ言って猪木さんはボクの「永遠の恋人」ですよ。猪木さんについて考えることで、ボク自身何かが動くことだと思っていますから。

長州 オレから言わせりゃ、会長はこの会社の中の**空気**だよね、新日本の空気。常に吸ってなきゃいけないものなんだよ。匂いっていうのはだいたい消えるんだけどさ、消えねえよ、こればっかりは。

山本 長州さんも、よく考えると不思議な人だね。その振幅の激しさというのは。猪木さんが柱時計で、長州さんは振り子みたいなものですね。

長州 そうでもないんだよ。あまりにプロレスを難しく考えすぎちゃったからさ。なぁ？ 後半の10年間は難しく考えすぎちゃったんだよ。でも、どうせやるんなら難しく考えたほうがいいし、それはそれぞれ個人差はあるさ。会長の「カウントダウン」が終わったからって匂いは消えないんだよな。

RIKI CHOSYU VS TARZAN YAMAMOTO

山本 絶対に消えませんよ！

長州 ああ、またどんな匂いになるかでさ。『ポワズン』みたいに毒みたいな匂いになるのか、ホントにリフレッシュして「ああ、毎日この空気吸っていたいな」ってものになるのか。あの人の考え方ひとつで空気も匂いも変わっちゃうんだからさ。

山本 そうですよねぇ。ボクたちはどうあがいても"一つの時代"にしか関われないとしたら、A・猪木にすがりつくか、食いつくかそれしかないんです。

長州 普通ちょっといないぜ。だから匂いがキツイ時にはシンドイと思うし、いい匂いの時には「あー、いいなぁ」と思うんだよ。

山本 でも、いい匂いの時は少ないでしょう？

長州 どうかなぁ……。

山本 猪木さんと一緒の世界の中で同じ空気を吸うと、お互いに身を縮めるというかそういう部分はありますね。

長州 それは、やめない限り、去って行かない限りは無理だろう。会社の人間だろうが、選手だろうが誰でも。新日本プロレスに関わっている人間は全部だよ。これは、太刀打ちできるとかできないとかいうもんじゃないんだよな。これは長年言ってきてるんだよ。これは説明してきたんだけど、**もうめんどくさくなっちゃったんだよ、あの人のことは**。

山本 猪木さんのことをめんどくさいと……それは長州さん、ないでしょう。やっぱりボクらはしつこく粘っていかないと……。

長州 いろいろアレンジして言ったところでしょうがないんだよ。「猪木さんてどういう人ですか？」って聞かれたって、もう疲れちゃうんだよ。この前、「会長のことで山本さんと対談してくれ」って言われた時も、なんでまた山本と会長の話しなきゃいけないんだって、やめようかとも思ったんだけど、**でも1回ぐらい顔を合わせとかなきゃ気を悪くする**んじゃないかとも思ってな。いまさら山本と会長のこと話

さなくたって、山本は山本で会長に対する感性もあるからな。まあ、会長に対してオレはいまのところそんな感じだよ。
山本　長州さんにはガーッっといって欲しいなあ。**墓にクソぶっかけてやる**とか、ああいうのが長州さんらしいし。
長州　現実的に見える部分での、会長に対する対処の仕方は「カウントダウン」をキチンと素晴らしいものにしてあげたいというね、そう見せてあげることだよ。気持ちの中の部分ではもっと違う部分だからさ。
山本　いや、ボクたち雑誌を作っている立場だと、永久に猪木さんを使っていきたいという気持ちはありますよ。
長州　オレはあの人が「カウントダウン」に入ったからといって寂しいという気持ちはないんだよ。あの人が去って行くというんだったら、これは話がまた別だけどさ。空気も全部変わってくるだろうしね。そんなところじゃねえかな。





この世界で生きていたら、他人の3倍くらいは濃密な人生がある 潰れていく団体と、潰れなきゃいけない団体ってのもいっぱいあるよ

山本　長州さんもホントおもしろかったもんねえ。藤波選手を破った時、**「オレの人生に1回ぐらい幸せなことがあってもいいだろう」**という名言を吐いてくれたし。ボクなんか長州さんに強烈に影響受けてますよ。でも、このプロレスの仕事をやっていたら、他人の何倍もの人生があるでしょう？
長州　どうかな、それは反対かもしれないよ。
山本　ええーっ？
長州　反対かもわからないよ。

山本　いやぁ、この世界で生きていたら、他人の3倍くらいは濃密な人生があると思うな。いままでやってきたことを考えるとね。
長州　いいことが続いている時はそう考えるのかもしれないな。仕事のことでトラブっちゃったり、悪いことが続いている時は「あ〜あ」とも思うしな。



山本　長州さんのストレスのイライラとか、フラストレーションはどこからきてたんですか？　これはいっぺん聞いてみたかったんですよ。
長州　それは、やっぱり仕事だろうな。変な部分に考え方が変わってきたり、**UWF**ができたり、それが**分裂**してまた違う団体やわけのわからんのができたり、それに付随して変なのがどんどんできただろう。そういうのがすごくイヤだったね。
山本　なるほど。
長州　だからオレ、前にもマスコミに言ったけど、潰れていく団体ってのはいっぱいあるよな。
山本　ええ。
長州　潰れなきゃいけない団体ってのもいっぱいあるよ。前に他人ごとじゃなくて「コノヤロー！」って思ったのは、**どっかの団体が選手が会場に来なくって、リングの上で客に土下座して謝った**っていうのがあったよな。「この、クソ馬鹿野郎！　この恥さらしがぁ」と思ってさあ。「もう二度とやるなオマエたち」って、オレの名前出していいから書いてくれって言ったんだよ。昨日今日できた団体が、テメエらの中でトラブってそれで客に土下座して謝るなんてのは、許せねえよ。オレから言わせりゃ、そこに行くまでの問題だよ。
山本　はあ……。
長州　今回の**高田**（延彦）んとことアキラ（前田日明）のとこの問題もあるけど、個人的にはそれに近いものを持ってるよ。あいつらだけの問題ってわけにはいかないだろ。やっぱりマスコミも悪いよな、あれは。フォローした部分があまりにもなさすぎるよ。どうやって焚き付けようかって考えてるだろ。やってる当人たちも調子こいて、周りが見えなくなってドンドンやっちゃってるだろう。「この、クソ馬鹿野郎ども！」って思うよ。我々のこの世界の中で、テメエら2人で**クソ垂れやがって**さぁ、それを片付けねえんならそのまま潰れてしまえって。この業界全体の中でのケジメは彼らがつけなきゃいけないんだよ。垂れたクソはテメエらで拭き取らなきゃ。テメエら同士がそれぞれのリングでクソ垂れてんじゃねえんだから。我々の世界の中にまでクソ垂らしたわけだからさ。やっぱり**イメージが悪いよ**。
山本　悪いですねぇ。いや、悪いなんてもんじゃないでしょ、もう。
長州　お互いが言い合う言い分はわからないでもないけど、それがあまりにも外に漏れすぎたよな。他のリングに迷惑かけないように、もっと早く対処しなきゃ。

UWFが出てきたからプロレス全体がデカくなったとは言えますよね
UWFもマスコミも、みんなくたばったら墓にクソぶっかけてやる!





山本　普通、あそこまでは喋らないでしょう?

長州　だから、その程度の感覚で団体を興しちゃってるからね。なかなか、意思の疎通ができなかったんだろうな。

山本　それは、ある意味では、長州さんのUWFに対する懸念がストレートに出てしまったということですよね。

長州　いや、今回はそれとはちょっと違って、全体的に漏れちゃったからな。だから、その漏らしたものはどうすんの?　って。テメエらだけ元のサヤに納まってるけど、廃棄物はそのままだからな。

山本　……（苦笑）

山本　でも、まあしかしUWFとはお互い本当に因縁がありますねぇ。

長州　ねえよ、そんなもん!　まあ、みんな早く潰れてくれりゃいいなと思うよ。テメエらでお互いに首絞め合って早く潰れりゃいいんだよ。まあ、もたないけどな、**間違いなくもたねえよ**。

山本　うーん、あんな状態では、一種の徒花に終わるかもしれないですね。

長州　プロレスをわかってないよ。

（長い沈黙）

山本　でも、プラスの評価をするのなら、UWFが出てきたからプロレス全体がデカくなったとは言えますよね。

長州　何を言ってんだよ〜、お前!　そんなことあるわけねえじゃねえか!（怒）

山本　いや、それは言えますよ長州さん。

長州　それは感性が違うよオレとは。とんでもない話だ!

山本　でも、ボクはそういう評価をずっとしてるんですよ。

長州　とんでもない、その反対だよ、オレから言わせりゃ。オレたちが頑張ってるからアイツら、枝の先っぽの雫みたいに落ちなくてすんだんだよ。これは悔しさでも何でもなくそう思うよ。オレたちが頑張ってるから、ぶら下がっていられるんだよ。**それは間違いだよ**、山本。

山本　そうですかねぇ?

長州　オレはそう思ってるよ。

山本　ハァ……（苦笑）。

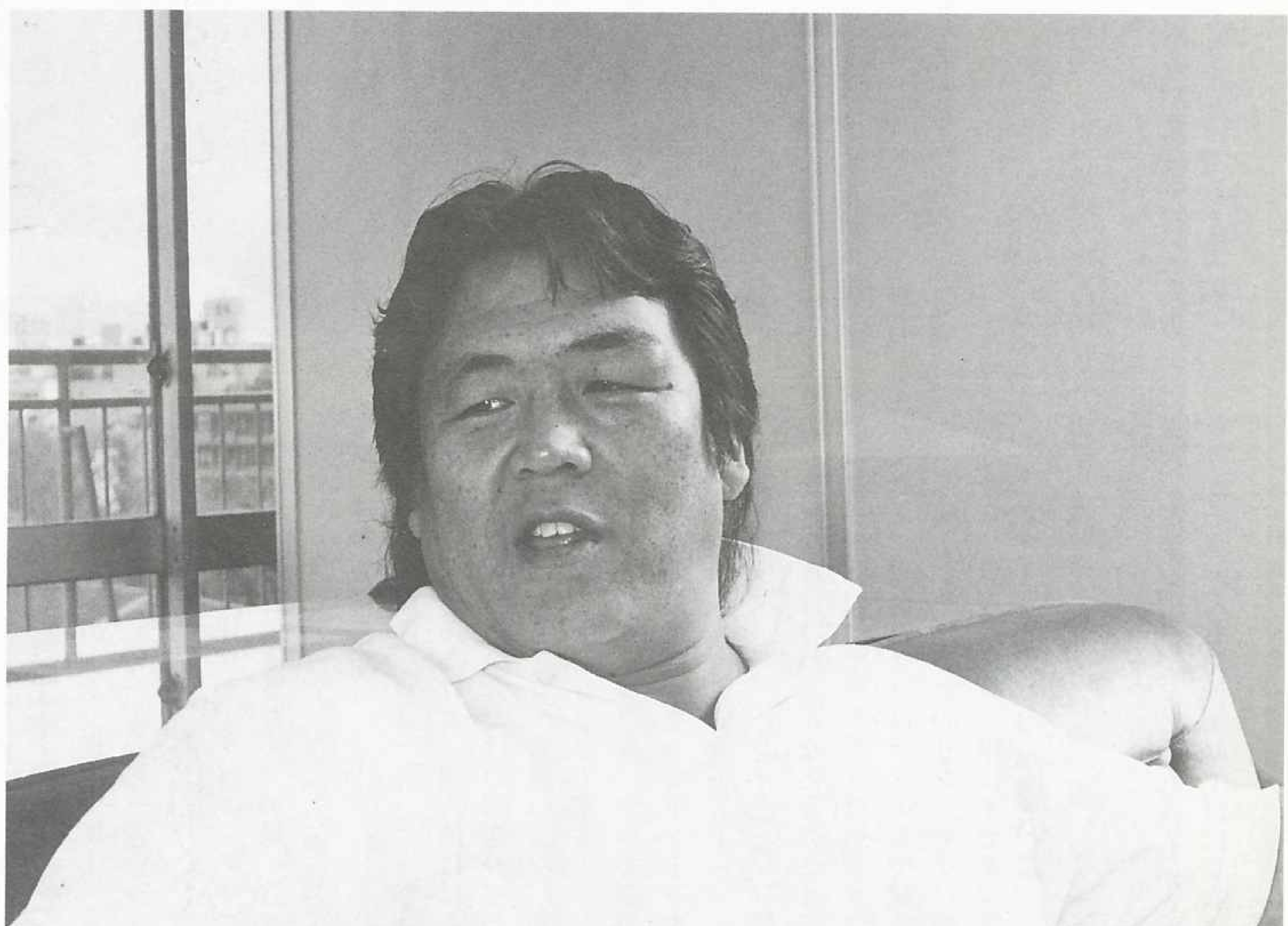
長州　正直言って、アイツらが言ってることとオレには見えねえんだよ。何が言いたくて、何がやりたいのかっていうのが……。「**ハイ、1億円積みました**。ハイ、やりましょう」って。**前の蝶野の一件**だって、何にもオレには見えねえんだよ。

山本　それは長州さん、興味深い発言ですねぇ、そういうふうにハッキリ言い切ってくれる人がいまいないから。

長州　いなくはねえだろ、みんなそう思ってるよ。ただ、他人ごとのケンカだと思って、笑って見ている選手はバカだよな。

山本　無責任すぎますよねぇ、ハッキリ言って。自分のことだと思って考えなきゃマット界はだめになっていく。

長州　それは漏れてきてからだぞ、廃棄物が。漏れなきゃ、お互いに首絞めてくたばりゃいいんだよ。でも、漏れてきたら無視するわけにはいかないからな。ファンのためにも、プロレスのためにも。団体が違うったって土俵は一緒だからな。後始末も何もしないで、元のサヤに納まりやがって、じゃあいったい何がしたかったんだよ。



山本　いやぁ、まだ納まっていないような気がするんですよね。

長州　だから、納まったらこの廃棄物をキレイにするの

か？　って。
山本　それは、言わなきゃいけないですね。
長州　な？　**あのマスコミっていうのもホントどうしようもねえな。**あいつらみんなくたばったら、墓にクソぶっかけてやるんだ！　ホントだよ書いとけよコレは。**山本、お前にはぶっかけねえから心配すんな**（笑）。
山本　あちゃ～（笑）。それはもう、強烈な発言だなぁ。久しぶりに長州さんが爆発しましたね。
長州　もう、親が怒ろうが怒るまいが関係ねえ。みんなクソぶっかけてやるんだ！
山本　彼らがやっていることが見えないというのがいいですねえ。
長州　ホントに見えねえんだもん。山本が見えてるって言うんだったら、オレに説明してくれ！　何を投げたんだ？　ウチとか**全日本**とかいろんなところに、何を投げたんだよ？
山本　説明できないですねぇ（苦笑）。
長州　オレだってこの業界に20年間もいるのに、全然見えねえよ。なあ山本、**宮戸**って何なの？　高田って何なの？　ねえ、アイツらホントは**ホモなんじゃないの？**　何なんだアイツら。
山本　クックックッ（苦笑）。いやぁ、高田選手のことはわかりますけどね。
長州　なんで？
山本　わかるというか、あの人なりのスタイルで生きているなぁと……。
長州　何でアイツは表に出ないわけ？
山本　表に出ないというより……、ヒールにならないためでしょうね。
長州　なんだよそりゃ（笑）。なんで対抗戦はダメなわけ？　で安生が言うと、**安生**じゃなきゃダメだって。で、何を投げたの？
山本　すいません、それボクに聞かれても説明できないですよ（笑）。
長州　前に蝶野にクソひっかけてきたよな。

RIKI CHOSYU VS TARZAN YAMAMOTO

山本　その時はどうだったんですか？
長州　話したよ、「やろう！」って、**巌流島**で。こっち4人で向こうが高田と宮戸と安生とあともうひとりは誰でもいいって。まあ、あとのひとりは**山崎とは言わなかったんだよ、かわいそうだからさ。**
山本　ハハハ（笑）。
長州　とにかく出せと……。で、ウチは**WCW**とあの時、業務提携していたんだから、もし**NWA**のベルト巻いている蝶野とやりたいんだったら、その蝶野とやる前にこっちのオレと**健介**と**マサ**さんと橋本といっぺんにやって、オマエら3000万円用意しろ、と。タダでやらせるわけにはいかないんだから。そうだろう。
山本　ええ、そうですね。
長州　それでやろうって。そしたら「5分間時間をください」って言うから、そっちの部屋で考えろって。5分考えてきたら「できません」だとよ。
山本　「できません」って言ったんですか？
長州　そうだよ。なんでできないんだ？　って聞いたら「これは、ちょっとできません」って。ホントだよ。
山本　3000万円用意できなかったんですか？
長州　いや、カネの問題じゃないんじゃないの。「この3000万円はどうするんですか？」って言ったら、社長が「この3000万円は、ウチの4人の選手にあげてください」と。**社長**はいいって言ったんだから（笑）。
山本　へーえ、そうなんですか（笑）。
長州　できないっていうのは、カネの問題じゃないんじゃないの？　ウチは見えるものは投げたよ。
山本　それなのに向こうは下りたわけですね。
長州　うん、ホントだよ、聞いてみな。
山本　ええ、聞いてみますよ。
長州　それで、残った選手が蝶野に挑戦してくれって言っただけだから。興行的な部分で折半だどうだこうだって、ウチが儲けてもしょうがないから、だからお互いにカネがかからないところで、巌流島でやりましょうって。聞いてみな、いま言ったことにひとつも言葉の誤りはないよ。
山本　その時は、宮戸選手と安生選手と**鈴木健**の3人だけで……？
山本　うん。アキラも「オレひとりでいい」って名乗り出ればよかったんだけど……。
山本　7人でということになって……。
長州　3人だろうが4人だろうが、団体戦をやろうって言ったんだろ？
山本　ハイ、そう言ったんですよ。
長州　だから、最初に投げた部分をこなして、最終的にそこへ持っていけばいいことだろう？　な？　そうだろ。ウチだったら「アキラ、橋本と一騎討ちしてくれ」って言って、「それはできない。ただし7人並べますから対抗戦をしましょう」って言うんなら、これはおいしい話だと思ってすぐに入っちゃうよ。
山本　入っちゃうんですかぁ？
長州　入っちゃうよ。おいしいじゃん、そうだろ？　で、その後にそういうものを実現できるように持っていくよな。これは完全なビジネスだ。まず第一歩がかなうんだから。高田のとこは何を投げたんだよ、全体に。




長州さんはプロレス界の土俵はひとつって考え方だからねぇ
スタイルが違うって、こいつら何をほざいてんのかな？って

山本　長州さん、ビジネスという言葉が出たんですけど、**4・16のジュニア**（SUPER J-CAP・両国国技館）なんかは、ビジネスという言葉で割り切っちゃいけないけど、ああいう形で他団体の選手を新日本のリングに上げることに対してはどう思ってるんですか？
長州　あれは、間違いなく意義があったよな。

山本　最近では一番意義がありましたよ。

長州　これは変な意味で解釈してもらいたくないんだけど、あれはウチのリングでしかできないことなんだよ。

山本　とにかく最近の中では特に画期的な出来事ですよ。

長州　オレは試合が始まる前にみんな集めて言ったよ。まず、みんなこのリングに上がって感動してくれと。団体の大きい小さいは関係ないと。これからジュニアを大きくしていくのも小さくしていくのも、ここに集まったお前たちなんだからと。

山本　ちょっと待ってください。それは他団体の選手たちに言ったんですか？

長州　みんな全員集めて言ったよ。

山本　太っ腹ですね（笑）。

長州　太っ腹でも何でもないよ。ウチのリングに上がるんだから、みんないい感動をしてくれってことだよ。

山本　それは、新日本プロレスという器を提供して、どうぞという気持ちなんですか？

長州　ああ、そうだよ。

山本　それが本当の目的だったんですか。でも、いままではそういうパターンがなかなかできなかったんですよね？

長州　いや、ジュニアの世界は我々と近いものはあったよ。感覚的な考え方がね。やっぱりあそこは上がりづらいとかはあったんじゃない？

山本　そのジュニアのオールスターを総括してどうですか？

長州　100パーセント、みんな頑張った。

山本　100パーセント！　ということは、予想した通りにうまく回ったということですか？

長州　それ以上にプラス・アルファが出たね。

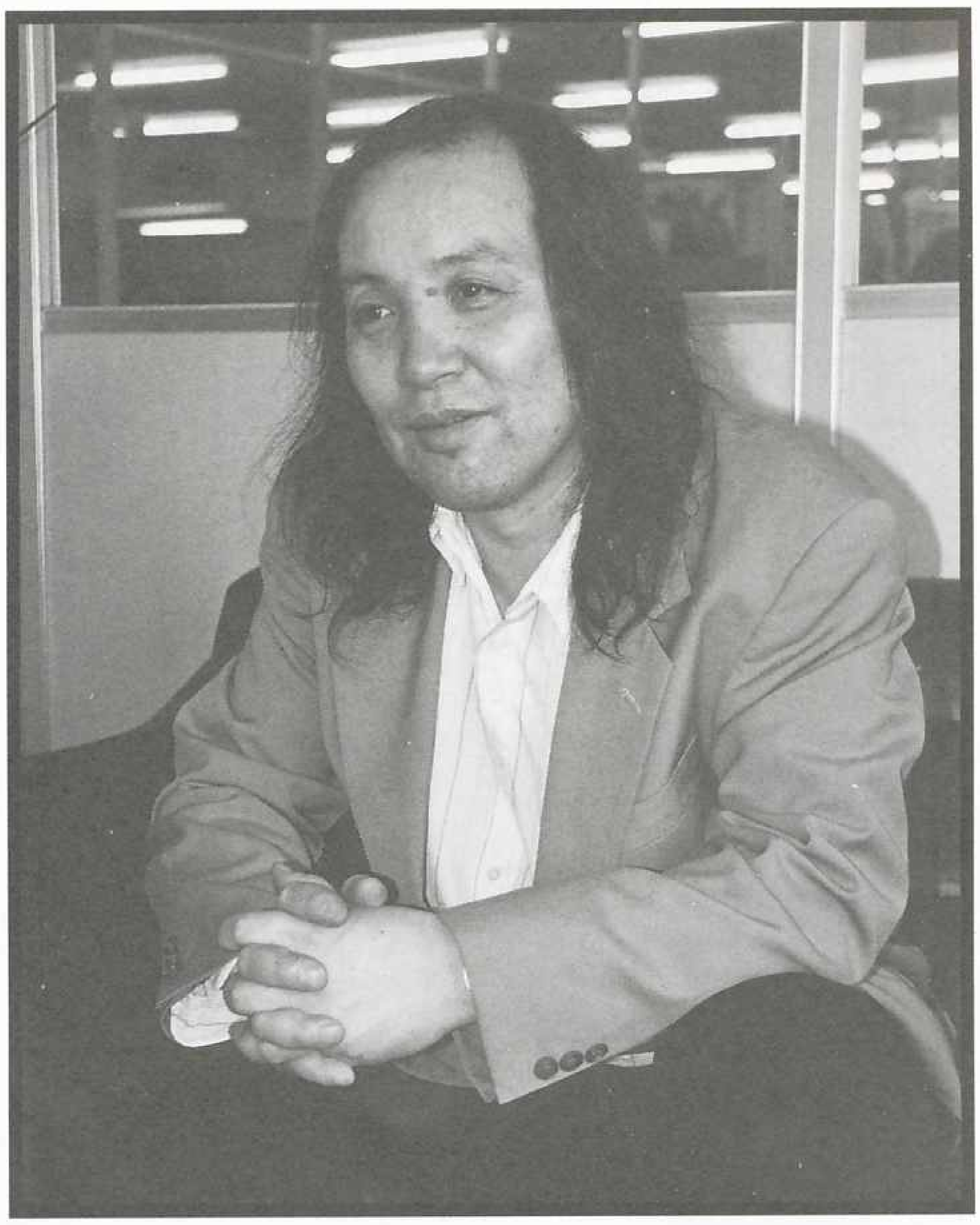
山本　どんなプラス・アルファですか。

長州　ただ、彼らはそこからがスタートだからね。それが次に繋げることができるかどうかが問題なんだよ。

山本　そうなるとやっぱり、力がないといけないでしょう？

長州　そういう部分での協力は惜しまないつもりだから。でも**「次はウチで」**なんて簡単に考えてもらうと困るってこと。「いやぁ、それは約束が違うじゃないですか」ってなるとオレの感覚とズレが出てくるからね。

山本　例えば**FMW**が「次はウチがやりたい」と言ってきましたけど、ああいう考えには「ノー」なんですか？



当時は長髪（とハゲ）がトレードマークだった落武者。
今見ると意外と凛々しかったりするから、時の移ろいとは不思議なものである。

長州　いや、それはまだ保留。そういうふうに話がドンドン進んでいっちゃうと、潰れるのも早いんだ。こういうジュニアの大会は特にね。

山本　器の問題というのは確かにあるんですよね。

長州　ひとつハッキリしたのは、これだけのものができたんだなぁって。オレ自身はもっとマイナスに見ていたんだけどな。

山本　ハッキリ言って出来過ぎでしょう。

長州　うん、プラス・アルファだったな。それだけ新日本のリングだから頑張れるっていうのもあるんじゃないか。選手からは間違いなくそれ以上のものが出てくるからね。これが、東北の**みちのくプロレス**でやろうっていうんじゃ、ダメっていうんじゃないけど、大事にしたいんだったら、それは話が違うもん。だからって独占しようとは思ってないよ。

山本　ただ、あの成功のパターンっていうのは、これまでの新日本の歴史にはなかったものですよね？

長州　あったじゃないか、昔も。全日本も参加して**オールスター**とかやったじゃん。

山本　でも、あれは**『東京スポーツ』**が誘導してやったわけですよね。

長州　そんなのはどこが入ろうが、できねえもんはできねえんだから。

山本　でも、あの4・16は何かが見えましたね。

長州　まだまだ弱いだろうね。あれに他の団体の小さい選手がもっと出てくればね。ただスタイル云々って言ってる部分は、オレにはまだわからないんだよ。こいつら何をほざいてんのかな？って。スタイルが違うってのは、オレが昔言ってた土俵が違うってことなのか？

山本　長州さんはプロレス界の土俵はひとつって考え方だからねぇ。それに乗ってるか乗ってないかの違いということでしょう。

長州　そう、ただそれだけなんだよ。

山本　それが、一番の真実というか、真理というか。

長州　こいつらは「土俵が違う」って言ってるのか。そうこっちが決めつけていいのか？ってことなんだよな。

山本　スタイルが違うことをもし

RIKI CHOSYU VS TARZAN YAMAMOTO

「土俵が違う」と考えてしまったら、これはもうおしまいですよ。

長州　どっちなんだろ？「スタイルが違うからウチは出たってしょうがない」って言うのは、住んでる世界が違うってことなのか？　それならプロレスラーとは何だ？って。

山本　うん、住んでる世界を限定しちゃだめですよ。プロレスって巨大な世界なんだから。ＵＷＦがしゃらくさかったのは、そのプロレスの大きさを無視して、てめえの世界だけを善としたことですよ。あれだけは美学的に大嫌いだった。



長州　狭いんじゃなくて、そんなのはプロレスラーじゃないんだよ。

山本　そういった意味で言うと、長州さんにとって**ライガー**はどういうレスラーなんでしょうか？

長州　ある部分ではライガーというのは、すごい努力をしててね、彼以上に努力してるヤツはいないだろう。でも、誰でも彼でもウチのリングに上げようっていうんじゃないよ。昨日今日選手になったってのはダメだよ。簡単なことだよ、トレーニングしないヤツがリングにあがれるわけねえんだから。そうでしょ、上がってるのが不思議なんだから。これはもう間違いないんだから。レスラーなんだからさ。**オレも道場に行かなくなったら、引退**だと思ってるよ。道場に行かなくなったらレスラーじゃないんだから。

山本　…………………（沈黙）

長州　それも（新日本の）空気なんだよな。トレーニングもしねえヤツがリングに上がるなんてのはあり得ねえんだからよ。なあ、山本。

山本　道場のない団体もありますよ（笑）。

長州　ああ？　それはまた話が別だけどよ。トレーニングだよ。

山本　ということは、それさえあれば共通の分母になり得るということですね。

長州　そうだろうな。

山本　それさえあれば、みんな一緒だと考えていいわけですね。要するにどのリングであろうと関係ないと……。共通項があるということですね。

長州　ああ、関係ない。努力しないヤツにどうしてチャンスが回ってくるんだよ？　あり得ないよそんなのは。オレはイヤだね。





この世界は尻尾のモグラ叩きをするしかないんですよ

死んでるのがわかってないのが、いっぱいいるよ

山本　あのジュニアの成功をもっと拡大できないんですか？　例えば、ヘビー級にまでとか。

長州　だから、拡大するもしないも彼らの努力じゃないか。ヘビー級にそれを？

山本　ええ。

長州　できるよ。投げたものが見えれば。ウチが投げてやってもいいけど、たぶん食わないだろうな。彼らがそれを見ようとしないだろうな。それが、この前の蝶野の一件じゃん。ウチはこれまでいろいろ話があったけど、投げてきたものに対しては完全にみせてるよな。全日本とかもそうだっただろ？

山本　…………そうですねぇ。

長州　ウチはいつだって責任持って投げてるよ。いたずらで困らせようなんて考えたこともないよ。アキラのとこにも投げたけど、アキラもそれを見てくれてアイツはちゃんと対応してくれたよ。それはそれで投げたものを見せてくれればいいと思うよ。

山本　ああ、なるほどねぇ。これからもそうやって投げていくわけですか？

長州　いやぁ、そんな簡単には投げねえよ。

山本　簡単には？（笑）

長州　必要もねえよ。早くくたばってくれりゃいいよ。

山本　そのくたばれってのはUのことでしょう。

長州　いや、Uであろうが何であろうが、**インディペンデント**もそう。オレの感覚でダメだと思うところはみんな潰れてほしいよ。そういうのはいっぱいあるよ。まあ、自然と潰れるだろうな。

山本　でも、この世界はトカゲの尻尾と同じですからね。次から次へと尻尾が生えてくるんですよ。尻尾のモグラ叩きをするしかないんですよ。

長州　だって、やってる彼らはたぶん、何を持ってリングに上がってるか感覚が理解できねえもん。一回ぐらいは話してみたいと思うよ。「どういう意義があってリングにあがってんだ？」って。

山本　どんなこと喋るんでしょうね？

長州　**「俺は絶対に潰さない」**とか言ってるだろ。ふざけんなって、テメエはもう潰れてるんだって。それを認識させてやりたいよ。

山本　ハッハッハ、なるほどね（笑）。

長州　「オマエは地縛霊なんだから、もうあっちの世界へ

行け！」って**織田無道**みたいに説得してやるよ。**死んでるのがわかってないのが、いっぱいいるよ。**

山本　ハッハッハ（笑）。除霊しなきゃいけませんね。

長州　でも、どんなに団体が小さかろうが、一所懸命リングに上がって、一所懸命鍛え上げたものを出してるヤツらには、オレはいくらだって投げてやるよ。それはウチの選手だって一緒。トレーニングしなけりゃ、チャンス握れるわけないんだから。オレはそいつにオマンマを食わしてもらうんだから。そんなところでは、世代闘争もくそもあったもんじゃねえよ。

山本　そうですねぇ。でも、ボクなんかピンからキリまであってもいいんじゃないかという気持ちもあるんですよ。

長州　練習もロクにしねえオレがこんなこと言っちゃいけねえか（笑）。ちょっとうしろめたいな。

山本　長州さんの考えだと団体は2つか3つになりますね。

長州　数の問題じゃないよ。小さくたってやることやってりゃ、評価されますよ。そういうのを見せられれば、こっちだって努力しますよ。やっぱりねぇ、死んでる人間がいるところには死んでる人間しか集まらないんだよ。

山本　うん、そうですねぇ。

長州　死んでる人間がウチにきて「一緒にトレーニングさせてください」って言って、いくらやったって意味ないんだわ。

山本　ということは、長州さんとしてはデ～ンと構えているということですね。

長州　構えてると言ったら、読んでるヤツはまた「何言ってんだ」って思うんだろうけど。「何言ってんだ」って言う前に「やらしてください」って、ドンドン来ればいいんだよ。

山本　来ればいいんですか？

長州　来りゃあいいんだよ。

山本　それはかまわないんですか？

長州　かまわないよ。ウチにメリットがあれば何も拒まないよ。その代わりメリットがあった分は、それ以上にして返してやるから。

山本　ほお～、そういった意味では門戸を開放するということですね？

長州　あぁ？

山本　もう一度確かめますが、門戸を開放するという意味ですね？

長州　山本は極端すぎるんだよ。オレも言葉の駆けっこしてるわけじゃないけどさ。

山本　でも、いま言われていることはそういうことだから……。





長州さんの感覚を理解することが査定に入ってる。それは面白いですよ

いまのウチは恵まれているよな。10年前のオレなら1億は稼いでるよ

長州　また、こういうふうに偉そうなこと言うと、新日本だけがどうのこうの言われるからなぁ。ああ、いやだいやだ。でも、決して現状に満足してるってわけじゃないよ。

山本　でも、これだけの人材を動かそうというのは大変じゃないですか。

長州　バカが多いからな（笑）。

山本　いや、バカと言ったら失礼ですけど、アホと言ったらいいのかな？　あ、アホと言うのも失礼か（笑）。

長州　簡単に言えばレスラーっていうのはさ、毎年3月になるとさ、プロなんだから1年間の自分の評価っていうのを気にすると思うんだよ。こっちは現場の査定するし、会社も査定してるしな。なかなか現場と会社の査定が一致するってのは何人もいないんだ。驚異的に上げてるヤツもいるよ。このまま、何年か経ったら**落合**を越えちゃうなっていうのが……。

山本　驚異的に？

長州　ああ、ここ2年、驚異的に伸ばしてるヤツがいるよ。

山本　そうですか。どの選手なのか知りたいなあ。

長州　これはウチの社長も**倍賞**（取締役）も認めてるよ。上限はつけてないからね。契約は会社と1対1でやってるからね。自分でもいくら欲しいか紙に数字を書かせるんだよ。自分の1年を振り返りゃわかることなんだよ。査定が一致してるヤツに「見せてみろ」って言って、その書いた数字も倍に書き直してやると喜ぶよね。

山本　え？　本当に倍ですか？

長州　うん、倍に近いくらいの数字。それ2年続けてるヤツがいるよ。

山本　誰ですか？　下のほうのレスラー？

長州　ハッハッハ、オレだよ（笑）。それは冗談だけどそういうヤツがいるの。

山本　ああ、いますよ、確かに。

長州　そういうのが何人かいるんだよ。その反対に上であろうが何であろうが、査定が低くてトラブるヤツは永遠と1時間でも2時間でも話してるよ。でも、それ以上の数字には上がらない。

山本　そういう倍も出すというのは、出すほうも気持ちいいでしょう。

長州　恵まれてるよな。だから、これだったら10年前のオレだったら1億ぐらいは軽く稼いでるだろうなと思うよ。

山本　長州さんが？

長州　いまの会社の状態だったらだよ。

山本　でも、お眼鏡にかなうレスラーがいるというのはいいですねぇ。

長州　そいつらは自分で自信持ってるよね。だって、やることやって、現場に入ればそれだけのことができるんだから。あとはオレの言うことを感覚的にどれだけ把握してるかってことだろ。この3つは我々のプロの世界で必要なことなんだから。どれかひとつ欠けてもダメなんだから、疎通ができなくなっちゃうんだから。

山本　長州さんの感覚を理解するっ

ていうのが、査定の中に入ってる。それは面白いですね。それはボクも大賛成ですよ。『週プロ』を作っている自分にも、その考えはありますから。

長州　ああ、そうだよ。

山本　ということは感覚がズレてる人もいるということですね？

長州　それはいるよ。でも何時間もねばって「もうちょっと上がりませんか」ったって、上がらないものは上がらないもん。

山本　ハッキリしてますね。

長州　だってな、これだけ上げてくださいって社長に言ったって、倍賞の方で「これ以上の枠はありません」って言ったら、それまでだもん。本人に対しての枠がないわけだから。でも、その反対に対しては枠を外してるんだけどな。現にいるんだから。



山本　それは選手としてもやり甲斐ありますねぇ。

長州　だってそれがプロというもんだろ。いろいろ難しいことばかり考えたって、レスラーなんだから。それで何が革命戦士だ？って言われたって、おマンマ食っていかなきゃならないんだから。乞食やるわけにはいかないんだから。どうやって自分のキャラクターを活かすかだよ。我々プロにとっては、それが第一だ。商品になっていればいいことなんだよ。

山本　ということは、長州さんが10年前に生きてたときと、まるっきり違いますね？

長州　あの時は会社が厳しかったんだよ。いまのオレの立場だったら下の人間にカッコいいとこしか見せたくないもんね。下のヤツらは上の人間を見て育ってくるんだから。

山本　まったくその通りですよ。性格も何も似てくるんですから。似てないと、その組織は強くならないんです。

長州　だから、何もしないで努力もしないで、いいもん食おうと思ったら大間違いだよ。

山本　キッチリ差別化されてるわけですね。

長州　うん。

山本　それは、いつごろからですか？

長州　それは会社が景気良くなってからやってるじゃん。オレが現場の査定始めてから4年は経ってるよ。

山本　ひとりひとり全部、長州さんがやってるわけですか。見たいですねぇ、その査定というヤツを。

長州　契約のときは社長と倍賞だよ。

山本　その前段階のことを長州さんがやってるわけですね。

長州　こっちはこっちで現場の査定だけを……。会社も会社で査定やってるから、当然、食い違う選手もいっぱいいるんだわ。そういう時はお互いに間を取りあってな、まあオレは心情的になりやすいんだけどな。会社に頼み込んじゃうよ。

山本　長州さんが？

長州　ああ。まあ、野球の世界じゃないけど、今年の期待料ってことで説得して。

山本　長州さんが自分の感覚で思ってるものが「間違ってる」と言われることはないんですか？

長州　それは間違っていようが、口を出す問題じゃないよ。オレらの感覚でみんながやらなきゃやらなきゃいけないでしょ。毎年2月にここで「1年は早いぞ」っていってるんだから。もう5月だよ……。

山本　そうですねぇ……。

長州　そうだろう。現場に来て何時間仕事するんだよ。たかだか3時間だよ。巡業に入ったら我々はそれで仕事に入っていくんだよ。それは昔、山本とも言い合ったじゃないか。

山本　うーん、言われましたねぇ。

長州　でも、いつかはおれもリングを降りるときがあるんだから、またこの仕事をやるヤツがいるんだから。そいつはそいつの感性で査定するだろうしさ。

山本　でも、それは会社がうまくいってるからでしょう。ずっと上昇線を描いていかないとだめなんですよ。それができるかどうかが、我々の使命でもある。だからボクにしても長州さんにしても、好きにやるしかない。そうでしょう。

長州　そうするのは誰だっていったら、我々なんだよ。線が下になったら現状維持もクソもねえだろ（笑）。悪くても現状維持だと思ったら大きな間違いだ。

山本　そうですよね。少なくとも成績は上昇か平行でなくちゃいけない。でも、これだけ選手が膨れ上がってくると人件費も大変でしょう。

長州　そうでもないな。そこから何人が商品になるかだからな。

山本　ははぁ～？　実際に見ている部分では、ちょっと厳しいという選手もいる？

長州　でも、いくらでもチャンスは転がってるわけだから、ものにするかしないかは本人次第だよな。ハンパなことじゃ上へは行けないけどな。

山本　行けないですよねぇ。選りすぐりですからねぇ。

長州　今日はこんなとこでいい？

山本　長州さん、おとなしかったけど、ありのままの姿が出ましたね。今日は自然体でしたよ。

長州　おとなしい？　充実してるって言ってくれよ（笑）。

山本　あ、長州さん、この麦茶もう一杯もらえませんか。この麦茶凄くおいしいですよ！

〈1993年4月25日・新日本プロレス事務所にて収録〉

革命戦士
長州力

完全 VS 再録

落武者亡霊
ターザン山本

「猪木イズム世界一決定戦」を10倍楽しく見るための
サブ・テキスト

文責／藤子・G・不二雄

さて、前ページまで、実に12ページにも渡って再録した対談も、収録当時とはかなり状況が変わっているのを、皆様は先刻ご承知のことと思います。そこで読者に非常に親切なことでは、世界で3本の指に入る本誌が注釈まで付けて楽しんでいただこうと思いたちました。お礼はいりません。

【会長】 近頃、「そろそろ会長職を降りる」などと言い出した我らがアントニオ猪木のこと。「デカいことばかり言ってるが実現することはめったになく、借金も多いが金遣いは荒い」ことと納豆の消費量に関しては、我がダブルクロスのグータラ会長・山口昇に匹敵するほどの偉大な男である。

【山本】 当然、インタビュアーでもある死に損ないの落武者亡霊・ターザン山本のこと。面識のあるプロレス記者を呼び捨てにするのは、体育会系のフレンドリーさを感じさせる長州トークの基本なのである。なあ金沢！（『週刊ゴング』インタビューでの口癖）

【最近調子いいじゃん】 94年のこの時期、アントンは1月のドームでは天龍をチョーク・スリーパーで失神させ（盟友・長州の愛の平手打ちによって蘇生）、3月の東京体育館では安田忠夫と組んで蝶野を失神させ、4月の広島大会では馳と組んで藤原&石川雄規組を失神させたりと、キラー街道をバク進していた。

【暗い事件】 元・美人秘書による「金まみれの悪行三昧」告発や手作り千円札事件、売春&拳銃疑惑、新間親子による公設第二秘書（当時）・沢野慎太郎殴打事件（笑）などのこと。こんなのがワイドショーなんかで当たり前のように放送されてたんだから、いまにして思えばとんでもなくステキな話である。

【ジャパン】 インディー団体の先駆け、ジャパン・プロレスのこと。新日離脱直後の昭和59年12月に旗揚げし、全日に乗り込んだりの活躍を見せるが、62年8月に分裂。この時期の長州は、自主興行でキマラや謎の赤覆面男（独身）と闘ったり、全日マットでトム・マギー（重量挙げ）との異種格闘技戦を経験したりと、ボク的にはかなりステキであった。

【パキスタン遠征】 昭和59年8月、猪木ペールワン（現地の英雄を倒した猪木のパキスタンでの愛称。ホントか？）らと同行したパキスタンで藤波とタッグを組まされるという猪木流の荒療治に耐えかねた長州は、「冗談じゃない。バカバカしくて話にならん！」とばかりに新日離脱を決意したという話だ。

【橋本】 言わずと知れた破壊王・橋本真也。最近の口癖は「みんな見せ掛けのボディビルで作った体でラリアットやってりゃ済むと思ってる。俺はそれだけがいちばん心配だ！」。とりあえずボクも破壊王に全面賛成である。

【馳】 猪木が「ズバリ言って俺が最初から手掛けてねえですから！」と言い切る、数少ない長州の秘蔵っ子であり、現在は全日に主戦場を移した、闘う愛の海綿体（自称）・馳浩のこと。新日のパンフで悪徳プロレス雑誌『紙プロ』について原稿執筆したりなど、実に遊び心のあるナイスガイである。

【カウントダウン】 ムタ、リーガル、スティング、ゴルドー、ベイダー、ウィリーなどの強豪たちと闘う、いつ果てるともわからない猪木流引退ロードのこと。破壊王曰く、「カウントアップしてるじゃねえか！」とのこと。

【オレたちの世代】 鶴藤長天、すなわち格闘の頂点を目指した猪木イズム直撃世代というべき鶴田、藤波、長州、天龍らのこと。

【拠り所】 ここでは「猪木さんを拠り所にしないとだめ」などと殊勝なことを言っている落武者だが、実は「俺がアントニオ猪木なんです！」と公言してはばからない身の程知らずだというのは御存知の通り。そりゃ業界で嫌われるのも非常に無理ない話である。往生せえや！

【天龍】 長州のソウルフレンド（心の友）であり、ターザンの天敵。その男気の良さと酒癖の悪さは伝説的だが、「酒の席での失敗は全て許しきる！」というから、実に男らしい。ステキである。

【藤波】 かつて長州に「俺はお前の噛ませ犬じゃない！」と噛みつかれたりしながらも、「ただ一人だけ、最後まで猪木を裏切らなかった！」（井上義啓）ことで知られるマッチョドラゴンのこと。当時、「長州が俺を標的にする理由がわからない。アマレスから鳴り物入りで入門した長州が猪木さんのパートナーとし

て活躍するのを、俺はリングサイドで憧れの目で見ていたのだから」と思わずボヤいた気持ちは、非常によくわかる。

【藤原】 元・前座の鬼。長州に通路で襲いかかるテロリスト経験を経てUWF入り。現在はAV男優からサブミッション（寝技）までこなす、立って良し寝て良しのオールラウンドプレイヤーとして活躍中。ライバルは強豪・チャック・ウィルソン。

【闘魂三銃士】 武藤、橋本、蝶野という、猪木の洗礼を受けた最後の男たち。武藤は猪木のスター性とグラウンド技術を、無個性で悩んでいた蝶野は猪木のヒール性と外人好きな面（猪木の最初の妻は外人だった）を、そして我らが橋本は全てにおいて「どうってことねえよ、ダハハハハハハ」という非常に非常識かつ豪快な猪木イズムを受け継いだわけであろう、きっと。

【世代闘争】 猪木らの旧世代軍に対して長州がブチ上げたテーマ。だが「ゴチャゴチャ言わんと誰がいちばん強いのかハッキリさせればいいんや！」だの「あいつは言うだけ番長や！」などと同じ新世代のはずの前田に毒づかれたり、旧世代側に新世代よりも若い武藤が紛れ込んでいたりの矛盾を抱えていたためか、テーマはあっさり崩壊する。

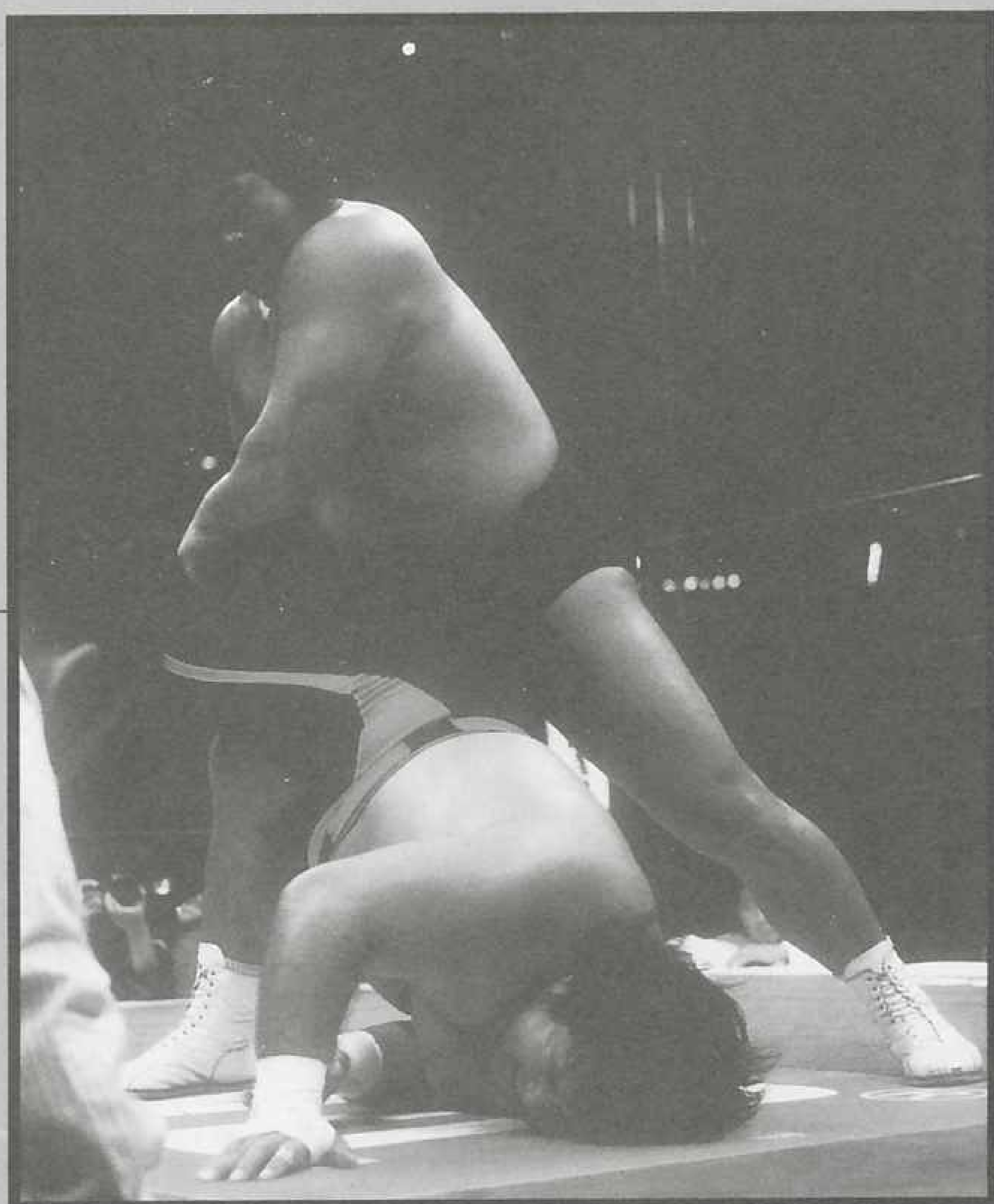
【時代はオレたちのものだ！】 ちなみに破壊王は「時は来た！」という名言を残しているのだが、闘魂伝承はまだまだ先のようである。

【維新軍団】 長州が心の師・マサ斎藤やアニマル浜口らと結成した革命集団。得意技はハイスパート・レスリングと太鼓の乱れ打ち。「我ら5人は一蓮托生。今度揉め事があったらプロレス界から足を洗う」と公言するが、一時的にしろ足を洗った浜口を除いて本当に引退までしたのはただ一人、スナック・カンちゃん店主のキラー・カーンだけであった。

【空気】 どうも最近、猪木の空気を吸っていそうな選手が少なすぎるような気がしてならない。石沢や藤田など、付き人を経験した選手に関してはプンプン臭い立つほどなんだが。

【もうめんどくさくなっちゃったんだよ、あの人のことは】 まるで長州の本音のような名言。そりゃ身近にいるとそうなってもしょうがないのかもしれないが、長州の前では緊張して小さくなってしまうことで知られる落武者が「それは長州さん、ないでしょう」と珍しく噛み付いているのもポイントである。

【一回ぐらい顔を合わせとかなきゃ気を悪くする】 昔は長州も、こんな落武者相手にわざわざ気を使ったりしていたのか。非常に大人である。



【墓にクソぶっかけてやる】 Uインターにバッドニュース・アレンやベイダー、旧ソ連のレッドブル軍団らを引き抜かれたり、蝶野に噛み付かれたり（後述）の度重なるゴタゴタの果てに、長州が吐いた名台詞。決定打となったのは94年2月に開催が発表された「プロレスリング・ワールド・トーナメント」。賞金1億円を餌にして船木・前田・三沢・橋本・天龍らに一方的に挑戦状を送るが、当然ながら誰もが激怒&無視。絶縁宣言を出されたりする中で唯一、前田だけは「団体対抗戦で提示されたリングスの宮戸は「対抗戦なら」と妥協案を出すが、外人は、どこの誰かも分からない馬の骨」と爆弾発言。高田までもが「7対7とかゴチャゴチャ言わんと1回戦で待ってます」と言い出し、大会ポスターには前田のシルエットも勝手に掲載。これでは長州にクソぶっかけられても自業自得というものだが、この時期のUインターがバカみたいに面白かったこともまた確かなのである。

【オレの人生に1回ぐらい幸せなことがあってもいいだろう】 昭和58年3月、藤波への3度目の挑戦でようやくWWFインター王座を奪取し、後に年間最高試合賞も受賞することとなる名勝負を終えた長州の発言。実に切実かつリアルな名言だったが、それ以降の長州は幸せ街道バク進中のようである。めでたしめでたし。

【UWF】 ラッシャー木村や剛竜馬、グラン浜田、そして新間寿らが率いる新日の別部隊だったが、佐山や前田、藤原によって格闘技路線を突き進むこととなる団体。意外にも当時、U嫌いの長州は「(旧) Uは間違ってはいなかったと思う。やり方は良かったと思うよ。オレもUには少し期待していた部分もあったんだけど」と発言したりもしていた。

【分裂】 一枚岩の仲良し集団というイメージで突き進んできた第二次UWFだが、SWS設立期に表面化した神社長との軋轢や、安生&宮戸と前田との軋轢によって三派に分裂（現在は5派）。前田との間人がいいために、このとき、各派閥の間を取り持つべく飛び回っていた山ちゃん（山崎一夫）がUインターで貧乏クジを引かされるハメになったのは、あまりにも有名な話である。

【どっかの団体が～土下座して謝った】 リングが到着しないんで土下座して、とりあえずマットだけで試合しちゃったのは大仁田時代のFMWだったと思うが……。

【高田】 さわやかな皮を被りながらも、実は藤原曰く「いざというときに相手の腕を折れる男」、それがノブだ。酒の席での武勇伝は、かつての兄貴分・前田にも匹敵するほど。ちなみに酒を交えてのインタビューの席上、酔っ払っていたとはいえ犬殺しの本誌鬼畜編集長・山口昇のことを「山ちゃん」と呼んでくれたのは、あまりにも衝撃的な出来事であった。

【アキラ】 前田日明の長州的表現。顔面蹴撃までされながらも前田に対してこういうスタンスを取れる長州は、非常に大人である。どうでもいいけど、いまの前田対長州が巌流島あたりで実現したら面白そうだよなあ。

【クソ垂れやがって】 長州の口癖。まるでアメリカ界隈の飲んだくれ系パンクバンドに匹敵するファック・オフ（「クソったれ」の直訳）アティチュードが実に素晴らしすぎる。

【イメージが悪いよ】 クソなどの下品なスラングを多用しておきながらも、こんなことを言い出す長州。まさにその通り。正論です！

【間違いなくもたねえよ】 実際、96年12月27日にUインターは崩壊。その理由は新日との対抗戦によって息を吹き返したように見えて、結局は対抗戦によって外部の力抜きでは興行できない団体にされてしまった結果というのが通説だ。ちなみに復活の噂もあり。

【それは間違いだよ】 間違いかどうかはともかく、レフェリー失神や場外フェンスアウト、両者リングアウトなど、良くも悪くもプロレス流の不透明決着がなくなってスポーツ的な意味での試合のクオリティが上がったのは、間違いなくUWFの影響であろう。

【ハイ、1億円積みました】 実際、記者会見の席上ではガードマン2人を従えた鈴木健が机に1億円積んでいたから衝撃的。なお、その際にファッキンな落武者が付けた『週プロ』の表紙コピーは「夢と1億円。Uインターがまたやってくれた！」であった。

【前の蝶野の一件】 93年10月、蝶野が某誌インタビューで軽い気持ちで「高田さんと闘ってみたい」と口にしたことから始まったUインターとのゴタゴタのこと。すかさず鉄人ルー・テーズを新日事務所へと送り込んだ宮戸は、対戦要望書を提出。物別れに終わると、今度は「新日は『リスク料3千万円を払い、大晦日に巌流島で挑戦者決定バトルロイヤルをやれ』と言ってきた」と裏側を暴露。長州を激怒させた。ところが、だ。それが一転して宮戸&田村抜きの全面対抗戦までやっちゃうんだから、世の中わからない。新日とのゴタゴタにしても、第二次UWF崩壊にしても、結局のところ悪いのは全部宮戸だったのか。

【あのマスコミっていうのもホントどうしようもねえな】 長州のマスコミ嫌いは有名な話。思えば維新軍団で人気だった頃、TV『セーラー服通り』や『テレホン・ショッキング』に出演したり、月刊プレイボーイ誌上で初体験の年齢や相手まで暴露された恥ずかしい思い出の数々が原因なのだろうか。ただでさえマスコミ嫌いなんだから、『週プロ』編集長の落武者が許せないのも当然ではあるのだが。

「猪木イズム世界一決定戦」を10倍楽しく見るための

サブ・テキスト

【山本、お前にはぶっかけねえから心配すんな】 その山本にだけ、これまた全力投球でクソをぶっかけたような気がするんだが、どうですかお客さん！　世の中、一寸先は闇である。ちなみに我らが猪木は、倍賞美津子夫人（当時）との仲に亀裂が入っているなどと書き立てるマスコミに激怒し、地方で汚穢（おわい・糞尿の意）を購入して出版社にクソぶっかけることを決意する（嫁も同意）が、周囲の常識的な人間に止められて諦めたという素敵なエピソードの持ち主だったりする。

【全日本】 馬場イズム溢れる老舗団体。長州参戦～天龍革命によって「明るく楽しく激しいプロレス団体」に生まれ変わった。ここでは鎖国中だというのに1億円トーナメントで三沢が挑戦状を送り付けられた事件のことを指す。

【宮戸】 握手の前に手鼻をかむ悪癖を持ち、体臭がキッいという理由でゴッチ先生に「スカンク」というあだ名を付けられたUインターの頭脳（別名・平成の闘う新間寿）のこと。なんとも嫌な頭脳である。現在、シェフ業のかたわらシュート・ボクシングの忘年会に顔を出したりもしている彼氏。ちなみに味にうるさいだけあって、Uインターのちゃんこの味付けは彼の手によるものであったとか。

【ホモなんじゃないの？】 いや、確かに宮戸のホモ説は東京プロレスの石澤オーナー以上に根強かったんですけどねえ……。ナイス長州。

【安生】 かつてはボウフラ、ミドリムシ、ミジンコ、オランウータンなどの愛称で親しまれたUインターの道場王（推測）。だが、問題の1億円トーナメントで「前田は前のUWFで終わった選手。200％勝つ自信がある」と暴言を吐いたため、200％男の肩書きを襲名。前田を大激怒させるが、Uインターは脅迫・名誉毀損で前田を告訴する（後に前田は「やりすぎた」と謝罪）。ヒクソン・グレイシーに対しても「高田が出るまでもない。200％、1分で勝てる」と言いながら、あっさり返り討ちされるが、後の長州戦でブレイク。そして失速…。

【巌流島】 古くは宮本武蔵が佐々木小次郎と決闘を行った記念すべき地。倍賞美津子と離婚直後の猪木が、マサ斎藤と文字通り長時間に渡るノーピープル・マッチを繰り広げたことで知られるが、元はといえば武将好きの藤波が「俺の故郷・大分と長州の生まれ故郷・下関の中間地点にある巌流島で、長州と闘ったらゴキゲンだろうなあ」と発案したものなんだとか。酷い話である。ちなみに馳とタイガー・ジェット・シンとの血塗れノーピープル・マッチも馳史上に残る名勝負だった。

【山崎とは言わなかったんだよ、かわいそうだからさ】 Uインターのゴタゴタ当時、長州は「みんな首吊って死ね！　墓にクソぶっかけてやる！　でも山崎はいい人間だからな。あいつは申し訳ないって言ってるし」などと発言。マニアの間で囁かれていた「山ちゃん＝無茶苦茶いい奴」説を裏付けることとなるが、後にフリーのヒール選手として新日参戦が決定すると「オレは山崎をいい奴だなんて言ったことはない！」と、あっさり前言撤回。まさにプロですな。

【WCW】 ホーガンやスティングなんかが活躍する、ケロちゃんの大好きなアメプロ大手団体。大味な選手ばかりではなく、フレアーやリーガルなど出来る人も中にはいる。

【NWA】 フランク・ゴッチに始まり、ルー・テーズ、ビル・ロビンソン、ハーリー・レイス、リック・フレアーなど、素晴らしき男たちが手にしてきた伝統のベルト。近頃は蝶野も仲間入りしたWCWの極悪軍団・NWOの元ネタか？　馬場の三日天下や藤波の幻の戴冠劇など、日本人的には色々とドラマの多い王座である。

【健介】 ジャパン・プロレスの生え抜きとして長州イズムを受け継いだのはいいが、ちょっと受け継ぎすぎたのか、武藤に「あいつはただの長州のコピー！」などとズバリ言われてしまった男・佐々木健介のこと。嫁（北斗）の影響だとは思うが銀仮面&銀髪や金ブーツ&金スパッツなど、近頃の衣装のセンスにはいろんな意味で目を見張るものがある。

【マサさん】 いまなお見事なマッチョ・バディ（首も見当たらない）を保ち続ける、恐るべき50代。警官相手の暴行で独房入り経験あり、英語は外人女子からベッドで学んだ、好物はカルピス、実は新婚さん、ルチャのことをルーチャと呼ぶ、現役をげんやくと読むなど、ちょっとイイ話には事欠かない。

【社長】 ターザン曰く「一歩前に出たら男になれる」世界の荒鷲・ビッグサカこと坂口征二社長のこと。親指をペロリと舐めた状態でのガチンコの強さは、ディック・マードックやUWF勢が証明している。口癖は「宣言！」。

【鈴木健】 Uインター再興に燃える元・暴走族兼ド素人。TMNをこよなく愛し、男子便所で自慢の長髪にブラッシングするのが趣味……って、そりゃ文具屋ケンちゃんじゃなくて『週プロ』のケンちゃんですね、失礼。

【4・16のジュニア】 満員札止めの異常な盛り上がりとなった、この大会。ハヤブサやサスケ、そして外道の株が急上昇したことや、W★ING代表でエントリーされていた茂木が「しょっぱい試合ですいません」ぶりを発揮したことでも知られている。成功の秘訣は、出場を直談判した板倉宏に「NO！」の返事を下したライガーの英断によるものか。

【次はウチで】 FMWの荒井広報部長（当時）とサスケ社長が試合当日にいきなりこう言い出し、FMWは何度もしつこく食い下がったが結局、第2回大会はWAR主催に決定。世の中、そんなものである。

【FMW】 近頃はOB界発足を記念してサンボ浅子がエキジビションながら堂々の復帰を果たしたりというい加減さが魅力の大手インディー団体。正式名称フロンティア・マーシャルアーツ・レスリングってホントか？

【みちのくプロレス】 東北のバカ社長（自称）が神の啓示を受けて設立した地域密着型プロレス団体。近頃は頭蓋骨をカチ割りながらもキーボードを抱えてリングに上がったりと、リング上の熱い姿と素の愛すべきバカ系キャラクターとのギャップが段々埋まりつつあるのが楽しい限り。根強いフリーセックス願望でもあるのか、さらに今年は北欧ツアーまで企てているらしいから、実に素敵です。

【オールスター】 79年8月26日、東スポの音頭取りで開催された全日本、新日本、国際の3団体が集結した日本武道館決戦のこと。馬場・猪木組や鶴田・藤波・マスカラス組（相手はタイガー戸口・マサ斎藤・高千穂明久組）などの夢のタッグ結成で話題となった。坂口征二対ロッキー羽田戦やセミファイナルのラッシャー木村対ストロング小林戦など、地味渋なカードも紛れていたんだが。

【東京スポーツ】 まさに活字プロレスというべきハッタリ全開の見出しを特徴とする、日本一プロレス的な新聞媒体。なお夢のオールスター戦は東スポ創立20周年特別企画として行われたのだが、主催が主催なだけあって半信半疑だった人も多かったはず。

【ライガー】 Jカップ開催などジュニア活性化という熱い想いのために動き続ける、リバプールの風こと獣神サンダーライガーのこと。ちなみに彼氏がモデルとなった漫画『スープレックス●田くん』では、ゴジラと風俗に賭ける熱い想いが描かれていたのだが。

【道場に行かなくなったら、引退】 道場論によって幻想を与えて続けてきた新日選手は、やはりこうでなければならないだろう。練習以外の面で幻想を与えられるような他団体の選手の場合、当然その限りではないんだが。

【インディペンデント】 本来なら自主・独立した団体を意味する外来語。したがってインディー連合だのインディー統一機構だのインディー自体が矛盾しているのである。ちなみにこの言葉、本来なら「働かなくても暮らせる」という、あまりにも皮肉めいた意味もあったりする。

【俺は絶対に潰さない】 これは「俺はFMWを絶対に潰さないんじゃ～（涙）！」が口癖だった現・OB会所属の大仁田のことでしょうか。やっぱり道場重視の長州的には、ヒザの故障でスクワットも満足にできないようなレスラーがどうにも許しがたいんですかね。

【織田無道】 心霊系タレント住職。猪木同様、エアマックス愛用者としても知られている。なお猪木がエアマックスを好むのは、やはり新日の空気だからなのか。さすがダジャレ王!!

【死んでるのがわかってないのが、いっぱいいるよ】 この台詞もいまとなっては、まるで新日の取材拒否によってプロレス業界から葬り去られ、しかも自分の追悼興行まで開催されたのに成仏しようともしないターザンのことを指すとしか思えないから不思議である。

【落合】 プロレス界の野茂というキャッチフレーズはよく見るというのに、ダーティー・イメージが強すぎるためなのかめったに引き合いに出されることのない、プロ野球界の3億円プレイヤー。悪妻を持つと旦那が伸びるというのは太古の昔から言われていることだが、こと顔に関しては落合夫人にも匹敵する妻を持った新沼謙二が伸び悩み気味なのはなぜなのか。謎である。

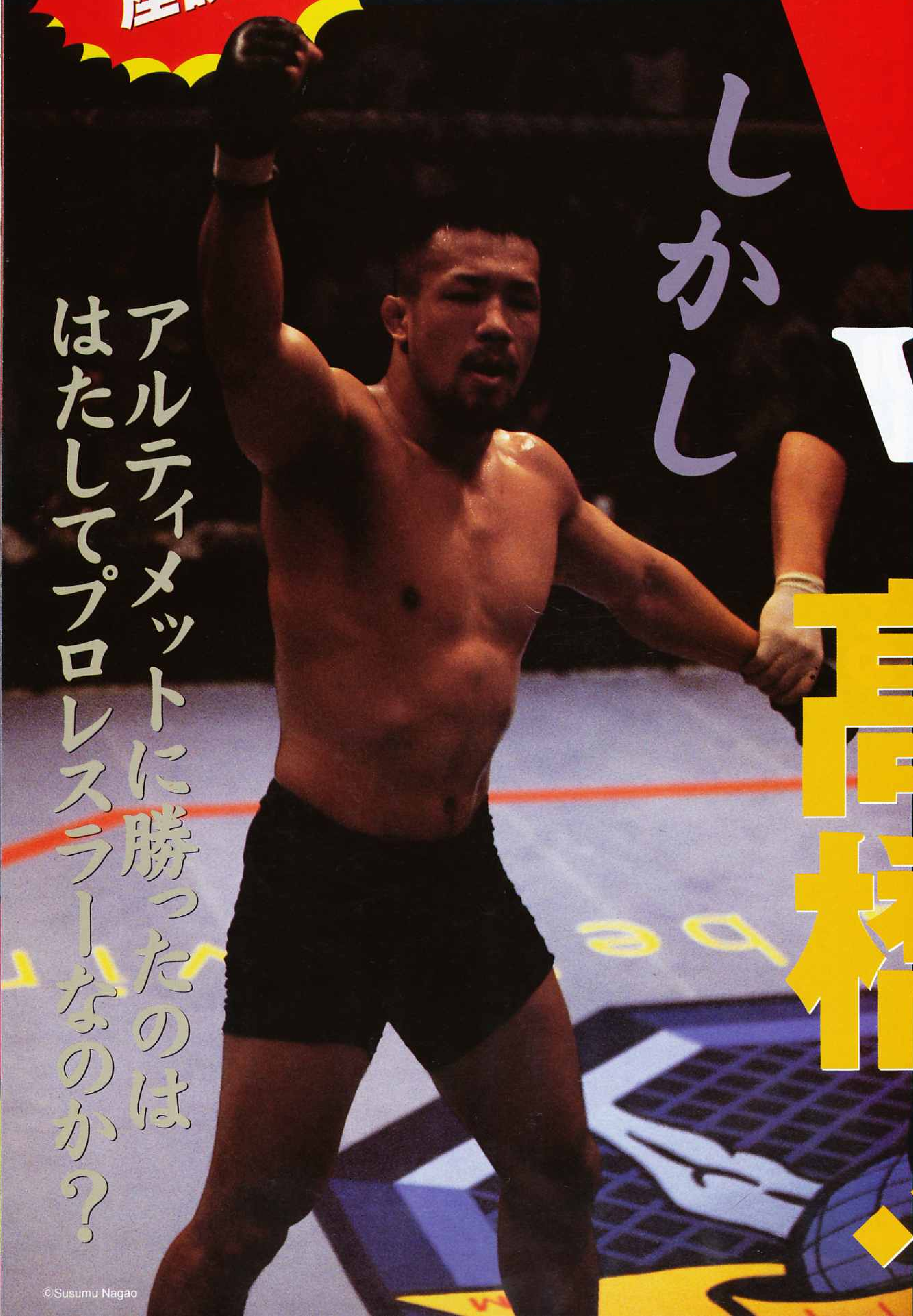
【倍賞】 元『串焼きばいしょう』の歌うマスターとして知られる倍賞明氏ではなく、元リングアナ・倍賞鉄夫氏のこと。ちなみに元・全共闘シンパとしての華々しい活躍ぶりについては幻の単行本『倍賞家の人々』に詳しい。

緊急即日座談会

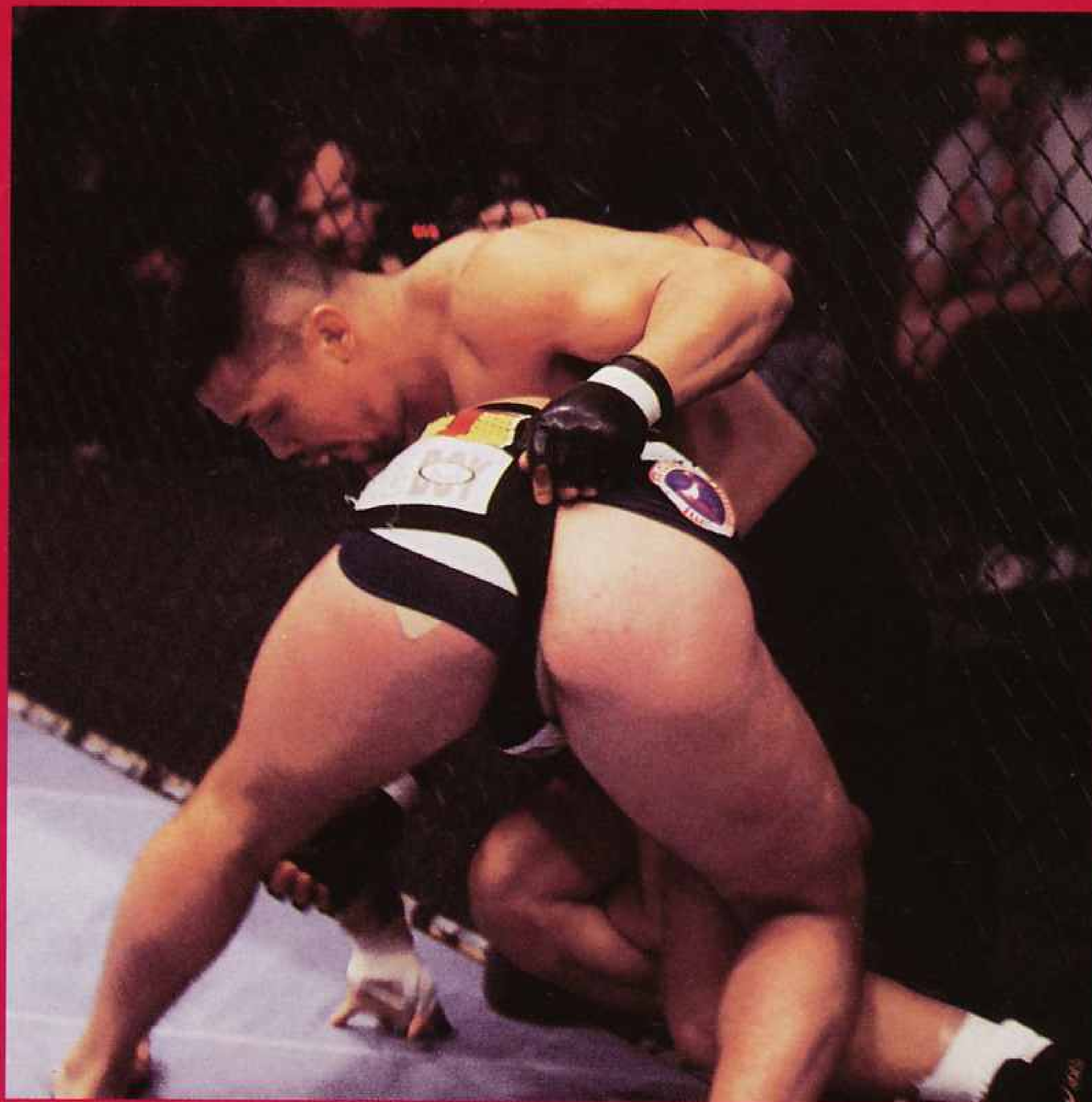
VIVA髙橋！

しかし

アルティメットに勝ったのは
はたしてプロレスラーなのか？



髙橋はジャンルに対する道場破りを退治した！



これは、アルティメットからおみやげも持たずに帰ってきたYASUPUを成田から直行させて、急遽行った即日座談会の記録である。

TAKASHI　おい、おまえよく帰ってこれたな！

YASUPU　あ、はい。なんとか、まぁ。

NOBBY　今回、客は入ってた？

YASUPU　あの、無料だったんですよ。だって、大会前日いきなり開催地が変更になってアラバマ州でやるって決まって。行けるわけないじゃないですか。だから、チケットは全部払い戻し。それで当日入った人は……。

NOBBY　無料！　気前がいいね、毛唐は（笑）。誰が一番人気あったの、会場では？

YASUPU　人気があったのは、やっぱりグレイシーというか、柔術。「ジュウジツ！　ジュウジツ！」っていうコールが起こるんですよ。もうムカツく奴らで。凄いんですよ、イズマイウのセコンドなんか30人もいるんですよ。

NOBBY　ガハハハハハ！　30人！（パチパチパチと手を叩く）。一人で来やがれ、一人で！

YASUPU　パンクラス側のセコンドは二人でしょ。だから、しょうがないから、ぼくらが「頑張れ！」って言うしかないですよね。あと、日本人の観客が。

NOBBY　実に大和魂が燃え上がるシチュエーションだな（笑）。

YASUPU　で、髙橋の試合後のコメントは「俺はパンクラスの中では下の方の人間だけど、イズマイウはグレイシー柔術のトップ・クラスの人間。それに勝ったんだから、これで『パンクラスは最強だ』と言ってもいいですよね」というようなことを言ってました。

TAKASHI（おでんをムシャムシャ食べながら）言ってもいいんだよ！　勝ったんだから。負けるまで言い続ければいいんだよ。（YASUPUに箸を突きつけ）おい、試合前、船木はどんなこと言ってた？

YASUPU　ポイント・パンチ。とりあえずパンチを繰り出せと。要するに、判定になったときにパンチを繰り出してるほうが有利になるからって言ってました。

TAKASHI　ムシャムシャ。うまい！　グレイシーは守りを大切にして、相手が来たら仕留めるという形だから、判定になるとそういうアグレッシブなパンチ、キックとか、あるいは声を出すとか、「ガァ～ッ」と言うとか、そういう、採点になると不利なんだよ。だからそれを船木は見抜いてるんだよ。

NOBBY　相変わらず頭いいですね、船木は。

TAKASHI　頭いいというか、セコいんだよ（笑）。

NOBBY　ガハハハ！　セコイ！

YASUPU　失礼ですね～。だけど、船木はその辺はちゃんとわかってるんですよ。ちゃんと試合前のスパーリングで、「どんなにセコいって言われても、今回は勝たなきゃだめだから」って。

TAKASHI　ムシャムシャ。そう言ったの？

YASUPU　言ってましたよ。だって今回勝たなかったら意味ないですもん。取りあえず、勝つこと。勝つためにはセコくなること。それを徹底して言ってましたね。

TAKASHI　ムシャムシャ。セコくなることは悪いことじゃないですよ。勝つための手段だから。勝つための手段は平等だから何やったっていいんだよ！　セコかろうが、卑怯だろうがやるべきなんだよ。だから、その判定になったときの攻めのポイントを稼げ、と船木が言ったことが最大の勝因だね。

YASUPU　ああ、そうですね。

NOBBY　でも俺は、今回ねえ、プロレスラーが勝ったっていう気が全然しないんです。

YASUPU　エーッ！　そうですか？

TAKASHI（マフラーで口を拭きながら）それは科学的に合理的に緻密に計算して勝ったもんだから。いわゆるプロレスラーのアバウトなイメージと違うから。プロレスラーが勝ったと思えないというのは、それは正しい見方ですよ。でも、パンクラスは従来のプロレスのアバウトなイメージを論理的に変えようとして作った団体だから、勝つことを証明しなければいけなかったわけだ、逆に言ったら。

NOBBY　実証しなければいけないわけですよね。

TAKASHI　実証主義の中で、その実証を掴んだんだから、やっぱ

緊急座談会出席者

TAKASHI（プロレス業界の亡霊）
YASUPU（プロレス業界の鼻つまみ者）
NOBBY（プロレス業界じゃない人）

髙橋義生

り凄いよね。

NOBBY 良くやったってことに関しては賛成ですよ。VIVA髙橋！ ですよ。

TAKASHI これはもの凄いことだし、船木イズムの行き着く先の一つの結論を我々に証明してくれたんですよね。でも、それはしかし僕らが描いている、ディック・ザ・ブルーザーがこんなんやるとか（噛みつくジェスチャー）、フリッツ・フォン・エリックがアイアン・クローで勝つとかね、そういうのがNOBBYがいうプロレスラーのイメージなんだよね。だから、そういう意味でいくと、これは向こうからしてみれば、飛んで火に入る夏の虫なんだよね。だから、それを知っている船木はそういうレスラーのイメージを壊しながら否定していったんだから、つまり勝たなければならない宿命にあったわけなんです。

NOBBY だから、俺は正直言って、髙橋が練習してるのが専門誌に載ってるのを見たり、いろいろ周りから聞いたりして、絶対勝つと思ってたよ。勝てなきゃ絞首刑だよ！

YASUPU アハハハ。ボクはもうドキドキしてました。

NOBBY いや、マジで。これで勝てなかったら、プロレスラーなんて絶対言わせないと思ってたから！ 500％勝てると思ってた。

YASUPU ああ、そうか。

NOBBY これだけ研究して練習して勝てないんじゃ冗談じゃないと思ったもん。

YASUPU でも髙橋っていうのは船木の言ったことを守らなかったりとか多いけど、今回に限っては全部守ったんですよ。もし、負けたらやっぱり、髙橋やパンクラスの負けかも知れないけど、プロレスの負けって言われるからですよ。結果的に。

TAKASHI （ズズーッとお茶をすすりながら）結果的にはパンクラスもプロレスの運命を背負ってたんですよ、非常にマクロ的に。でも、その背負ってるプロレスという世界の中では、パンクラスは異質なもんなんだよね。

NOBBY そのプロレスを背負ってたってことに関しては物凄く尊敬の念に値しますね。

TAKASHI ズズーッ。物凄く背負ってるよ。今までのUWFはプロレスとは言わなかったんだから。でも、パンクラスは「自分たちはプロレスです」って言ったんだから。プロレスを物凄く背負っていて、その役割を果たしたことにおいては、やっぱり大きな勲章を与えなきゃいかんよね。俺なんか絶対勝つなんて思ってなかったんだよ！ 坊主にならなければいけないな、俺は（笑）。丸坊主に！

NOBBY でも、プロレスだっていうからには壮大なファンタジーを見せてもらわなきゃいけないよね。決勝を棄権するとかのセコいリアリティーじゃなくて。

YASUPU そこ、難しいな。

TAKASHI いやいや、ちょっと待て！ とりあえず勝ちゃいいんだよ！ 勝ちゃ！

一同 ガハハハハ。

TAKASHI だから今度は純プロレスとパンクラスが試合すりゃいいんですよ。今度はみんな髙橋を倒せばいいんだもん。次に髙橋倒したヤツは凄いよ、コレ。

YASUPU ま、確かに。でも負けても、あのルールで勝たないと、って言い訳できるじゃないですか。

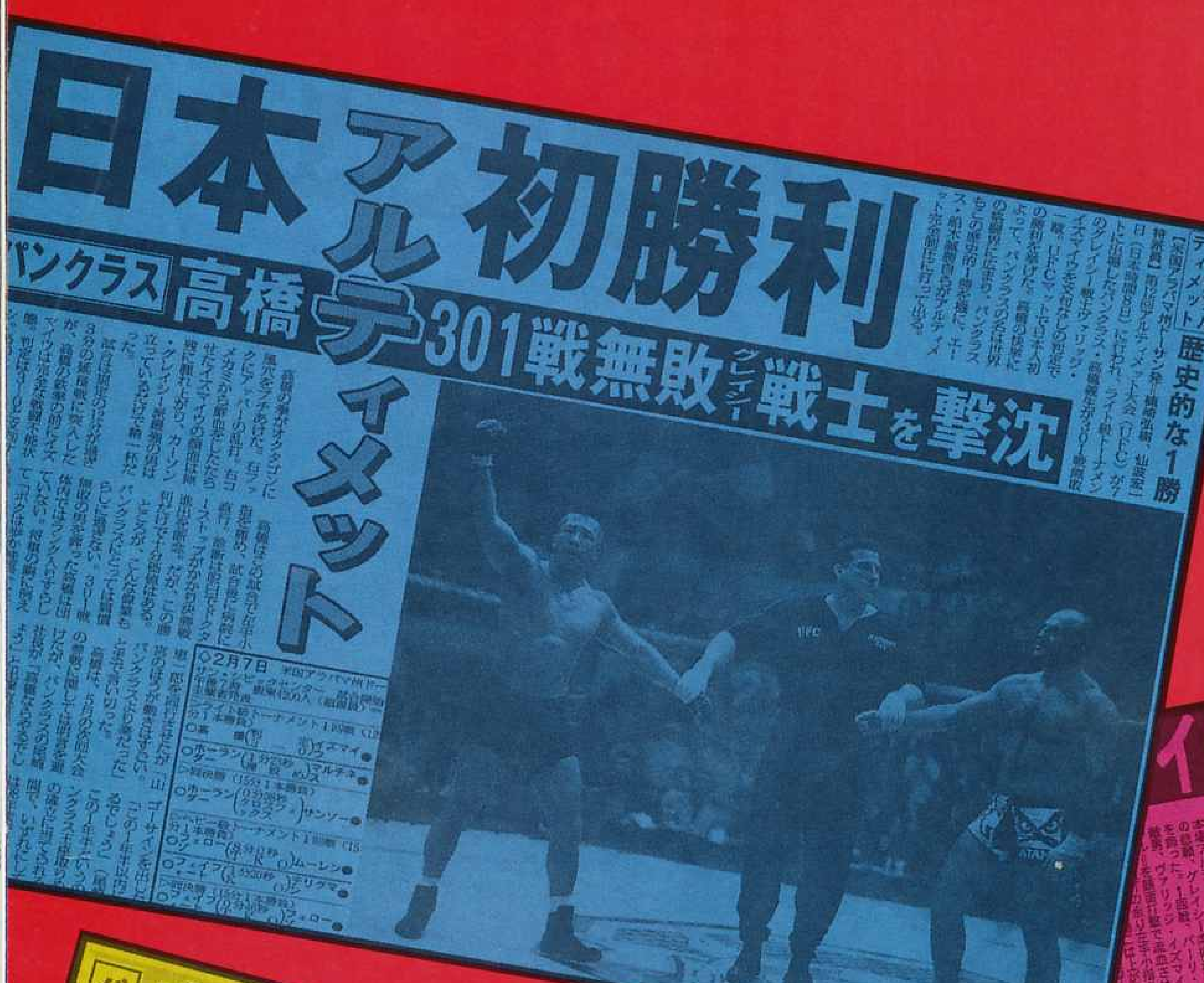
NOBBY いまね、言い訳っていったけど、この髙橋の勝ちによってプロレス界はものすごい言い訳ができたんですよ。逆に、髙橋レベルでも勝てたっていう風に言い訳を作っちゃう土壌ができちゃった。

TAKASHI でもハッキリ言って、（アルティメットに）行かなかったヤツは全部マヌケだ！

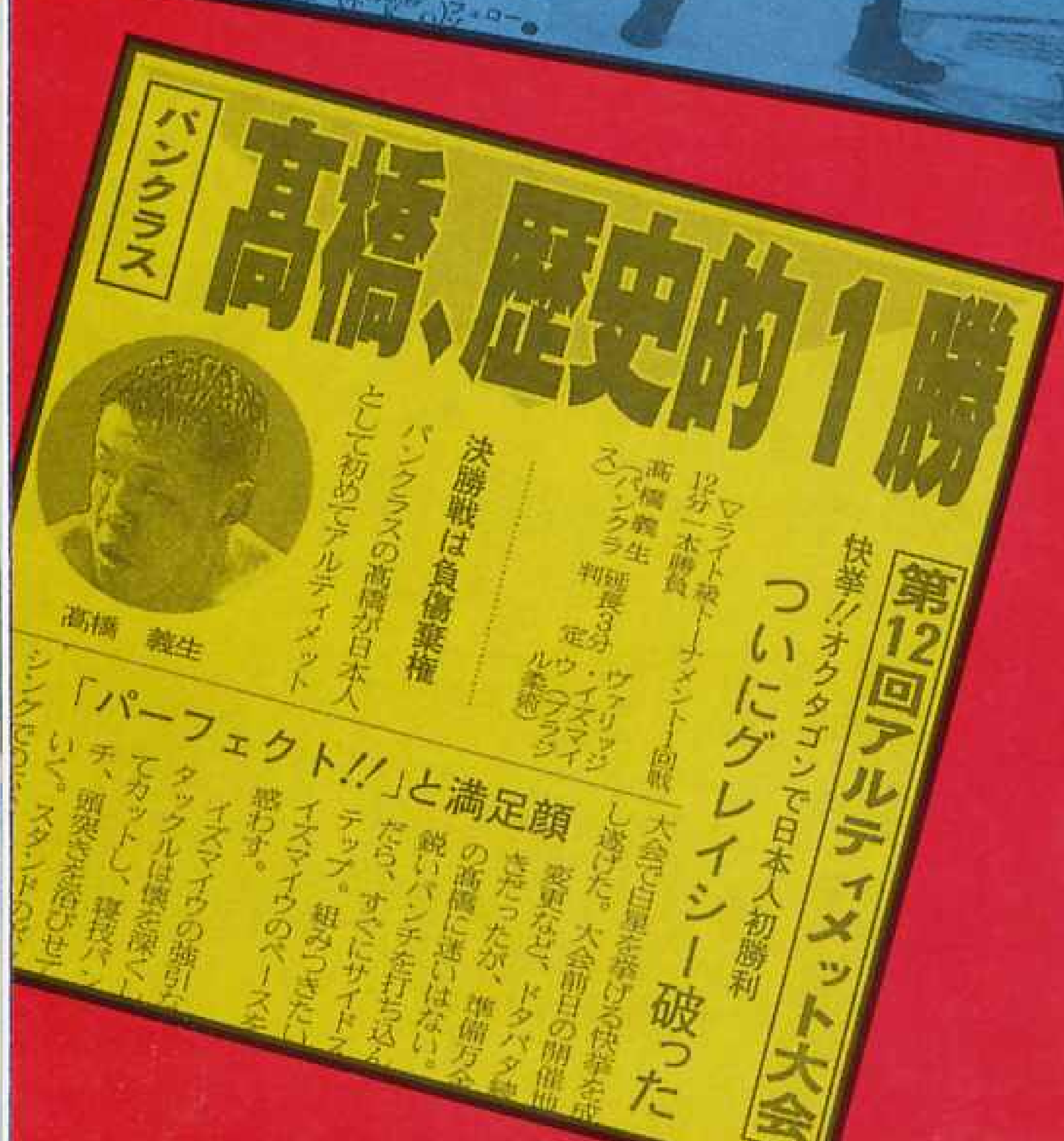
YASUPU へ？

TAKASHI 勝つという事実が出てきたんだから。いままで勝てないと言われたものが。だからコロンブスの卵みたいなもんだよ。トンッて割って卵を立てたと。ね。なんだそんなものだったら誰でもできるっていうさ。でも、やらなかった奴は全部間抜けですよ。髙橋を永久に超えることができませんよ！

NOBBY それに気付くプロレスラーがいつ出てくるかの問題か。







TAKASHI　ハッキリ言って、だからまあ、いわゆる番付表があって今回のことでいったら、前頭が横綱に勝つためにはどうしたらいいかというんで頭捻って練習して、たった一回のチャンスをものにするというかさ。で、一回しか使わない手を使ったっていうかね。そういう形でもう結集してやったというのは凄いよね。なんでもいいんだよ、蹴たぐりでもなんでも。足取りでもなんでもいいんだよね。うっちゃりだってなんだって勝てばいいんですよ〜。

NOBBY　今の話で出てくるのは格闘技は「勝ち逃げ」ができる世界っていうことですよね。

TAKASHI　いや、勝つことがすべてであって、勝者にしかもう、要するにさ、権利がないんだよ。負けたらまったく悲惨なわけですよ。救いのない世界、負けたら。プロレスは負けに救いがあるわけですよ。もしくは負けを救っていくんだよね。敗者を救っていく論理だけど、簡単に言ったら格闘技には、もうそういう甘さはないわけよ。

NOBBY　高山善廣が、この間、面白いこと言ってて、高山がアルティメット特別ルールかなんかでキモとやったでしょ。それに関して、要するに高山は「バーリ・トゥード用に練習をしなかった。それじゃ勝てるわけないですよね」って言ってた。

TAKASHI　あ、そう。バーリ・トゥード用の練習しなかったのはプロレスラーだから。ハッキリ言ってプロレスラーを捨てないことには勝てないよ。

NOBBY　ルールが違うからね。

TAKASHI　プロレスラーっていうイメージが持っているいろんなパワーとか、そういうものを一旦は捨てないことにはバーリ・トゥードには勝てない！　まあ、捨て去れない人と捨てる人がいて、意識的に要するに頭の中で捨てようとしたのは船木と鈴木なんだよね。だから船木はやっぱりそういった意味では早く捨てたから。

NOBBY　捨てたってことに関しては素敵だよね。

TAKASHI　でも船木はドロップキックじゃないけど、試合後に宙返りしたりとか、遊び心は秘めてるんだよ。でも、僕たちが考えているプロレスのね、アバウトな大ざっぱないいとこ、いい面ではやらないんだよ。その二つが彼の中にあるんだよね。表では要するにパンクラスしてるんだよ。でも、心にはあるんだよ、彼は。プロレス心というのはものすごくあるわけですよ。

YASUPU　NOBBYさんは、それがやっぱり嫌なんですよね。

NOBBY　嫌というか、その二元論の成り立たせ方に深みが感じられない。

TAKASHI　いや、一応分けて考えなきゃダメだよ。

YASUPU　ダメなんですか？

TAKASHI　その二つをごちゃ混ぜにしたらいけないんだよ。バーリ・トゥードとプロレスっていうのは価値観が違うものとして厳然として対立概念としてあるんだよ。だから、両方を制覇しなきゃいけない。

NOBBY　両方を制覇するって意味において同じなんですよ。ジャンルは違うけども、本来プロレスラーはバーリ・トゥードにポンと出てても勝てなきゃダメなんだよ。測定可能な世界は甘くないとか、そんなもん関係ない。勝てなきゃ屁です！

YASUPU　あ、そうですね。

NOBBY　それは俺の幻想だけどね。

存在そのものが「ドス」であるのがレスラー！

YASUPU　ああ、いや、それは、絶対……でも、それは僕も持っていたい幻想ですよ。

NOBBY　普段の道場での練習があればね、ポンと勝てるもんだという幻想を持っていたいからね。

TAKASHI　その精神というかさ……要するにバーリ・トゥードというのは形を変えたプロレスに対する道場破りなんだよな、一種の！

一同　はっはー。

TAKASHI　バーンと新しい価値観が急に現れたわけよ。プロレスの価値観を崩すのに相当する、価値観としての道場破りが現れたわけです。だから、道場破りに対処するためにね……プロレスの道場というのはね、体を鍛えて技術を教えるもんじゃないんだよ！（バンバンッと机を叩き、お茶を引っくり返す）要するにィ、道場というのはァ、プロレスに対して道場破りが来た時にやっつけるのがプロレスラーなんだよ！　その精神が、いまやまったくなくて、ただ道場がそこに存在してることが一番罪なんだよ！　道場破りに勝つために道場があるんだよォ！　その道場破りが今バーリ・トゥードなんですよォォォ。NOBBYが言ったように道場破りに対処する精神を持っていないということが一番いけないことなんですよォォォ（バンバンッ）。

NOBBY　ボクの言いたいことはそういうことです！

TAKASHI　おい！　俺に語らせるなよ!!

一同　ガハハハハハ。

NOBBY　ちょっと今日眠いもんで（笑）。

TAKASHI　パンクラスも今回はつまり、プロレスというジャンルに対しての道場破りをやっつけたっていうことですよ！　ここが一番凄いことです！　プロレスラーが勝ったっていうことじゃない。ジャンルに対する道場破りをやっつけたということがいいわけよ。今まで道場破りに負けてたということなんだよね。今まではバーリ・トゥードやアルティメットやグレイシーに負けたんじゃなく、「プロレス」というジャンルが「道場破り」に負けたと考えなきゃいけないんだよ。

NOBBY　でもTAKASHIはプロレスとバーリ・トゥードは違う価値観だってさっき言ったけども、本来なら、従来のプロレスとパンクラスが違う価値観で見られてるわけでしょ、ファンからは。で、キミみたいなプロレスライターとかもプロレスとパンクラスは全く違うもんだと思ってるよね、基本的に。

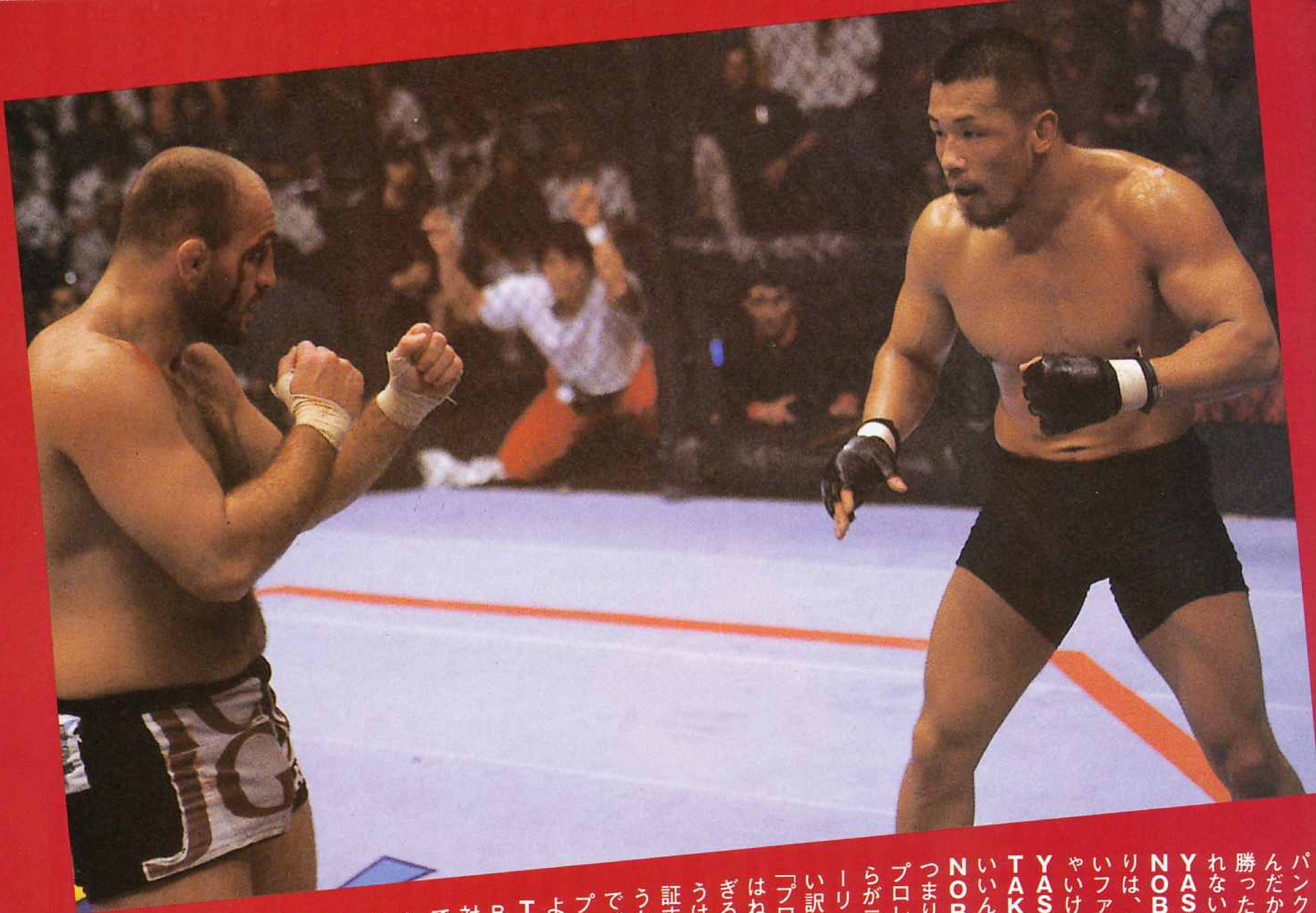
YASUPU　う〜ん。

TAKASHI　だからホントの理想で言うならね、パンクラスがああいうイデオロギーを持ってやってるでしょ。で、プロレスはこっち側でしょ。一番いいのはこういった理念で固めて思想的にね、あるいは戦術的にパーフェクトなものを求めてるパンクラスを、こちらのプロレスラーがポイッとやっつければ一番いいんだよ。それが一番気持ちいいパターンなんだよ。こっち側のプロレスラーが「おいでおいで」してパッとやっつければ、これが一番平和になるんだよな。ところがこっち側が努力してないので、ちょっとビビっちゃって行けないぞと。要するにUWFとかパンクラスが出てきた時に「何やってんだ」って言ってプロレスラーがイチコロでやっつければ、これ平和だったんだよな。うん。

NOBBY　UWF以降、プロレス側は何も実証してないんだよね。

TAKASHI　何も実証してない、腰くだけになってるから。

NOBBY　あのね、つまりファンタジーを支えてるのはリアリティーということで言えばさ、彼らなりの価値観の中でのリアリティーを見せたわけだよね。でも、これでまたパ



髙橋義生

ンクラスの課題が出来たんだよな。パンクラスにはファンタジーがないんだから。アルティメットで判定で勝ったからってファンタジーは生まれないでしょ。

YASUPU ああ。だけど……。

NOBBY プロレスだっていう限りは、単なるスポーツでは見られないファンタジーを見せてもらわなきゃいけないよ。

YASUPU そこ……難しいな。

TAKASHI とりあえず勝ちゃいいんですよォオオ！

NOBBY 勝ちゃいいんだけど、つまりはプロレスラーがね、彼らはプロレスラーっていってるから、彼らが二ヶ月なり、三ヶ月なりね、バーリ・トゥードの練習して勝てない訳がないんだよ。俺の持ってる「プロレスラー」という幻想の中ではね。それは格闘技を知らなさすぎるとか格闘技側の人間はすぐ言うけど、リアリティーというか実証するものと、ファンタジーというか幻想がとてつもないスケールでグルグル回転していかなきゃプロレスラーとはいえないんだよ。

TAKASHI それはNOBBY流の過剰なプロレスラーに対する、いわゆる僕たちと同じで、ズーッと少年時代からプロレスラーに対する過剰な思い入れみたいなものが生き続けているんだよね。

NOBBY 俺は別にプロレス弁護士会として語ってるわけじゃないんだけど（笑）。めちゃくちゃシンドイこと望んでるし。

TAKASHI それはものすごいシンドイことで、実証しないでファンタジーでいた方が楽なんだよね。ただしかし人間というのは、いつも心に刃というか、ドスを持っていなきゃいけないんだよ。

NOBBY ガッハッハッハッハッハ。いつも心にドス（笑）。

TAKASHI 心にドスを持っていて、いざとなったらパッと、こう出せるというものがなければいけないわけよ。

NOBBY それが一番プロレスラーらしいわけでしょ。いつも心にドス、というのが。

TAKASHI なんか生意気なこと言ったりとか、なんかあったらバーッとドスを出すというかさ。

NOBBY ああ、いつも心に仕舞っているドスを早く見たい（笑）。

TAKASHI ないんだよな。いままで。

NOBBY ないし、今回の髙橋の勝利はもう褒め称えていいことだけども、「心にドス」じゃなかった。最初からドスの構え方からキチンと教わって、ドスに磨きをかけて喧嘩にいったわけだから。

TAKASHI 存在そのものがドスでなきゃいけないわけよ。プロレスラーというのは。存在そのものが超越したものじゃなきゃ、超人じゃなきゃいけないわけよ。練習しなくても、そうやって訓練したり研究したりとか積み重なくても勝たなければいけないし、NOBBYの言い方は超人思想なんだよね。正しいわけ。

NOBBY その超人思想を支えるのが練習や道場。

TAKASHI ドスを伝授させてないわけよ。その方が問題なんだよ。ドスの存在そのものを教えてないこともあるんだよね。教えられなくなったのも。

NOBBY これからは、「世界格闘技連盟」っていう隠し玉があるからね。YASUPU、おまえナメるなよプロレスを（笑）。でも、だから、心のドスっていう部分が今回見えなかったから、俺はプロレスの勝ちだと思えないんだよね。

TAKASHI そういう見方もあるな。

NOBBY これは別に髙橋とか、パンクラスをケナしてるわけじゃないよ、ハッキリ言っとくけど。

TAKASHI まあ、一応しかし道場破りを破ったことは確かだ。

YASUPU これを破らなかったらズーッとまだ弱いというイメージがあったわけだから。

TAKASHI 一つの条件をクリアした。

NOBBY 本当は、格闘技はプロレスの一部なんだよなぁ（笑）。

YASUPU とにかく髙橋が勝ったことはうれしいです。

NOBBY いや、髙橋よりも問題は高田だよ（笑）。高田がヒクソンに勝たなきゃプロレスが勝ったことにはならない。

TAKASHI 俺は前田に勝ってほしいね。一番言いたいのは。

NOBBY ああ、ある意味で髙橋がオタクゴンに入ったってことは当たり前のことですからね。

TAKASHI うん、前田だね。ズズーッ。

NOBBY 前田日明がオタクゴンに入ってるのが一番プロレスを背負ってるっていう風に見える（笑）。これでリングスとかどう思うんでしょうね。

TAKASHI そういう反応も楽しいね、これから。この大事件がこれからどう報道されて、関係者がどういう反応があるのか楽しみだね。

YASUPU 一番やられたなって思うのはどこでしょうね。

NOBBY 意外にサスケとかが悔しがったりしてね。先を越されたって（笑）。

一同 ガハハハハハ。

〈2月9日、本誌編集部にて収録〉

必読新連載！

石川雄規の『闘いの美術館』

あるいは『格闘たまごっち』



～素描（デッサン）～

実体を描写する為に本来絶対必要であるべきこと、それは『陰影』を描くことである。

実体を『実』とするならば、陰影は『虚』と例えることができる。

人生とは、実体を現象化させる為に陰影を描き綴る『素描』の行為によく似ている。

影を完璧に描ききった時、他人にとっては初めて実体が見えてくるのである。『虚』が転じて『実』となる瞬間、人は何を想い何を感じるのか。『実』ばかり追いかけて浮かれている奴らに、そんなことわかるわけがない。いや、わかってなんかもらいたくない。

なぜなら、感性の鈍い人間が到底理解不可能な世界について考え、語る時の喜びは『猪木信者』だけが持つ最高に贅沢な特権だからだ。

アントニオ猪木は、まさに影を描き続けているレスラーである。

闘いの一つ一つが、己自身への問いかけと謎に満ちている。

己自身への問いかけ……？

そう、アントニオ猪木というレスラーは観客に対して、実は『問いかけ』も『謎かけ』もしていないのだ。我々が錯覚していたのは、アントニオ猪木が、彼自身に問い掛けている姿を見て、自分で自分自身に謎かけをしていただけなのだ。あたかも、猪木が闘いを通して訴えるメッセージを受け取ったかの様な錯覚に陥って……。

何故この世に生まれてきたのか。何をなすべきか。何が為に闘うのか。

彼が彼自身の中におそらくは抱えていたであろうテーマを、いつのまにか我々は我々自身のテーマに投影して考えていた。

そして、そういった類のテーマは、大抵のところ、答を出さなくても生きていくうえで何ら支障をきたさないものが多い。しかし、それについて真剣に考える時間をどれだけ費やしたかどうかによって『人生』の価値が変わってくる。

つまりそれは、実体のない『虚』について真剣に考えたことのある人間だけが、本物の価値ある人生、つまり『実』を手に入れることができるのだ。

に会いたかったです

我々猪木信者は、知らず知らずのうちに『虚』を転じて『実』と成す方法を学んでいたのかもしれない。

人は一つの現実を手に入れるその度に、多くの可能性を切り捨てながら生きている。『或いは』『もしも』といった、埋もれていった可能性たちの中に、存在したかもしれない『真実』を探すのが好きな人がいる。いや、好きなわけではなく、その行為の無意味さを一番感じているのは当の本人であろう。確かに我々は、多かれ少なかれそういった過去に向かうベクトルに乗って、想像という行為を楽しむ所がある。

しかし我々にとって本当に大切なのは、今現在の現実と未来の可能性の中に『真実』を見出す行為であるはずだ。

1993年12月5日、後楽園ホール。そこには私が長年探し続けてきた一つの『真実』があった。

対アントニオ猪木、公開スパーリング。同じリングに猪木さんが立っている。

「プロレスラーになって、アントニオ猪木と同じリングに立つ」

高校1年の春、保健体育の授業で自分の『夢』を発表する場においてそう宣言してから、約10年の歳月が経っていた。

常識しか信じない大人たちが憎かった。アントニオ猪木が私達に教えてくれた「夢は叶う」という真実、それを「現実はそんな甘いもんじゃない」と醜いツラで嘲る奴らが憎かった。

殺したいほど憎かった。

だから私は、たとえ死んでもレスラーにならなければならなかったのだ。常識しか信じない奴らがいかに愚かか証明するために。そして愛すべきアントニオ猪木は絶対に正しいと証明するために。何より、自分自身の真実をこの手に掴み取るために。

猪木さんにどうしても会いたかった。そして、どうしても伝えたい言葉があったのだ。

10年の歳月が長かったのか短かったのかわからない。ただ猪木さんのもみあげに白髪を見た時感じたのは、アント



猪木さん、ずっとあなたに

ニオ猪木というレスラーが背負うとてつもなく大きな何かと、それをずっと信じて過ごした歳月への愛しさ、そして誇り——。

スパーリングが終わった。ついにその言葉を伝える時がきたのだ。私は10年以上想い続けてきた言葉を、ようやく猪木さんに伝えることができた。

「猪木さん、ずっとあなたに会いたかったです——」

猪木さんはにっこりと笑ってくださった。私はその時思ったのだ。自分はこの瞬間を手に入れる為にこの世に生まれ、そして生きてきたのだと。一つの夢を掴んだ瞬間、猪木さんはもう一つの『真実』を私に教えてくれた様な気がする。

人は、ほんの一瞬を手に入れる為に、長大な時間を費やすことができるのだと。それは、ほんの一握りの『実』を得る為に膨大な『虚』を描き続けるデッサンによく似た、まさに人生そのものであるのだと。

バトラーツは、それぞれの選手がそれぞれの真実を描きあげるためのデッサンをしている。同じ団体だからといって同じ絵を描く必要なんてまったくない。だから、他のメンバーの信じる真実はお互いに謎に包まれている。これもまた楽しい。

私は、男として生まれたからには、プロレスラーを選んだからには、人の魂を揺さぶるような生き方がしたい。

常識を覆し、愚かな社会の風潮を蹴ちらし、そして世界の平和を祈るアントニオ猪木のように。

一流の技術はゴッチさん、藤原さんから教わった。男の生き様、闘魂は猪木さんから学んだつもりだ。

バトラーツの選手がそれぞれの作品を描き上げた時、またその作品が増える度に『闘いの美術館』はスケールアップしてゆく筈だ。

人はこの世に生まれたからには死ぬまで生きなければならない。いつか使命を果たして天に還るその日まで、私はずっと『人生の素描』を続けていきたい。バトラーツが『闘いの美学』の名に恥じぬよう。

そう、かつてアントニオ猪木の闘いが誰よりも激しく、優しく、切なく、そして美しかったように——。

格闘探偵団バトラーツ　石川雄規

1.21
後楽園ホール
BATTLARTS
PROJECT B
～地球征服作戦～

文学的視点から見た1・21バトラーツ　大正浪漫風レポート

結核が　バトラーツ見たら　燃え尽きた



恋文

坂井結核

12・26のターザン追悼興行でバトラーツを見ていたく感激してしまい、紙プロの面接を受ける。「君は今にも死にそうだから」と山口昇・鬼畜編集長から結核クンを命名される。好きな言葉は「生まれてきて、すいません」

拝啓　バトラーツ様

近ごろはようやく梅の花も咲きはじめ、蛙も目を覚ます季節になりました。いかがお過ごしでしょうか？　突然ですが、女郎以外のものに初めて恋をしてしまいました。それはバトラーツ、あなた様です。12・26のターザン山本追悼興行で出会ってしまったばっかりに、私はブレーキの壊れたダンプカーのような勢いで惚れてしまいました。あなたたちが藤原組の若手だった頃の試合は見たことありませんでした。おおぉ、これはいくら悔いたところで悔やみ切れません。しかし、私はむかしの私ではありません。

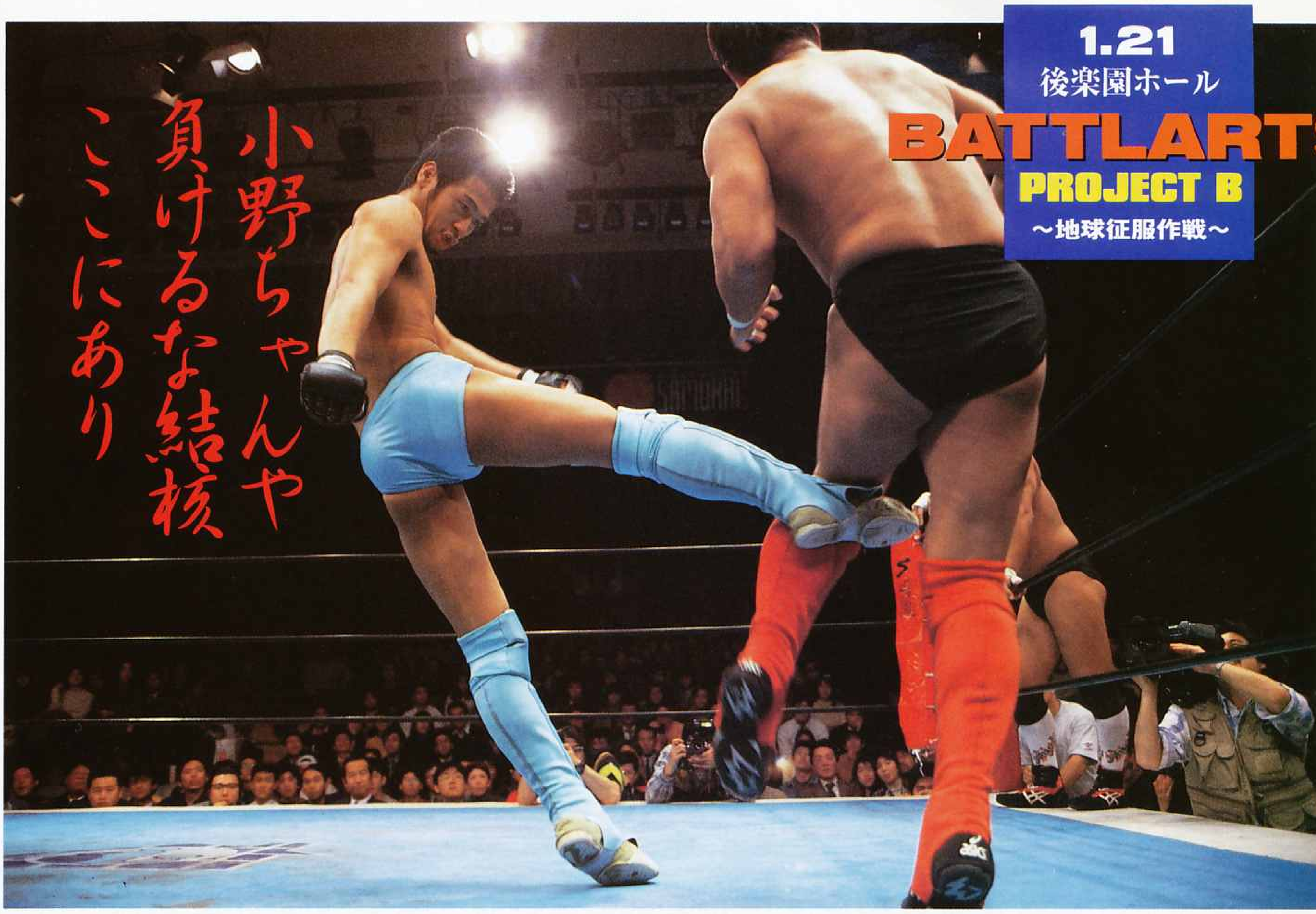
なぜ、私がこの恋文をしたためているかといえば、わたしに残された時間が僅かしかないいま、思いを秘めたまま死ぬのが何よりもつらいからです。わたしは現在、結核に冒されており、「あと1年ももたない」と医者に言われています。しかし、バトラーツの試合を見てからというもの、病状の進行はありません。バトラーツ・ショックで寿命が延びたからです。それはまるで乾電池をなめたときのように強烈でした。こんなプロレスを見続けたら1年しか持たない寿命が10年もってしまうというか。

ショックといえば、ヒロポン・マスターの坂口安吾の「堕落論」を読んで、ハッタリのあまりのストレートさに衝撃を受けたのを思い出しました。バトラーツは何が刺激的なんだろうと考えてみたら、外見もプロレスもストレートにやりたいことをやってしまうという、一見あたりまえの行動がひどく刺激的に感じられるということでした。頭ツルツルの人は投げまくるが蹴りは受けまくり、おやじ狩りしてそうな細い人は他人の頭をボコボコ蹴ってましたね。そんな試合から漂うドロ臭い雰囲気が新鮮でたまりません。それぞれが追い求めてる強さやかっこよさが、試合中の技や表情や髪形ひとつからでも伝わってくるので、私はドキドキしてしまいます。お客さんを思いっきりおいてきぼりにするつれないスタンスも、男としては逆に燃えるものなのです。さらにバトラーツはみんな負けん気の強そうな気性が顔に出てて素敵過ぎます。今まで、あまり大きな会場では試合をしていないそうですが、先日は後楽園ホールも埋まってしまいましたね。選手たちも、団体も、徐々に成長していく姿を見せてくれるのが、本当に何よりも楽しみです。

以上のようなことを紙プロの面接時に血痰を吐き、前髪を切りながら伝えたところ、ピンタ3発と同時に「オーケェイ、先のないお前の人生をここで活かしてみやがれ！」と山口昇・海賊編集長に監禁され、ここに恋文を書くに至った次第です。これからもバトラーツとの逢瀬をたくさん重ねて、バトラーツへの恋心を伝えていきます。そしてここに誓います。メガネをかけて、青白い顔して、肺病持ちでも、坂井結核はバトラーツのためなら死ねる！

草々

余命いくばくもない新人　坂井結核



1.21
後楽園ホール

BATTLARTS PROJECT B

～地球征服作戦～

小野ちゃんや 負けるな結核 ここにあり

バトラーツは旗揚げしてから1年も経っていない。これだけ団体の多い時代の中でも埋もれずに、逆に目立ってしまうのだから面白い。なによりも面白いのは、強さを求めてプロレスをする、「素敵なイカレた集団」（by石川雄規社長）の1人1人がホントにイカレてるからだろう。

日本一文学の香りがしない団体、バトラーツの人達は猪木やタイガーマスクのいた全盛期の新日本プロレスやUWFを観てきた人達の集まりだ。だからみんな若い。「でも前座だろ？」と山口昇・死神編酋長に一言で切り捨てられるのは致し方ない。レスラーとしてはまだまだ発展途上の段階である。石川雄規は、選手の好きなようにやらせている。試合後に「カチ食らわすゾ！」と控室に怒鳴り込むような管理のやり方はしない。懐がとても深い。客を突き放したスタンスで、それぞれ



が鍛えた強さと背負っている個性をぶつけ合っている様子が迫力となって伝わってくる。

Ａ・猪木が今号の対談で「すごい迫力ですごい試合をしていればお客はそれに入ってくるというかね」と理屈にもならないような理屈を語っているが、真実とはそんなものである。

Ａ・猪木には「やるときゃやるよ」という気骨があった。実際に腕を折ったり、半殺しになるまでボコボコにする「力」があった。ただ単純に強さだけを求めるのなら、シューティングに入門するのもいい。バトラーツの人達がなぜ強くなるためにプロレスを選んだのかということを考えると、プロレスは闘いの原点であるという、これまた大事な真実が見えてくる。

坂井結核

1.21
後楽園ホール
BATTLARTS
PROJECT B
〜地球征服作戦〜



初代タイガーマスクVS田中稔
と〜ってもいい選手だそうですよ！　田中さん。



石川雄規&小野武志 VS池田大輔&臼田勝美
「チームふたたび」と「社長と秘書」が激突。
「英二ふたたび」からつけたの?



重苦しく長い夜
先が見えぬまま
ただ歩いていた
ふと見上げると



船木勝一VS日高郁人
クールアイ、日高がデビューしました。



アレクサンダー大塚VS星川尚浩
豪快！　独楽のようにアレクサンダーが回します。



G・サスケ&愚乱・浪速&G・浜田&薬師寺正人
VS海援隊★DX&TAKAみちのく
好きです！　北海の味。カニミソをガブリ！

ショックで寿命がのびますよ!!



満天の星
その中に
一つ輝く
アレクの頭
結核



First デビュー記念 ちゃんタビュー

※ちゃんタビューとは、ちゃんこを食べながらインタビューするの意。

格闘探偵団バトラーツ

日高 郁人

24歳

聞き手／坂井結核
送迎／のものも
カメラマン／斉藤ユーリ

特別ゲスト／池田大輔選手・臼田勝美選手・田中稔選手

1／21バトラーツ・後楽園ホール大会で遂に念願のデビューを果たしたクールアイ日高っちょこと、日高郁人、24歳、獅子座、島根県生まれ。『FIGHTING TV SAMURAI!!』では日高特集が組まれ、一般誌の『スコラ』でもインタビュー掲載と、まさに恵まれた新人街道まっしぐらの日高っちょ。そんな日高っちょにインタビューを挑むのは、入社1週間で早くもデビュー、これまた恵まれた新人街道まっしぐらの『紙のプロレス』フューチャースター・坂井結核！ 新人が新人にインタビュー？ こ、これは！ バトラーツVS『紙のプロレス』の新人対決?! ん～、VIVA !!

※ちゃんタビューとは、ちゃんこを食べながらインタビューするの意。

後悔したくなかったから バトラーツに人生を預けてみた……。

(日高郁人男前語録VOL1)

——今日はよろしくお願いします(ヒマそうだったので、臼田さん、池田さん、稔さんも強制的にインタビューに参加させましたぁ!)。まず、プロフィールをお聞きしたいんですけれども。

日高 はい。

——生年月日は?

日高 1972年8月5日です。

臼田 こう見えても意外といってる青春真っ只中23才です。

田中 『週プロ』は23歳になってたぞ。

池田 お前、ほんとはいくつ?

田中 ほんとはオレより年上だろう?

日高 いやいや(笑)、同じじゃないですか。24歳です。

——身長、体重は?

日高 身長は172センチ……。

臼田 ホントかよ!

日高 ……172センチ、78キロです。

——出身地は?

日高 島根県の松田市です。

池田 広島じゃないの?

日高 ……。

——趣味は?

池田 釣りじゃないの?

日高 ……趣味は映画観賞です。

——あっ、忘れてた。デビューおめでとうございます。

池田 遅いよ(笑)。

臼田 いちばん最初に言えよ(笑)。

——す、すみません。

臼田 さすが『紙プロ』、強力な新人だ。

——で……(沈黙)

池田 インタビューする方が緊張してるよ。

——えっとですね、レスラーになる前は何かスポーツはやってたんですか?

日高 高校で柔道と、あとアマチュアレスリング。あ、あと水泳。……水泳はウソです。

田中 自分でツッコんだか(笑)。

日高 柔道とレスリングだけです。

——ケンカはよくしてました?

日高 いや、しないですねぇ。マジメでした。

——全くしなかったんですか?

日高 めちゃめちゃマジメでしたよ。

田中 ウソつけ。短ラン着てたクセに。

日高 短ランは着てました。

臼田 マジメじゃねえじゃねえか。

池田 その眉毛もマジメじゃねえな。

日高 これは地のままですよ(笑)。

——高校出た後は何やってたんですか?

日高 その後は着付けの先生を……。

臼田 ダメだそのギャグ、笑えねーな。

日高 ……エンジニアです。

臼田 着付けの先生の後に言うから、それもギャグみたいだよ(笑)。

——高校の頃はレスラーになろうとは思ってなかったんですか?



日高 思ってましたよ。でも体が小さかったからレスラーになるのは断念したんです。

池田 それからどうしたの?

臼田 何真剣に聞いてんスか(笑)。

池田 だって、日高のことよく知らないから(笑)。

日高 それからはマジメにサラリーマン生活を送ろうと思ってました。

——一度断念して、またレスラーになろうとしたきっかけって何ですか?

日高 通勤電車って超満員じゃないですか。

臼田 満員電車が嫌だったの?

日高 いや、違いますよ。サラリーマンって、毎日疲れ切った表情で帰るじゃないですか。

池田 オレも疲れた顔して帰るよ。

日高 それは……、だから……、サラリーマンとかで一生終わりたくなかったんですよ! 後悔したくなかったんですよ!

臼田 してんじゃねえか、ここ(バトラーツ)に入って(笑)。

日高 ……後悔してないですよ。

——それで、サラリーマンをやめて、バトラーツに入ったんですか?

池田 淡々と聞くね、君も(笑)。

日高 いや、それから5年が経過するんですけども。

池田 肉体労働とかやりながらね。

——え、やってたんですか?

日高 いえいえ、やってません(笑)。

臼田 池田さん、日高のこと知りすぎっスよ(笑)。

池田 君(結核)がツッコまなきゃ終わらないよ(笑)。

日高 ……で、会社に1年半勤めたんですけど、残業が多かったんであまりジムにも通えなくて、行ってもちょっとしか練習できない状況だったんですよ。だから会社を辞めて、時間のキッチリしてるバイトをやりながらお金貯めてたんです。

——ジムって、アニマル浜口さんのジムですか?

日高 いえ、それはもっと前のことで。入社して1年目の秋に、東京で1ヶ月半くらいの研修があったんですよ。その時に浜口さんのところで1カ月ぐらい練習させて頂いたんです。

臼田 (棒読みで)その時『レスラー養成コース』で中心になって練習していたのが船木(勝一)さんだったんだろ?

日高 それ『週プロ』の記事読んでるだけじゃないですか(笑)。

田中 大森隆男や大谷晋二郎に交じって練習してたんだよな?

日高 それは『週刊ファイト』の記事ですよ(笑)。

体力的にしんどいと思ったことはあってもつらいと思ったり、やめようと思ったことは一度もない！

（日高郁人男前語録VOL2）



蝋人形のような日高っちょ

——大森さんや大谷さんと練習してたんですか？

日高　大森さんは会ったことないです。大谷さんは会いましたけど。

臼田　でも、向こうは「そんなヤツいたっけ」って言うかもしんないね（笑）

——アニマル浜口ジムで船木さんと知り合ったんですか。

日高　そうです。はい、そうです。

——あ、それで、バトラーツを選んだわけですね。

田中　ウチにはパンクラス落ちてその足で来たんだよな。

日高　それはウソです。すいません、ウソばっかで。

臼田　日高郁人物語はウソで固めた半生か（笑）。

日高　固めてないですよ（笑）。

——それで、バイトしながら体を鍛えて……、レスラーになろうと……思ったわけですか。

日高　メモ読んで質問してます？

——いえ、読んでないですよ。考えてしゃべってます。

日高　ああ、そうですか（笑）。

のも　日高っちょ、ツッコむねぇ（笑）。

日高　はい（笑）。

——えーと、それでまぁ団体がいろいろある中で、バトラーツを選んだ理由というのは何ですか？

日高　関節技が主体のレスリングがしたかったんですよ。それで、その頃新しく旗揚げして、しかも若い方ばかりだったんで。

——『パンクラス』とか『リングス』とかいろいろある中で、何でバトラーツを選んだんですか？

日高　他は頭になかったんで。

——船木さんがいたっていうのは関係なかったんですか？

日高　全然関係なかったです。

臼田　それも淋しい話だね、全然関係ないってのは（笑）。

日高　船木さんがいるから入りやすいとかいうのは全然なかったですよ。

——じゃあどうして？

日高　新しい団体だからっていうのもありましたし、体もないし、年もいってますから。でも石川さんはチャンスを与えてくれそうな気がしたんです。

——ほう。

日高　普通なら書類選考で落とされてもしょうがなかったんですけど、石川さんはチャンスを与えてくれそうな気がしたんで。落とされても押し掛けるつもりだったんですけどね。

池田　夢追人なんだね。

日高　それ、うちのオカンが言ってたセリフですよ（笑）。

——それほどまでしてもレスラーになりたいと思ってたわけですね？

日高　そうですね。年齢的にも最後のチャンスだと思ったんで。

——入門して9ヶ月で、こないだデビューしたわけですが……。何かあんまりうれしそうじゃないですね？（笑）。

日高　いや、うれしいです。やっとここまでこれたんで。

池田　表情が表に出ないヤツなんだよ。目が冷たい。

日高　あの、一番うれしいのは自分が好きなことやって給料頂けるっていうことですよ。プロレスラーになって、それでお給料頂けると。サラリーマンやってた方が給料よかったわけですけど、でも自分のやりたいことで稼いだお金が一番価値ありますからね。

——そうですよね。

日高　ところで坂井さんのアダ名はなんて言うんですか？（笑）

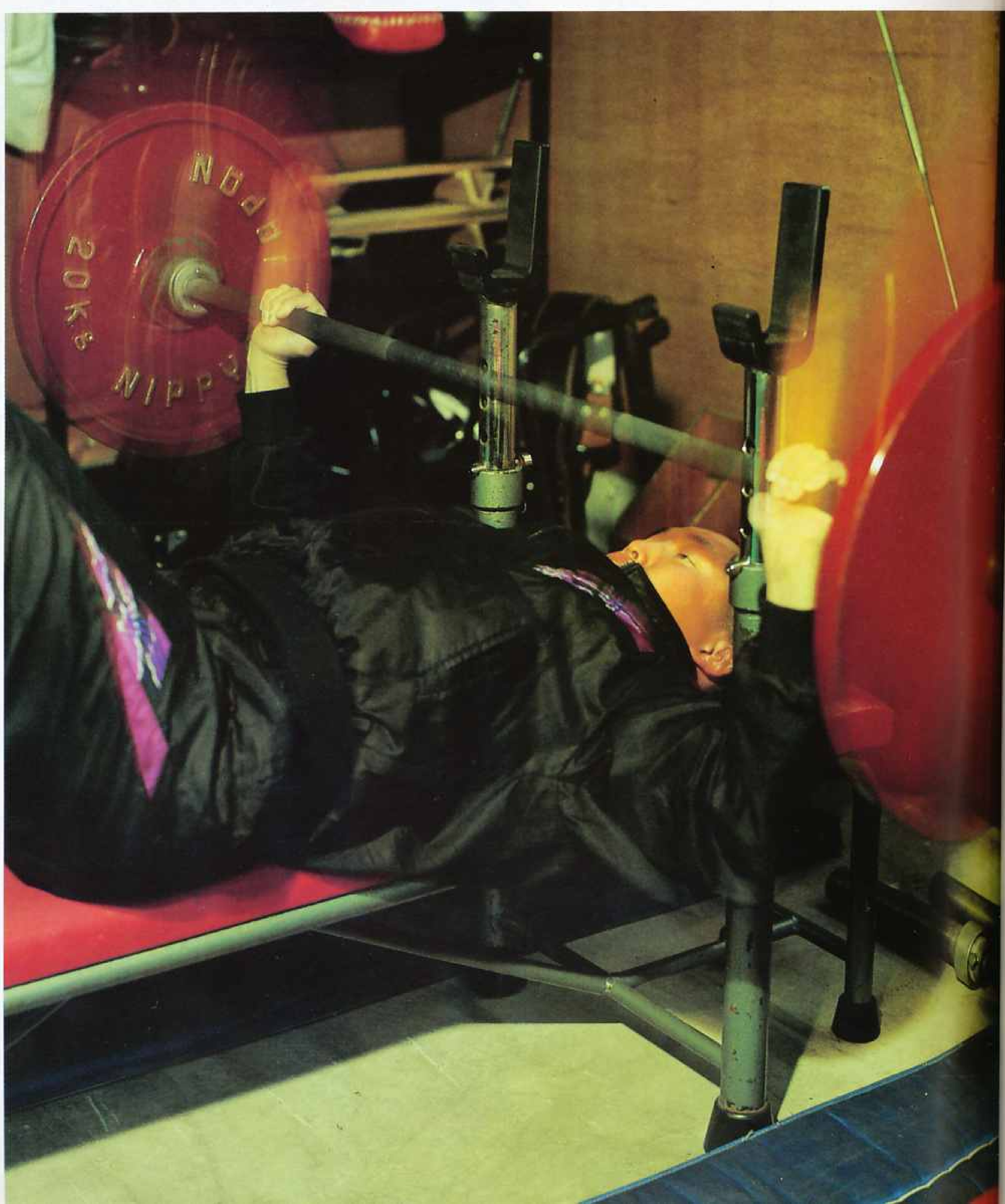
——僕はシラカバ君って言います（インタビュー当時は〝坂井シラカバ君〟

日高郁人

だったが後に"坂井結核"に改名)。
臼田 ……さ、続き、続き。
――バトラーツの先輩の方々はいかがですか？
日高 いい先輩ばかりです。
臼田 ほんとかよ(笑)。
――そんな先輩方と一緒にやるトレーニングはきつくないですか？
日高 練習はきついですよ。
――やめようと思ったりしたことは？
日高 やめようと思ったことはないですね。つらいわけじゃないですから。しんどいってことはありますけど。
――しんどいとつらいは違う？
日高 しんどいっていうのは、体力的なしんどい。つらいっていうのは精神的に追い込まれるってことですから。でも、やめようと思ったこともつらいと思ったこともないです。レスラーになろうと思って入門したんですから。
――ホントに1回もやめようと思わなかったんですか？
日高 入門の前の日に仲のいい友達に会って、手元のお金を全部預けてきたんですよ。手元にお金があるとつらくなって帰ろうと思ったときに帰れちゃうし、そいつに電話して「夜逃げするから、悪いけど金返してくれへん？」なんて言えないから……。
池田 そうやって自分で自分を追い込んでたんだ。『あしたのジョー』みたいだな。
臼田 ま、そういうことになってますけどね(笑)。
日高 これは実話です(笑)。
臼田 何かカッコいいことばっか言ってんな(笑)。
田中 『スコラ』の取材のときもカッコいいことばっか言ってんスよ。あらかじめ用意して。
日高 用意してないですよ(笑)。
――理想のレスラー像ってありますか？
日高 理想は……、ないですね。
臼田 え、ないの？
日高 自分の理想はあるけど、目標にしている人はいません。
池田 この前、ダン・スバーンって言ってたじゃん。
日高 言ってないですよ(笑)。
――自分の理想って？
日高 それは内緒です。
臼田 ホントはないんだろ(笑)。
日高 いや、あるんですけど、うまく言葉にできないんですよ。ひとつ言えるのはお客さんに何かを感じさせるレスラーになりたいってことですね。
――将来の夢は？
臼田 夢追人だからね。
日高 ないですね、まだ。
臼田 ないのか！(笑)。
――今でもちゃんこ作ってるんですか？
日高 作ってます。
臼田 みんな期待してるのはキミのちゃんこだけだから(笑)。
――先輩からそういう意見も出ていますけど？

自分自身にプライドがもてるよう日々精進！

(日高郁人男前語録VOL3)



これまた蝋人形のような日高っちょ

日高 ちょっと最近はメニューがマンネリなんで。
臼田 味にムラがあるんだよ。
田中 最近、味が落ちてるよな。
臼田 常にお金の取れる料理を作らないとね。
日高 いやいや、プロじゃないんですから(笑)。
池田 さ、それではファンの皆さんに一言でも……。
臼田 もう、まとめっスか(笑)。
――プロレスラーとして「ここだけは人に負けないゾ」って、人に誇れるものってあります？
日高 気持ちだけは負けないです。たくさんの人の期待をいい意味で裏切らないように。
(ここでのものも、カメラマンのユーリさんを送りに行くため一旦退場)
――雑用はまだまだいっぱいあるんですよね？
日高 下が入らないんで……。デビュ

ーしてもやることは同じですね。
——まだ一番下なんですか?
日高 そうです。
——入ってもやめちゃうんですか?
臼田 2~3人合格してるんだけど、みんな来ないんだよな。
——うちに入った人もみんなやめちゃうらしいです。ところで、ニックネームってありますか?
日高 クールアイ・日高っちょです。これは『紙プロ』さんが勝手につけたんですけどね。
池田 今のあだ名は「日高っち」だよ。『たまごっち』を育てるように、日高君のことを育てようと思ってオレが名付けた。
日高 石川さんの『たまごっち』は、今日朝死んでました。
臼田 『ひだかっち』はうまく育たないと『よねやまっち』になっちゃうんだよ(笑)。
——ライバルは誰ですか?
池田 のぶ(結核の愛称)だけマジメに話進めてるよ(笑)。
日高 自分自身とアイツですね。
池田 誰、アイツって? ……俺かぁ? 方向が俺だぞ。
日高 違います違います、アイツです(後日談・お金を託した友人)。
池田 わかった、ダイナマイト・キッドだ!
日高 何で?(笑)。
臼田 のぶ?
日高 だから何で?(笑)
臼田 だって同じ新人対談じゃん。
池田 のぶはこのインタビューがデビュー戦なんだよ。
日高 これがデビュー戦なんですか?
——そうです。
池田 『紙プロ』の粋な計らいで。
臼田 新春ビッグスペシャル! もう新春なんて言ってる時期じゃないけどな(笑)。
日高 ビッグスペシャルの方が間違ってますよ(笑)。
臼田 いいんだよ。それがオレの粋な計らい(笑)。


クールアイ日高っちょ。冷ややかな視線を投げかけてる相手は……? この位置だと臼田選手かな? もう、ドキドキしちゃうね。

ちゃんこの味にプライドはない!
(日高郁人男前語録VOL4)

——あの、カッコイイ理想像とかってありますか?
日高 やっぱり服装とかは常に気を使いたいですね。
池田 お～お。
日高 どこで見られてるかわかんないですから。
田中 オレ、こんな格好で出かけようとしてるのに(笑)。
日高 (無視して)見られる心境として、最低限気を使わないと。
池田 綺麗な服着てピシッとするのもいいけど、その中に流れているかっこよさって何?
臼田 水前寺清子が「ボロは着てても心は錦」って歌ってたよ。かっこよさ……、海釣り行って釣った魚をそこでさばいて食うとかさ。
池田 ギンギラギンだけどさりげないとかさ。
日高 それは嫌ですね(笑)。
——かっこいいと思う人っています?
日高 アントニオ猪木さん。
——猪木さんのどこが?
日高 人と違う感じがします。しゃべったことないんでわかんないですけど、挨拶しただけでも猪木さんは違う感じがしました。威圧感ありますし。
——そういうの身に付けたいと思いますか?
日高 そういうのって身に付けようと思って身に付くもんじゃないじゃないですか。やっぱり人生経験で。
——内面からにじみ出るものはすぐには身に付くもんじゃないと。だから外から作っていこうと?
日高 いえ、そういうわけでは……。
池田 何かジャーナリストみたいだね。
臼田 悪徳政治家を追求してるみたいだね。日高っち、たじたじ。
池田 やっとのってきたね、のぶ。
日高 もうたじたじです。
——日高選手にとってプライドって何ですか?
日高 精神的な強さですかね。いつも自分自身にプライドが持てるように、日々精進して。
池田 日々精進、懐かしいな。入門当時、オレもよく言ってたよ。
日高 自分自身にプライドが持てるように。
池田 今までは自分にプライド持てなかったの?
日高 いやぁ(笑)、まぁ、プライド持てるようにこれからはがんばろうと。
——なるほど!
池田 のぶ、やっと納得したか。
臼田 こういうのを求めてたんだ。今までのは無駄なトークだったんだな。
池田 っていうか、やっぱり上司がいないと伸び伸びするんだね。
——そうですかね。
池田 これから君のことを「のびのび」って呼ぼう。
日高 ……でも、こんな難しい話するなんて、さすがシラカバ君ですね。
池田 違う違う、のびのび。
日高 それにしても、のものも、帰ってくるの遅いですね。
臼田 どこまで送ってったんだよ。
日高 ……完全に迷ってますね。
——あ～あ、む、胸が……ゴホッゴホッ……(肺がうずいてきたのでこれにて終了)。
〈97年1月30日、埼玉県越谷・バトラーツちゃんこ道場にて収録〉

日高郁人

日高郁人・クールに己を振り返るということで

1／21・後楽園ホール 自分（日高っちょ）観戦記

——じゃあデビュー戦を振り返ってもらいましょう。

日高 浮足立ってた感じですね。精神的に余裕がなかったんで。

——がむしゃらだった?

日高 船木さんに全部先を読まれている感じだったんで……。あとは、サマーソルト・ドロップで回りすぎたんで、そのあとマウントとったんですけど、そういうキテレツな攻撃も出せたんでよかったかなと。

臼田 サンセット・フリップじゃないんだ。

日高 サマーソルト・ドロップです。小野さんにアドバイス頂いてやった技です。



——試合を終えた後の心境は?

日高 そうですね。試合終わったら泣いてしまうかなとも思ったんですけど……。

臼田 お前、いま作っただろ（笑）。

日高 いやいや、涙もろいんで。

田中 親父が会場に来ても泣かなかったじゃねえかよ（笑）。

——うれしくなかったんですか?

日高 うれしかったですよ。試合後にファンの方に「デビューおめでとうございます」って言われて、そこで実感湧きましたね。

●童話作家の人生が童話であるように、プロレスラーの人生はプロレスでありなさい。 （顔に似合わずいいことを言う石川雄規社長より）

●プロレスには喜怒哀楽が必要。普段から喜怒哀楽を出せば、リングに上がっても出せるようになるよ。これからも日高の成長の手助けをしてあげられればと思っております。でも船木は強いんだゾ！

（顔に似合わず優しい言葉をかける船木勝一選手より）

●最近ちゃんこの腕が落ちている。（かりんとうが嫌いな田中稔選手より）

●練習生が一人しかいない中、よく頑張ってデビューしたと思います。もっと体を大きくして、もっと頑張ってほしいと思います。

（後ろでしゃべってる島田氏の声が大きくて声が消されてしまったアレクサンダー大塚選手より）



先輩探偵員たちからの温か〜い激励のお言葉



●……。（自宅療養中の米山サトシ選手より）

●夢追い人。以上！　あと、のものもは最近太ったと思います。

（日高には語ることがないと言ってさっさと帰っちゃった小野武志選手より）

●怖そうに見えるけど、ホントは優しい……、それは臼田選手。

（相変わらず酒を飲むと手が付けられなくなる臼田勝美選手より）

●日高より道場に自動販売機がついたことの方が私はうれしい。

（最近は『恋のバカンス』にハマっている池田大輔選手より）

●プロレスラーを早くあきらめて「島田さん、レフェリーやります」と言ってくれるのを待ってます。レフェリー人生がんばれ！

（何だかんだ言って一番キツイ言葉を残してオランダへ旅立って行った島田裕二レフェリーより）

日高 これがデビュー戦なんですか?

ですから。

臼田 悪徳政治家を追求してるみたい

ツちゃんこ道場にて収録〉



10名

みちのくプロレス
2 拝みケブラーダ『人生君』



各5名

1 春風亭昇太師匠
オリジナルTシャツ

もう何も考えられないので
このコーナーのタイトルは

読者プレゼント

にしてください（号泣）

——中村カタブツ君

新日本プロレス
3 フリースジャケット



5名

10名





38名

バトラーツ
4 特製ピンバッヂ

新日本プロレス
5 IWGPリング



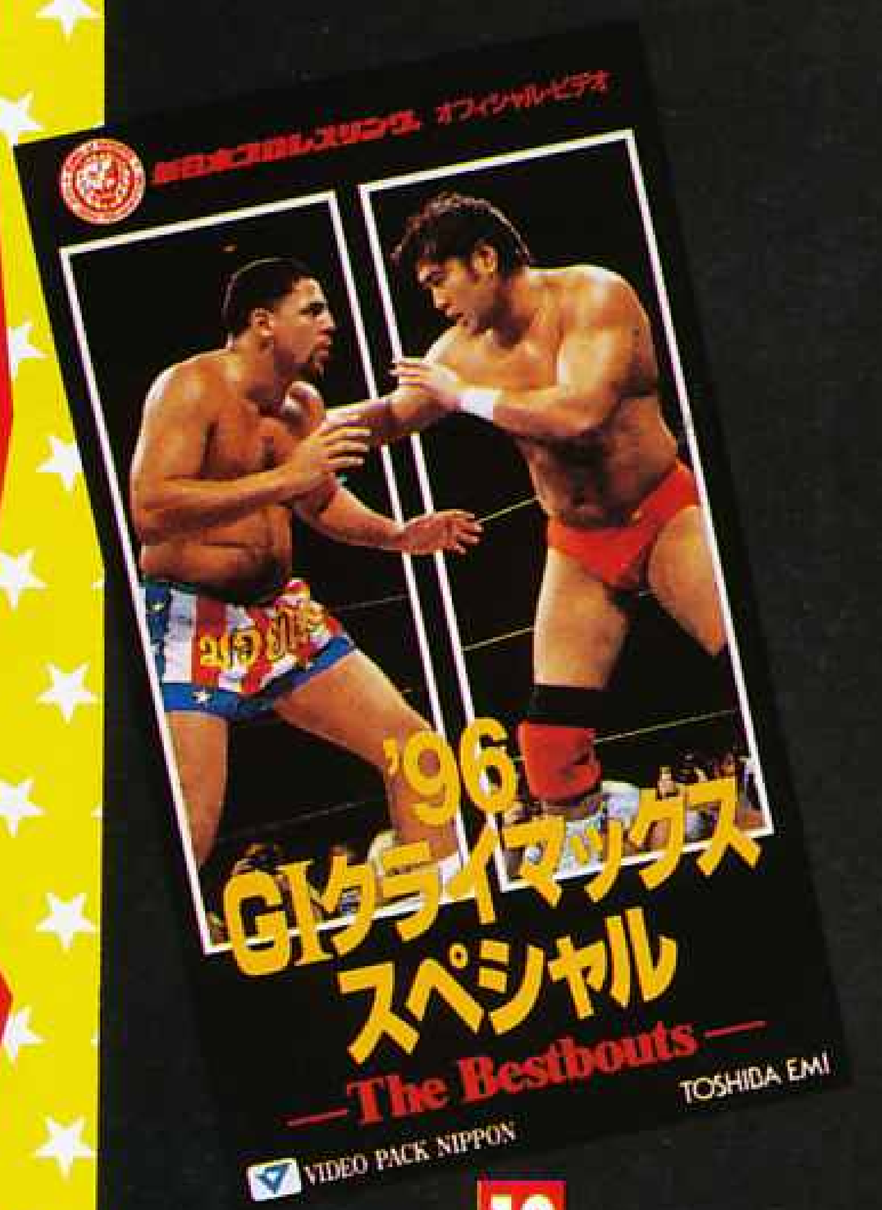
5名

WAR
6 天龍源一郎湯呑み

次ページからは「オバケ」の写真がたくさん出てくるので怖がり屋さんは見ないでね♥

東芝EMI提供のプロレス最新ビデオ

各3名



10 新日本プロレスリング オフィシャルビデオ
『'96 G1クライマックス スペシャル』



9 FMWオフィシャルビデオ
『駒沢伝説』



8 RINGSオフィシャルビデオ
『RINGS JAPAN』



7 FMWオフィシャルビデオ
工藤めぐみ
イメージ・ビデオ
『Squall』

3名



13 WAR
天龍ポストカード



18名

12 バトラーツ
特製パンフレット

5名



11 パンクラス
写真集『SEED』
(提供:ぶんか社)

応募方法

今回、僕が書いた文章はこれだけです(涙)。では目一杯書かせていただきます(号泣)。
官製はがきに住所・氏名・年齢を明記し、①希望商品名②面白かった記事③面白くなかった記事④ダジャレ⑤これからやってほしい企画⑥今号の感想をお書きの上、下記宛てまでお送りください。
〒171 東京都豊島区南池袋2−33−6 大同ビル3F
ダブルクロス 紙プロ編集部
「約束守れますか」係まで。
締切は3月31日



16



15

各30名

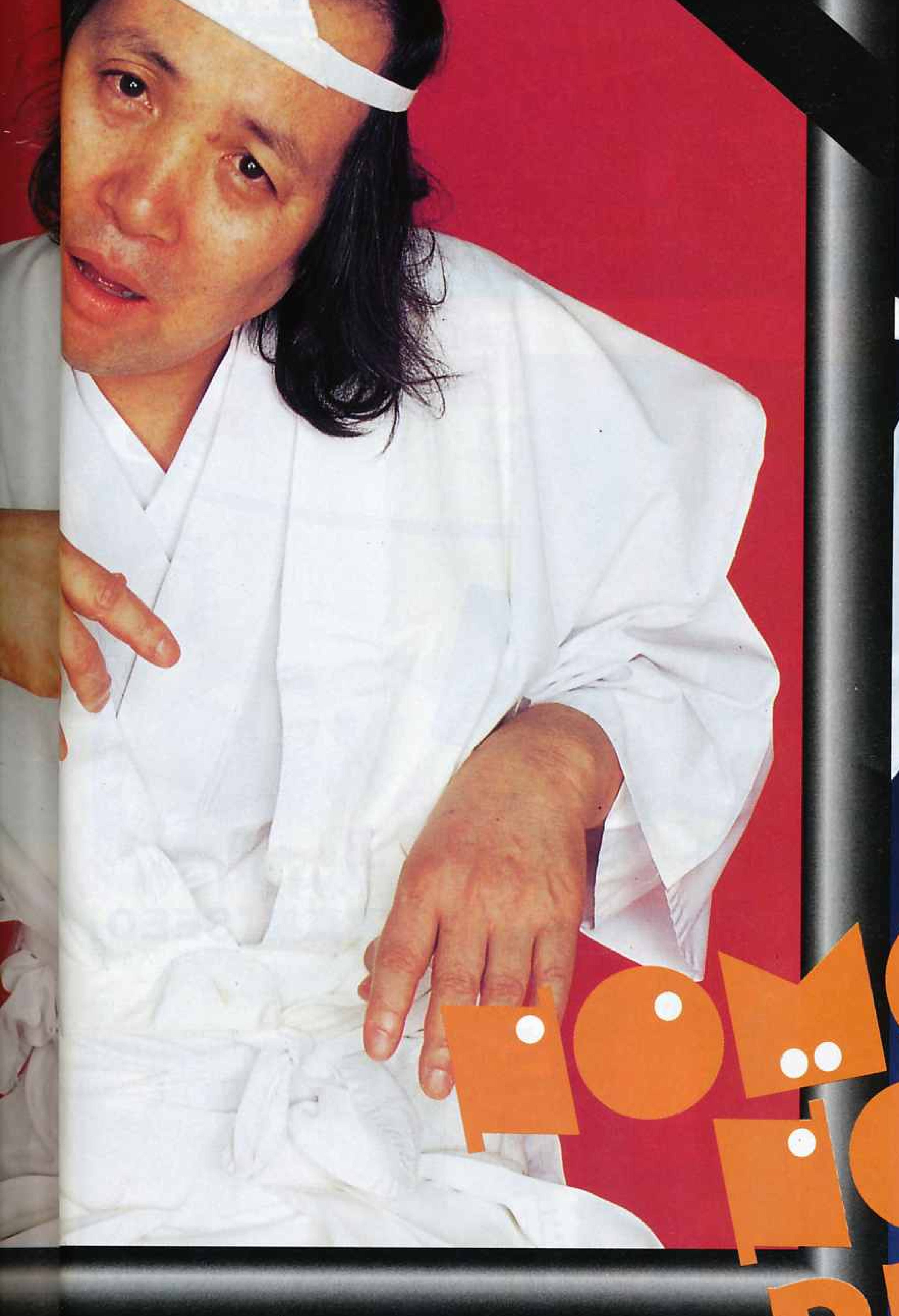
紙のプロレスRADICAL
特製プロレスカード



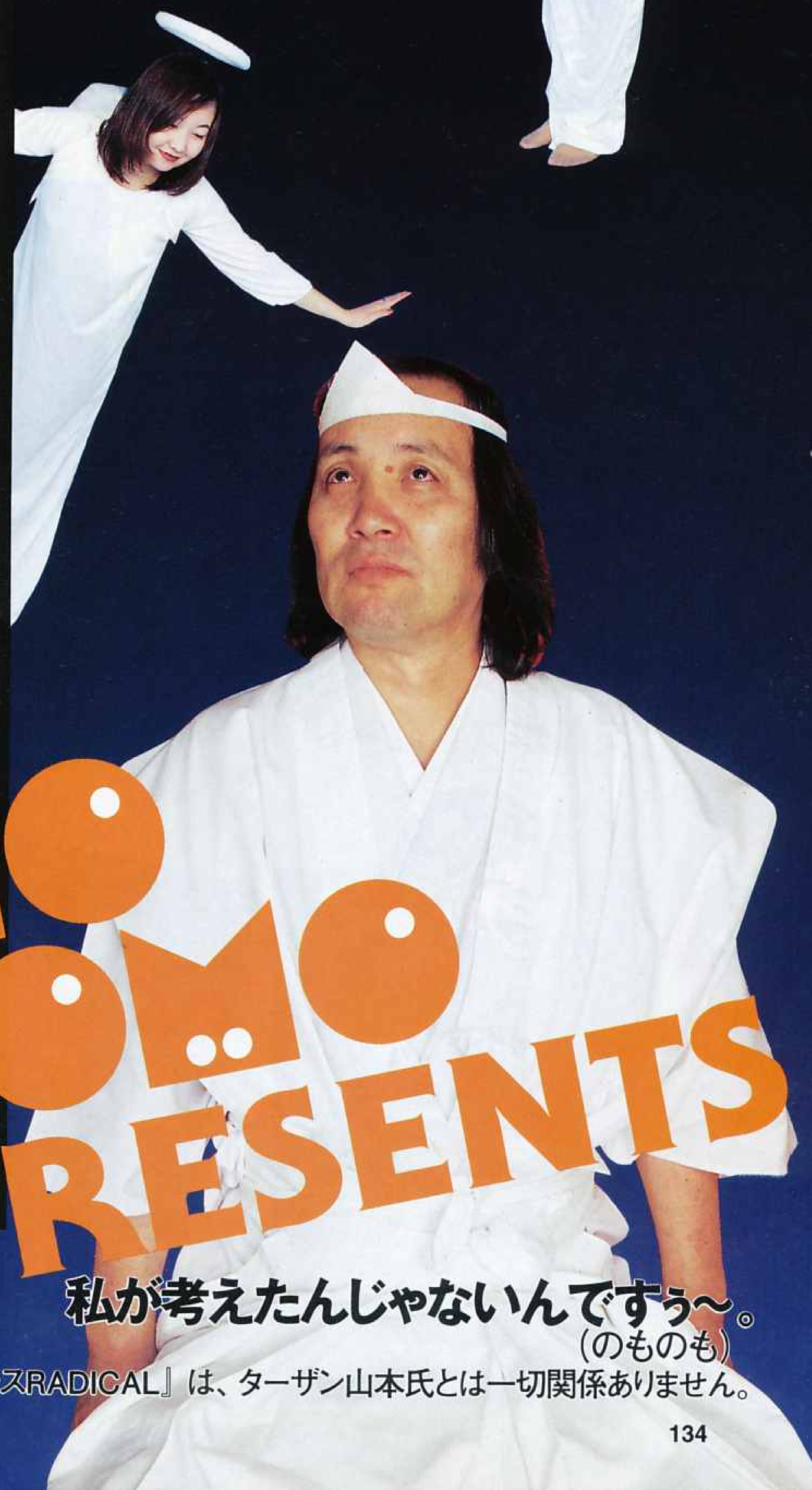
5名

14 マ・ルチャ・メディアスペシャル
Vol1『みちのくとの遭遇』

団体からは拒絶され、
マスコミからは掲載拒否!
RADICALがやらなきゃ誰がやる!!







MOMO MOMO PRESENTS

私が考えたんじゃないんですぅ〜。
(のものも)

注：『紙のプロレスRADICAL』は、ターザン山本氏とは一切関係ありません。

96年12月26日 川崎クラブチッタ

第1回 ターザン山本追悼興行 往生際。リポート

～狂気の沙汰も鐘しだい～



NOMONOMO　PROFILE

『紙プロ』驚異のニューキャラ、ののものもだよ。最近もちぶとりで困ってるの。好きな言葉はぐうたらだよ。それから好きな食べ物はおもちだよ。こんなことばっかり言ってるから「なめてんのか?」って、よく怒られるよ。ほぇぇ、みんな怒っちゃ、や～だ!

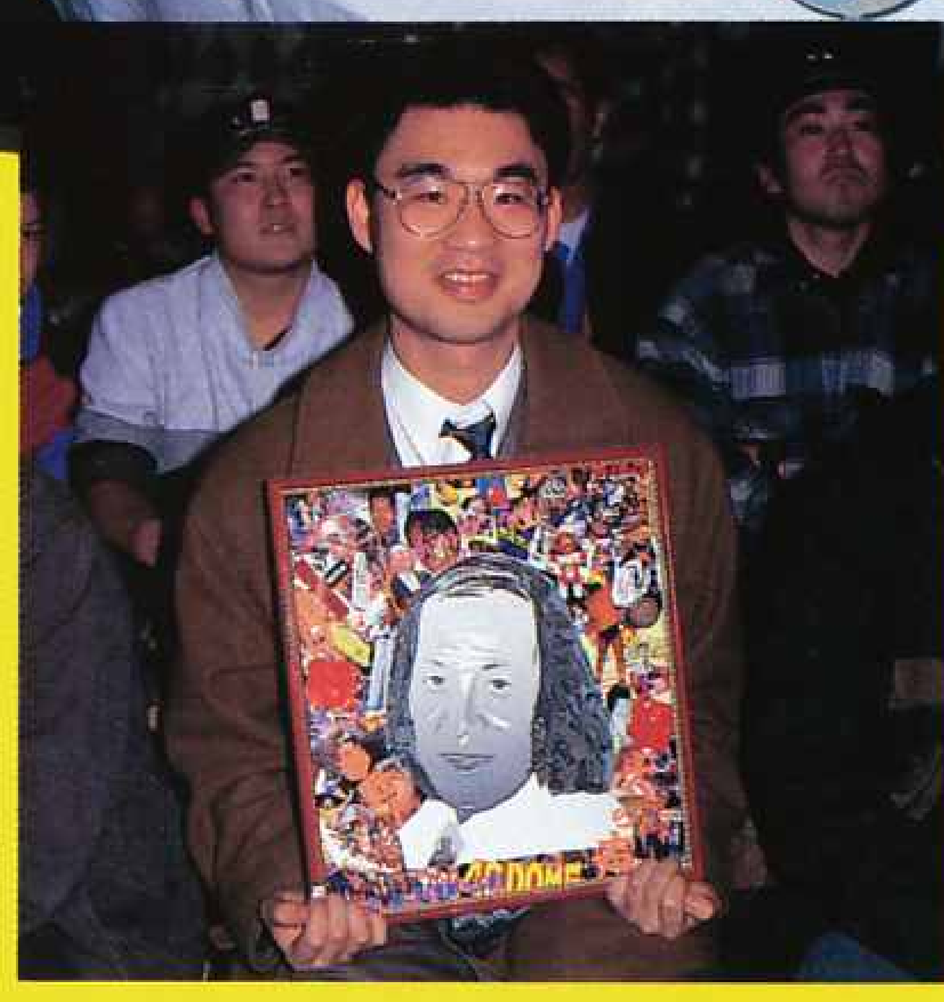


平成の仕掛人

往生際レポート







◀スタッフは喪服。入口には鯨幕。献花、遺影、お焼香など、どうしてココまでやる〜？　っていうくらい凝っていた会場。のものも、ホントのお葬式かと思っちゃった。みんなにも「ちょっとやりすぎなんじゃない？」とか「『紙のプロレス』はこういうとこに凝りすぎだ」って怒られちゃったよ。うふふふ〜。もう、ほっとけよって感じだね。

ターザン山本追悼興行『往生際』進行表

ザ・タイムテーブル・ボカン

START

17:30
◆開場

18:30
◆弔電
（剛竜馬、豊田真奈美、李春成、週刊ゴング、松永光弘〈香典〉）

18:40
◆ターザン山本発掘ビデオ上映
（ターザン&仁香さんの若かりし頃の映像〜クッキング・パパ、サスケへの悪ロビデオ）
♪ビデオ終了と同時になぜか『UWFのテーマ』

18:50
◆宣戦布告
（篠塚リングアナ）
「1996年12月26日、生か死か！　聖か邪か！　一体誰が往生際なのか？　これより、ターザン山本追悼興行を行います！」

◆平成の仕掛人・



▲今回のイベントは、みちプロの篠塚リングアナがメイン司会を務めてくれたの。篠さんが「リング内に亡きターザンの亡骸が入って参ります」と言って、棺桶を運んでくれたのがごらんの人たち。初代タイガーマスク、ザ・グレート・サスケ、石川雄規、高野拳磁、ローリングサンダー米山、アレクサンダー大塚の６人。ターザンとゆかりのあったレスラーということなんだけど、ヨネとアレクはターザンとどういう関係だったんだろ？



元UWFインター代表・ド素人の鈴木健だってぇえ

▶鈴木健、開会宣言「今日はターザン山本追悼興行にお越しいただきまして誠にありがとうございます。自分はターザン山本を葬ったと言われている、ド素人の鈴木健です。今日はハゲターザンの棺桶に五寸釘を打ってやろうと思って参りました。（一息ついて）御存知の通りUWFインターナショナルは明日を持ちまして解散ということになりました。UWFが解散ということで……、ボクは一体どうしたらいいんでしょう!! プロレス界でまだやり残していることがあるんです！ まだ言うわけにはいきませんが、ボクがやろうとしていることを実現できるよう、みんなにバックアップして頂きたいと思います。ターザン山本も同じような考えを持っていたんですが、彼の暴走的な、そして破滅的なやり方がこのような結果になっちゃったわけです。とりあえず今日はターザン山本のために皆さん、ご祝儀をよろしくお願い致します。ありがとうございました」

◀生き返ったターザン「なぜこのオレが殺されなきゃいけないんだ！ 篠崎答えろ！」……しのさんに聞いたってわかんないよね。「バカヤロー!! オレは新日本（プロレス）の長州力と刺し違えをしない限り死ぬわけにはいかないんだよ！ 長州力選手が、今日もしこの会場に現れなかったら私の勝ちとさせて頂きます（なぜだ?!）。それにしてもクリスマスが終わり、正月まであと少し。こんな日にこんな贅沢で洒落て冗談に満ちた興行を主催してくれた、あの悪名高き『紙のプロレス』に感謝しましょー！ ここでひとつの宣言をさせて頂きます。死にきれない私が皆さんに挑戦状を出したいと思います。（大きく深呼吸して）大仁田厚を認めるなー!! あんなものを認めてプロレスファンでいられるのかー！ 何を考えてるんだ大仁田厚！ たった３千人しか集まらない会場の人たちだけに認められて、見に行ってない（会場に行かなかったプロレスファン）みんなが認めていない大仁田厚、アイツは大バカもんだ。まずアイツを抹殺しろ！ オレより先にアイツを棺桶に入れるんだよ!!（……と息巻いている途中で、いきなり安生洋二のテーマ曲がかかり、ゴールデン・カップス入場）



18:55

◆平成の仕掛人・鈴木健、なぜか開会宣言！

♪『UWFのテーマ』フェードアウト後、当然のように『ドリフの曲』

※今は亡きターザン山本氏の亡骸が入った棺桶を、ターザンとゆかりのあったレスラーたち（初代タイガー、サスケ、石川、高野拳磁、他）がリングまで運搬。

♪BGM『威風堂々』

※リングに到着後、白装束をまとったターザン、棺桶から飛び出す。

往生際レポート



◀高山選手はのものもの天使の輪を直してくれたんだけど、のものもったらぶたれると思って「ひゃー」ってビビッちゃったの。ま、それはいいとしてＧ・カップスの３人はサインボール投げをしに来てくれたんだよ。Ｇ・カップスが来ることやこの日の進行すべて、ターザンには内緒だったんで、ターザンったらかなりはしゃぎモードだったよ。この時もひとりでキャピキャピしてました。

▼最前列には長州力選手特別指定席が設置してあったの。でも結局長州選手は姿を現さなかったよ。ってことはターザンの勝ちってことになるの？　なぜだっ?!



▼次の日の新聞は全部この写真を大きく載せていました。イベントのことは一切なしでＧ・カップス一色だったのね。全く失礼しちゃうわねー。ブー。



なぜだ?! 長州力様の席に座るターザン山本



◀ジャイアント馬場さんのテーマ曲にのって、海賊男の仮面を被った猪木さんが登場。れれっ？と思ったら春一番だったよ。また騙されちゃったぁ。というワケでＡ・一番の一言「えー、皆さんお元気ですかー！　えー、私は先日ガスパーを倒して絶好調です。えー、今日はターザン山本さんのお葬式ということで、なぜかジャイアント馬場さんのテーマ曲にのって入場してしまいました。まぁ、たまには変わったことをやった方がおもしろいんじゃないかなと、ええ。そしてまた何か新しいものが生まれればいいなと。えー、私は今日は試合はしませんが来年1月4日、ウイリーと闘うことになりました。えー、そして新日本プロレスは世界へ羽ばたきます。皆さんご声援のほどよろしくお願いします。えー、今日は本当にありがとうございました。それでは気持ちのいいヤツを一発やりますかぁ！　1、2、3、よいしょっ、ダーッ!!」

ザ・タイムテーブル・ボカン



18:55

◆ターザン山本「なぜこのオレが殺されなきゃいけないんだ！」と発狂

※発狂中　♪『安生洋二のテーマ』が鳴り、なぜかゴールデン・カップス入場。

◆Ｇカップス、台本通りにサインボール投げ

（※サインが入ってないボールを受け取ったお客さんは、ターザン鬼にボールをぶつけられる権利つき）

※思いっきり顔面にボールをぶつけられターザン激怒！

※Ｇカップスからひとことご挨拶（しゃべってる途中にテーマ曲がかかり、強制的に退場）

※Ｇカップス退場、炎上したターザンがまたまた発狂



19:20

★メインイベント１

○新崎人生
（♪新崎人生のテーマ）
VS
●愚乱・浪花
（♪愚乱浪花のテーマ）

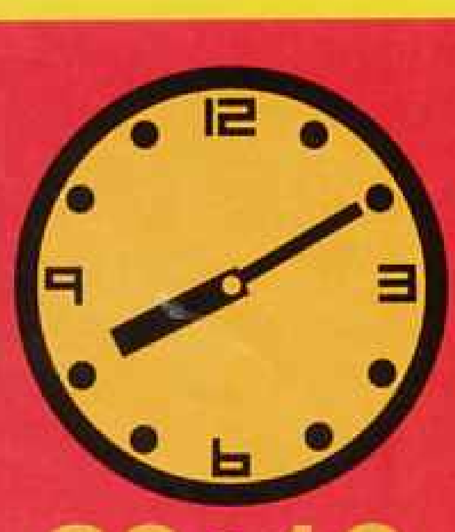
（８分33秒・エビ固め）



新日本プロレスみたいなファーストフードの固まりみたいなファンは、みんな殺してしまえー!!（おまえが死ね!!）

◀ターザン発狂の図。「興行をやってる連中も物好きだし、集まってくるレスラーもホントに物好きそして観客も物好き。これがプロレスの原点だよ!! あんな新日本プロレスみたいなファーストフードの固まりみたいなファンはみんな殺してしまえー!! オレを成仏させたいなら今ここで、このリングで、おもしろいプロレスを見せてみろっ！」

ザ・タイムテーブル・ボカン



20：10

◆休憩

★メインイベント3

○初代タイガーマスク
（♪初代タイガーマスクのテーマ曲）

VS

●獅龍
（♪獅龍のテーマ曲）

（10分57秒・ヒザ十字固め）

★メインイベント2

ディック東郷（♪海援隊ＤＸのテーマ曲）		グラン浜田（♪浜田のテーマ曲）
MEN'Sテイオー○	VS	スペル・デルフィン（♪デルフィンのテーマ曲）
TAKAみちのく		●薬師寺正人（♪薬師寺のテーマ曲）

（12分０秒・エビ固め）

最後はみんなで、1、2、3、ダーッ!!



20:15

◆吊電2
（尾崎魔弓、タイガー・ジェット・シン、井上義啓（元週刊ファイト編集長）、週刊プロレス、新日本プロレス、リングス）
♪BGMは、もちろん『パワーホール』

◆なぜか船木誠勝が「ターザンにひとこと」コメントしているビデオが流れる

20:25

◆懲りない男たち、高野拳磁WITH・Tののど自慢コーナー
※歌い出しすぐ鐘鳴る
♪『Over The Top』カラオケ

20:35

★メインイベント4

田中稔 （♪田中稔のテーマ曲）		○池田大輔 （♪池田大輔のテーマ曲）
臼田勝美	VS	ローリングサンダー米山
小野武志●		アレクサンダー大塚

（17分46秒・カカト固め）

10 ●おなじみ春一番

●何だかわかりませんが非常に悲しいお知らせにただ呆然としております。というわけで、冴夢来プロジェクトを応援して下さっているファンの皆様のために私、剛竜馬、山本氏のご遺志をつぐことこそ、私の使命と存じます。というわけで、冴夢来プロジェクトを応援して下さっているファンの皆様のためにも、これからもプロレスバカとしてがんばります！　ショアッ!!

いつまでもプロレスバカの冴夢来プロジェクト・剛竜馬様

●この度はお日柄もよく、大変ご愁傷様でございます。山本さんには、生前ひとかたならぬご厚情をあずかり、喜ばしい反面、内心ちょっぴりうざったいな、なーんて思っちゃったりしました。でも、女王解禁『B・Bomb』は買って下さいね。もちろん、山本さんのために脱いだわけじゃないですけど。

写真集好評発売中の全日本女子プロレス・豊田真奈美様

●拝啓　突然の悲報に、驚いてます。お嘆きをお察しして、お悔やみの言葉もありません。ロボタッグの時はお世話になりました。邪魔者がいなくなったという感じで、私のヒール度がアップしそうで大変喜ばしく思います。今度はOZアカデミーでロボタッグを組みましょうか？　フフフフ。

OZアカデミー校長のJWP女子プロレス・尾崎魔弓様

●山本さん、噂は聞いてますよ。何やらいろいろ裏で動き回っているそうじゃないですか。リベンジの方法が悪女っぽくて、とっても山本さんらしいと思います。後ろからナイフで襲ってメッタづきにしたいんでしょ？……わかる。へっへっへっ。

STRONG STYLE編集長（当時）・李春成様



●プロレスマスコミは団体に対してオドオドし過ぎている。力道山時代、日本プロレス時代なら、まだいい。しかし、今は昭和の風が止んで8年も経っている。平成の時代。それなのに、まだ団体の顔色をうかがっている。いい悪いではない。団体、レスラー、書き手、見る人……それぞれの立場によって見方、善悪の是非は異なる。ましてプロレスだから長州とのいがみ合いのあれこれを考えても仕方ない。言えるのは、団体相手に正面切って大ゲンカをしたということ。これがやれる男が真のプロレス記者なのである。ただし言っておくぞ。取材拒否を食らった第1号はこの俺なんだからな。もうひとつ、この前も芳の里さんと会った。すべては懐かしい遠い日の風。お互い、何の恨みっこもなし。

前・週刊ファイト編集長・井上一寸法師様

●胸ぐらを掴まれたこと数知れず、物を投げられたこと数知れず、それより何より机の中に入れてあった私の出張費10万円が、山本さんの手によって持ち出され競馬の資金に消えた時、もうこの人にはついていけないと思いました。とっとと成仏して下さい。『週プロ』に平和を！

週刊プロレス・市瀬様

●ターザン山本さんの興行に弔電?!　んー、それはできない！

週刊ゴング編集長・小佐野景弘様

●ミスターヤマモト、シヌコトヲオソレルナ！　ダイ・ウィズ・ガッツ!!

カナダ・トロント在住・タイガー・ジェット・シン様

●弔電拒否

今日は餅つきのリングス様

●弔電拒否　……どころか電話の応対すら拒否

新日本プロレス様

イベント終了後、プロレスパソコン通信ファンの中でターザン&イベント論争が持ち上がっちゃったの。どんな内容だったか特別に教えてあげるね。この論争は、ターザン山本が嫌いなのに、試合目当てで興行に行ったファンに対して「ターザン山本が嫌いなら、追悼興行なんかに行くな」という意見が出たことからはじまったの。そしたら「嫌いで憎んでた人も、亡くなったらお葬式に行ったりする。ターザン山本が嫌いな人でも、追悼興行に行くのは普通だと思う」という意見や「ターザン山本を見に行ったわけじゃなく、試合を見に行った」という意見が。

何やらただ事ならぬ雰囲気だわ〜って思ってたら、今度はターザンがサスケについてコメントしているビデオ（みちのくプロレスが成功したのは『週プロ』で取り上げたからだ。しかしこれだけ世話になっておきながら、オレが取材拒否を受けて編集長をクビになった時、サスケは何も言ってこなかった。しかも8冠のベルトまで取りやがって！　そして、サスケは頭を骨折した。オレに世話になっておきながら、オレが苦しいときに何もしてくれなかったヤツはバチがあたるんだ!!〜パソ通ファンからのコメントを引用）に対しての論争に。



「こんなコメントを聞いて、喜ぶ客が洗練されるって言えるのか？」「サスケ相手だからいいんじゃないか？」「サスケ相手ならいいが、客に見せることはないんじゃないか？」「（このコメントビデオを見て）サスケが喜ぶ喜ばないかより、客を喜ばせるべきだ。その点ではターザン山本と、ビデオを見せた主催者は批判されて当然」「サスケが笑い飛ばしてるんだからいいんじゃないの？」などなど、もうそんなことどうだっていいじゃ〜んって言いたくなるような意見ばっかり。そしてついに『洗練されたファンとは何か?!』へと発展し、最後には『ターザン山本とは何か?!』というお題に行き着いたわけです。

ほぇぇぇ、何だかよくわかんないけど、のものもが思うところ、みんなターザンが嫌いなんだねってことだ。でも、好き嫌いは別としてこんなに影響力のある人って、今までプロレス界にいたのかな？

ぐふ〜。プロレス界は謎が多いね。

ま、そんなことよりのものもは「納豆巻きを買ったつもりが、家に帰って食べようとしたらシーチキン巻きにすり変わっていたこと」の方が謎だけどな。でもどうしてだろ？　納豆巻き食べたかったのにな……。



▲パソコン通信で論争になっているとはつゆ知らず、呑気にキーボードを弾く（ホントは格好だけ）WITH.Tこと東北のバカ社長。……さすがです！

ザ・タイムテーブル・ボカン

21:10

●おなじみ春一番の1・2・3ダー

♪なぜか『ジャイアント馬場のテーマ曲』にのって、海賊男のお面を被り登場

※終わるやいなや、突然リング下に、K・Yワカマツ乱入。強引に山賊男ガリバー組みを引き入れる。

★メインイベント5

ザ・グレート・サスケ（♪イノキ・ボンバイエ）	VS	山賊男ガリバーX（♪山賊男のテーマ曲）
○石川雄規		山賊男ガリバーXX●

（19分13秒・腕ひしぎ逆十字固め）

※試合終了、リング上のサスケとリング下のワカマツがロゲンカ

21:40

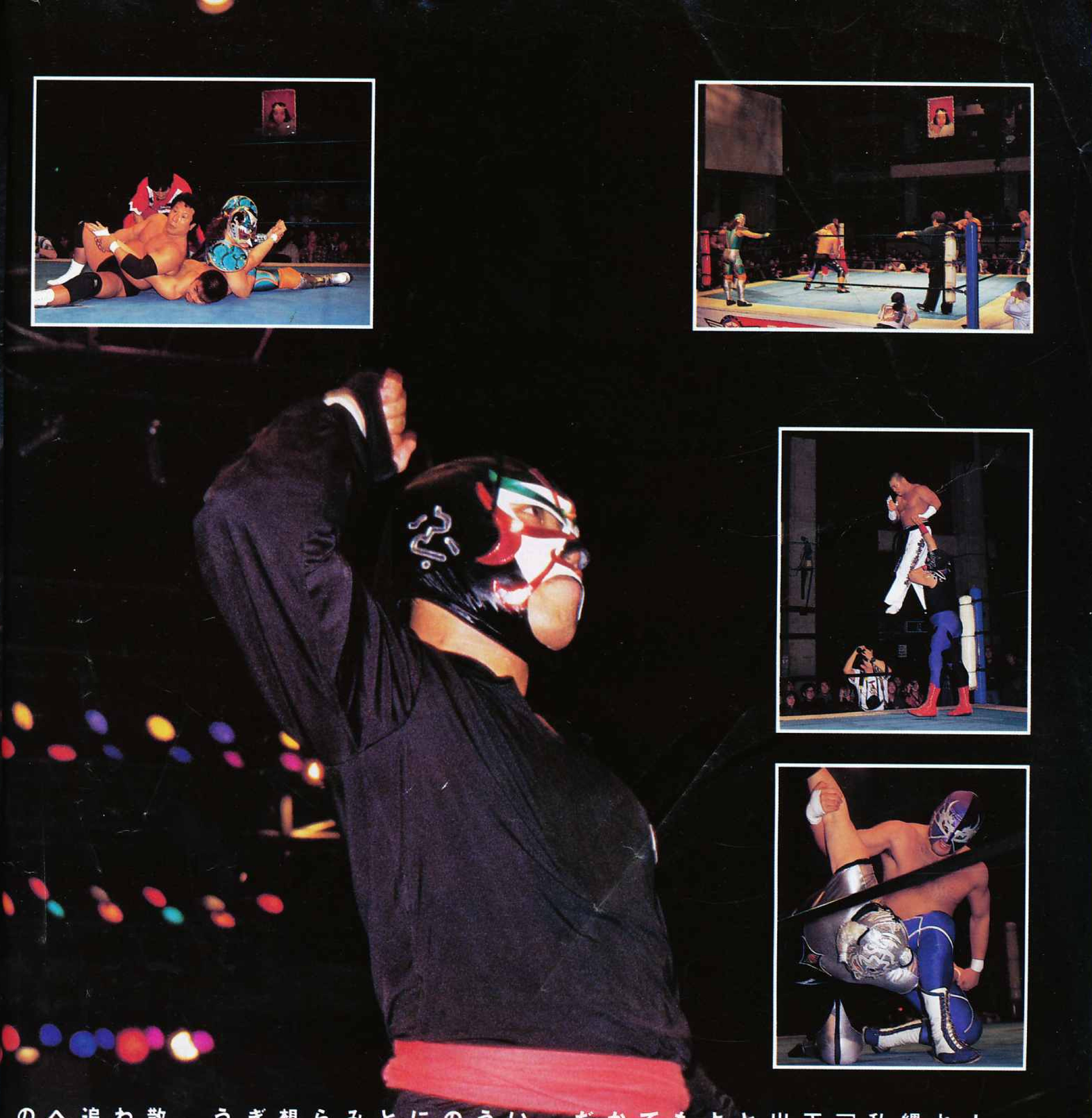
※サスケ&石川の呼びかけにより、出場選手&春一番、リングに上がり、なぜか1・2・3・ダー！

♪ダー終了同時、『みちプロのテーマ曲』&『バトラーツのテーマ曲』が流れる。

22:00

何事もなかったように終了





パソコン通信で論争になったり、出場レスラーに「何だこのイベントは！」なんつって怒られちゃったり、なんかよくわかんないけど一筋縄ではいかなかった『ターザン山本追悼興行』。私は他のスタッフがお仕事している中、呑気に「お客さんのひとり」として見てたんだけど、正直に言って「おもしろかった」の一言だったよ。出ていたレスラー&関係者の中には、ターザンと全く関係のない人がいたわけだけど、というより、むしろ関係のない人の方が多かったのかもしれないけど、それでも「いいもの」を見せてくれて、お客さんを満足させてくれたわけだから「さしずめ、君たちはプロフェッショナルだな！」って思いました。

今は「パソコン通信で取り上げられない方がいい興行だった」と言われてるらしいです。そう考えると、パソコン通信で大論争になったこの興行は、ひどくダメな興行だったということになっちゃうんだけど、なんかそれってちょっと違うんじゃないかなって思います。みんながみんな「おもしろかった。満足まんぞう！」ならいいんだけど、「おもしろかった」という感想すら持てない興行が今のプロレス界は多すぎるのではないか?!　……なーんて、知ったような口を聞くな！　のものもよ！　って感じ?

「刺激がなさすぎなんだよ！」「バイ菌をまき散らせ！」と吠えているターザンの意図が少しわかったような気がするな。このターザン山本追悼興行は主催者側から観客（プロレスファン）への謎かけだったのかもしれないね。ほえぇぇ、ま、のものもは、どうでもいいけどね。

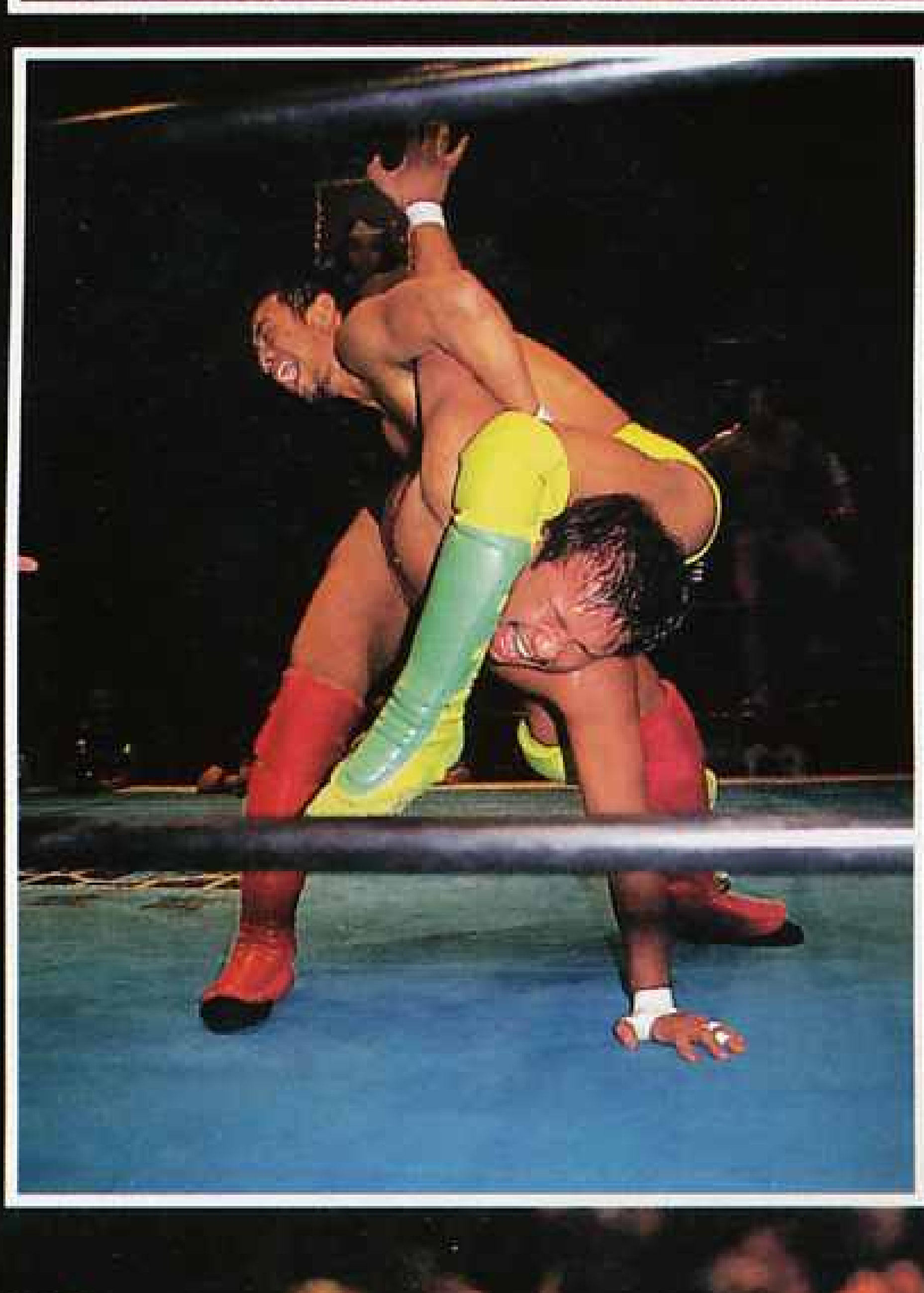


オレを成仏させたいなら このリングで、おもしろいプロレスを 見せてみろっ!!

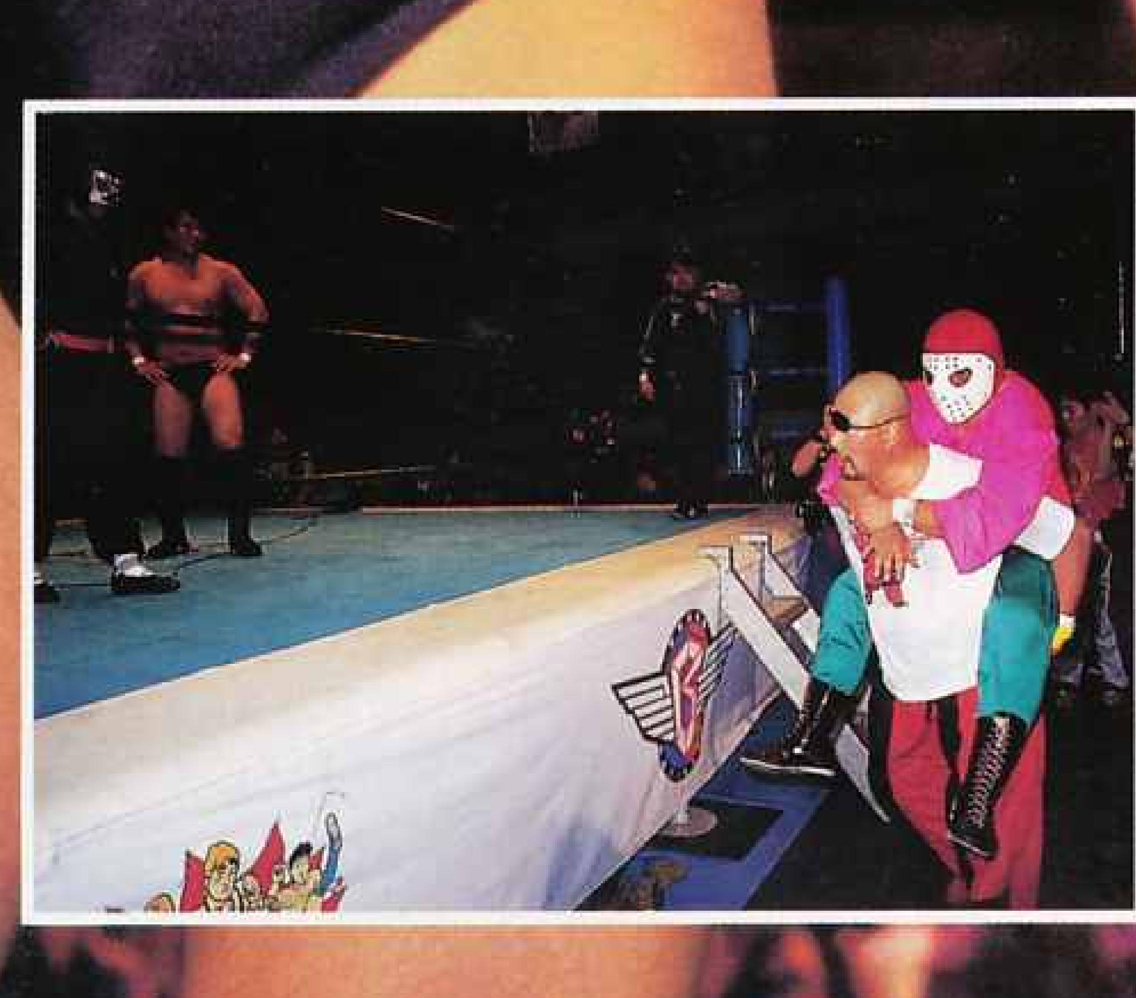


往生際レポート



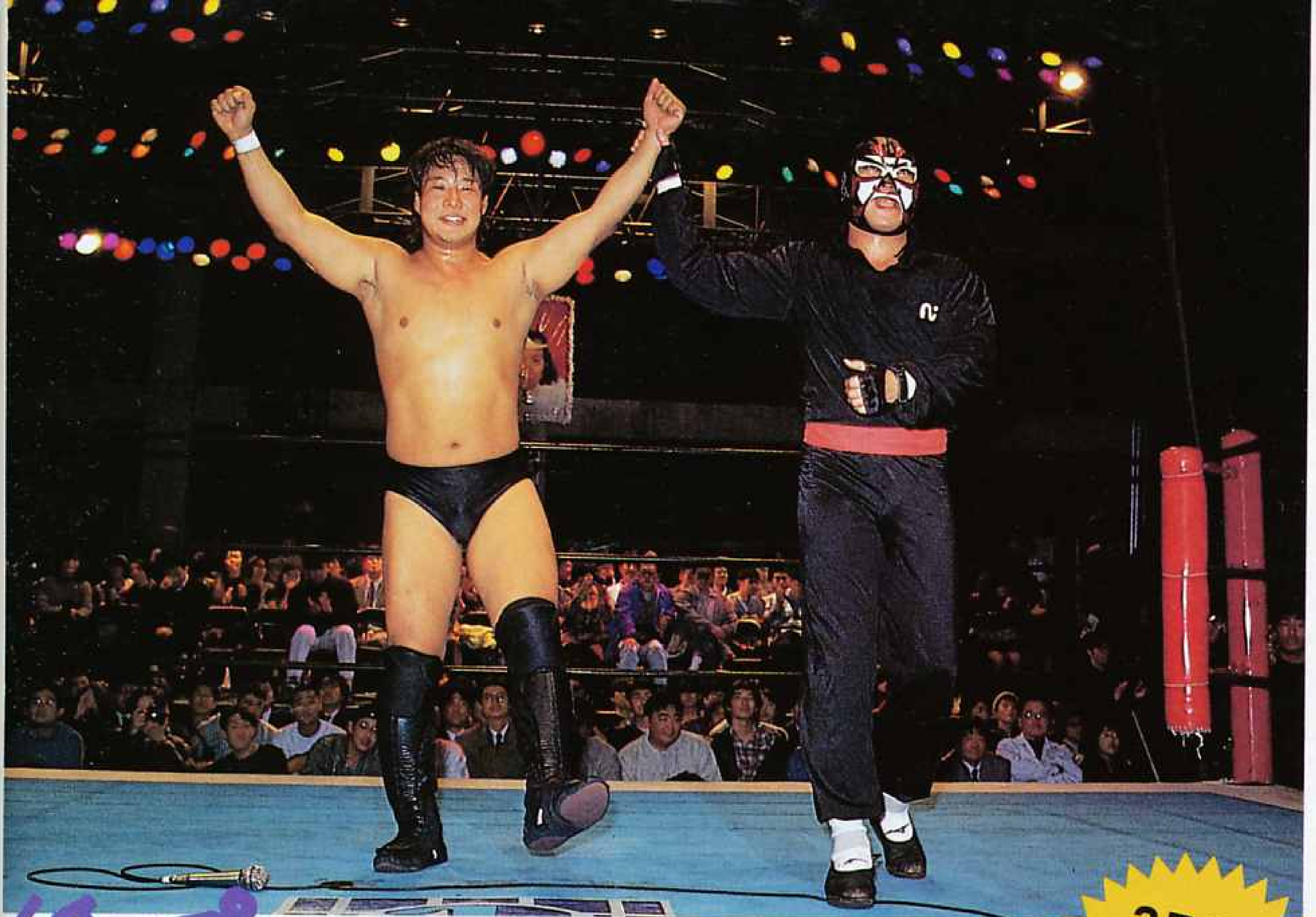






のものもは、どうでもいいけどね。

すべての道がローマに通ずるなら、ドンキホーテよ、デタラメに行け!!



紙のプロレスRADICAL VIDEO
『闘いのドンキホーテ!』

3月中旬発売決定! 6930円(税込み)

とことん調子に乗る『紙プロ』がLIVEになった「第1回ターザン山本追悼興行～往生際～」の伝説のセレモニーの数々。そして、はからずも、みちプロとバトラーツ幻の合同興行となったゼイタクな試合の模様をビデオで確認せよ!

全国書店、レコード店、ビデオショップでお求めください。
発売:(株)ダブルクロス　販売:(株)クエスト

世界平和のために、特別通信販売も行うんです!

①現金書留　②郵便振替…00130－3－769154　名義:(株)ダブルクロス
①②いずれかの方法で下記住所へビデオの料金をご送金ください。送料・税込みの出血価格7500円です。の際、住所、氏名、年齢、電話番号を明記していただかないと商品が届かない場合がありますので、必ず明記してください。(郵便振替の場合は用紙裏面の通信欄に記入)
〒171　東京都豊島区南池袋2－33－6　大同ビル3F　株式会社ダブルクロス『ドンキホーテ通販』係まで。
TEL.03－5992－3240　FAX.03－5992－3218

収録内容
96・12・26 クラブチッタ川崎

●【究極の社長タッグ実現!】
ザ・グレート・サスケ&石川雄規vs
山賊男ガリバーX&山賊男ガリバーXX

●【バトラーツ初のバチバチ6人タッグ】
池田大輔&米山サトシ&アレクサンダー大塚vs
臼田勝美&小野武志&田中稔

●【伝説の「怖い虎」が復活!】
初代タイガーマスクvs獅龍

●【みちプロ正規軍vs海援隊、96年最終戦争】
グラン浜田&スペル・デルフィン&薬師寺正人vs
ディック東郷&MEN`Sテイオー&TAKAみちのく

●【人生、96年最終巡礼】
新崎人生vs愚乱・浪花

●必見!　ターザン密葬と発狂の場面、翌日インター解散を控えたゴールデン・カップス突如来襲の様子も収録!

問い合わせ＝03－5992－3240



紙のプロレスRADICAL NO.1を買い忘れたマヌケな貴方に朗報です!

今号では1本もインタビューをしていない本誌鬼畜編集長・山口昇が、高田延彦、船木誠勝、初代タイガーマスク、橋本真也、タイガー・ジェット・シンの超豪華メンバーに「プロレスラーとは何か?」という壮大なテーマで挑むロング・インタビュー特集他、前田日明も登場している記念碑的創刊号を通信販売しまーす。在庫少ないのでお早めに。
〒171　東京都豊島区南池袋2－33－6　大同ビル3F
(株)ダブルクロス「RADICALナンバル1」係まで現金書留で申し込みください。定価600円＋送料310円＝910円です。
問い合わせ＝03－5992－3240

紙のプロレス RADICAL
No.2
1997年3月20日発行
定価650円

発売元:株式会社ワニマガジン社
〒160　東京都新宿区内藤町一番地
TEL.03－3357－2911(販売・営業)
発行元:株式会社ダブルクロス
TEL.03－5992－3240(編集・制作)
編集兼発行人:山口昇
編集スタッフ:野本のものも真貴子／中村カタブツ君／坂井結核／吉田豪／八木賢太郎(ミニーの世話のため非番)
デザイン:ツースリー(出田さん、ヒサくん、村松さん、マツ)
カメラマン:斉藤ユーリ
試合写真提供:長尾迪、乾晋也
お勘定:林ヘックション一枝
フィニッシュ:ツー・スリー
印刷:図書印刷株式会社

編集内容等に関するお問い合せは(株)ダブルクロスにね♥

紙のプロレス RADICAL
No.3は4月下旬発売予定

POW 6th Anniversary

POW
6周年記念
キャンペーン
プレゼント

デジタル携帯電話を 1000名様にプレゼント!!



アンケートに答えてもらっちゃおう!

●アンケート（回答は番号でお答えください）

Q1：あなたの一番好きなジャンルのゲームはどれですか？
1. ロールプレイング　2. シューティング　3. アクション　4. シミュレーション　5. その他

Q2：ゲームであなたが最も重視するポイントは何ですか？
1. テーマ（素材）　2. システム　3. グラフィック　4. サウンド　5. その他

Q3：あなたが関心を持っているジャンルをひとつだけ答えてください。
1. スポーツ　2. 音楽　3. レジャー　4. ギャンブル　5. その他

ご応募上の注意

★締め切り：1997年4月30日（当日消印有効）

★発表：抽選の上、当選者に申込書をお送りし、発表にかえさせていただきます。

★月々の基本料金、通話料、商品発送代金と事務契約手数料は、お客様の負担となります。

★ご質問等がございましたら、フリーダイヤルまで。
0120-884-814

応募はいずれかで

ハガキ
官製ハガキに住所・氏名・年令・職業・アンケートの回答を記入し、下記の宛先まで。
〒104-00　東京都中央区銀座6-13-16　銀座ウォールビル11F（株）ガイア内
POW6周年記念キャンペーンプレゼントM係

FAX
住所・氏名・年令・職業・アンケートの回答を記入し、下記の番号まで。
ファックス番号　03-3542-5571
POW6周年記念キャンペーンプレゼントM係



LEGEND OF THE GAMBLEKING
一発逆転/ギャンブルキング伝説



THE VICTORIOUS THOROUGHBREDS
サラブレッド達の栄光



FANCY COCO　魔法少女ファンシーココ
●育成シミュレーション



BLOCK KUZUSHI　ブロックくずし
●ゲーム初心者からの定番アイテム



GEKIRETSU PACHINKERS
激烈パチンカーズ

※"PS"マークおよび"PlayStation"は株式会社ソニー・コンピュータエンタテインメントの商標です。

PlayStation

株式会社プランニングオフィスワダ　〒150 東京都渋谷区神宮前2-6-10 外苑パレス4F　Planning Office WADA

pow パウ

紙のプロレス RADICAL
WANIMAGAZIN MOOK 44
1997 No.2
お互いのプライドがルールだ!!
平成9年3月20日 編集発行人／山口昇
発売元：(株)ワニマガジン社 〒160 東京都新宿区内藤町1番地 電話／03-3357-2911
発行元：(株)ダブルクロス 〒171 東京都豊島区南池袋2-33-6 大同ビル3F 電話／03-5992-3240
ワニマガジン社 定価650円（本体631円）

9784898292853
ISBN4-89829-285-2
C9476 P650E
1919476006500
雑誌 69861-44
印刷：図書印刷株式会社